

---

D・IS

you

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D・IS

### 【コード】

N4614Q

### 【作者名】

you

### 【あらすじ】

現実から一夏への憑依もの。

アンチなどはなし、一部オリジナル展開、一部設定改変（ISの性能など）

起きたら織斑一夏になっていた。何を言っているのかわからないが（ry

…どうすんだよコレ…。

アイエス  
IS、インフィニット・ストラトス。萌え、バトル、ハーレム属性を持つライトノベル。最近アニメ化した。主要人物の9割以上が女性と言う、むちゃくちゃな設定。

ラノベは友人に一度借りて流し読みし、アニメは一度だけ友人の家でだべりながら見ていた。

その1割以下の男に入る主人公に自分になっている。もうなにがなんだかわからない。なんでこんな女尊男卑の世界に来なきゃならないんだ。だいたい、最近のトリップとか転生とか憑依って神様に会ってチート能力もらったり、どこの世界に行くか選べるんじゃないのか？起きたら主人公になっていましたって、なんて優しくないんだ。

まあISとISによる社会への影響以外は現代とほぼ変わらない点は、他の世界、某BETAがいる世界とかよりはるかにましかたしかこの世界観は近未来だったか？

さて、とりあえず、目の前にいる黒髪のシャープな美人をどうしようか？。状況から主人公の姉だと思うが、名前は何だっけ？この状況、事故とかだったら記憶喪失とか言い訳できるんだけどな。

「どうした一夏？」

ハスキーな声で呼びかけられる。

「……………」

どう答えればいいんだ？

「混乱しているのか？おまえはクラスメイトが転校していく見送りに空港に行った。その帰りに事故にあったんだ。外傷はないが激しく頭を打ったため意識がなく入院していた。これは昨日のことだ。連絡を受けて私が来たんだが、ちょうどお前が起きたんだ。検査の結果特に問題はなかったからすぐに退院できるだろう」

状況説明ありがとうございます。事故で頭部を打ったということなら記憶喪失ということにしよう。

「そのまえに1ついいですか？」

「なんだ？」

「あなたは誰ですか？」

あれから2週間ほど経った。検査の結果記憶喪失と診断された。

1週間入院して、いろいろトリハビリを行ったが、当然記憶が戻るわけはなく、それでも生活していくには問題ないため退院した。

それから1週間ほど自宅療養をしていた。

普段は月に1、2回しか家に戻らなかつたらしい千冬さんは、俺が自宅療養している間は朝出勤して、夜戻ってくる生活をしている。俺は、掃除洗濯を行い、近所を散策して地理を覚え、帰りにデパートで買い物して、料理を作って出迎える日々を過ごしていた。ちなみに料理は元の世界で一人暮らしていたために覚えた。土日は友人達に材料費を出してもらい料理を俺が作るという生活をしてきたほど料理は得意だ。

千冬さんは記憶をなくした俺に何かと構ってくれる。少し寂しそうな顔をしながら昔あったことを話してくれたり、料理をおいしいと言ってくれる。

正直罪悪感が募る。

だって俺は織斑一夏ではないのだ。この世界のことをラノベに書かれていた世界の人間で偽物なのだ。絶対に記憶は戻らない。だって織斑一夏の記憶は俺にはないのだから。

織斑一夏は被害者だ。俺に身体を乗っ取られた。

俺は被害者だ。織斑一夏という存在にされた。

元の世界では就職して、自立していた。特にお金を使うことはなく貯金もだんだんとたまっていった。オタクだが馬鹿をやる友人達がいて、異性には縁がなかったが、不満なんてなく、小市民だが幸せな人生を送っていたのだ。

それがこんなことになった。

俺も織斑一夏も被害者だが、織斑一夏の肉親や近しい関係の人たちにとっては俺は加害者だ。

俺は、どうしようもないのだ。俺は死にたくない、だから織斑一夏として生きる。

これからもこの人の寂しそうな顔を見て、罪悪感を感じることに、それが俺が織斑一夏として生きることへの罰だ。

ごめんなさい千冬さん。

学業を復帰してからすぐに転校した。

織斑一夏を知っている人達が生活圏に入っていることは思ったよりつらかった。いや辛すぎた。織斑一夏は明るく単純だがいい奴で鈍感なところがあるが人気者だった。

俺とは全然違う。

俺は自己主張をすることはあまりないし、強烈な個性もない。だから織斑一夏を知っている人たちと話しが合わないのだ。

ゆえに千冬さんに無理を言っただけで転校することにした。

本当にこの人には迷惑をかけている。いつか俺にできることなら恩返しをしたい。

## 2 (前書き)

初期はどうしても原作やテンプレと似たような展開になってしまふ。

「皆さん入学おめでとう。私はこのクラスの副担任の山田真耶です」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。生徒達とそう変わらない小柄な体系なのに服と眼鏡のサイズが合っていないのか『子供が無理して大人の服を着た』か『子供が背伸びしている』といった印象を与えている。しかし巨乳ですね。童顔巨乳女教師、元の世界ではA とかでしかないだろう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

山田先生の挨拶に帰って来たのは沈黙、教室の中は変な緊張感に包まれている所為か誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

涙目になりながらちよつとうるたえる副担任がかわいそうだったがこれも経験だろう。それよりも問題がある、…俺の周囲に女性しかないことだ。

ここはIS学園。原作通り俺はこの学園に入学することになった。千冬さんに迷惑をかけないように学力を上げ、普通入学でも公立より学費が安く、特大生の場合学費が免除される私立の高校の受験日。受験会場に向かったはずがなぜかISが置いてあり、なぜか俺に反応した。



おそらくISの開発者（名前は忘れた）が仕組んだんだろう。

まあこれで原作通りとなってしまう俺はIS学園に入学することが決まった（政治やら諸々の理由により強制的に）

そんなこんなで今日はIS学園の入学式当日。右を向いても左を向いても、前を向いても後ろを向いても、女、女、女！

ごめん織斑一夏君。ハーレム主人公ですね、はいはいテンプレテンプレって感想しか君にはなかったんだけど、うん…これはひどい。

周囲に女しかいないって環境は思った以上につらい。しかもここは女尊男卑が常識の世界。正直家に帰りた。そして転校したい。

「次は織斑一夏君！」

どうやら自己紹介は俺の番になったらしい。

「…はい」

ローテンションに返事をして席を立つ。…自己紹介、どうしよう。

「織斑一夏です。史上初の男のIS操縦者ということですが、ISは試験で操縦したことぐらいしか知りません。ただ一人の男と言うことでいろいろ迷惑をかけることもあると思いますが、よろしくお願ひします」

最後に一礼する。

まあ無難にこんな感じかな。

ぱちぱちと拍手がなる。とその時黒い髪的美人が教室に入ってきた。

千冬さんだ。

相変わらずこの人を見ると罪悪感が沸くのだが、最近はそれも少

し薄れてきた。この人が今の俺に慣れてきて、俺を一夏として認識してくれているからだ。きっと俺の心情を考えて記憶を戻すより今の俺を肯定することにしたんだろう。正直この人には頭が上がりない。

「お、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

千冬さんは俺達生徒の方を向きながら胸に手を当てて発言する。すごい様になってる。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

相変わらず傍若無人なお人だ。でもそれがいい（キラ

まあ冗談は置いといて、この人はこれくらい言っても違和感がな  
いというかカリスマみたいなものがある。

その証拠に、

「キヤ                   ！   千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！   北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

すごい人気だ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

騒がしさを増す女子に千冬さんは凄まじく鬱陶しそうに顔をしかめた。それはきつと飾り気の無い本音であろう。例えそれで相手との関係が悪化するのだとしても、彼女はこういう時躊躇わずに発言する。

「きゃあああああああ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてく！」

いや、これはカリスマと言うより女子高のノリなのか？絶対このノリにはついていけないな。

千冬さんは額に手を当ててため息をつく。それすら見とれてしまっている人がいる。やっぱり何をしても絵になる人だな。

「織斑」

「なんですか？千冬さん」

「学校では織斑先生と呼べ」

「わかりました織斑先生」

「お前の自己紹介は終わったのか？」

「はい、特に問題はなかったと思います」

「そうか」

千冬さんは一瞬俺の左の方を見た。視線を追うと長い黒髪の千冬さんに少し似た感じシャープな感じを持つ女生徒がいた。

あれは、原作ヒロインか。名前は例によって忘れた。

彼女には記憶のことを話すしかない。気が重いが仕方ない。彼女は織斑一夏のことが好きだったんだよなあ。それを俺はたたき壊す。俺は悪人だな。

つい自嘲的な笑みを浮かべてしまう。

「織斑」

「なんですか？」

「大丈夫か？」

「…はい、俺は平気です」

どうしようもないなら空元気だろうと平気だと言い続けるしかない。これはだれにも相談できないし、俺が耐えるしかないのだ。

「そうか」

千冬さんはそれきり何も言わなかった。

「え……？ 織斑くんって、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな……？ 同じ名字だし、もしかして姉弟だったりして？」

「それじゃあ世界で唯一男で『アイエス』<sup>アイエス</sup>を扱えるっていうのもそれが関係して……？」

教室のあちこちからちらほらそんな声が聞こえてくる。

どうやら織斑千冬と織斑一夏が姉弟だという事は知られていなかったらしい。割と珍しい苗字だし調べれば直ぐわかりそうなもんだが。

「ああっ、いいなあっ……！ 代わって欲しいなあっ……！！！」

今の自分が誰かに成り代わるなんて碌なもんじゃない。その願いがかなえばきつと後悔する。望んでいなのに成り代わった俺の用に。

教室の視線の殆どが千冬さんに注がれている中、明らかに俺に向いている視線がある。それは教室を飛び交う熱っぽいそれとは対象的に、どこか冷めた視線だった。横目でちらりと確認すると、視線の主は原作ヒロインだった。先程までは窓の外へと向いていた筈の視線は今はこちらに向いている。

ほんとどうしようもないいな。

また自嘲しそうになるが、唐突に鳴り響いたチャイムの音が思考

の進行を遮った。

「さあ、ショートホームルームSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼教官宣言に対し湧き上がる歓喜の声。

俺の他にもう一人くらいこのノリにため息を吐く感性の持ち主が居る事を切に願う。

(人気があるだろうとは思ってたが、ここまでとは……)

原作を知っていたがここまで熱狂的だとは思わなかった。

織斑千冬、日本の元代表IS操縦者であり、公式試合での戦歴は無敗。国際大会での優勝経験もあり。ところがある日突然現役を引退し表舞台から姿を消す。か。原作をほとんど覚えていないから原因はわからない。

どうでもいいことか今の俺には。千冬さんは俺に罰を与える人で恩人、それだけだ。

ふう。

現在、一時間目のIS基礎理論の授業が終わった休み時間だ。ちなみに授業は原作と違い余裕でついていけました。活字を読むのが好きな俺は分厚い教本を読むのは苦にはならなかった。全て理解することはできなかったが、数式を暗記するようにとりあえずは頭に入った。

それはいいんだが、この状況はどうかできないものか。

俺は今、客寄せパンダのようになっている。

廊下には他のクラスの娘や2年、3年生が詰めかけている。が遠回りに俺を見てはひそひそと話していて誰も俺に話しかけようとはしない。

妙な緊張感が満ちている。

「ちょっといいか？」

黒髪ポニーテールで制服の上からでもわかるナイスバディの娘、篠ノ之箒（自己紹介で思いついた）、原作ヒロインの一人だ。たしかツンデレだったはずだ。原作からしてデレ度がすごかったような気がするが。

千冬さんから聞いた話では、小学校四年のころまで共に過ごした幼馴染の女の子。

「篠ノ之さん？」

「…話がある。ついていい」

放課の時間では記憶喪失だということを話すには時間が足りない

し、放課後に時間を作ってもらおう。

「すまないが、放課後にできないか？もうすぐ授業が始まる」

「…わかった。放課後だな、逃げるなよ」

放課後か気が重いな。でも逃げるわけにはいかない。

現在は二時間目の放課。

「ちょっとよろしくて？」

後から声をかけられた。振り向いた先にいたのは少しロールした長い金髪の少女だった。確かメインキャラの1人でお嬢様属性のイギリス人、だったか？

名前はセシリア・オルコット（例によって自己紹介でry）。



「オルコットさん、か？」

「ええ、そうですね、イギリスの代表候補生にして、入試首席のセシリア・オルコットですわ」

うーん、オーバーリアクションだけど元がいいから様になるなあ。あと唇にリップか何かを塗っているのか、妙に色気がある。

「俺に何か用か？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

どう対応するかな。男性蔑視する女性は基本無視か近づかないようにしてきたからなあ、対応が思いつかん。はあ、やれやれだぜ。

「なんですのそのため息は！？」

ああ、なんか厄介なことになったなあ。

「…女子だけの空間で男一人でいることがどれだけストレスかわかるか？すまないが話をするだけでも気疲れするから今は放っておいて欲しいんだけど」

「むむう！わたくしを馬鹿にしていますわね！でもまあ、わたくしは優しいので”今”は許して差し上げますわ！」

はあ、これをデレさせるとかありえない。

放心している間にチャイムがなり、千冬さんが教室に入ってきた。そのまま教壇に立った。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

原作通りなら初期は接近戦オンリーなのかな、俺のIS。専用機は男のロマンだねえ。楽しみだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

原作通りオルコットさんと戦うことになるのかね、この流れは。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

けっこう面倒くさそうだな。

「はい、織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

原作通り（ニヤ、ですよねえ。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

まあISでの戦闘は楽しいから模擬戦形式で戦えるのは嬉しいのだが。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バン！っと机を叩いて立ち上がり甲高い声で異論を出したのは先ほどのオルコットさんだった。

「そのような選出は認められません！ 実力から行けばわたくしが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！ここはサーカス団ではございませぬのよー！」

「つまり立候補するということでもいいのだな」

「ええ！そして織斑一夏！決闘を申し込みます！」

ですよねえ。

練習機を借りられるか千冬さんに聞いておこう。

おそらくISは原作通りになっているはずだから、機動力を重視して練習するか、後は簡単に情報を集めておこう。

ああ、なんか楽しみになってきた。入試の時もISを動かすのを楽しんでいて、いつのまにか試験が終わったんだよなあ。うん、楽しみだ。

#### 4 (前書き)

感想ありがとうございます。

続きです。話がなかなか進まない+キャラとの絡みが少ない…

原作通り、オルコットさんとクラス代表の座をめぐり試合をすることになった。それ以外は特になにか起きることもなく（相変わらず周囲は女性だけだが）

放課後、山田先生と千冬さんからISの練習機を借りる許可を取り、明日からさっそく練習が行えるようになった。これは千冬さんが優先的に練習機を回してくれるよう手配してくれるそうだ。ありがとうございます。

「それと織斑君、寮についてなのですが」

原作だと篠ノ之さんと相部屋だったな。

「喜べ、職員用の寮の空き部屋（私が空かせたんだが）、私の部屋の隣に決まった」

「という事です」

どうやらこれは原作と違うのか。まあ記憶がないという状態で篠ノ之さんと相部屋はまず無理だしな。事故で少し過保護なところ（仕事があっても土日などは家に帰ってきて出勤したりなど）が千冬さんにはあるから、千冬さんがなんとかしたのかもしれないな。

でもこんな急に決まることなのか？

「教師用の寮に入るといのはわかりますが、確か空き部屋がないから1週間は自宅から通うことになっていたのでは？」

「…おまえは自分の状況を理解しているか？」

世界でただ1人の男のIS操縦者、それを野放しにしておく…なんてできないよな。そういうことか。

「護衛、監視ということですか？」

「そつだ、ましてやお前は昔誘拐されたことがある。…今のお前は覚えてはいがな」

あゝ、そんな事件もあつたつけ、たしかドイツのヒロイン（例によって名前はry）のフラグに関係していたか？

「わかりました。ところで着替えなどの荷物は？」

「お前がまとめていた荷物を私が持ってきた。足りないものは買つか土日に家に取りに行けばいい」

「わかりました」

「夕食は6時から7時、寮の一年生用の食堂で取ってください。職員用の寮に住みますがそれ以外は校則どおりでお願いします。ああ、お風呂は男性職員用のお風呂を使用してください」

「わかりました」

「では私たちは職員会議があるのでこれで、それじゃあまた明日」

「後でお前の部屋に行くからな。夕食後は部屋にいる」

「わかりました」

「ではな」

さて、篠ノ之さんとの会話だ。気が重い。

廊下に出ると篠ノ之さんがドアのそばで待っていた。

「お待たせ、それじゃ行こうか」

「ああ、屋上でいい」

「わかった」

黙々と歩く。

彼女はあまり話しをしないタイプだったか？原作は最初からだいたいしか覚えていなかったし、もう忘れている部分があるからなあ。

オリキャラで原作介入とかするわけではないので原作を気にする必要はないのだが、ある程度は行動の指針にはなると思ったが、完結していなかったし、ほとんど役に立たない。それよりISの練習をした方がいいな。

つらつらと考えていると、屋上についたようだ。入学式でしかも授業があつた後だからなのか人氣が全くない。よかった。

「…」

「…」

「…」

「…」

篠ノ之さんは緊張？しているのか会話が始まらない。俺から話しかけるか。

「篠ノ之さん？俺に何か用があつたんじゃないのか？」

篠ノ之さんはいきなり俺の腕をつかんできた。

「私のことを！？覚えていないのか！？」

「…ごめん、1年前に事故にあつてね。頭を強く打って記憶喪失なんだ。医師の話では今の俺が安定しているから外因がなければ記憶が戻らない可能性が高いって」

篠ノ之さんは力なく腕を下ろす。その眼には涙がたまっていた。



「…そんな、嘘だ」

「…ごめん、本当のことなんだ。千冬さんに聞けば同じことを言うよ」

「…本当に！、本当に、私のことを覚えていないのか！？」

篠ノ之さんはさすがのような眼で俺を見つめ、問いかけた。ああ、心が痛い。

「…ごめん」

篠ノ之さんの眼から涙が流れている。本当に心が痛い。

「…私は、一夏のことが好きだったんだ。きっと初恋だった。その一夏はもう、いないんだな？」

「ああ」

「私は、私は」

もう見ていられないな。

篠ノ之さんをそつと抱きしめる。

「…っ……………」

篠ノ之さんは静かに泣いていた。

こんなかつこいいのは柄じゃないんだが、さすがに放つてはおけない。故意ではないといえ原因は俺にあると言えることだし。

「その、すまなかつた一夏、あつ、織斑」

その後、篠ノ之さんが泣きやむまで俺は篠ノ之さんを抱きしめていた。15分ほど経って篠ノ之さんが泣きやんだところだ。

「いいよ、一夏で」

「そつ、そうか、わかった。なら私も箒でいい」

「箒さんでいいか？」

「…呼び捨てでいい」

女性を呼び捨てって世界観的にも個人的にもかなりハードルが高いんだが。元の世界でも高校の時までだぞ女子を呼び捨てにしたのつて。

箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒、箒

と、よし。

「わかったよ、箒」

よし、どもらず言えた。

「ああ」

「…」

「…」

アフターケアが必要かもしれない。篠ノ之さ、箒は篠ノ之博士のこととかで悩んでいたし。

…話し相手、話す話題………！？1ついい案を思いついた。

「ほ、箒」

やばい、どもった。

「な、なんだ」

「よければいいんだが、昔の俺のことを教えてくれないか？」

「その、いいのか？」

「ああ。今の俺と昔の俺は同じ身体の別人みたいなものだが、やっぱり気になるじゃないか」

「わかった。私の知っていることでよかったら」

でももう日が落ちてきているな。さすがに春とはいえ日がなくなれば寒い。

「とりあえず今日は帰ろうか。もう日が落ちてきている」

「本当だ。わかった、ならまた明日」

「また明日、あつ、夕食だが一緒に取らないか」

さすがに昼食のような針の筵では食べたくない。

「いつ、いいのか？」

「男一人のあの状況で食べるのはさすがにきついんだ…」

「わかった」

「6時に食堂の前でいいか？」

「ああ」

とはいっても学生寮と職員寮はごく近くにある、というかつながっているし。帰りも一緒に歩くことになった。

「そういえば、寮はどこになるんだ？」

「職員用の寮で千冬さ、つと織斑先生の部屋の隣だ。さすがに女子しかない寮で一緒にとかはありえないだろ、常識的に考えて」

原作では相部屋なんてことになっていたが、まあお約束と言う奴か。

「そうなのか。そういえば今は千冬さんと呼んでいるんだな。昔は千冬姉と呼んでいたんだぞ」

「うーん、今の俺にとっては姉と言うより、恩人という感じがする。まああんな美人だからたまにドキッとするけどね」

「むう」

(千冬さんみたいな女性がタイプなのか今の一夏は…って私は何を考えているんだ。今の一夏は私の初恋の相手の一夏ではないんだぞ…でも、さっき抱きしめられた時安心したし、私を気遣って昔のことを教えてくれて言ってくれたし…)

うーん何かおかしなことを言ったのか俺は？ 箒が急に黙ってしまった。クールに見えるが観察すると表情が変わるのがわかる。

つと寮についたな。距離は50mほどか、まあ遠かったら不便だしな。

「じゃあ、また後で」

「あつ、ああ」

何か考え込んでいたが箒は大丈夫なのだろうか。

## 5 (前書き)

一日に1、2話投稿ペースを維持したいです。

箒と別れて数分で職員用の寮の自分部屋についた。

家具、家電製品、シャワー、情報端末、トイレなどすべてある程度新しい物でそれなりの値段がするだるう物が設置されていた。さすがに各国のIS操縦者を育てる教育機関だけのことはある。

荷物は部屋の中、ベッドの前に置いてあった。

とりあえず、中身を確認するが、今すぐに必要なものがないということはなかった。

一通り部屋を見て回った後、箒との約束の時間が近づいてきたため、外に出る。職員用の寮だけあって、廊下は人氣が全くない。食堂への道を一人歩く。ちなみに職員用の寮と各学年の寮は全てつながっている。一年生寮の食堂に近づくにつれて、ざわざわと人の声が聞こえてきた。

近くにいた女子がこちらを見ているのをしり目に食堂の前を見渡す。黒髪ポニーテールの娘、箒がいた。

「ごめん、少し遅れた」

「いや、時間通りだ。私が少し早く着いただけだ」

「そっか」

「ここで話していても、邪魔になるだけだ。さっさと中に入ろう」

箒と連れだって食堂に入る。

メニューを見てみるがすごかった。メニューの多さがものすごいのだ。

カレー、麺類、洋食、和食、デザート、セットメニューがある。

それもそれぞれかなりの種類だ。

「箸は何を食べる？」

「私は実家が和食中心だったから、和食セットにする」

「そうか、いろいろ試してみたいが俺も今日は和食セットにするよ。それにしてもすごい種類だな」

「そうだな。それだけでもこの学園の規模がわかる」

箸と食堂の感想を話しながら、食券を渡して配膳を受け取る。

席はかなり空いていた。おそらく一度にこの学年の生徒全員が集まっても空きが出るだろうぐらいに食堂は広がった。

「やはり広いな。この辺りはほとんど席が空いている」

少し離れた場所の人がいないエリアで箸の座った向かいの席に座る。

「いただきます」

「いただきます」

昼は消化にいいうどんを頼んだがおそらく手打ちだと思えるほどうまかった。そしてこの和食セットもうまい。これ以外のメニューも楽しみだ。一学期でメニューを全覇してみよう。

「そういえば、クラス代表でオルコットだったかと戦うことになったが、大丈夫なのか？」



「とりあえず練習機の貸出申請を織斑先生と山田先生に頼んでおいた。明日から少しでも多くの時間を練習に費やすつもり」

こつちの生活に慣れてから、毎日トレーニングをしていたので基礎体力はあるはずだ。というよりこの身体は前の身体に比べて身体能力が高いので、運動をするのが苦ではないし、鍛えればそれなりに成果が出るため、この身体を調べる意味でもいろいろと試してみたいのである。

身体能力は問題なかったので、後はIS適正が原作通り俺にあるかを調べたいのだ。

「そうか……なつ、なら、私も何か手伝うぞ？」

「それはありがたいのだが……」

手伝って何を手伝ってもらえばいいのか。練習機をもう一つ借りるのはさすがにすぐには無理だしな。

「……だめなのか？」

シヨボーンとする筈。普段きりりとして鋭いからなんかすごく可愛いく見えるな。

「いや。手伝ってもらおうといっても何を手伝ってもらえばいいのかわからないんだが」

「そつ、それは……とつ、とにかく手伝いをするからな！」

「ええと、わかった。よろしく」

この反応は原作通りっぽいけど、俺は記憶喪失なんだがなあ。

(昔の一夏と違うのに、私のことを覚えていなのに、私はやっぱり今の一夏のことになってる…)

まあ、殴るとかされてないし、これならそれなりに良好な関係を気づいていけるかな？

夕食を終え、明日の朝食も一緒に取ろうと筈と約束し、部屋に戻った。

端末が置いてあったので、使い方を調べてみることにした。この世界は科学が前の世界よりかなり進んでいる。さすがに宇宙へは進出されていないが、ISは宇宙での活動が前提としてあるし、近いうちに人類は宇宙へ進出するのかもしれない。

話がそれたが、端末を使い、ISについて改めて調べてみるが基本的なことしか載っていなかった。まあ信憑性の薄い情報では陰謀論などが飛び交っていたが。

思ったより疲れていたらしく、ぼうつとしながら端末を眺めていたが、呼び鈴が鳴ったため、ハツとして立ち上がる。

ドアを開けると千冬さんがいた。

「織斑先生」

「今は千冬さんでいい。入るぞ」

「ええ、どうぞ」

千冬さんは部屋を見回していたが、俺の方へ向き、眼を合わせてきた。怜悯な眼の中に感情、俺を気遣う思い？が見える。心配しているのかもしれない。

「一夏」

「はい」

「クラス代表のことだが、あまり無理はするな」

「はい。でもやれることはやろうと思います。実はISを操縦するのけっこう楽しみなんですよ。どちらにせよこの状況からは逃げられないし、ならいつそ楽しむことにします」

千冬さんはフツとニヒルに笑った。ああ、相変わらずふつくしい。

「まったく、お前は…まあいい。とりあえず、がんばれ、一夏」

「…はい」

「では私は部屋に戻る。もし何かあったら私の部屋へ来い」

「わかりました。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

千冬さんが部屋を出て行った。

あの人が今は家族なんだよなあ。これはいまだに慣れない、だつてきれいだしスタイルいいし、元の世界の俺とほとんど年代だし、家ではズボラになるから風呂上がりの時なんかバスタオル一枚でうるつくことがあつたし、あれはすごいドキドキしたなあ。

あの人は姉だ。あの人は姉だ。あの人は姉だ。…ふう。これで大丈夫だ。もう少しで〇〇〇するところだつた。

…疲れているし、よけなことは考えずシャワーを浴びて寝よう。

さて、入学二日目の放課後、打鉄という訓練用の量産機を使用して見たが、一言、すごかった。

ISは最高だった、元は小説の設定だけあって、元の世界では決して経験できないことだ。

ある程度は思うままに動く、早く急な制御や複雑な動きを行うとすると、こちらのイメージ不明慮だと勝手に動きがおかしくなる。感覚と思考で動く感じだ。Gがほとんど軽減されているため体力はあまり消耗しないが、それでも体力がないと感覚と思考が鈍くなっていく

すごく楽しい、身体全てを使用したアクションゲームのような感じだ。軍用でなければただ楽しんでいられることができたのかもしれないが、それでも楽しいものは楽しい。

飛行する感覚は最初は怖かったが、スピードを上げていくとすごく気持ちいい。車の運転に慣れたドライバーがついスピードを上げてしまうような感覚がある。

つい口元に笑みが浮かんでしまう。

練習初日はつい楽しんでしまい、碌に練習せずに終わってしまった。ちなみに打鉄の準備や整備などは箒に手伝ってもらった。箒は原作と違いなぜか俺に優しくしてくれるのだ。もしかしたら根はすごくやさしい娘なのかもしれない、原作一夏の鈍感のせいでツンデレっぽくなってしまったのかもしれないな。

ちなみに箒とはご飯をずっと一緒に取っていた。土日は千冬さんも一緒だったりしたが。それとクラスの女子の数人も一緒に食べるようになった。相変わらずきゃいきゃいしているが、それなりに仲が良くなったと思う、いろいろな噂話とか教えてくれるし。

そしてそれから5日間、土日もぶっ通しで練習を続けた。おかげでだいぶISに慣れることができた。原作一夏と違いIS適正は今の俺の方が高いのかもしれない。

機動は素人なりにかなり自信がついたし、1つ面白い機動を考え

ることができた。これは身体にも負担がかかるとは、かなり有効な機動だ。実は機動に関してはひそかに自信がある。

ちなみにISを使用する際に着るぴったりとしたスーツ（女子のレオタード状はやばかった。色気がありすぎた）はへそ出しのものはやめてもらい全身タイプのものを使用している。さすがに露出趣味はない。

そして、おそらく今日は実戦だ。なんとか勝てないものかな…

千冬さんと山田先生に呼ばれ、第三アリーナのAピットに向かった。どうやら俺の専用ISが搬入されたらしい。ちなみに筭と話していた途中だったために筭も一緒だ。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番で物にしろ」

よし実戦だ。

心臓の鼓動が速くなっているが、体が硬くなっている感じではない、すごく心が躍っているのがわかる。

「一夏、あれだけ必死に練習していたんだ。だから」

「ああ、あの歪んだプライドをたたき壊してやるさ」

日本の文化、特に食事については世界一だろ、常識的に考えて。それを馬鹿にしたことを後悔させてやるさ。

ピット搬入口が開くと真っ白なISが見えた。原作通り白式だろう。

「これが織斑君の専用IS白式です！」

「身体を動かさせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ、できなければ負けるだけだ。わかっただな」

「了解です」

純白のISに近づき、触れる。俺のIS。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化する」

千冬さんに言われた通りに、白式に身体を任せる。すぐに装甲が閉じまるでISが自分の身体と一体化したように感じる。

打鉄とは違い、時間がたつほどに感覚が鋭くなっていく。センサー類も打鉄とは比べ物にならないくらい正確で速い。

センサーがセシリア・オルコットのIS、ブルーティアーズを感じる。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分はどうだ？」

「…すごいですよこの白式。打鉄とは比べ物にならないです」

本当に最高だこのISは。このISで負けたら、それは操縦者、俺の責任だ。

「大丈夫そうだな。ならばいつてこい！」

「はい！」

深く思考に瞬時に反応し体がふわりと浮く。

「一夏！がんばれ！」

冪みたいな娘が応援してくるのは嬉しいな。



「ああ！いくぜ！」

加速してピットから出ると、ブルーティアーズを視認できた。青い羽根の騎士のようなISだ。そして見た限りでは射撃型。これは原作通りだ。なら俺の訓練の成果が試せる。

オルコットさんは腰に手を当てたポーズをしている、いちいちオーバーワークだがやはり元がいいので様になっている。それにしても露出度が高い格好だ。

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコットさんが鼻を鳴らしながら馬鹿にしてくる。だがその挑発は意味がない。

「逃げる？どうして俺が？」

そうだ、白式と俺なら勝てる！俺は心の底からそう信じている。

「最後のチャンスを上げようと思いましたが、やめにしますわ」

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

オルコットさんが射撃モードに移行したとセンサーが警告してくる。すぐにでも火蓋は切って落とされるだろう。俺は白式に装備一覧を出させた。

やはり、近接ブレードだけだった。

「代わりに、」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

来る！

「ボロボロにしてさしあげましてよー！」

「やってみる！」

レーザーが放たれる瞬間に急上昇し、かわすと同時に近接ブレードを展開した。

「いくぜ！」

次々に放たれるレーザーをくるくると回転しながらランダムに移動しかわす。相手の周りを高速で飛び交う、そして少しずつ接近していく。

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうなんて……笑止ですわ！」

予想以上の精密射撃だ。それも連射性が高くなかなか近付けない。だが逃げに徹していれば命中はしない程度だ。巧く移動すれば距離を詰められる！

「そっいいながら、一発も当たっていない！」

ある程度の距離が詰まった。これなら、

「セイ！」

加速を最大にし一気に距離を詰め、斬撃を胴の形で行う。

「速いですわね！でもまだ！」

オルコットさんは瞬時に後退し斬撃を交わす、それをセンサーが感知し、後退先を予測する。俺はセンサーの予測が出ると同時に最大加速のまま方向転換を行う。

「甘い！」

後退する際の初動からの加速と白式の最大加速ではあまりに速度が違い瞬時に距離を詰め、斬撃を逆胴の形で行う。

「きゃあ！」

オルコットさん何とかかわそうとするが、脚部に当たったようだ。

「どうやら、先制は俺のほうだったようだな？」

「くっ！言ってくれますわね！いきなさい！」

ファンネルつばい兵器が射出され、四方から俺を狙ってくる。

「ちい！オールレンジ攻撃か！」

四方から放たれるレーザーをセンサーの情報をもとにかわすが、

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、 576

「しまった！」

一瞬判断が遅れてしまい、左手にレーザーが当たってしまった。あのスナイパーライフルのような主武装とは違い、1発1発の威力が低いためそれほどシールド残量は減らなかった。

しかしあれはめんどくさい。かわすことに専念しても少しでもミスをすれば攻撃が当たってしまう。……攻略方法はないのか？原作は…主人公補正が起きたことしか覚えていない、それにたしか負けただ。

考える！……相撃ち覚悟で落とすか？……それがいいな。

1～4まで割り振られたファンネルもどき。まずは1つめのファンネルもどきに集中する。1のファンネルもどきのレーザーをかわす。

2、3、4のファンネルもどきのレーザーを相撃ち覚悟で無視し、1のファンネルもどきを斬る。

「ここだ！」

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、510

2つのレーザーが直撃するが、1のファンネルもどきは落とした。ファンネルもどきは一度オルコットさんの元に戻る。

「くっ！やりますわね！」

再びスナイパーライフルで牽制し、距離を取られた。

「でもまだ3つ残ってましてよ！」

距離を詰めようとしたが、間髪いれずに再びファンネルもどきが

射出された。しかし、もう脅威を感じなかった。なぜなら、

「2つ目！」

4つあったからこそ回避できなくなったのだ。1つ数が減っただけで機動を見切り、レーザーを回避しつつ斬り落とすことは容易になった。

「3つ、4つ目！」

改めてオルコットさんに向き直る。

「いいですわ！もうあなたをただの素人だとは思いません。代表候補生並みと判断して、全力でお相手して差し上げますわ！」

言葉とともに、腰の部分についている砲から何かが高速で発射される。

ミサイルか？！速い！どうやら噴射剤を併用して直線でのスピードを高めたものらしい。回転して後ろを向き加速し回避するが、正確にこちらを追尾してくる。ファンネルミサイルといったところだろう。どうする？ミサイルをブレードで斬れるか自信がない。それはこちらは高機動で相手の攻撃をかわしているため体力の消耗が大きい。この消耗戦になればこちらが不利だ。

ファンネルもどきの弱点はおそらくファンネルもどきを使用している時は他の武器の使用ができないことだろう。しかしそれは今の状況を打破することはできない。せめてバルカンなみの弾幕でも張ればいいのだが。

ああもつ、どうすればいい？！

「すごいですね織斑君、あの機動力は白式の性能があるとしても、とても搭乗時間が数十時間とは思えません」

山田先生が称賛の声をあげる。モニターには無線誘導兵器を落とした一夏が映っている。

「ああ、私も驚いている。さすがは私の弟だ。しかし……」

「なんですか？織斑先生」

「セシリア・オルコットは代表候補生だ。今までは油断していたが、ここからは本気でやるだろう。どうなるか見物だな」

そう言っているが千冬の口元には笑みが浮かんでいる。そしてことばどおりモニターには無線誘導兵器の実体弾に追いかけれ一夏はいまだ反撃に移れていないのが映っている。

「確かにそうですね。でも、そう言っていますが、口元が笑っていますよ？」

「っ、んん！」

山田先生の指摘に照れてバツが悪くなったのか、咳払いをする千冬。その顔は少し紅潮していた。

「…それでも勝つのは織斑だからだ」

「えっ！？どうしてですか？」

確信をもった千冬の声に驚く山田先生。

「白式はまだフォーマットとフィッティングが終わっていない。もうすぐ終わるはずだ。それに…白式には隠し玉がある。膠着状態なら一気に状況が変わるぞ」

少し懐かしい顔をして言う千冬。

「あっ！そうですね！それにしても…織斑君、本当にすごいですね」

その言葉にまた口元に笑みを浮かべる千冬。いつもの鋭さが影を潜めている。そしてそれを見てにやにやする山田先生。

（一夏…すごい。それにかっこいいな。…私もあんな風に強くなれるのだろうか？）

山田先生と千冬のやりとりが全く耳に入っていないほど、篝はモニターを、いやモニターに映る一夏を一心に見つめていた。

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、457

くっ！じり貧だ。ファンネルミサイルから逃げ回っていたが、向こうは確実にダメージを与えるためにあえてファンネルミサイルの操作をやめ、スナイパーライフルを撃ってきたのだ。そのすぐ後にファンネルミサイルは地面にぶつかって爆発した。そしてまたファンネルミサイルを放ってくる。確実にこちらにダメージを与えられる戦法だ。

本当に厄介だ。…いや、同時に攻撃されないだけでした。しかしこのままでは…

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、398

本当にどうすればいい!？

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

なんだ!？

突然のことで驚いてしまった。すぐさま表示された確認ボタンを意識すると頭に直接データが送られてきた。

フォーマットとフィッティング…そうだ原作での主人公補正的なイベント、すっかり忘れていた。データを理解したが、…すごいな、



初期状態よりさらに繊細で精密な機動が可能になり、武装も雪片式型のバリア無効化攻撃ができる、この状態の白式ならば、勝てる！  
よし、あれを使って一気に決めてやる！

「ま、まさか……ファーストシフト！？あ、あなた、今まで初期設定だけでの機体で戦っていたと言うの！？」

驚いているオルコットさん。

「これで決めさせてもらう」

俺は、静かにしかし勝つと確信した思いを込めて宣言した。

「……できるものならやってみなさいな！」

またファンネルミサイルが発射される。まずは一気に最大加速し、真正面からファンネルミサイルに向かっていく。

タイミング……ここだ！

ファンネルミサイルが当たる瞬間に一気に最大加速を用いて、急停止する。そして横に瞬時加速させファンネルミサイルを回避する。ファンネルミサイルがこちらに向かってくる前に、瞬時加速でまた急停止し、オルコットさんに向かい瞬時加速する。

Gがきつい！身体がきしむ！だけど！

「そんな、速い！」

オルコットさんの驚く顔が見える。しかし、瞬時にスナイパーライフルで迎撃してくる。

精密に放たれるレーザー、それを先ほどの瞬時加速の連続使用による高速変則機動を連続使用してかわす、しかしいくつかはかすっ

てしまう。

だが、距離が詰まっていくと相手は対応できなくなっていく、そして俺はバリア無効化攻撃を発動させる。

「ハッ！」

そして気合とともに雪片式型を大上段から袈裟斬りに一閃する。シールドを無効化し、フィン上のユニットを切り裂き、あまりの衝撃に一部が破損する。

しかし、いまだオルコットさんのシールド残量は残っているようだ。だが後一撃で終わるだろう。

逃げようとするオルコットさんに向かいまた高速変則機動を行い後ろを取った。

これで俺の勝ちだ！

バリア無効化攻撃による雪片式型の斬撃が今度は脚部に当たった瞬間、

『試合終了。勝者 織斑一夏』

ブザーとともにそう告げられた。

勝った。

そう思った瞬間、身体に痛みが走った。

何とか耐えられるほどだが、疲労と合い回って倒れそうになる。まずい、な。

何とかピットに戻ることができたが、ISが待機状態になった瞬間に膝について倒れてしまった。

「一夏！大丈夫か！？」

篤が駆け寄ってきて、支えてくれた。

「なんとかね」

「全く無茶をしたものだ。だが…お前の勝利だ、よくやったな一夏」

千冬さんが笑顔でほめてくれた。この笑顔を見ただけでも無茶をした甲斐があったと思う。

「篠ノ之、織斑を医務室に連れて行ってやれ」

「わかりました。一夏、行こう」

俺は筭に支えられながら、医務室に向かった。

## 6 (後書き)

なんとか書き上げることができました。

ISの正確なデータがわからないので、このSSでは白式は現存のISでは機動力、運動性能がもつとも高いISとなっています。

強さは、

機動力なら 憑依一夏>原作一夏 かなりの差

接近戦なら 憑依一夏<原作一夏 それほど差はない  
です。

## 7 (前書き)

今回の話は、うれし恥ずかしもご知りません。って感じですよ。  
二  
ヤニヤ

暇だ。

今日は、オルコットさんとの試合の翌日。

俺は、医務室での診断の結果、今日は安静にしているとのこと、寮で一人だらだらしていた。また、昨日は固形物は食べるなど言うことで、某インゼリーなどしか取っていないので腹が減っている。朝も疲れていたのか起きれなかったせいで朝食をとれなかったし。

することがないので、一人反省会をすることにする。

ベッドに寝そべりながら、設置されている端末を使用し、昨日の試合の映像を映し出した。

それなりに高い錬度の試合だと思うが、しかし、俺が勝った理由はISの差が大きいからだと思う。ブルーティアーズの無線誘導兵器はシステムが完成していない実験機、ゆえに操作性は最悪なのだろう、だから無線誘導兵器とスナイパーライフルを同時に使用できない。たいして白式は技術確立用の実験機ではなく、高い基本性能と近接戦特化を突き詰めている。そのため操作は簡単だ。たしか白式は篠ノ之博士が作ったんだっけ？原作知識があやふやだからわからないが確かそうだったはず。確立できていない技術をテストするのではなく、確立した技術で作られた、そう、いわば完成されている機体だといってもいい。だから勝てた。ん？雪片式型は新技術のテスト用だったかな？まあいいか。

もし、ブルーティアーズの無線誘導兵器のシステムが完成したりすれば、間違いなく負ける。より精密にオールレンジ攻撃を行いながら、あの精密で連射性の高い狙撃をされるとか、まさに蜂の巣にされてしまう。

まずは白式に乗る時間を取り、あの機動を行った際の反動を少なくさせる。昨日医務室から戻った後千冬さんから、あの高速変則機動は許可するまで使用するなと言われた。しかし、白式の搭乗時間

が増えていけばパーソナルデータが集まっていき、いずれは反動も抑えられていくので、1日に無理しない程度で練習しろとのことだ。もしくは専用のパッケージを使用する方法もある。パッケージとは簡単に言えばガンダ SEE のストライクのパクリみたいなものだ。

現状ではより正確な機動と、雪片式型の扱いを上達させ、白式にデータを集める。それと攻撃する瞬間のみバリア無効化を発動させるとか試してみよう。

まずは白式に乗り、より正確な機動を行う、またいろいろな機動を試していく、これだけを行っていいればいい。雪片式型については感覚として剣を正確に振るうというのがわからない、間合いなどもデータがあってもそれをより役立てることができないのだ。これはどうすれば……たしか箒が剣道で中学で全国大会で優勝していたはずだ。簡単なことでもいいから教えてもらえるか頼もう。

箒か……フラグを立てていて、好かれていたのは原作一夏だったはずだ。でも妙に俺に優しいんだよなあ。昨日もこの部屋まで連れてきてくれた時に、格好良かったぞ、なんて言ってくれたし……まさか俺がフラグを立てているなんて……あるわけないですよねえ。元の世界スペック的に考えて。

ふう、考えたら少し空しくなった。寝るか、眠れるかは、別、として。

… z z z …… z z z ……

どうやら寝ていたらしい。時計を見ると昼になっていた。しかし食堂で昼食を取る時間はほとんどない。購買で買ってもいいが、まあいいか。某インゼリーで済ませよう。

顔を洗いさっぱりすると、身体の芯からあつた痛みや疲労は取れていた。よし、大丈夫だ。しっかりと夕食を取って明日からまた頑張ろう。

と心を一新していると呼び鈴の音があった。こんな時間に誰だろう。千冬さんかな。

ドアを開けると思ってもいなかった人物、オルコットさんが立っていた。

「オルコットさん？」

「あー夏さん。お体は大丈夫ですか？それとセシリアで結構ですわ。あなたはわたくしに勝利した方ですから」

あれ？

「じゃあ、セシリア？」

「はい！GOODですわ」

えっ、何この笑顔、可愛い。



「大事なとのことですが、お見舞いに来ましたわ」

「ええと、ありがとう」

なんでこんなに優しいんだ。えっ？フラグ立ったのか？

「それと飲み物を買ってきましたの。どうぞ」

スポーツドリンクを渡された。一応冷蔵庫にある程度買い置きがあるのだが、もらっておく。

「ありがとう」

渡される際に手が触れ合った。

「っ」

セシリアは照れているのかもじもじしている。やべえ可愛い。

「そっ、そうでしたわ。今夜、一夏さんのクラス代表就任パーティーを行うとのことですが、大丈夫ですか？駄目なら明日以降でも大丈夫ですわよ」

「ああ、もう疲れも取れたし、大丈夫だ」

・・・

「そうですね、それは良かったですわ。では夕方にでもわたくしがお迎えに上がりますわ」

何か含みがあるが、まあいいか。

「わかった。楽しみにしてる」

「はい！では、わたくしはこれで」

もしかして俺、青春してるのか！？

織斑一夏、わたくしを負かせた方、強い男。わたくしの理想の男。昨日の試合、最初は油断していたが、最後はできうる限りの力を出した。でも負けてしまった。しかし、負けたことを理解した瞬間悔しさよりも、恋心が募ったのだ。もしかしたらわたくしは心のどこかで負けることを望んでいたのかもしれない。

だって一夏さんは世界でただ一人の男のIS操縦者なのだ。つまり理想の男になれる可能性が唯一ある男と言ってもいい。だからわたくしはきつとあの方に期待していた。

昨日の試合を見ていた生徒の多くはきつとあの方に大なり小なり恋心を抱いただろう。この男性蔑視の風潮が強い世の中、女性と対等で強さと優しさを持った男なんていないのだ。あの方を除いて。

絶対に負けない、わたくしが恋をするのはきつとこれで最後にな

るかもしれないのだ。

もっかのところのライバルは篠ノ之箒。篠ノ之博士の妹で、今最もあの方に近い女だ。食事は毎日一緒だったそうだし、練習を毎日手伝っていたらしい。それにクラスで、いや学年でもトップクラスのスタイルのよさ、あれはわたくし以上だ。わたくしもそれなりに自信があるがあれには負ける。

それに剣道？の中学生の大会で優勝したことがあるらしい。鍛えられた体は女性らしさを含みながらも均衡が取れており、ただ綺麗と思ってしまう。強敵だ。

でも負けない、一夏さんは、絶対にわたくしがもらいます。

ISの操縦技術について教本を元に調べていたが、いつのまにか夕方になっていた。そういえばセシリアが帰った後、悪寒がしたがあれはなんだったのだろうか？

昼までは寝ていて、寝ぐせや寝汗をかいていたために軽くシャワーを浴びてさっぱりした後、セシリアが迎えに来るのを待っていた。しかし…

気がつけば、修羅場になっていた。何を言っているのかわからな  
いが（ry

「さあ、一夏さん。わたくしと一緒に行きましょう」

「一夏、私と一緒にいこう」

どうしてこうなった？どうしてこうなった？

「あら、お昼にお見舞いに行きました際に、わたくしが迎えに行くとお約束しましたのよ」

「なっ！抜け駆けとは卑怯だぞ！」

Why? Why?

「あら、ノロマな方が悪いのですわ。わたくしはただ速く行動しただけですわ」

「な、昨日まで一夏を馬鹿にしていた尻軽が、何を抜け抜けと」

あばばばばばばばばばばばばば

「し、尻軽ですってえ！」

「ふん！」

バチバチと火花が散っているがきつと気のせいだ、うん、気のせいだと思いたい。とにかく事態をおさめないと。どうする？そうだが時間が押しているじゃないか！？

「…とりあえず、時間がないから、食堂に移動しよう」

「むう、わかりましたわ」

「…わかった」

二人は俺の左右に分かれ、寄り添うようにくっついていった。嬉しいのだが、嬉しくない。

「…その二人とも？せっかく可愛いんだからさ、怒った顔もいいけど、笑顔でいてほしいんだけど。喧嘩はやめようよ？」

「一夏さん…」

「一夏…」

よし、これで修羅場は大丈夫。クサイセリフを言っただけはあるぜ。しかし、某妖精が現れそうなクササだった。正直素面で言えるセリフじゃないだろ、クササ的に考えて。

と思っていたら、二人は顔を合わせた後、そっぽを向いた。

「ふんっ」

「ふんっ」

大丈夫じゃねえー！……はあ、胃が痛い。

なんだこの女は！？

昨日まで一夏を馬鹿にしていたのに、いきなりこの態度はなんだ！？

この一夏は私の幼馴染とは別人と言える。でも、1週間だが毎日一緒に食事をとり、昔の話を聞いてくれて、そしてISの練習をしているときは楽しそうだがすごく必死だった。

私はその姿に恋心を抱いていった。そして極めつけは昨日のあの試合だ。

一夏はきつと私に申し訳なく思い、いろいろ一緒に行動してくれたのはわかっている。でも、落ち込んでいるときにあんなに優しくされて、そのうえあの強さを見せられたら、正直ずるいと思うほどだ。

セシリア・オルコット、代表候補生は強かった。でもその代表候補生に一夏は勝ったのだ。

すごく、格好よかった。そして私は今の一夏を好きだと強く思った。幼馴染の一夏とは別人だが、優しく、強く、かっこいい。

それを自覚した時は真っ赤になってしまったほどだ。

同時にこの学園での生活がすごく楽しみになった。だって一夏の同情からくる行動かもしれないが、ほぼ毎日一緒に行動できるのだ。それを習慣にしていっていつかは一夏と……なんて考えると胸がぎゅ〜としてあったかくなった。

なのに、この女はなんだ！？

絶対にこの女には負けない！一夏は私がもらっていく！

## 8 (前書き)

1日に2話投稿することのなんと幸せなことか。

ま、ただストックが多くなって来ただけですけどね。

そして、クラスメイトが誰が誰だかわからない件について

(のほんさんのみ顔と名前が一致する)

「というわけです！織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

クラッカーが乱射された。

俺を中心に右にセシリア、左に篤が座り、クラスの仲が良い娘がその周囲に座り、そのほかの娘は立っていたり、近くの席に座ってこっちを見ている。

きゃいきゃいと女子特有の雰囲気があるが、まあ歓迎されているので悪くはない。というかちょっと嬉しい。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

なんかダシにされているような感じだが、まあいい。それより、篤？セシリア？二人とも近すぎじゃないか？さっきからずっと離れないのだ。まるで先に離れた方が負けと言う雰囲気漂っている。

ああああ、俺はどうすればいいのだ。

香水と汗が混じったいいにおいがするし、あつたかいし、元の世界ではDTではないとはいえ、ほんの数回だけだったし、この身体は若いし、ごにゃごにゃ……それにこの二人はやばい、顔は可愛いし、スタイルは抜群だし、…ふう。千冬さんとの生活である程度慣



れていなかったら、今頃どうなっていたことやら。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしてみました〜！」

いかにも新聞部ですといった感じの人だ。そういえばネクタイつていうのか？の色が学年ごとに違うんだな。この人は黄色だ。そして1年は青だ。3年は赤だったかな？

「あ、私は黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ、名刺」

名刺を受取るが、うん、何やらパステルチックですね。やっぱり女子高のノリだ。

「ではではズバリ織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

感想、昨日の試合の感想か…

「セシリアは強かった。俺が勝てたのは機体性能のおかげと云っていい。でもクラス代表になったからには、……………いや、俺はたとえ相手が千冬さんでも負けたくない。だから勝つために努力するさ。みんなも力になってくれたら嬉しい」

(きゅん！)

(ぼ〜)

(織斑君って格好いいじゃん)

(おりむー、すてきです)

ああああああああ、つい熱くなつて語ってしまった、恥ずかしい。感想と言われて昨日のあの興奮を思い出したからだ。俺はきつとISにハマっているんだ。もう一度あの興奮を味わいたい、ISとの一体感、死力を尽くしての戦い、そして勝利。それはなんて幸せな時なんだろうか。

「そうですね。わたくしに勝利したのですもの、一夏さんはもっと強くなれますわ。わたくしもお手伝いしますわ!」

「私も、何か手伝えることがあったら遠慮なく言ってくれ!」

「わたしも、わたしも」

えーと、これはクラスが団結したってことでいいのか?

(これはまたすごい子だね)。うん、これからはネタに困らなさそうだ)

「それじゃあ、写真を撮りましょう。織斑君とセシリアさんで互いの健闘をたたえる感じ、握手とかしている場面をお願い」

「まあ!、わかりましたわ!」

まあ、記念には成るか、初勝利という記念にね。

「…むっ」

「それじゃー撮るよー、35×51÷24は?」

5 1 ÷ 2 4    ||    約 2 . 1 × 3 5    ||    約 7 4

「約 7 4」

「正解！正確には 7 4 . 3 7 5 でした」

つい計算したが、意味わからんなこの会話。

っていつかなんで皆さん、俺とセシリアの周りに集合しているんですか？まあ、これも思い出になるしいいか。

そして簿、なぜひつついているんだ？

「なぜ全員入ってますの！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃない」

「むー！」

この女だらけというのはなかなか慣れることができないが、それでも楽しくやっつけていけそうだ。

夜10時過ぎまで続いたパーティーは終わり、後片付けをするので俺は手伝うと言ったが、先に帰っていいよと言われたので、厚意に甘えることにした。

例によって篤とセシリアがひつついている。

セシリアの好意はもはや明確だ。俺は原作のような、信じられないほどの、わざとじゃないかと言える鈍感ではないのではさすがに気づく。

篤も原作一夏ではないのにきつと俺に好意を抱いているだろう。

さすがにセシリアとの修羅場を味わえば気づく。なんで俺に？と疑問はあるが。セシリアは試合に勝ったのが理由だろうな。

しかしどうすればいいんだ。今はISに専念したいし、それに恋愛沙汰は苦手なのだ。元の世界でも付き合っていたりしていたことはあったが、オタクな友人たちと馬鹿をやっていた方が気楽で楽しかったのだ。

好意は嬉しいが今は付き合うとかは考えられない。もし告白されたら、そのときははっきりと今の心情を伝えよう、いや、今はっきりと言った方がいいのか？しかしこの二人に好かれているというのも捨てがたいが、まあ、こういうことははっきりしておいた方がいいな。

「二人とも、話があるんだが」

「なんですか？」

「なんだ？」

立ち止まって、二人に問いかける。ふう、ちょっと緊張するな。

「その、二人は俺に好意を抱いているだろうか？」

二人は、顔を真っ赤にした。この純情さ、凶悪な可愛さだ。

「それは、その…まあ…」

「そっ、それはだな、えと…」

もじもじとしている二人は本当に可愛くて、ちょっと残念だが、はっきりと伝える。

「俺は、今はISに専念したいんだ。だからきつと他のことは考えられない。だから、あゝ、その」

「……………」

「……………」

「だから!?!?それで!?!?」

「私たちにあきらめると言うのか!?!?」

あれ？

「お断りしますわ！そのような理由でこの思いをあきらめることなんてできませんわ！」

「そうだ！たとえ一夏の言葉だろうと、そんな理由では絶対にあきらめない！」

ええー！なんでこんなことに……………

「一夏さんは特に意識しないでいいですわ！ただ私が勝手に思いを抱き、そして行動するだけですから！」

「そうだ！お前はISに専念すればいい。私はその姿が好きだから！お前が私を見ていなくても私はお前を見ている！」

ふうー、女の子は強いなあ、いや、恋する女の子は、か。

「わかったよ。なら、え〜と、まあ、よろしく？」

「はい！」

「うむ！」

まあ、いつか。それはそれで楽しくなりそうだ。それにこんな可愛い娘に好意を抱かれて、嫌なはずがない。

そう思うよな、お前も。そう思うだろう、てめえも！……………でも修羅場は遠慮したいなあ。

あんなイベントがあったせいか、黙々と歩くことになった。しかし、あの修羅場特有のピリピリした感じはなく、ピンク色というのが甘酸っぱい雰囲気漂っている。

ふう、ようやく俺の部屋の前に着いた。今日は肉体的な疲れは取れたが、精神的に疲れたな。明日はISを動かして発散しよう。

「それじゃ、二人ともお休み」

「はい、おやすみなさいませ」

「ああ、おやすみなさい」

あ、箒に剣の使い方を教えてもらうのを頼むのを忘れていたな。

「ああ、そうだ、箒」

「なんだ？」

「俺の白式は雪片式型、剣しか武器がないから剣の使い方を教えてもらえないか？」

「あっ！ああ！いいぞ！」

「そうか、ならいつも通り放課後は練習に付き合ってくれるか？」

「わかった！」

そこまで笑顔にならなくても、そしてセシリア睨むなよ。

「わっ！わたくしも何か手伝うことはありませんこと！？」

まあ仮想敵があった方が実践的でいいしな、セシリアなら実力は身をもって知ってるし。

「そうだな、簡単な仮想敵になってくれると助かるが」

「はい！大丈夫ですわ！」

だから箒睨むな。

「はあ、二人とも、明日からよろしく頼む」

「はい」

「うむ」

「じゃあ、改めておやすみ」

「おやすみなさいませ」

「おやすみなさい」

部屋に戻って、ベッドで寝ようとして思った。  
俺ってヘタレなのかなあ、と。



パーティーから2週間ほどたった。現在は、放課後になると見学者、いや見物人がいるなか、箒、セシリアとISの練習をしている。箒には竹刀を用いて、剣の振り方を習った。そしてすぐISを起動し、ISで雪片式型を振る。そうして剣のデータをISに蓄積していった。また箒が打鉄（俺が練習用に使用していたものをそのまま借りることができた）に乗り、近接戦闘の練習もした。さすがに高機動での接近戦は行わなかったが。

セシリアとは、射撃を避ける訓練、鬼ごっこで相手に接近する技術、簡単な模擬戦を行っている。

二人も俺と練習することで、スキルアップをしているようだ。俺ばかり世話になるのはやはり気が引けていたので、これは互いにスキルを高め合ういい関係だと思っている。

それと食事は箒だけでなく、毎回セシリアも一緒に摂るようになった。とくに何かしてくるわけではなかったため、まあこんな関係もありかなと思うこともあれば、修羅場（3年生がISの練習をしようとして誘ってきたりしたときなど）が発生して、胃が痛くなることもあった。

それでもこのIS学園生活を俺は楽しんでいる。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

箒、セシリアと一緒に登校し、席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

この時期に、転校？……………ああ！中国人の幼馴染（例によって名前はry）か！

「この次期に転校か？家庭の都合とかかな？でもそれなら休んでい

ただけつてことになるな。なんでだろう」

そつだ、転入は難しいはずだ。入学は身体能力とIS適正、筆記試験など数々をこなさなければならぬが、転入は国の推薦とか必要だったはずだ。なんか理由があつたか？原作は例によつて（ry

「それはわからないけど、中国の代表候補生だつてことはわかつてるよ」

「代表候補生か」

原作通りならたしか戦うことになつたはず、それでたしか襲撃かになにかあつたはずだ。まあ、例によつてぶつつけで戦うしかない、そのための努力はしてきたし、それなりに実力はついたはずだ。

「あら、わたくしの存在をいまさらながらに危ぶんでの転入かしら」  
セシリアか、いつもの腰に手を当てたポーズ、相変わらずオーバリアクション気味だが、可愛いので許す。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

箒か、相変わらずクールと言うよりぶっきらぼうだが、俺と眼が合うと、ちよつと照れながら眼をそらすのが可愛いので許す。

なんか俺が悪人に思えてくることがあるが、修羅場が発生するとその思いは薄れる。

と、まあ、このように俺たちの関係は落ち着いているのだ。

さて、中国人の幼馴染か、はつきりと記憶喪失でもう昔の記憶は戻らないと伝えよう。千冬さんやIS、そして箒とセシリアのおか

げで、俺はたとえ誰かを傷つけても今の自分であると決心したのだ。もしも今すぐに元の世界の元の時間に戻れると言われても、絶対に拒否する。俺は、俺が織斑一夏だ。自信をもってそう言える。

「それにもうすぐクラス対抗戦だぞ。そのようなことを考えている場合ではない」

「そうだな、後1週間と少しか。しかし、不安とかは感じないんだ。むしろ戦えることが楽しみで、どんな試合になるのか考えるだけでわくわくするよ」

「そうだ、試合は楽しみなのだ。またあの興奮が味わえると思うと、ぞくぞくするというか、あれ？もしかしてバトルマニアなのか、俺？

「まあ、一夏さんったら」

「一夏らしいな」

「もう織斑君ったら」

「くすくす」

(本当に一夏さんは男の子ですね。でもそれが格好いい)

(まったく一夏は男の子だな。そこが格好いい)

(織斑君は男の子だねえ。それがいいんだけどさ)

(おりむーは男の子だねえ。でもそれがいいところだよ)

なんでか笑われる。

「でも、本当にがんばってねー！」

「わたしたちのためにも！」

「そう、フリーパスのためにも！」

そう、フリーパス、学食デザートの半年フリーパスが1位のクラス全員に渡されるのだ。毎日三食に好きなデザートがつけられるのだ。うん、女子が燃えるわけだ。確かにデザートもかなりの腕の専属パティシエが作っているだけあって、そこらの有名店で販売しているものと遜色ない出来だ。それが毎日ただで食べられる。セシリアのようなお嬢様はともかく一般家庭で育つたりした生徒にとつてはすごく魅力的だ。もちろん俺にとつてもだ。

正直、ここの食堂の料理人はレベルが高い。さすが世界でただ1つのISの教育機関だ。予算は日本が全て出しているがIS技術関連などによる特需で日本の景気は右上がりなため、予算をけちることはない。それに協定各国の国籍の人間も学園にかなりの人数がいるために予算をけちるわけにはいかない現実もある。

まあ、フリーパスのためにもぜひ勝ちたいものだ。そのためには筈やセシリアとの練習を頑張らなければ。

「いまのところ専用機をもってるクラス代表つて1組と4組だけだから、セシリアに勝って、さらに一緒に練習をしている織斑君なら、余裕だよ」

「まあ、でも真剣勝負じゃないと楽しくないからな。全力で戦うだけさ」

「その情報、古いよ」

声がした方を見ると、教室の入口にツインテールの小柄で、脇が出ている改造制服（校則で改造は認められている）を着ている娘がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

右手を腰に当てたポーズでそう言った。うーん元気な娘だねえ。さてどうするか、……………後で話せばいいか。もうすぐSHRの時間だ。千冬さんが来るし。

「中国代表候補生、<sup>ファン</sup>鳳 <sup>リンイン</sup>鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

こちらに向けビシッと指をさしてポーズをとった。うーん、セシリアと違って、微笑ましい元気さというか、見ていて飽きないなあ。

「久しぶりねー夏！」

「…放課後、話がある」

「奇偶ね、わたしもよー！」

鳳さんはぱあっと笑顔になるが、ごめん、全く期待しているような話にはならないよ。はあ。

「おい」

いつの間にか千冬さんが鳳さんの後ろに立っており、ガツンと恒

例の出席簿打撃が凰さんに当たった。痛そうだ。ちなみにこのクラスでもっとも出席簿打撃を喰らった回数が多いのは箒とセシリアが同率1位である。どちらも真面目だし、成績も優秀なのだが、修羅場になったり、張りあったりすると我を忘れることがあるので、そのたびに千冬さんの出席簿打撃を喰らうのだ。俺は千冬さんと間違っただけで呼んでしまった時に数回だけ出席簿打撃を喰らったことがある。今はもう織斑先生と言っのに慣れて、出席簿打撃を喰らうことはなくなっている。

「いた〜。なにすんの!？」

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

声が上がっている、千冬さんの恐ろしさを知っている証拠だな。

「織斑先生と呼べ。さっと戻れ、邪魔だ」

「また後で来るからね、逃げないでよー夏!」

さすが千冬さん、この傍若無人さが怜悧な美貌と相まって下手な男よりも格好いい。まあ家ではかなりアレなんだが。

「出席を取る。遅刻や休んでいる奴はいないな」

そう言えば、最近千冬さんと一緒に食事を摂っていないな。毎日箒、セシリアと一緒にだしなあ。うーん、……ああ、そうだな外食にでも誘うか。それに、もうすぐ給料が入るのだ。男性によるISの運用と白式のデータを取っているため、国から補助金が入ることに

なったのだ。これはセシリアに勝利したことにより、より詳細なデータが欲しいと要望があり、専用機持ちと同じく、給料が支払われることになった。まあ国から出るのだから、当然専用機持ちよりも安いが。世知辛いねえ。

よし、家族の団欒ということで二人だけで行こう。箒やセシリアにはあらかじめ断っておこう。

……なんかデートに誘うみたいだな。

「織斑、ボケつとするな」

「あつ、すみません」

(一夏、なんでそんなに真剣に私を見つめているんだ？記憶喪失になつてからあの鈍感はなくなっているが、さらに悪い方向に進化していないか？このクラスの大半が大なり小なり、こいつに惚れているように感じるんだが？あの二人は間違いないしな。全くあの二人のせいで最近一夏とは話しもできていないじゃないか……：ISのことを教えてもらうなら、まず私の元に来るべきではないのか？全くこいつは変なところで遠慮する。記憶喪失になつたからこそ、私たちはより絆を深めていったんじゃないのか？なのにお前はいつも私に遠慮して、もっと甘えてくれればいいのに……)

……千冬さんからすごいプレッシャーを感じるんだが、怒っているのか？でも出席簿打撃はなかったしな。……わからん。やっぱり今度食事に誘おう、今までいろいろ迷惑をかけたお礼と、機嫌を取るために。プレゼントとかでもいいと思うが、それだと買いに行くとき箒とセシリアがついてきそうだし、それに、こういうのは何を選んだらいいのかわからんしな。

さて、先ほどの授業の放課後、さっそく箒とセシリアに詰め寄られた。

「一夏さんっ！あの中国人とはどのような関係なのですか!？」

「一夏っ！あいつとはどのような関係なのだ!？」

二人とも千冬さんに出席簿打撃（授業中ボケっとしていたので）を喰らったのに元気だねえ。そういえば、いつもより少し強くたたかれていた気がしたな、やっぱり千冬さん怒っていたんだろっか？

「うーん、そうだな……」

セシリアにも話すか、と言うより別に今の知り合いになら気軽に話せるし。千冬さんや箒も今の俺を認めてくれているしな。

「箒は知っているが、俺は1年ほど前に事故で記憶喪失になった。



たぶん鳳さんは記憶喪失になる前の知り合いなんだと思う」

「まあ、一夏さんにそのようなことが……って、あら、なぜ、篠ノ之さんがそれを知っていますの？」

だから詰め寄るなっ。

「私と一夏は幼馴染だった。小学生と時から、6年前に私が引越す前までいつも一緒だった。それで入学した時に再会して話したんだが、その時に聞いた」

「あら、そうでしたのね。でも一夏さん、記憶が戻ることはないのですの？」

「ないな。俺自身、記憶を取り戻そうとは思っていないし」

「…それで、篠ノ之さんは、その…」

「構わん。昔のことを覚えていないのは少し惜しくはあるが、今の一夏を認めているし、その…」

ああ、うん、好きだったことだな、ははっ、て、照れるぜ。

「なっ、何雰囲気を作っていますの!？」

はっ、つい雰囲気流された。

「それにしても織斑君がそんな過去を持っていたなんてねえ」

「暗い過去がある男か」

ああ、ここ教室の中だった。まあ、もう気にしていないことだし聞かれてもいつか。それとそんな格好いいものじゃないんだが。

「あつ、もしかしてそれが織斑君がISを動かせる原因かも？」

「いや、それは違うよ。俺がISを動かせる原因は全くの不明。篠ノ之博士ぐらいじゃないと究明できないと思うよ。それと事故が人為的だったとかもない、あの織斑先生がそれを調べなかったとでも？」

「ありませんわね」

「ありえないな」

「ありえないよね」

「ありえないよ」

「ですよねえ。」

「なら放課後にあの方に、それを伝えますの？」

「そうなるね。少し気が重いが、まあ仕方ないし」

「そうか…」

（までよ、まさか私と同じように抱き締められたり…駄目だ！許さん！）

(もしかして、篠ノ之さんと同じようになる?…駄目ですわ!…これ以上ライバルは要りません!)

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

「なっ、何?」

「私が付き添いをしてやるぞ!」

「わたくしが付き添いして差し上げますわ!」

なんでこんな展開になるんだ? 凰さんは箒と違って激情家っぽいからあんな雰囲気にはならないし、きつとフラグが立つこともないだろう。とは言ってもこの状態の二人には通じないか。

「わかった、わかった。ついてきてもいいが、あまり騒がないでくれ」

「わかった」

(場合による!)

「わかりましたわ」

(場合によりますわ!)

はあ、なんか急展開だ。この2週間の平穏が懐かしい。

10 (前書き)

今回は短めです。

鈴は簡単には落とささせません。

さて、放課後になった。これから鳳さんと会う予定だ。

箒とセシリアはまるで警戒するかのように俺にぴったりとひっついてる。

二人とも？鳳さんと話す時は離れてようね？

さて約束の場所、屋上、いつかの箒に記憶喪失であることを告げたあの場所に来た。

鳳さんは先に来ていたようで、腕を組みながら、景色を見ていた。

「鳳さん、お待ちせ」

「一、夏？その二人、何？」

箒とセシリアを見て、目じりが上がった。

「クラスメイトで、毎日ISの練習を一緒にしている仲間な。っと、二人とも少し離れていてほしいんだが」

「…しかたありませんわね」

「…余計なことはするなよ一夏」

二人は少し離れた場所でこちらを監視している。いや鳳さんは間違いないフラグが立つわけないから、そんなに過敏にならなくてもふう、まあいい。この会話が終わったら、また、昨日までのように戻るだろう。

「鳳さん」

「さつきから、その呼び方はなんなのよ。前のように鈴でいいわよ」

「あゝ、…言いくいんだが。1年前に事故にあつて記憶喪失になつた。それ以前のことは覚えていない状態だ」

「は？」

うん、まあ、いきなり何を言っているのかつて思うよな。

「1年前に事故にあつて記憶喪失になつた。それ以前のことは覚えていない状態。そう言った」

「マジ？」

「マジ。だから鳳さん、すまないが、俺は君が誰かもわからない。それと、今の俺の状態で安定しているために記憶が戻ることはないし、俺も無理に戻そうとは思わない。本当にすまない」

「やつ、約束のことも覚えていないの!？」

「じめん」

「…………ふ、ふふふ、ふふふふふふ」

え、何これ怖い。

「そう、いくら事故で仕方ないとはいえ、あの約束を忘れるなんて……………一夏、確かクラス代表だったよね」

「あ、ああ」

「……いいわ。なら、このやるせない気持ち、クラス対抗戦で！あなたにぶつけてやる！覚えてなさい！」

凰さんは肩を怒らせて、帰って行った。あまりの怒りにツインテールが宙に上がっていた気がしたが……怖！

「終わったようですね、一夏さん」

（あの様子なら大丈夫そうですね。でも篠ノ之さんと言う例がありますし、心の片隅には置いておくことにしましょう）

「あいつは本気でお前を倒そうとしてくるぞ、さっそく練習しよう  
一夏」

（ふう、これなら大丈夫か？でも、私のようにISで戦っている姿を見たりしたらどうなることか。油断は禁物だ）

「そう、だな、結局はいつも通り練習するだけだな。それが強くなることへの近道だ」

「その通りですわ」

「その通りだな」

原作よりややこしいかもしれない状況だが、俺は俺だしな。

「よし！ならいつも通り練習に付き合ってくれ」

「はい！」

「うむ！」

気合を入れたことだし、今日はいつも通り練習しようと思ったが、ちょっと試してみたいことがあるので、セシリアを呼ぶ。気分転換にもなるしな。

「なあ、セシリア？昨日さ、漫画とかアニメを見ててさ、そのとき思いついた試してみたい連携技があるんだが。ちょっと試してみないか？」

「連携！一夏さんですよ！？それはぜひ、試しましょう！」

うん、ノリ気だね。そして篝睨むな、今からすることは近距離と中距離を得意としているISだからできるんだ。お前は俺と同じ接近戦タイプだろ。

そして、肝心の決め台詞はやはりあれだな。

「………と云うわけだ」



「なるほど、面白そうですね。では一度試してみましよう」

「ああ、それと、この技が決まったときはこう言っただ。これがく  
~~~~~だ!と」

「あら、格好いいですね。気に入りましたわ。ではさっそく試してみましよう」

試してみたが、意外に巧くいった。あのセリフを言うことができるとは、思わなかった。うん、あれはいいものだ。

と、箒がすねているから、接近戦の練習に誘うか。

「箒、接近戦の練習の相手を頼む。剣は箒に教えてもらっしかないんだからな、頼りにしてるぞ」

「そうか、私を頼りにしているか、そうか、そうか。よし、わかった、相手しよう」

とたんに笑顔になる箒。

この様に、セシリアと箒に気を使いながら（アメを与えているよ  
うな感じがするのは気のせいか?）、練習は進んでいった。

さて現在、時刻は21時過ぎ、俺は千冬さんの部屋の前に立っていた。

用件はもちろん、外食に誘うためだ。ネットで調べたが、電車に1時間ほど乗って海と山がある小さな町に行き、少し港や堤防を歩くと、まだ湿気を含まない潮風は気持ちいいはずだ。そして港から少し離れた小料理屋で、取れたての魚の刺身や地元の郷土料理を食べる。その後は、山を歩きながら、観光できる神社があるので、そこに行く。そしてその後は帰るだけ。

記念に写真を撮っておきたいな。携帯も元の世界より進化しているから、それで代用するか。

と、まずは誘わなくては、どうにもならない。

呼び鈴を鳴らす。

すこして、ドアが開くと、ジャージ姿（1年生の寮の寮長でもあるため、寮内では基本ジャージで過ごしている）の千冬さんがいた。

「一夏か、入れ」

「失礼します」

相変わらず、汚い部屋だ。千冬さんはズボラなため、掃除とか整理とかをしないことが多い。仕事面ではすぐくきつちりしているが、プライベートだところなるのだ。この部屋へ初めて来た時に、この部屋の掃除はたまに業者に頼んでいたことが判明し、日曜などに俺

が掃除していた。ここ2週間はISの練習で来ていなかったが……これはひどい。2週間でこうまで散らかすとは、うん。今週はISの練習の時間を削るか、そして掃除だな。

「千冬さん、休日に予定が空いている日はありますか？」

「何だ？急に？」

「あ、その白式のデータ取りで給料がもらえるから、そのお金でどこかに外食にでも行かないかと、お誘いに」

「…は？」

千冬さんは少し口を開いたまま停止している。そんなに突拍子もないことを言ったのか？俺は。

「だから、白式のデータ取りで給料がもらえるから、そのお金でどこかに外食にでも行かないかと、お誘いに。最近あまり話しをしていなかったし、二人で家族団欒って感じでどうかな、と」

うん、何か口説いてる感じがしてきた。ちょっと恥ずい。

（一夏と二人で、か……ふむ、悪くはない。いや、むしろ喜ばしい）

「いいぞ、今週は土、日どちらも空いている」

（いや、クラス対抗戦が近いため、少し仕事たまっているが、無理にでも空けさせる）

「なら、土曜の昼前から昼過ぎに出発することにしましょう。それ

と、その前に掃除、洗濯をしますから」

「うっ、わ、悪いな」

うん、すごくバツが悪そうな顔ですね。この人は普段はあのお堅い威圧感が強い表情しか見せないが、身近な人にはプライベートではいろいろな表情を見せる。この学園に入学して、そのギャップが判明した時はちょっと笑ってしまった。ちなみにその時は照れ隠しに、げんこつを喰らわされた。

「そうだ、どこに行くかは決めているのか？」

「はい、電車で1時間ほど海と山がある小さい町に行こうかと、少し歩きますが、この時期は熱や湿気もないし、潮風がきつと気持ちいいですよ。それで取れたての魚の刺身なんかを食べて、後は山に観光用の神社があるために、そこまでぶらぶらして、帰るだけです」

「ほう、それは楽しみだな」

(聞いた限りでは少し落ち着きすぎている感があるが、普段忙しい私にはちょうどいいプランじゃないか。それにしても、こいつはなんでこう無駄にハイスペックなんだ)

「そうですね、俺も楽しみです。休養を兼ねているので、ゆっくりしたいですね」

「そう言えば、お前のあやふやな敬語も慣れたものだな。最初は違和感がありすぎて変になりそうだったぞ」

原作一夏は鈍感なところを除けば、高校生らしいと言えるかもしれない。俺はいろいろ混乱していたから、千冬さんに対しては変な敬語で話す癖がついてしまった。

「はは、なんか、もう習慣になってしまったんですよ。じゃあ、俺はこれで」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい」

（よし、急いで土曜日の分の仕事を終わらせるか）

## 10 (後書き)

みなさん、感想ありがとうございました。

誤字は更新後に直します。

ようやく、アニメ4話分のストックを書き溜めました。

今日は5話があるので、それを見ながら続きを書かねば。

アニメを見ていると、もっとHな表現を使いたくなってくる自分がいる件について。

## 11 (前書き)

アニメ5話に興奮したので早朝投下。  
実はラウラが一番好きだったり。

さて今日は、待ちに待った土曜日。

現在午前11時である。

今日は、いつものように朝食を摂った後、千冬さんの部屋を掃除した。

そして、出かける段階になったのだが、千冬さんが学園では先生と生徒なので、駅までは別行動と言うので、別行動することになった。あの人はけっこう外面を気にする人なのだ。

俺が先に出かけることになったため、さっさと移動しようとして少し早歩きで歩いていた。

冨とセシリアには、今日は家庭（千冬さんしか家族はいないが）の都合で用事があると言って、ISの練習はなしと伝えてある。

さて、行こうと学園を出ようとした時、俺に話しかけてきた娘がいた。

「おりむー、どこいくの〜？」

間延びしていて、おっとりしているクラスメイト、布のほとけ仏、本ほん音、のほほんさんだ。クラス一、いや学年一、もしかしたら学園一の癒し系かもしれない娘である。意外にスキンシップが激しい娘で、食堂や移動中に寮で会つと、ぴよんと飛んで抱きついてくる癖がある。とはいえ、のほほんとしているため、他意がないとわかるのでやめさせる気にならない。というより、この娘には強く物を言えない。

「のほほんさん。今日は織斑先生と少し家族の団欒をしに、すこし遠出しようかと」

「それにしてはあ、服装がきっちりしていますよ〜」



「織斑先生はほら、肉親が言うのもなんだが、容姿端麗だろ。だから一緒に行動する時は、恰好だけでもよくしないとだめだろって、俺は思うんだ」

そうなんだよなあ、特にコーディネートされていない服でもあの人を着ると、全く別物に見えるんだよなあ。まあ、それは筭やセシリア、この学園の生徒にも言えることだが。もとは小説の世界だからって、美形率が高すぎだろこの学園の生徒は。

「わたしはあ、おりむーも格好いいと思いますよ〜」

さすがのほほんさん、ただの会話なのに癒される。そこに痺れる、憧れるう！

と冗談は置いていて、このまま話してたいが、大切な用事があるので、会話を切り上げよう。

「はは、ありがと。ごめん、急いでいるので、また今度」

「わかったあ、じゃあね〜」

俺はブンブンと手を振る（本人は振っているつもり、実際はゆっくりと振っている）のほほんさんと別れ学園を出た。

（これはあ、要報告かな〜？）

まさか、この時のほほんさんに会ったことがあのようなことを引き起こすことになるなんて、この時の俺は、思ってもみなかった。

「というわけで、おりむーは、デートするかなのような雰囲気です、どこかに出かけました。織斑先生と一緒にだっついていましたよ」

のほんさんがクラスメイト二人に一夏のことを報告する。

報告を聞いたクラスメイト二人、篝とセシリアは数瞬固まっていた。

「……………」

「……………」

が、どちらからともなく眼を合わせると

「オルコット」

「篠ノ之さん」

「「尾行するぞ！（しますわよ！）」」

と言い顔き合った。普段の仲の悪さからは想像できないほど、二

人は息が合っていた。

（おりむー、ごめんねー、でもお二人は友達だし、それにわたしも、おりむーのことは気になっただけ、二人に調べてもらいます〜）

何気に腹黒い思考をしているのほほんさん。

まさに恋する乙女は強し。

千冬さんが来るまで少し時間があつたので、切符を先に買っていた。  
いた。

そしていかにも待ち合わせてます。といった雰囲気装い立っていた。

男性蔑視の風潮のせいで男性を奴隷のように扱う女性増えているため、よけいなトラブルに巻き込まれないためだ。

ISの登場によりISを動かせるのが女性だけのため、女性優遇が当たり前な世の中になったが、あまりにひどい女性は当然嫌われる。これがISに乗れる、またはセシリアのような専用機持ちならいいが、ISに乗れず、適正もない女性が威張るのはおかしいと思っっている人が多いためだ。実際に学園にもプライベートでは男性を

奴隷のように扱っている生徒はいらすが、それでもIS学園で成績上位をとるのがどれだけ難しいか知っているため、ISに乗れない女性が自分と同じ待遇はおかしいと思っているようだ。

ISに乗っている、または乗る資質のある女性は若い女性が優先される。そのため、自分がISに乗れるわけではないのに女性の代表と名乗り、日本の政治を女性主導だが自分に都合がいい、専制政治に近いものにしてしようとしたある女性議員がいたが、ある人物によって、スキヤンダルの嵐に巻き込まれて、二度と社会復帰できないほどの傷を負ったという事件があった。

これは一夏に憑依した時に、家の外に出る時気をつけることとして千冬さんから教えられた。この話をした時、ある人物のあたりで千冬さんは額に手を当てて話していたが、たぶんある人物は篠ノ之博士なのだろう。

このように篠ノ之博士はまさに天災と言える人物らしい。ISを作り、世界を混乱させたかと思えば、あまりにひどい人物が権力を握ろうとするのを阻止する。まさにやりたいほうだいだ。

しかし、一度は会ってみたいな。たしか、原作では1回会う機会があったはずだから、その時にいろいろ話をしてみよう。

とつらつらと考えていると、千冬さんの姿が見えた。

白いワンピースに黒いカーディガンを羽織っている。靴はパンプスを履いている。それと薄い色のストッキングだ。うーん美人だなあ。可愛いではなく綺麗という言葉が似合う大人の女性だ。元の世界では同年代なんだが、精神年齢はこの人の方が高そうだ。それにより大人というかアダルト？な雰囲気を漂わせている。

「一夏、待たせたな」

「いえ、それほどではないです」

「ふむ、どうだ、似合っているか？」

感想を聞いてくる千冬さん。うーん、プライベートとはいえ、いつもはこんなこと言わないはずだが？

「ええ、似合ってますよ。大人の女性らしい千冬さんの良さが出ます」

さりげなく女性を褒めるのは常識だ。これは元の世界で付き合っていたことがある彼女が口を酸っぱくして何度も言っていたことだし、つこい言い方だと逆にむかつくらしいが。

ちなみに今のはお世辞ではなく本音だ。心からそう思っているから簡単に口に出せたのだろう。元の世界で実際にあったが、全く似合っていないのにお世辞を言うのは苦しいものだ。

「そうか。山田君に見立ててもらったんだが、ふむ、あいつの眼は確かだったということか」

ああ、山田先生のことか。あの人もなんだかんだでキャラが濃いよなあ。山田真耶、逆から読んでもヤマダマヤ、と誰かクラスメイトが言っていたな。

「お前もその格好、それほど悪くはないぞ」

まあまあ似合ってるぞってことですね。わかります。

「では行くつか」

「はい。切符は買ってあります」

千冬さんに切符を渡す。

切符を見てどの路線か判断して、さっさと歩いていく千冬さんの横に並び歩く。

今日はいい日になりそうだ。

「オルコット、どの駅までかわかったか？」

「ばっちりですわ」

セシリアはISで培った観察力で一夏が切符を買った時と同じ手順通りにボタンを押して切符を買った。

それは間違いなく一夏の買った切符と同じだった。

「よし、行こう。電車に乗る時は1両外すぞ」

「ええ、織斑先生は勘が鋭そうですね、気をつけませんと」

二人はまるで長年の親友のように連携して、一夏と千冬を尾行していった。

「ふうつ。潮風が気持ちいいな。たまにはこんな風にリフレッシュするのは大切だな」

「そうですね。日頃の疲れが癒されていくような感じですよ」

電車（とはいってもリニアで動く上、線路が上部にあるものだ。さすが近未来だ、と初めて見たときは感動したものだ）に乗って1時間、ようやく目的地に着いた。

IS学園の周囲には山と海があるが開発が進んでいるためにそれほどゆっくりできるわけではない。だから少し遠出することにしたが、この場所は当たりだった。まず人がほとんどいない。そして世界の速い流れから放っておかれているような田舎。普段の騒がしさが全くない、そののほほんさんのような雰囲気のところだ。

ふうつ、心が癒される。

千冬さんも普段の鉄面皮ではなくなり、穏やかな表情で眼を細め、潮風を受けている。

何も話さず、ゆっくり歩いていたが、全く苦にならず、むしろこの沈黙が心地よかった。ただ波の音が聞こえそのリズムがまた心地よい。

しばし歩いていると、目的の小料理屋に着いた。

「ここか、お前の言っていた店は？」

「そうです。入りましょう」

さつそく取れたての刺身と味噌汁を頼む。店内には意外にも、ちらほらとひとがいた。明らかに地元の人ではなさそうだ。50代ほどの夫婦とか、女性の集団（グルメ探しとかが趣味っぽい）がいる。ネットですっかり調べれば隠れた名所としてわかるので、それなりに人は来ていそうだ。

もつとも、この店はまちがいに採算は取れないだろう。あくまで趣味が高じたレベルの店だ。

いや、こういう小料理屋は趣味でやっているぐらいがちょうどいいのかもしれない。

しばらくすると、料理が運ばれてきた。

「いただきます」

「いただきます」

さつそく、料理に手をつける。

「ほう、これはうまいな」

千冬さんが称賛の言葉を上げたが、それには俺も賛同だ。取れたての魚は旬の魚ではないが、ぷりぷりして身が引き締まっており、おいしい。

「味噌汁もうまいな」

おそらく、これは雑魚、いわゆるまだ身が小さい魚などを煮込ん



でダシにしているのだろう。それもいろいろな種類の魚だろう。だから味わいが深い、そしてまだ気温が低く、日陰にいと少し肌寒いくらいの温度のため、味噌汁の温かさが身体を芯から温める。ふう、このまったり感がたまらない。

「ふう、うまかったな」

「はい、いい店でしたね」

全て平らげ、お茶を飲んで一息つくると千冬さんはまったりと言った。この店は当たりだったな。しっかりと調べたが、もしもと言うことがあるしな。この店に来れただけでも来た甲斐があったというものだ。

「さて、一息ついたし、次の場所へ行くか」

「はい」

しかし、移動しようとしていた俺達の後ろで何やら揉めている声が聞こえてきた。

「篠ノ之さん、食事は用意してありますの?」

「大丈夫だ。私は緑茶とおにぎりを、お前には紅茶とサンドイッチを買ってきた」

「あら、気が利きますわね」

「この様な時に、準備不足などと言つミスは起こさないように精神鍛錬は積んでいゝつもりだ」

「しかし」

「だが」

「あの二人は夫婦なのか(なんですよ)!?」

二人は先ほど店に入っていった二人を思い出し。声を荒げた。何も話さず、黙々とつかず離れずの距離で歩いているのだが、なんとというか妙に雰囲気があるというか、まるでそうあることが自然であると思つてしまふのだ。

「一夏さん、織斑先生はあなたの実姉ですよ、そんなインモラルな関係いけませんわ」

「一夏、確かに千冬さんは綺麗な人だが、おまえの実姉なのだぞ、そんな危険な関係は駄目だ」

「ぜひ、私わたくしにするべきだ(ですわ)」

同じセリフが二人の口から発せられる。

「なんだと！」

「なんですって！」

ただそれだけで、友情はひび割れた。所詮は仮初の友情だった。

千冬さんがキレた。以上、中継を終わります。

……はい、箒とセシリアが尾行していたみたいです。千冬さんも完全に休息モードだったため気がつかなかったらしい。

ついてきたものは仕様がなかったので、合流することになった。

現在は4人で神社に向かって歩いている。

しかし、千冬さんは、全くの平静、まるで全く怒っていませんと他人が見たら思えるだろう。しかし、千冬さんのこの状態は今ままで一番怖く感じる。

あの二人、学園に戻ったら、千冬さんの地獄の説教を受けることになるだろう。ご愁傷さま。

まあ、そんなわけなので、せめて今だけは楽しませてあげよう。

「箒、セシリア、ツーショットでも撮るか？」

「はい！」

「ああ！」

うん、まあその笑顔もあと数時間で終わるから。今のうちに楽しんでおいてくれ。

それから千冬さん、平静を装っていますが、こめかみがびくびく動いてますよ。あまりのプレッシャーに周囲の重力が増しているんじゃないか？

「千冬さんも一緒にどうですか？」

「ふん、まあいいだろう、こんな機会滅多にないからな」

この後は神社で写真を撮ったり、お守りを買ったり、俺は三人へ健康祈願のお守りをプレゼントし、逆に三人から勝利祈願のお守りをプレゼントされた。しかし、さびれた神社でも観光用だからといってあらゆる種類のお守りがあるっていうのもどうかと思った。

そんなこんなでハプニングもあったが、楽しい一日を過ごし、俺はしっかりと家族団欒と休養をとることができた。

寮に帰った後、箒とセシリアは千冬さんに連れられてどこかに行ったので、夕食時に偶然会ったのほほんさんやそのほかのクラスメイトとまったりと夕食を取り、その後は食堂で2時間ほど談話した。

俺以外は女子だけしかいなかったが、それなりに楽しい時を過ごし（可愛い娘が多いのでそれはいい気分になるさ）、シャワーを浴びてから寝た。

今日は休日らしい休日だった気がする。鋭気を養ったことだし、明日からはまたISの練習漬けだ！

一夏のほほんさん達と楽しい夕食を摂っているころ、箒とセシリアは千冬の説教地獄を味わっていた。

床に正座し、千冬のプレッシャーを受けながら、ガミガミガミガミと千冬の言葉責め。

ある属性を持っている人以外にとっては、まさに地獄だ。

「だいたいISさえ満足に動かせないひよっこが恋だの愛だの百年早い……………ガミガミ……………確かにあいつはいい男になる、いやいい男だろうが、お前たちのようなひよっこにそう簡単に……………ガミガミ……………」

二人がようやく解放された時、足がしびれて歩けないどころか、立つことすらできなくなっていたという。

二人は思った。

(織斑千冬、恐るべし)

そしてその言葉は、二人の心の奥に刻み込まれた。

12-1 (前書き)

12話は少し長くなったので、展開的にも考え、2つに分けました。  
山田先生の胸は凶器、異論は認めない。

さて五月の半ば、クラス対抗戦第1回戦が開始された。

俺の相手は原作通り、凰鈴音さんだ。

毎日の練習というか特訓のおかげで、高速変則機動も制限をかけた状態（3回連続で使用したら数秒は使用不可）での使用は可能になった。

専用機持ちどうし+世界初の男のIS操縦者という珍しい試合のため、観客席は満員だった。前回のセシリアとの試合もそうだったが、今回の試合も各国のIS関係のお偉いさんが見ているらしい。まあ、俺には特に関係するわけではないので、どうでもいい。それよりも試合に集中だ。

俺は今から、第2アリーナ第1試合に俺は出場する。

ピットから発進し、宙で待機した。

すぐそばに凰さんとそのIS甲龍が見える。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「一夏、手え抜いたら許さないから」

「ああ、全力でやるぞ」

「私の思い、全部ぶつけてやる」

どうやら体調、気力ともに万全のようだ。でもそれでこそ戦い甲斐がある。互いに武器、俺は雪片式型を、凰さんはぶ厚い刃の青竜刀を手にした。

『それでは両者、試合を開始してください』



「いくわよお！」

ブザーが鳴るとともに鳳さんが突進してきた。  
速い！

俺はアンロック・ユニットの向きを変更したブースターで、後方へ瞬時に加速し、斬撃を回避した。雪片式型で受け止めることも可能だが、あんな重そうな斬撃を受け止めたくはない。

「やるじゃない！でもねえ！」

鳳さんはもう一つ青竜刀をオープンし、柄と柄を合わせて双竜刀にする。そしてバトンのように扱い、くるくると回りながら突進してくる。

俺は、上下左右前後ろ、あらゆる方向へ加速しながらクロス・グリップド・ターンで常に相手を正面に見やりながら確実にかわす。

クロスレンジになれば、あの嵐のような連撃に巻き込まれてしまうため、近接戦をしながらも距離をとりつつ、鳳さんを観察する。

おそらく、最高速度はセシリアのブルー・ティアーズよりも遅い。しかし、初速のみは上回っている。間合いを一瞬で詰めるためだろう。明らかに接近戦重視のIS。

そして間合いを詰める突進の理由は脚部のスラスターを使用しているからだろう。高速回転は純粋な技量か。

「ふう、やっかいな動きだ」

「かわしておきながら、よく言うっ！」

さてどう攻略するかな。

まずは、回転しながらの斬撃を受け止める。

ガキンと音が鳴って受け止めたが、やはり重い！

「はっ！」

凰さんはすぐさま逆回転して、連撃してこようとする。それをアンロック・ユニットのブースターで後方へ瞬時に加速すると同時に、回避した瞬間に前方へ加速するイメージを白式へ伝え、突進し間合いを詰める。

「あまい！」

そのまま雪片式型で斬撃を放つ、斬撃は凰さんの腕に当たり、シールド残量を削る。

「きゃあ！」

確かに短距離だが間合いを一瞬で詰める突進力は脅威だが、突進するためには短い時間だが加速が止まる。つまり連続使用できないのだ。

また接近戦で一定以上の距離（間合いの外だと突進できない）があると、距離を詰めようとするが突進することはないため遅い。

俺は、回転する方向とは逆の方向へアンロック・ユニットのブースターの向きを変え、瞬時に加速し、初撃を回避し、一瞬止まった瞬間にもう一度瞬時加速で間合いを詰め、攻撃する。

「ちょこまかちょこまかと、うざいのよ！」

凰さんはどうやら頭に血が上っているようだ。しかし、その怒りを攻撃に活かし、冷静に猛攻と言える攻めを繰り返してくる。

しかし、よく観察すると、機動の限界が見えてくる。

斬撃は重いが回避すればいい。もちろんこれは白式の高い基本スベックがあればこそできることだ。明らかに搭乗時間は俺の方が少なく、白式にデータがそれほど蓄積されていないのに高速変則機動を無理なく実行してくれるのだから。

とはいえ、これは待ちの戦法、カウンターだからこそできる。

さて今度はこちらから攻撃するか。

「じゃあ、今度はこっちから行くぞ!」

「やってみる!」

まずは通常加速で間合いを詰めていく。

凰さんが迎撃しようと、こちらの攻撃に合わせて移動しつつ青竜刀を構える。

それを見て俺は急加速し、間合いを詰める。凰さんがそれに合わせて高速回転し、俺に向けて青竜刀を振り回した。その瞬間に俺は後方へ瞬時加速の応用で高速移動する。それに合わせて突進していく凰さん、次の瞬間にはあの重い斬撃が来るのだろう。しかし、俺はさらに横へ瞬時加速し、突進をかわす。凰さんの動きが一瞬止まった瞬間に、さらに瞬時加速で距離を詰め、斬撃を放つ。

「せい!」

今度は凰さんの脚部に斬撃が当たった。

「くう!」

瞬時加速を応用して、1瞬1瞬を高速で加速し移動するのを3回連続で使用できる俺と白式。

前方への一定距離の突進は白式の瞬時加速並だが、連続使用でき

ない鳳さんと甲龍。

もはや接近戦では俺の勝ちを確信できる。油断しなければ、勝てる！

「機動力が違いすぎる！」

そう言って、俺から、距離をとる鳳さん。

中距離と言える距離で、こちらを向く。なにをする気だ？そう思った瞬間、俺に衝撃が連続して当たった。

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、430

何、が、起きた！？。

すぐさま瞬時加速で横へ移動し、ランダムに回避運動をとりながらもクロス・グリッド・ターンで常に鳳さんを見据える。

しかし、鳳さんは何も武器などは持っていないのに、見えない砲弾が飛んでくる。

そうか！こんな隠し玉が原作でもあった！

「そらそら、今度はこちらの番よ！」

「くっ！」

しかし、どうする！？

回避行動に専念すれば、命中しないことから、それほど命中率は高くない、か。ならば、回避しつつ、また観察させてもらう。

連射できるが、一定の弾数ごとしか連射できない。撃ちつくすとするとためが必要になる。

鳳さんの向いている方向とは違う向きだったのに、こちらに撃つことができる。つまり全方位へ撃てる。しかし、狙いを定めるため

か撃てなくなることがある。また全方位へ一斉に発射できないことから砲門はおそらく2つ。特徴的なアンロック・ユニットから弾は飛んできているようだ。

瞬時加速どころか通常加速にもおそらくはロックが追いついていない。高速回転をしないと、旋回速度が低い。1度撃ちだした後で瞬時加速すると、全くついてこれていない。

「なんて機動力なの！当たらない！」

セシリアのような精密射撃ではないし、射撃専用調節のセンサーを使用していない。

一見すると、射撃は見えない砲身に弾丸、接近戦は高速回転と突進が対応しづらいが、一定以上の機動力、つまり白式の機動力なら全てに対応できてしまう。

鳳さんの技能は高く、甲龍をかなりのレベルで使いこなせている。しかし、俺と白式とは相性が悪すぎた。

「終わりにする」

勝てる。そう確信し、俺は宣言する。

「くっ！まだよ！」

鳳さんもこのままでは勝ち目が無いことに気づいているのだろう、焦った声で否定する。

俺は、通常加速して回避運動をとりつつ、見えない弾丸が地面に当たったのを確認した瞬間に瞬時加速を行い、別方向へ高速移動し、鳳さんを翻弄した。

「くっ、捉え、きれない！」

そして、凰さんは旋回するが俺を追うことができず、先ほどまで俺がいた場所の周辺へ見えない弾丸が発射されていく。

それを見て俺はバリア無効化攻撃を発動させると同時に瞬時加速を連続使用し、急停止し直後に凰さんへと一気に間合いを詰めた。

そして逆袈裟に雪片式型を振り上げる。

「もらった!」

凰さんは接近するのを感知したのか、青竜刀を構えようとするが、凰さんに雪片式型が直撃する。

そして、数秒後

『試合終了。勝者 織斑一夏』

ブザーとともにそう告げら、

『ズドオオオオオオオオ!!!』

突如大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

しまった!原作でのなんかの襲撃か!戦うことに夢中になってすっかり忘れてしまった!

それに凰さんのシールドエネルギー残量は0だ。実体シールドもないISなので一撃で致命傷になる可能性がある。

ってことは俺が単騎で相手するのか!?

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

っていうか撃ってきたあ!

くっ、凰さんも狙われている！

俺は瞬時加速で凰さんのもとへ移動する、高速で移動しながら凰さんを抱きかかえてさらう。

直後、俺達のいた空間にビームが走っていく。

ハイパーセンサーからの情報で、セシリアのスナイパーライフル以上の出力とわかり、戦慄する。直撃したら死ぬかも知れない。

死がすぐそばまで近づいていると感じ、冷たい汗が背を流れる。

「ちょ、ちょっと、離しなさいよ！」

「しずかにしろ！集中できない！」

つい、声を荒げてしまう！緊急事態だ、仕方がない。

煙が晴れると、全身装甲の中ボス臭がぶんぶんするISがいた。

『織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生からの通信。

しかし、俺達は完全に狙われており、撤退できないだろう。

「それはどうやら無理そうです。完全に狙われています」

そう言っつて、通信を切る。緊急事態で話をしていない暇はない。

この状況からは、時間稼ぎに徹するしかない、か。

俺は、生き延びることができるか？と言ったところか。

ふっつ、よし、集中！

「来るっ！」

センサーが高出力ビームが発射体勢に入ったのを認識した瞬間、俺は回避行動に移っていた。



突然の衝撃、そして謎の襲撃者。それに冷静に対処できる者はいなかった。

「お！織斑先生！どうします！どうすれば！あわわ、はわわ」

必要以上にテンパリ、意味不明なことをつぶやいている山田先生。

「落ちつけ。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言って砂糖の入っている容器にコーヒーを入れる千冬。  
そのまま飲むとするが、容器を持っていることに気づいた。

「あ」

「…織斑先生……さすがにそれは……」

「んんっ」

頬を紅くしながら咳払いでごまかす千冬。

いつも通り冷静に見えた千冬も動揺しているようだ。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「無理だ。遮断シールドがレベル4になっている。3年の精鋭がシステムクラックを実行中だが、どれくらいで完了するかは不明だ。それに外部との連絡も取れない」

セシリアが提案する、しかし千冬は端末の画面の情報をもとに出撃は無理だと言う。そのうえ同じ理由で教師達や3年生も出撃できない。さらに外部との連絡も取れない。

「わたくしなら一夏さんと簡単な連携も取れますのに、出撃もできないなんて」

「そういえば、お前たちはほぼ毎日一緒に練習を行っていたな。この状況じゃお前でもないよりはましか。まずは凰を何とか避難させれば、一夏の負担は減るのだが………なにか手はないものか」

千冬はぐつと手を握り締めながら、脳では幾多もの対応を考えては不可能だと切り捨てていた。

時間との勝負なのだ。一夏達になにかあつてからでは遅い。碌に連携が取れないであろうセシリアでも、いないよりはまだと千冬は思っていた。しかし、そのセシリアも出撃できなければ意味はない。八方ふさがりだ。

先ほどから何も離さない少女、篠ノ之箒は画面を見つめながら、両手を握りしめ、ただ一夏の無事を祈っていた。

(一夏！無事でいてくれ！……くっ、私は、ここで祈っていることしかできないのか！)

「くそっ！しつこい！」

他のものには一切反応せず、ただひたすら俺を狙ってくる仮称、中ボス。

高出力ビーム砲とビームガトリングを使い、ただひたすら俺を狙ってくる。

高出力ビーム砲とビームガトリングのみをただ撃ってくるだけなので、回避は簡単だが、一方的に狙われ続けるということはプレッシャーになり、ただ体力、精神力が消耗されていく。ブーストエネルギーも試合後なので、3割を切っている。

さらに敵がどれだけのエネルギーを有しているかわからない。こちらが動けなくなる前にエネルギーが尽きることはないだろう。

鳳さんを抱きかかえている体勢では接近戦はできない。常に距離を保ちながら、宙を舞い続ける。

幸い今はまだ被弾していないが、被弾するのも時間の問題だ。本当に、ピンチだ。

「一夏！私を下ろしなさいよ！私も戦う！」

鳳さんはそう言うが、シールド残量のない鳳さんは一発でも直撃すれば死ぬことになるだろう。鳳さんが危険を冒して参戦しても、中ボスを倒せるかわからない。それならこのままかばっていた方がいい。最悪の場合、参戦もありだが、今はまだ分の悪い賭けに出る時間じゃない。

「一夏！」

「耳元で怒鳴るな！黙って俺に守られてろ！」

話している余裕がないんだ。

「あ……………うん……」

（きゅん、って違うでしょ！この一夏は私のことを忘れている、あの鈍感じゃない奴だっけ言うのに、なにときめいてるの私！それよりもこの状況よ！、私に勝った実力とはいえ、一夏一人のこの状況じゃまずいわ。守られているのは私らしくない。考えるのよ！何か手はないか……………援軍、ビーム……………障壁……………それなら……………！、これだ！）

「一夏！大型のビームを誘導して、障壁に当てるの！そうすれば！」

そうか！援軍が来る！

「わかった！山田先生！」

プライベート・チャンネルで山田先生を呼び出す。

『わかりました！……………安全に破壊できるのはこのポイントです！』

そして作戦を伝えると、数秒で誘導してほしいポイントを示される。

さて、やりますか！

まずは示されたポイントの反対側へと攻撃を回避しつつ、中ボスを誘導する。

そしてポイントへ向かって瞬時加速を行い、一気に中ボスとの距離を離す。

すると中ボスとの距離が離れたため、射程範囲の長い高出力ビーム砲を放ってくる。ビームが放たれる瞬間に瞬時加速を連続して行い、俺は射線から外れた。

「残念、それははずれた」

放たれたビームがポイントに当たり、障壁が破壊される。

中ボスはその後も俺に向かって接近しビームガトリングを放ってくるので、かわしながら破壊された障壁から離れていく。

数秒経つと、センサーに反応があった。反応があった場所を見てみると、青いISをまとった金髪の少女、セシリアが破壊された障壁から現れた。

どうやら観客がおらず、一撃で障壁が破られる場所の一番近くにいた戦力がセシリアだったようだ。

「お待たせですわ！一夏さん！」

「セシリアか！」

「まずは鳳さんの避難を！」

「わかった！」

セシリアがスターライトmkIIで中ボスを牽制する、俺は破壊された障壁へ向けて瞬時加速を行い、障壁に空いた穴に近づき、停止した。

「鳳さんはあの障壁から避難を」

「…わかった。一夏、必ず勝つてよね！」

鳳さんは破壊された障壁へ向かい移動しながらそう言った。

「必ず勝つ！約束する！」

鳳さんは返事をせず、破壊された障壁の内部へ消えていった。

「解析した情報を渡しますわ！」

中ボスを牽制しながらセシリアが送ってきた情報を白式が受け取った、確認すると無人機である可能性が高いとのことだ。ならば遠慮せずに全力の零落白夜を叩き込める。

「一夏さん！この前の練習で試してみました、あの技で完全に沈黙させますわよ！」

「あれか！よし、やってみるか！」

なんだろう、実戦という緊張感があるからか、セシリアの思考が感覚として伝わってきている気がする。そうだ、俺達ならやれる！

「まずはこれでも喰らいなさいな！」

セシリアのBT兵器が四方から中ボスへ向けて次々とビームを放つ、回避運動をとりながらも中ボスは数発のビームを浴びる。

ひるんだ中ボスへ加速しつつ、雪片式型を握り締めた。そして中ボスへ接近戦を挑んでいく。

「次は俺だ！」

スラストの多さを元にした、変則的な運動能力で俺の斬撃を回避しながら、回転してラリアートのような攻撃をしてくる中ボス。鳳さんと同じような攻撃だが、スラストが多いために回避後の力ウンターが滑らかで、隙がない。瞬時加速を応用した短距離の高速移動も、制限無視の連続使用でしか隙を作ることができないだろう。しかし、今の俺にはセシリアがいる。

俺はあることを確認してから、中ボスへ向けて不用意な斬撃を放った。

中ボスは斬撃を難なく回避し、俺へカウンターのラリアートを喰らわせようとする。俺は瞬時加速を行い、一瞬で短距離を上昇してラリアートをかかわす。かわした瞬間に零落白夜を出力最大で発動させる。

「かかりましたわね！」

中ボスはさらに別のスラストを使用し、回転しつつ間合いを詰めて俺を追撃しようとするが、それは叶わなかった。なぜならセシリアのスターライトmkIIから、俺を目標にして放たれたレーザーが中ボスへ直撃したからだ。

「これが俺達の、」

レーザーが直撃して隙だらけになった中ボスへ、瞬時加速を連続で使用して間合いを詰めた。そして必殺の意を込めて、雪片式型零落白夜を袈裟斬りで放つ。中ボスは左肩口から胸当たりまでバツサリ斬られ動けなくなる、すぐに俺は雪片式型を引き抜いて、中ボスから離れた。

「切り札「ジョーカー」ですわ！」

次の瞬間、セシリアが放ったBT兵器実体弾が上空から中ボスに直撃した。

中ボスは煙を挙げて落ちて行き、地にたたきつけられた。

その後、まるで陸に上がった魚のようにピクピクしていたが、しばらくするとシステムが完全にダウンしたのか中ボスは動かなくなつた。

センサーも完全に沈黙したと解析した。

俺とセシリアは中ボスに勝利した。

終わつた、と理解した瞬間に緊張が解け、ものすごい疲労が襲ってきた。

かつてのセシリアとの試合のように、身体の芯が痛むようなことはないが、疲労はそれよりも大きい。疲労の原因は連戦だったと言うこともあるが、やはり命の危険を感じたことが理由だろう。

ちなみに俺とセシリアが行った連携は、

1、セシリア、BT兵器で敵を足止め。

2、俺、中ボスに接近し、接近戦でおとりになり、中ボスを引き付ける。

3、セシリア、BT兵器を戻し、スターライトmkIIIで俺へ狙いをつける。

4、俺、攻撃後にわざと止まり、中ボスが俺を攻撃する。

5、セシリア、スターライトmkIIIを撃つと同時にBT兵器実体弾を射出。

6、俺、回避して零落白夜を発動、中ボスにスターライトmkIIIが直撃

7、俺、中ボスを零落白夜で攻撃して、離れる

8、BT兵器実体弾が、上空から中ボスを直撃して地面に落とす。



と言う形だ。

しかし、なんとかうまくいったが、無人機だから簡単に引つかかってくれたのだろう。もし相手が千冬さんだったら、初撃のBT兵器を落としたり、俺を接近戦で負かせたりして、俺達は碌に連携できず各個撃破されていただろう。

セシリアと練習を毎日していなかったら、こうまでうまく連携がとれることはなかっただろう。連携の訓練は行っていないが、それぞれの癖や習得している機動を理解していたからこそできたことだ。いろいろな要素がからんで、1度遊び半分でやって試した連携が思いのほか巧くいった。運がいい。

「一夏さん！わたくしたちの勝利ですわね！」

いつの間にかセシリアが俺のそばまで来ていた。

「セシリア、あの連携技、実戦ではぶつつけ本番だったのに巧くいったよかったよ」

「きつと、わたくしと一夏さんの相性が良かったからですわ」

「はは、そうかもな」

ISの相性がよかったのは確実だ。高機動接近戦型、中遠距離射撃型。バランスがとれていたのだろう。異性としての相性はどうか？……悪いことはないが……うん、わからんな。

『よくやったな、お前ら。後は私たちの指示に従って、………』

シャワーを浴びてから泥のように眠りたい。千冬さんからの指示を聞きながら、俺はそう思った。

12・2(後書き)

切り札「ジョーカー」だ！これだけは書きたかった。

### 13 (前書き)

今回はちよいエロ表現あり。  
アウトなら修正します。

現在、俺は寮の俺の部屋のベッドで横になっていた。

あの仮称、中ボスとの戦いが終わった後、千冬さん達への報告は短く済ませ、身体の検査を行った後、部屋で休めと言われたのだ。後日この事件に対しての口外しないように手続きする必要がある。

それと一応、試合は俺の勝ちと言ったことになっている。もっとも以降の対抗戦は中止となったが。

シャワーを浴びた後、ベッドで横になるとすぐに眠気が襲ってきた。疲れていたからだろう。

起きたら、夕方になっていて、ちょうど日が暮れる時だった。

水分を補給した後、そのまま俺はベッドでごろごろしていた。

そういえば、中ボスは原作知識ではなんか敵対する組織？が送り込んだんだっけ？いや篠ノ之博士だっけ？まあ、とにかく俺と白式のデータが取られた、ということだ。原作知識的に考えて、これからは命をかけた戦いを行うことも増えていくのだろう。

しかし、俺はISから離れられない。離れたくない。たとえ命の危険があろうと、ISで戦いたい。

……は、はははは、まるで俺はIS中毒者だ。いや、実際そんなのかもしれない。

いいさ、どんな奴でも俺と白式で倒してやる。

俺は白式の待機状態、右手のリストバンドを左手で触る。

「これからも、よろしくな相棒」

声を出してつぶやくと、一瞬だけリストバンドが光った気がした。

そろそろ起きるかと思いきや、呼び鈴の音が鳴った。

誰だろうか？

ドアを開けると鳳さんがいた。

「鳳さん？」

「入っていい？」

「どうぞ」

さて、どういう用だろうか。

「その、さ、試合に負けちゃったけど、愚痴聞いてもらえないかな？」

「こころなしかツインテールが下がってる気がする。鳳さんが沈んでいるのがわかる。」

まあ、俺にできることだし、いいか。

「いいよ」

「一夏さ、私のこと、本当に忘れてるんだよね？」

「ああ」

「…………私とあなたの出会いはさ、小学5年生の頃に転校してきて、まあその時いろいろあったんだけど、それ以来ほとんど毎日一緒だったんだ」

そう言えば原作であったな、このエピソードは、いじめられていてそれをかばったとかだったはず。

「まあそれで、たぶん私があんたと一番仲が良かったと言えるほどの仲だったの。あんたは毎日私の家、中華料理屋にご飯を食べに来てたし。あの時は毎日楽しかったし、ISに乗ろうとかも全く思っていなかった」

人に歴史あり、か。原作だとそこまで掘り下げないからな。

「でも、中学2年の時、理由はわからないけどよく親が喧嘩するようになったの。それでさ離婚することになって、親権は母さんが持ってたから国に帰ることになったの。あんたや、他の友達と離れるのは嫌だった。それに、父さんの料理はおいしかったし、私が父さんを嫌いになったわけじゃない。でもどうしようもなくて、結局、私は国に帰った」

懐かしそうに思い出を語る鳳さん。どれだけ大事な思い出なのが伝わってくる。

「家族って難しいね。あれだけ仲が良くても、ちよつとしたことで壊れてしまう」

俺は恵まれているな。元の世界ではごく普通の一般家庭で特になにかあったわけではなく、一夏になってからも、千冬さんという家族がいた。

「それでさ、中国で生活し始めたんだけど、全く楽しくなかった。だからISを始めたんだけど、才能があったのかぐんぐん強くなつてさ、代表候補生、専用機持ちになった。専用機持ちになって、給料が入るようになってさ、お金貯めて、もう一度日本に行きたい、あんたに会いたいって思ってた。簡単に日本に行くことはできたの、

IS学園に入ればいだけだから、でも短い間でもあなたと普通の学校生活がしたかった、昔のようにな。だからIS学園に入るよう軍に説得されても拒否してただけど、あなたが世界で初のIS操縦者になっただって聞いて、IS学園に転入することを決めただ」

なるほど、っていうかこの娘、すごくいい娘じゃないか！好意に気づいてやれよ原作一夏！

「それでやっと、あなたに再会できたと思ったら、記憶喪失って、記憶喪失って何よ！じゃあ私は！私の思いは、どうすればいいのよ……」

そうか、鳳さんは箒と違って原作一夏を今現在も好きなんだ。

箒にとって原作一夏は、離れていた年月が長く思い出という感が強かったが、鳳さんにとっては、まだ想い出に変わる前、記憶していることなんだ。だからこんなにショックを受けているのだろう。

芸がないが、抱きしめるぐらいしか慰め方がわからん。

箒にしたようにそつと鳳さんを抱きしめる。

泣きながら時折、ドン！ドン！と俺の胸をたたく鳳さん。

ごめん、でも今は俺が織斑一夏なんだ。もう、譲れないんだ。ごめん。



しばらく俺達は抱き合ったままだったが、鳳さんが泣きやみ、顔を上げると、

「洗面所、使うわよ？」

と言われたので、タオルを貸してあげた。

「ふう、泣いたらすすきりしたわ。一夏、あらためてよろしくね。それと呼び方は鈴でいいわよ」

鳳さんは握手を求めてきた。

「ああ、よろしく、鈴」

空元気だけど元気になってよかったと思いつつながら、握手を返した。

「そう言えば、あんたの白式だっけ、あの機動性は反則でしょ。正直、第3世代のISのなかでも機動性は群を抜いてるわよ」

「そうなんだ、白式って接近戦ではシールド無効化する一撃必殺もあるし、高い基本スペックが俺の要求する無茶機動を実現してくれる、すごくいいISなんだ。なんていうか俺との相性がすごくいい。正直どんな相手でも俺と白式なら勝てる、そう信じてしまっただよ」

(うわー、こいつIS馬鹿だ。でも、いい顔するじゃない)

ああ、つい、熱く語ってしまった。

そうだな、いろいろ話をしていて仲好くなっていけばいいか。あくまで友達というかIS仲間？としての。

うん、鈴ってなんかすげえいい娘だから、このまま放ってはおけない。

しかし等と違い一歩離れた距離で接しよう。さすがにこれ以上フラグ立てるとかしたくない。はは、さすがに自意識過剰かな？

「でも鈴の甲龍もすごかったよ。白式じゃなければきつと負けていた。正直ISの性能を引き出していたのは鈴の方だった。俺ももっと白式の力を引き出せるようにしないと」

「あれ以上強くなる気が、あんたは。でも、そうね、さすがに今の甲龍じゃあんたたちに勝てないわね。でも今回の敗北で弱点である機動性を補うパッケージや攻撃強化のパッケージが作られたりすると思うから、いつかあんたに再戦して、その時は勝ってやるわ」

それは楽しみだなあ。

「なら、俺はその時までにもっと強くなるよ」

「ん」

(なんか、こいついい奴ってどうか、やばい、惚れてしまいそう。私の好きなのは昔の一夏、私の好きなのは昔の一夏、私の好きなのは昔の一夏、………よし、大丈夫だ。うーん、ただ一人の男、専用機持ってて同じ専用機持ちに勝てるぐらいの強さ、優しいっていう

か余裕のある態度、このISへの情熱が伝わってくる眼、これってさ、IS操縦者キラーじゃない？反則だわ)

「あんたって…」

「なに？」

「…なんでもない」

(昔の一夏と変わっていないところはモテる体質か。はあ、わたしもいつかは落とされちゃうのかなあ)

なんか鈴が俺を観察している気がするんだが、気のせいかな？  
つと、また呼び鈴が鳴ったな。

「ちょっと、出てくる」

「うん」

ドアを開けると、セシリアと箒がいた。

あの異形との戦い。

一夏さんに抱きかかえられていた中国人にはむかつきましたが、それでも、その後の戦闘での、一夏さんの思考が感覚として伝わっていると錯覚してしまいそうな感じ。

あんな感覚を味わってしまったては、もう、我慢できない。指が動いてしまう。

「はあああ、一夏さん、一夏さん！わたくし……わたくし……もう……っつ！」

一夏さんへの想いがあふれ、つい、行為を行ってしまった。

こんなはしたない自分、あの方には見せられないと思う反面、あの方に求められることを期待している自分がいる。

あの宣言以来、わたくしは常に一夏さんと行動を共にしている。

一夏さんはわたくしと篠ノ之さん、どちらか一方を優先することはない。だから同じ距離にいるとわかる。しかし、他の生徒たちよりはわたくしたちの方が距離が近いとわかったりして、にへらと笑ってしまったこともある。

放課後の練習と言う名の訓練はすごい密度で、あの方はグングンと強くなっている。それに引きずられる形でわたくしも強くなっていく。

もう、わたくしはあの方から離れられない。

一夏さんの声が聞きたい。

部屋を訪ねてみましょうか、普段は用事がない限りあの方の部屋に行くことはありませんが、あの戦いの昂揚で今日は我慢できそうにありませんもの。

では、しっかりと身だしなみを整えなければ。

わたくしは心躍らせながら、身だしなみ整えていった。

「一夏」

私の好きな人の名を呟く。

あの襲撃事件。私は何もできなかった。

一夏は強い。放課後は毎日一夏と一緒にISの訓練を行い、必死に訓練し、どんどん強くなっていく一夏を知っている。

私もその影響でISの操縦が巧くなってきているのはわかるが、

一夏やセシリアと比べるのもおこがましい実力だ。

その上、あの襲撃事件だ。

私は、前にただ見ていると言ったが、それでは一夏の隣にいることはできない。そう思った。

強くなりたい。

あの姉に頼めば、きっと専用機を作ってくれたりするだろう。でも、そんなのは嫌だ。私は自分の力でこの思いをかなえたい。まだ、その努力をしていないのだ。

よし、強くなろう。まずは来月の学年別個人トーナメントで結果を出そう。

一夏はISに夢中だから、それなりの間は恋愛とかはしないはずだ。よし、その間に強くなるぞ！

……でも、もしも、もしも強くなれなかったら、私はあの姉を頼

るのだろうか？

一夏に、会いたいな…。

よし、部屋を訪ねてみよう。普段は用事がない限り一夏の部屋に行くことはないが、今日は我慢できそうにない。

よし、身だしなみはしつかりとしないといけないな。

私は胸を躍らせ、身だしなみを整えていった。

「一夏さん！、なぜその方がいらっしやるんですの!？」

「一夏!どうしてその女がいるんだ!？」

二人が鈴を見つけるなり、詰問してきた。

大丈夫、鈴はフラグなんて立っていないから。

「今日の襲撃事件のお礼と、記憶喪失のことについて話し合っただけだ」

だから疑わしそくにしない、じろじろ見るなよ。

「へえ、あんたら二人ってもしかして…」

鈴も余計なことは言わない。修羅場に発展するかもしれないだろ。

「そうですね！わたくしは一夏さんのことを好いておりましてよ！」

「そうだ！私は一夏が好きだ！」

今日の二人はいつになく積極的だ。

はつきりと好きだと言われたのは、あの日以来だ。今は受け入れる気にはならないが、やはり嬉しい。

「へ、へえ、そう」

(このスタイルのよさ、私を馬鹿にしてるの！？それに、昔の一夏じゃないけど、奪われた感じがしてすごく面白くないんだけど！)

「ふーん、でも相手にされていないんじゃないの？」

あれ？なんでそんなに挑発的なんだ？…鈴の視線は……ああ、そういうこと、か

「そんなこと、あなたには関係ないですわ。それにあなたは、ふふん」

セシリアは鈴を見下し、鼻で笑う。間違いなく鈴が小柄で、スタイルもこの中で一番あれだ。それを示唆しているとすぐにわかる。

「な！なんですってえ！ぐぬぬぬ……ふん、あんたこそ、料理とかできなさそうじゃない。あのメシマズの国の人間だけあってね」

「なんですつてえ!」

「何よ!」

この二人仲悪いな。まあ、あの修羅場じゃないだけましか?

「一夏、そろそろ食堂に行こう。あの二人は忙しそうだから放っておけばいい」

漁夫の利ですか、篤さん。

「って!何抜け駆けしてますの!」

「ふん。そうだ、セシリア、私から見れば二人とも五十歩百歩だぞ」

少し顔を赤くしながら、一部を強調するポーズをして俺を見る篤。

……今日の夕食のデザートはプリンにしようかなあ。ぷりんぷりん。

「むー!」

「ぐぬぬ」

「ふん」

熱い!助けてください!少佐!少佐あ!

…はあ、これからはもっと騒がしくなりそうだ。

「三人とも、そろそろ夕食の時間だから、その、そろそろ、やめにしません、か?」



あああ、俺って変なとこでへタレだよなあ。ははは…

「…しかたありませんわね」

「しょうがないわね」

「しょうがないな」

ふう、でもまあ、今以上に騒がしくなるが、それ以上に楽しくもなりそうだ。

だから、まあ、いつか。………「ごめん修羅場はやっぱり無理。」

### 13 (後書き)

鈴は仲のいい女友達の立場で、オリ展開を試みます。

14 (前書き)

1日2回更新。

現在、6月頭の日曜日の午前9時過ぎ。

俺は鈴と一緒に1年ほど千冬さんと過ごした家の掃除に来ていた。きっかけは鈴と話をしていた時（襲撃事件以降は、毎日ではないが、食事を共にしたり、近接戦の訓練を行ったりしている）に家の話題が出て、家のことを思い出した。掃除をすべきだと判断し、本日はこの家に来たのであった。

さすがに箒やセシリア、俺に好意を持ってくれている娘を家に上げるのは、間違いが起きてしまいそうなので、今回は自重してもらうことになった。それに二人もそれぞれすることがあるらしい。

『注：憑依一夏は普段から女子に囲まれているため、感性が鈍っております』

そこで、鈴の出番である。

鈴は箒やセシリアと罵りあい（修羅場）をすることがあるが、俺を取りあつてのことではないので、つまり好意を抱いていないので、間違いが起きないだろうと判断してのことだ。

それにしても、埃がたまっている。

俺はISの訓練に集中してすっかり家のことを忘れていたし、千冬さんは家に戻る必要がない、いや、むしろ千冬さんが掃除などすれば、逆に散らかるだけだろう。

さて、今日は忙しくなりそうだな。

「うーん、この家も久しぶりねえ」

そう言えば、鈴はよくこの家に遊びに来ていたって言うていたな。確か、実家が自営業だったために遊ぶ時は一夏の家などで、帰る時

は一夏を連れていって、夕食を一緒に取っていた、という生活だったらしい。また、ある兄妹もほとんど一緒に、その兄妹の親が食堂をしていたため、そこで夕食を食べることもあったらしい。たぶん原作の友人のことだろう。

今の俺が言えることではないが、一夏、もげる。と言いたくなつた。元の世界で同じ話を聞けば、必ず言っていただろう。

「それしても埃だらけね。2か月近くほったらかしだったんでしょ。さすがにこうなるか」

「ああ、さすがにこれはまずいな。今日はよろしく頼む、鈴」

「任せておきなさい！じゃあまずは二階からね」

「ああ、俺の部屋と千冬さんの部屋は俺が掃除するから、それ以外の部屋、二つを頼む。埃をはたきで落として、水拭きとから拭きだ」

「わかった」

汚れるためジャージに着替え、マスクをして、俺達は掃除という名の戦場へ向かった。

昼前、ようやく1階2階と全ての部屋の掃除が終わった。

「鈴、先にシャワー浴びていいから」

「わかった」

鈴がシャワーを浴びている間に、汚れないように気をつけ、部屋を見て回った。

1年ほど過ごした家だが、久しぶりに来ると、すごく感慨深い。この世界に来た時、最初は混乱していたが、千冬さんの助けもあって、生活していけるようになり、心もだいぶ落ち着いていった。

IS学園に入り、この世界に来た時ほどではないが、生活が一変した。

そして、ISとの出会い、篝、セシリアとの出会いを経て、俺は織斑一夏として自覚することができるようになった。

1年と、そしてこの2カ月間、いろいろなことがあったなあ。なんて、懐かしんでいると、鈴が部屋に入ってきた。

「はい、終わったわよ」

汗と埃を流すだけだったので、鈴はすぐに出てきた。

「はい、ドライヤー。じゃあさっさと入ってくる」

「…ん」

(全く眼中にないっていうの!?!せめて少しは意識しなさいよ!そりゃ、あいつらみたいに好きってわけじゃないけど、全く意識されていないってのはむかつくわね!胸か!胸がないのは女じゃないとでも言うのか、あんたは!)

軽くシャワーを浴びて出ようとした時、一瞬プレッシャーを感じたがなんだったんだらうか?

部屋に戻ると、鈴は髪を乾かし終わり、いつものツイントールにしていた。

「さて、これからどうする?」

「どうしよつか?」

どれくらい時間がかかるかわからなかったため、この後の予定は考えていなかった。

「そうだな、昼をどこかに食べにいかないか?手伝ってくれたお礼として、おごるよ」

「いいの?でもあの二人にばれたら、まずいんじゃない?」

確かにいい気はしないだろうが、目的がお礼だし、いいだろう。

「まっ、大丈夫だろう」

「じゃあ、中華料理が食べたい」

頼むのはラーメンだろうな。鈴は昼食は必ずラーメンを頼んでい  
るほど、ラーメンが好きらしい。

「またラーメン？」

「そうよ。悪い」

「いや、別にいいと思うよ。っというか、ラーメンが嫌いな人って  
いるのか？」

少なくとも俺は知らない。

「いないんじゃないの？」

「さて、いい加減お腹すいてきたし、行こうか」

「そうね」

持ってきた荷物を大型のバッグにしまい、俺たちは昼食を求め家  
を出た。



学園生ご用達と言える、学園で一番近くのデパート、その中にある中華料理店に行くことにした。当たり前だが、学園外の人も当然来る。

鈴はラーメンを、俺はラーメンセット+ギョーザを頼んだ。

鈴は小柄なためか、小食だ。ISと同じで燃費がいい。…もしかしてそれが理由であるISに選ばれたのかも、なんてね。

「ふん！」

つと、そんなことを考えていたら、鈴が俺の脛を蹴った。痛い。鈴を見ると、三白眼で俺を睨んでいた鈴。なぜばれたし。

まあ、俺が悪いのか？心の中で思ったただけなんだが、まあいい、謝るか。鈴はさばさばした性格だから、謝れば許してくれるだろう。

「俺が悪かった」

「ふう、まあいいわ」

どうやら許してくれたようだ。

鈴はこういふところが付き合いやすいんだ。学園の女子達とは違い、女子高のノリではないし、それに一步引いた感じで付き合える、女の友人って感じた。箒やセシリアは関係がちよつと複雑だし。

でも、やっぱり男友達が欲しい。元の世界みたいに、たまには男だけで馬鹿騒ぎがしたい。

女子だけなのは別に悪くはない、それなりに慣れた今、むしろ楽

しい。きれいどころが多いし。楽しいんだが、なあ。

例えるなら、毎日、同じ料理を食べ続けている感じだ。

原作一夏はたしか男友達がいて、たまに遊んでいたはずだが、俺にはいない。そう、今の俺には同性の友達が一人もいないのである。

……言つてて空しくなるなこれは、うん、やめよう。

無駄なことを考えていると、料理が運ばれてきた。

「いただきます」

「いただきます」

味はまあまあだ。まずくはない、むしろおいしいだろう。値段もお手ごろだ。しかし、

「これなら、学園の学食や寮の食堂で食べたほうが安くておいしいんじゃない？」

と鈴が言う。そのとおりだと思う。デザート専門店とかなら、たとえ高くても客が来るだろうが。

「確かに。ほとんどただであの質だからな。あれと比べるのが間違っているんだろうが、毎日、食べてると慣れてくるからな。つい、比較してしまうな」

「そうよねえ。正直、あの食事になれたら、卒業したら困りそうね」

千冬さんみたいに教師になれば問題ないんだけどな。

「でも、たまには家庭的な味のものが食べたくならないか？」

「確かにね、毎日外食してるみたいだしね。そう言えば、あんた料

理できるの？前はけっこう上手だったわよ」

「そこまで凝った料理はできないけど、それなりにレパトリーはある。休みの日は千冬さんが帰ってきてきたから、まずいもの食べさせるわけにはいかないし、練習した」

ある程度の腕は元の世界でもあったからな。

「へえー」

(シスコンなところも変わっていないのか)

「なら、鈴はどうなの？」

原作的に考えて、確か料理はけっこううまかった気がする。

「私？私は少しはできるわよ。昔はあんたに負けてたんだけど、それから練習したの。昔、あんたに作ってあげたら、すごい微妙な顔でおいしって言われてさ。前に話したと思うけど、約束のこともあったしね」

(もつとも、レパトリーは少ないけど)

あー、あれのことか。

鈴と一緒に行動するようになってから、昔の話を聞いたりすることがあって、そのときに約束のことを聞かされたのだ。本人いわく『ふっきたから、むしろ隠すより話した方が楽になる』らしい。なんで、あれだけされて好意に気づかないんだ、原作一夏え…  
…と思ってしまうほど、原作一夏の鈍感は異常。

「そうだ、なら今度、お互いに弁当を作って交換しない？さすがにずっと作っていないと腕がさびってしまいそうだしさ」

「そうだなあ、もう2カ月も料理してないから、このままだと腕がさびるし、それに家庭の味が恋しなあ。」

「いいな、それ。それにたしか寮のキッチンは、一流ホテルのシェフとかが使ってるような器具が揃ってるって話だ」

「クラス一のしつかり者である鷹月静寝さん、彼女がそう言っていた。ちなみに呼び方は静寝さんである。箒とセシリアは告白してくれたので名前を呼び捨てにし、他の娘はさんづけかあだ名で呼ぶなどになっている。鈴は過去のことと女友達だから呼び捨てだ。」

「静寝さんは弁当派なので、けっこうな頻度で弁当を作ってきている。味もそれなりにいいし、おかずが同じだということもない、ノリは他の娘と変わらないが、弁当を作ってきたり、クラスをまとめたりしている娘で、クラス委員長的なことをすることもある。俺はクラス代表ではあるが、クラスをまとめるようなことはしていない、というかできない。女子のパワーをなめてはいけないのである。」

「へえ、おもしろそうじゃない。じゃあさ、今日の夕食は寮のキッチンを試すために、一緒に料理作らない？失敗したら、食堂で食べればいいし。さすがに知らないキッチンで料理をぶつつけ本番で作るのは不安ね」

「わかった。それじゃ、材料を買ってから帰るか」

「そうね、帰ったらあんたはどうするの？」

「何も考えていなかったからな、うーん、……アーリーナの予約は取

っていないので、基礎身体能力向上のトレーニングをして、後は木刀でも振るか。座学は夜に部屋で行う。

「トレーニングだな」

「また？本当ISが好きよね、あんた。まあいいわ、私もすることないし、一緒させてもらおうよ」

「ああ。じゃあ行きますか」

俺達は材料を求めて、食品売りに突貫していった。

鈴とトレーニングを行ったあと、シャワーで汗を流した。  
俺はいま、寮のキッチンで完成した料理を前にしている。

俺は、肉団子に細かく刻み炒めたシイタケと人参を詰めたものと、野菜たっぷりのグラタン（人参、玉ねぎ、ジャガイモ、ブロッコリ

ー、ホウレンソウ、マカロニ）を作った。

鈴は、酢豚と、野菜ギョーザ（キャベツ多め、にら、しいたけ）とゴマ団子（黒と白）を作った。

ご飯は白米を食堂で買うことにした。

とても二人分ではない量を作ったが、大丈夫だ。なぜなら、箒とセシリア、クラスメイト数人が食堂で待っているからだ。

いつものごとく夕食は一緒に摂ろうと誘われたが、今日は鈴と一緒に料理を作ると言うと、箒とセシリアも参加すると言ってきたが、この二人の料理の腕はおそらくアレなので遠慮しておいた。

クラスメイト数人も一緒にと誘ってきたが、料理のことを言うと、一緒にではなく、私達の間もお願いと頼まれたのだ。花より団子だということなのだろうか？まあ、2人では多い量だからちょうどよかった。

「よし！完成ね！じゃあ一夏、さっそく食べましょう」

「大型のお盆で運ぼう」

大型のお盆にさらを乗せて歩いていく俺と鈴、食堂のいつもの席に着くと、箒とセシリア、クラスメイト数人に囲まれた。

お盆を置いていき、それぞれに受け皿を渡していく。ちなみに白米はもう人数分用意されていた。

「では、いただきます」

ただ一人の男である、俺が音頭をとる。

「……………いただきます……………」

俺は鈴の作った料理を受け皿にとる。

俺の作った料理は味見をしたので、味はわかっているし、俺が食べるために作ったわけではないので、食べない。

さて早速酢豚を食べる。…うん、餡が程よく甘酸っぱく、肉、野菜も程よい硬さ（柔らかさと表現する人もいる）だ。これが素人だと、餡が汁っぱいか粉っぱかったり、野菜がすごく硬かったりするのだ。おいしい。

では次に野菜ギョーザを食べる。…これは、ギョーザの味は隠し味などない普通の味だが、炒められたキャベツの感触がアクセントを与えている。おいしい。

どちらも白米が進む。

最後はゴマ団子だ。まずサクツとした感触、次にモチツとした感触がした後、餡の甘さを味わう。揚げたてなので、まだ熱いがそれがまたよい。おいしい。

結論、鈴は料理が上手だ。

これだけの料理をただ幼馴染だから作ってくれてると思っていたのか、俺の料理を食べている鈴を見ながら、俺は思った。原作一夏…もげる、と。

（肉団子の中に詰められた具に肉汁がしみっていて、具本来のうまさ  
と肉汁のうまさ絡み合っている。野菜たっぷりグラタンは、焦がしたチーズをスプーンで割ると、中から湯気がでるほど熱々。そして野菜本来のうまみとホワイトソースの味が、程よくからんでおいしさを増している。これはなかなかやるわね）

「鈴の料理、うまいな」

「あんだこそ」

俺達は互いに称賛の言葉を言う。

「うっ、どちらもおいしいですわあ」

（女としての差を見せられた感じですよ。チエルシーに頼んで料理を教えてもらおうかしら。それに一夏さんと一緒に料理を作る…  
…いやんいやん）

「む、おいしい」

（一夏は料理のできる女性が好きなのか？こんなことなら叔母さんに習っておくべきだった。それに一夏と一緒に料理を作る……てれ  
てれ）

「どれもおいしい」

「おりむーはあ、料理もできるんですね」

どうやら評判のようだ。やはり食べてくれる人がいた方が料理は気持ちよく作れる。

おっと、タッパーに詰めた料理を千冬さんに持っていかなければ。

「悪い、ちょっと用があるから、片づけを頼んでいいかな？」

「よろしくてよ」

「いっぞ」

「…ああ、そういって。しょうがないわね」

「料理のお礼なのでえ、気にしなくてもいいです」



「ありがと、じゃあ後はよろしく」

ちなみに料理を食べた千冬さんは一言、『うまいな』と言ってくれた。

これからはなるべく料理を作って、腕を磨こうかな？

## 14 (後書き)

ストックでは眼帯さんとシャルをガンガン書いてます。  
早くデレさせたい。

## 15 (前書き)

各ISの設定は一部変更されています。

設定は投稿しておき、随時更新していくほうがよいでしょうか？

月曜の朝。いつものごとく女子特有のノリでわいわいと会話している。どうやら今日の話題はISスーツのようだ。カタログを見ながら談笑している。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

ISスーツか、最初渡されたのは腹だしタイプだったんだよなあ。俺はすぐにデザインの変更をお願いし、全身タイプにもらったが、原作一夏はよく我慢していたなあ。学園で使用しているスクール水着状のピッチリスーツもあれだが、腹だしタイプもなあ、碌なデザインじゃないだろ。

「そつえば、織斑君のISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

「どこかのラボの特注品。男用のものを研究用に作ったらしい。デザインはさすがに男が露出するのはあれだから、全身タイプに変更してもらった」

変更しなかった場合は、別の会社に発注することになっただろう。IS関連の製品を作っている関係者からすれば、貴重なモルモット的存在だから、ある程度のがままは言える。

そのわがままの一つ、白式の高機動パッケージの作成要望が学園

に通ったが、千冬さんの話だと、白式の高機動パッケージをどの会社で作成するかもめているらしい。

特殊な3世代の白式のデータ欲しさにどの会社も参入したのが理由らしい。

それと、高機動パッケージの作成については、データ取りのためと、前回の襲撃事件で明らかに俺が狙われたため、もしも場合の自衛手段にもなるからと言う理由で、作成が決定した。らしい。

「ISSスーツは~~~~」

教室に入ってきた山田先生がすらすらと説明しながら、こちらに向かって歩いてきた。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

一応なのか……。一部がなければどうみても高校生、いや中学生にも見えるからなあ、この人は。しかし、千冬さんや篝以上のあの武器は反則だよなあ。

たまに、たゆんたゆんという擬音がする状況だと、つい眼がいつてしまう。魔性の胸だ。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？わかりましたね？」

「~~~~~はい~~~~~」

親しまれているのか、なめられているのか、いやその両方か？山田先生も大変だな。まあ、若い教師なんてこんなものだろう。例外

(千冬さん)を除いて。

「諸君、おはよう」

「「「「「お、おはようございます」「」「」」」」

例外である千冬さんが教室に入ってきた。その瞬間にざわざわしていた教室が一瞬で静まり返り、厳格な雰囲気が変わる。

相変わらず仕事面ではこれ以上ないほど厳しい人だ。

あつ、昨日出したサマースーツを着ている。

昨日、料理を渡しに行った際に、サマースーツを使用する用のクローゼットにしまっておいたのだ。

ちなみに、4月に千冬さんの部屋を掃除した際に、千冬さんのスーツは家にあるものは全部千冬さんの部屋に持ってきて保管用のクローゼットにしまっておいた。

家事が全くできない人だが、千冬さんはそれでいい。むしろ家事万能だったら、俺がしてあげられることが何もなくなってしまうではないか。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるが」

千冬さんの話は実戦訓練を行うが、自分のISスーツを持っていくものはそれを使用すること。持っていないものは学校指定のものを使用すること。それすら忘れたものは学校指定の水着(スクール水着)で、それすら忘れたら下着で訓練を行わせるという内容だ。

それにしても、スクール水着とかブルマとか妙にエロく感じてしまっただよなあ。中学生や高校生の時は何も感じなかったのになあ。

そういえば、オタクな友人は『\*\*\*氏、\*\*\*氏、\*\*\*氏、熟女に学生3種の神器(制服、ブルマ、スク水)、ロリっ娘にアダルトな下着(黒、紐)こそ至高の萌えでござるよ』なんて言ってたな。あの後

あいつら属性談義を始めやがって、結局『至高の萌えはそれぞれの心にある』なんて結論だったんだ、懐かしい。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

ん？なんか、忘れていた気がする、あゝ、原作知識か？なんかイベントが……ああ！そうだ！

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「え……」

「……ええええええええっ！？」

そうそう、転校生。たしか男装さん（例によって名前はry）と眼帯さん（例によって名前はry）だったなあ……って俺にも絡むじゃないか！？

これ以上フラグ立てるのは嫌だぞ、そりゃ原作ヒロインは可愛い娘ばかりだが、人数が増えれば修羅場はもつときつくなる、さすがに嫌だ。それに箒とセシリアは告白までしてくれたから、他の娘のフラグをあえて立てるようなことはしたくない。

どうしよう……男装さんはさりげなくフォローする形で、俺に女子バレせずにいれば、イベントは特に発生せず、フラグとかも立たないかなあ？眼帯さんはたぶんIS戦で負ければ、フラグは発生しないはず。しかしIS戦でわざと負けるなんて、俺は絶対にできない。

眼帯さんはもし原作通りになったら、箒やセシリアと同じように

接するか。

あんな風に行動で好意を示してくれていたら、いつかは誰かを選ぶのかも知れないが、今は……いや、恋愛ことを考えるのはやめよう、答えは考えて出るものじゃない。自分の思いに何かを感じたら行動する。今はISと学園生活を楽しめばいい。

しかし、こんな考え方、すごく自意識過剰だ。しかし実際モテてるしな、俺、もげる。なんてね。

考え込んでいたら、教室が静まり返っていた。

山田先生を見ると、そのそばに金髪の男の子（原作知識から女だと気付いているが）と銀髪で左目に眼帯をした少女がいた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男……？」

みんな呆然としている。まあ驚くよなあ。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

たしかに男の娘として通じそうな、声と顔だ。男としては小柄に入る背丈。礼儀正しく背筋が伸びていて、ふんわりとした雰囲気と相まって貴公子といった感じが。

しかし、この声を聞いていると、オカリンという言葉が浮かんでくる？なぜだ？

「きゅ……」



「はい？」

「きゃあああああああああ　　っ！」

まるでジャニーズ系アイドルが転校生だったみたいなのり、いやほとんど同じ状況か。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「男の娘、はあはあ」

「っておい、最後のはおかしいだろ！？」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬さんの声も暴走状態にある女子の耳には届かなかったようだ。もっとも呆れが強く、ぼやきのように小さい声だったのもあるが。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

長い腰まである銀髪、左目の黒い眼帯、そして他者を排斥する鋭く冷たい眼、女性として小柄な身体だが、威圧感がひしひしと伝わってくる。

千冬さんも鋭い眼だが、生徒を生徒として見ているのがわかる。しかし眼帯さんの眼は他人を人とすら思っていないかのように冷たい。

この少女がデレるとか、誰も想像すらしないだろうなあ。原作知識がなかったら俺もそう思っぐらい冷たい雰囲気だ。

「…挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

アニメなどでよく見るあの敬礼を行うラウラ。しかし千冬さんに織斑先生と呼べと訂正をされていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……」

誰一人喋らない沈黙状態。しかしボーデヴィツヒさん、呼びにくいな、眼帯さんでいいか、眼帯さんはこれ以上話すことはない、口を閉じたままだ。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

あつ、山田先生が泣きそうな顔になっている。眼帯さんに眼を移すと、ちょうど眼があった。

「！貴様が」

確かこの後、

『バシン！』

痛え。そっか、平手打ちされるんだ。ふう。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

確かに俺、中の人的にはあの人は姉じゃないが、この身体的には姉だし、今の俺にとって千冬さんは大切な人だ。眼帯さんが認めようが、認めなからうが、関係ない。

「千冬さんは大切な人だ。眼、君が認めようが、認めなからうが、関係ない」

(一夏……………はっ、あいつは弟だぞ。くそっ、あんな真剣な顔で言うから、ときめいてしまったじゃないか)

大切なことなので、言葉に出しました。ってか眼帯さんって言いそうになった。きまらない奴だ……………俺え。

まあ、原作的に考えて理由があったはずだし、この程度の理不尽では、怒る気にはならない。本当の理不尽とは、起きたら小説・アニメの主人公になっていた、ということを使うのだよ。

「…私は、認めない」

眼帯さんはそう言って、空いている席まで移動し、座った。

「あ……………ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS基礎実習を行う。解散！」

さて、とりあえず彼女のことは放っておこう。それより早く着替

えなければならぬ。

「織斑。デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

おっと、デユノアさんのフォローもしなければならぬ。着替えるときは後ろを向くとかすればいいか。

「君が織斑君？はじめまして。僕は」

「待った。時間がないから、先に移動しよう」

「男子は空いてるアリーナ更衣室で着替えをすることになる。実習のたびに移動することになるから、面倒だが時間に気をつける。わからないことがあったら俺に聞いてくれ」

「あ、うん」

男友達と話す感じってどんなだっけ？もう3カ月近く同年代の男と話していないからわからなくなってる……はあ。とりあえず名字を呼び捨てにするか。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

ああ、面倒だ。時間がない…走るか。…いや、あの人は黨先輩、新聞部の副部長か。よし、インタビューを餌に状況を納めてもらう。

「黨先輩！」

「織斑君！インタビューを！」

「次は織斑先生の授業だから、時間がなくて。インタビューなら夕食後に受けてもいいから、この状況を何とかできませんか？」

「夕食後にインタビューね！オツケー！まかせて！」

俺とデュノアが走って移動する。それを追いかけようとした女子達を、黛さんが引きとめる。

「インタビューは新聞部が責任を持って行います！明日、号外を出します！写真なども撮りますから、撮った写真の配布も同時に行います！」

その言葉に女子達は黛さんを質問攻めにする。予約がどうか聞こえる。まあいい。これで更衣室に行ける。

「なんで、みんな騒いでるの？」

状況が飲み込めていない。まあ、女だし、わからないか。

「世界でたった二人の男のIS操縦者。珍しいからだ」

「あっ！ うん。うん。そうだね」

この感じは、自分が男だと忘れていたのか？

「おっと、それより急ぐデュノア」

「わかったよ。それと、僕のことはシャルルでいいよ」

「わかった。シャルル、俺も一夏でいい」

男と話しているこの感じがいいなあ。もう、この娘はずっと男装でよくな。

「うん、よろしくね」

「よろしく。それじゃあ、早くISに着替えるぞ」

よし、シャルルが見えないように後ろを向いて、いつもよりゆっくりと着替える。

早く着替えるためか、シャルルの方からがさごそと音がする。

俺がISスーツを着ようとするころには音がしなくなった。着替え終わったのだろう。なら、俺もさっさと着替えるか。

着替え終わり、後ろを向くと、シャルルはすでに着替え終わっていた。万が一のこともあるし、よかった。

「それじゃあ、グラウンドに行こう」

「うん」

これなら十分間に合うし、歩いていくか。

「一夏のスーツ全身タイプだけど、どこの会社製のものなの？」

「どこかのラボの特注品。シャルルのは？」

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはあるけどオーダー品だ

ね

デュノア……そうだ、たしか原作で、その社長が父で男として入学するように命令されているって話のはず。

「デュノアって、もしかして？」

「うん、僕の家だよ。父が社長をしてる」

この話は地雷っばいな。シャルルの眉が少し下がっているし。

「へえ。金持ちとかが多いのかなこの学校。セシリア、イギリスの代表候補生もすごいお嬢様だし」

「セシリアって、オルコットさん？イギリスの代表候補生で専用機持ちの？」

「そう、そのセシリア」

実家にはモノホンのメイドさんとか執事がいるって聞いた。それと夏休みには一度実家に来ませんかとも。

メイドさんか、元の世界のあいつらが聞いたら発狂しそうな話だ。しかし俺にはメイド属性はない、が一度は見てみたい。イギリスも料理はあれだが観光するところは結構あるし。行ってみるのも悪くはない。

グラウンドに着くと全員整列していた。

「ぎりぎりだったな。とっとと列に並べ」

もうちよつと急いだ方がよかつたか。まあいい。  
俺とシャルルは一組の列の一番端に加わる。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

隣にはセシリアがいた。

「シャルルの件で女子に追いかけられていたから」

「あら、それは災難でしたわね」

俺はなるべく頭から下を見ないようにしながら、セシリアと話しをする。だって、下を見ると女子の尻の形がしっかり見えてしまうから。ISスーツ（もうエロスーツって呼び方でいいよ）を着ている女子高生、それが61人もいる。セシリアや箒で慣れたはずだが、この人数に囲まれていると緊張する。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

担当が千冬さんということもあるが、実戦訓練と言うことで、みんないつも以上に気合が入っている。

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る」

「めんどいなあ、なんで私が」

「こつこつというのは見世物のようで気に入りませんわね」



ぼやきながら、前に歩いていく二人。  
たしか山田先生と戦うんだっけか、俺も戦いたかった。

「  
」  
千冬さんが、やる気のない二人に何か話している。

(オルコット、あいつにいいところを見せるチャンスだぞ)

(はっ)

(鳳、負けっぱなしでいいのか、実力を示すチャンスだぞ)

(むっ)

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわね！」

「私の実力を見せるいい機会よね！専用気持ちの」

いきなりやる気になった。千冬さんは何を言ったんだ。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

セシリアは鈴を鈴さんと呼んでいる。仲が悪い時もあるが、鈴は俺にフラグが立っていないので、基本は仲がいい。たまに喧嘩するが。(ISの訓練などで意見の違いがあったりしたときなど)

「ふふん。それはこっちのセリフ。学園での公式戦は黒星しかない

し、あんたを倒して実力を示してやるわ」

もしも、この二人が本気でやりあったらどうなるか。訓練の中で行った模擬戦ではほぼ互角、接近したら鈴が勝ち、遠距離で釘づけにしたらセシリアが勝つ。

しかし、セシリアのブルー・ティアーズは、BT兵器の稼働率が上がったらすごいんだが、まだ稼働率が低いからなあ。稼働率が上がるとさらにビットの数を増やすことができるようになるそうだ。セシリアは今もBT兵器の上達は頭打ちだと言っていた。この手の兵器は特殊な才能うんぬんではお約束か。

とはいえ、本当に全力で戦闘はしないだろう。…しないよな？

「慌てるなバカども。対戦相手は」

『キイーン……』

この音はなんだ？

「あああーっ！ど、どいてください〜！

声がする方を見ると、山田先生が上空からこちら落ちてくる……つてあぶない！

白式！

俺は白式を呼び出し、着装した。そして山田先生をキャッチしようとするが、

「一夏さん！危ないですわ！」

セシリアが俺をかばおうとブルー・ティアーズで突っ込んできた。

「ちょー！」

『ドガ　　ンー！！！！』

うっ、痛い。それに何も見えない。

『フニヨンフニヨン』

何か柔らかいが弾力のあるものを手がつかんでいる。何だろう？

『モミモミ、モミモミ、モミモミ』

「やあん、駄目ですう。……あん！」

一体何が起きているんだ？

「むぐー！」

うっ、顔に何か当たってる。

『クンクン』

いい匂いと何かを滾らせる匂いがするなあ。これは何だろ？しかし、息が、息が！できない！苦しい！

「むー！ふんふん！、ふう！ふう！」

「だ、駄目ですわ、こんなところで、あん、せめて人の見ていないところ……あ、ああん！」

さらに強く何かを押しつけられる。  
く、苦しい。た、たす、けて。

「お前らは！何をしているんだ！さっさと起きろ！」

千冬さんの声で何とか再起を果たした、俺達。

どうやら、俺の手は山田先生の大きな胸に、顔はセシリアの股間に当たっていたらしい。

とてつもなくいい思いをしたんだが、その代償に何かを失った気がする。

山田先生は熱っぽい眼で俺を見るし、セシリアは顔を赤くして、もじもじしながらも俺を見つめていた。

鈴はぶつぶつと何かを呟いていた。

（大、大、大、大、ふふふふふ、巨乳は、敵だ！）

「おまえらの相手は山田先生だ。山田先生も、いつまでボケっとなしている、しっかりしろ！さあ、始める！」

「はっ、はい！」

千冬さんの声に正気に戻り、上空へ上がっていく、三人。

「織斑」

「はい」

千冬さんが俺に話かけてきた。あれ？この寒気は何？

「ふん」

『ゴチン』

音がするとともに頭に痛みが走る。ああ、千冬さんにげんこつされたのか。

「今は授業中だ、色ボケするな」

「はい、すみませんでした」

そして、箸、睨むな。

安心しろ、お前の胸も山田先生に負けず劣らず立派だ。大きさは負けるが張りがあって、揉みごたえがありそうだ。

………って、思考が色ボケしてるー！

平常心、平常心、平常心。

よし、大丈夫だ。だから千冬さん、睨まないでください。

…ふう、……よし、3人の戦いに集中しよう。

16 (前書き)

みなさん、いつも感想ありがとうございます。

上空を見ると、山田先生が二人相手に優勢に戦っていた。

山田先生は、セシリアのBT兵器から次々に放たれるレーザーを難なく交わす。BT兵器での攻撃を中断し、ビットが本体ISに戻っていく。

それを見て鈴は衝撃砲で山田先生を撃つが、山田先生は回避行動をとり、直撃しそうな時は実体シールドで防ぐ。同時に空いている右手のライフルでさまざま鈴を撃つ、鈴は回避するが続けて山田先生が追撃し、防戦一方になってしまう。

セシリアがスターライトmkIEIで山田先生を撃つが、山田先生は回避しつつ今度はセシリアに向かってライフルを連射していく。セシリアは回避していくが、衝撃砲で山田先生を撃とうとした鈴にぶつかってしまう。おそらくセシリアの回避の機動が読まれ、回避先を山田先生に誘導されたのだろう。

山田先生はすぐさま上空へ移動し、ライフルを瞬時にクローズ（量子変換してISにしまう）し、グレネードランチャーを瞬時にオープン（量子変換してISから取りだす、コールともいう）する。タイムラグが全くないスムーズでお手本のような技術だ。

そして二人に向けてグレネードランチャーからグレネードを発射する。ぶつかって混乱している二人に、グレネードが直撃し、爆発した。

二人は上空から撃たれたため、衝撃で地面に落ちていあった。混乱していたため、受け身すら取れていなかったのだろう。それが地面に落ちた理由だろう。

山田先生は、強いとは感じない。しかし巧いと感じる。この戦いで基礎技術が非常に高いことが分かった、しかしなぜか強いとは感じないんだよなあ、なんでだろうか？

山田先生がこちらに降りてくる。生徒達は驚きと強さへの憧れが

混じった眼で山田先生を見ていた。

そして無様に地に落とされた二人は、罵りあっていた。

「あなたのせいですわ!」

「あんたのせいよ!」

「ぐぐぐぐぐつ……!」

「ぎぎぎぎぎつ……!」

ふう、二人とも、クラスメイト達に笑われているぞ。

女子達は二人を見てくすくすと笑っていた。

しかし、あの内容だと、一対一で戦っていた方がまだよかつたと思う。総合戦力で勝っていても、碌に連携が取れないところなるのか、覚えておこう。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。それと山田先生は元代表候補だ。以後は敬意を持って接するように」

まあ、山田先生のことだから、また何かミスとかして、今まで通りになると思うが。

「では実習を開始する。専用機持ちはグループリーダーを務める。出席番号順に各グループに入れ」

1組の若い番号順に俺達のもとに集合した。

それぞれの班に分けられた女子は、いろいろな感想を言っていた。俺のところは、



「やったあ」

「ラッキー」

「うーん、残念」

とか言っている。

一番ひどいところは眼帯さんのところだ。眼帯さんの雰囲気呑まれ誰も話そうとはしない。ご愁傷さま。

「それじゃあ、出席番号順にESの装着と機動、歩行までやろうか。まずは1番の人」

「はいはいはい！」

元気いいですね。

「出席番号1番！相川清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「はい、よろしく」

「よろしくお願いしますっ！」

お辞儀をして、右手を差し出してくる。…ふう、しかたない。

「それじゃ、始めようか」

握手をして、手を離す。

「はい！がんばりまーす！」

「ああっ、ずるいー！」

「私も！」

…ふう。

「わかった、ISに乗る前に握手をするから、早く始めようか？」

「……はい！」

なんか芸能人、いわばIS学園生徒だけの芸能人みたいな感じだ。まあ、波風立てるわけにもいかないし、ある程度は愛想良くしておこう。印象は大事だ、社会にでも好印象を相手に与えることは大事だったしな。

それほど時間に余裕がないため、順番に着装、機動、歩行と問題なく行っていく。

しかし、最後、箒の番の前に時間を気にしていたからか、ミスをしてしまった。

「あ、しまった」

訓練機のコックピットが高い位置に固定されてしまった。

訓練機（今使用しているのは打鉄）は専用機のようにオープンして着装ができないため、降りる前にしゃがまないと、コックピットが高い位置に固定されてしまい、装着するためには踏み台などを使うか、ISを装着し運ぶかするしかない。

これは前に箒、セシリアと訓練しているときに起きたことだ。あ

のときは……… 箒を、お姫様だっこして運んだんだよなあ。そして当然訪れる修羅場、ははは、はあ。

さて、どうしようか、と箒を見ると、顔を紅くしながらじく俺を見つめていた。踏み台などでもいい、というかそうしたいが、先ほどの痴態のこともあるし………しかたがない、か。

俺は白式をオープン、着装する。

「箒、落ちないように気をつける」

「わ、わかった」

箒を抱きかかえると、ギョツと抱きついてきた。

胸のあたりにふよんふよんという感触がする。

くぬう、これは、いいもの（乳）だ。特に弾力がいい。

…って、さっさと運ぼう、このままじゃ、このままじゃ、このままじゃ、…ってしまふ。

静まれ、静まれ、静まれ…ふう。

（うう、こんなことするのは恥ずかしいが、セシリアに後れをとるわけにはいかないし。あ、一夏、近くで見るといつもよりだらしない顔になってるのがわかる。もしかして、お前は大きい胸が好きなのか？お前が望むのなら、私の胸はいつでも…）

「ずるーい！」

「私もされたかったー！」

うん、その場合途中で確実に…ってた。…っていうか絶対に拒否してた。さすがに緊急時でもないし、こんなことするのは身近な女性（千冬さん、箒、セシリア、鈴）にしかしない。

「…篝、ISに移ってくれ」

「わ、わかった」

よし、篝は無事、打鉄に移ったな。

周囲を見回すと、ものすごいプレッシャーに襲われた。

『ピキーン！』

この感じっ、セシリアか！？

セシリアの方を見ると、じとじとした眼で俺を睨んでいた。

いつもなら、恐怖していたが、今はやばい。セシリアの顔を見ると、先ほどの痴態を思い出してしまうからだ。……いい匂いだっ

なあ……ってちっがーう！平常心、平常心、平常心……ふう、よし、この記憶は封印する！

午前中の実習が終わり、着替えを手早く済ませ、（午後も実習があるので時間がとられるから、ISスーツは着たまま、上から制服を着ている）昼食を摂りにいつものメンバー＋シャルルと一緒に学食に来ていた。

俺は、パスタ（半熟卵のカルボナーラ）とシーザーサラダを、箸はいつもの和食の日替わりを、セシリアはサンドイッチと紅茶を、鈴は醤油ラーメンを、シャルルはグリーンカレーを頼んだ。

箸はクラスメイト達と比べご飯をしっかりと食べる。朝も昼も夜も、たいていは和食で結構な量がある。しかし、中学で剣道で全国1位になっただけあって、運動量が多いため、太らない。走りこみも毎日行っているし、ISの訓練にこない日は剣道部で汗を流している（週に1回で幽霊部員になっている）。スタイルはさらによくなっ  
ていっている気がする。

セシリアは、日によってまちまちだ。洋食、和食、中華、気の向くままに決める。しかし紅茶だけは必ず頼み、緑茶は必ず飲まない。食事の制限は大まかに行っているようで、食べ過ぎた時は運動量を増やしたりして、スタイルを維持しているらしい。それと、セシリアの食事は、専用のシェフが作っていたために、イギリスの料理がまずいと知らなかったらしい。チエルシーという、姉のようなメイドに聞いたたら、『まずいですね』と言われ初めて知ったらしい。

鈴は、昼食はラーメンを毎日食べるが、小食のため、朝昼夜全体的と食事の量が少ない。また朝、夜は栄養のある物中心にしている。さらに運動量が多い、しかし、一向に身体は成長しない。本人はかなり気にしているようだ。小柄だが、太っているわけでないし、むしろ綺麗なスタイルなので気にしすぎだと思う。あまりに気にしすぎるようなら今度助言してみよう。

「それにしても、すごい種類だね、この食堂」

「俺もこの学園に入ったばかりのころ、そう思ったよ」

俺の隣はいつものごとく、箸とセシリア、対面に鈴とシャルルが座っている。

「おいしいし、種類も多いからと言って、食べすぎないように気を  
つけないといけませんわ。油断していたら、あっという間に太って  
しまいますわよ」

「はは、僕は小食だから、大丈夫かな」

「でも、食べなすぎるのも問題だと思っぞ。箸みたいによく食べ  
て、よく運動するのが一番だと俺は思っぞ」

「そっだな、私もそう思っぞ」

「あら、太っても知りませんわよ」

「食べた分は動けばいいのだ」

(それは私に対する当てつけか？篠ノ之箒)

「でも、食べてもらう側としては、作った料理を全部食べてくれる  
と嬉しいな。適量を作っても、ダイエットしてるからって食べても  
らえないのは気分が悪いな」

千冬さんと暮らしていた時、男が食べる量を作ってしまった時が  
あったが、千冬さんは無理して食べてくれたからなあ。あれは嬉し  
かった。もちろん次からは適量にした。

「一夏さんの作った料理なら、無理をしても食べきりますわ」

「そっだ、一夏の作った料理ならどれだけでも食べられるぞ」

嬉しいが太るぞ？

「そういえば、こんど弁当を作ってくるって話、いつにする？」

そう言えば、昨日鈴とそんな話をしたな。しかし、通常の日はずこし面倒だな。食材の買い出しや朝は早く起きないといけないし、時間が取られてしまう。できるだけESの訓練などに時間を当てたい。

「それなんだが、弁当を作るのはやめて、週末は自炊するとかにしないか？それならストレス発散になるし」

俺は料理をしてもストレスを感じない。むしろストレス発散になる。千冬さんに作り続けていたら、そうなっていた。

(うつ、毎週はきついかも。昨日の3品が一番自信があるやつだった、あとは…うん、無理だ)

「そうね、たまになら付き合っただけでもいいわ」

「わかった」

入学するまで土日は千冬さんに料理を作っていたから、昔みたいに土日は夕食だけでも作るか。

(やはり、料理スキルが高い方が有利か)

(チエルシーに料理を習いましょう)

「一夏は料理上手なの？」

「まあ、苦手ではない」

自分ではそれほど満足できてないんだ。千冬さんにはもっといろんな料理を食べてもらいたいし。

「なに言ってるのよ。昨日の肉団子とグラタンはおいしかったじゃない」

「うむ、自信をもっていいぞ」

「そうですね、一夏さんの料理はおいしいですわ」

うーん、照れるな。

「ありがとう。ってことで上手らしい」

「くすくす、一夏っておもしろいね」

シャルル、手を裏返して口に当てるな、女みたいだぞ。男の振りをしろ。

「笑うなよ、みんなが見ている」

「はは、ごめんごめん」

なんか先行きが不安だ。気を抜けばシャルルはどこかで女ばれしそつだ。



「改めてよろしくね、一夏」

「ああ、よろしく」

放課後俺はいつものごとく訓練を行った。シャルルはその間、部屋に荷物を置いたり、整理をしていた。シャルルの部屋はやはり俺と同じ部屋になった。

シャルルを連れて、食堂で夕食を摂った後、新聞部のインタビューに応え、ようやく部屋に戻ってきたところである。

「疲れたね、でも楽しいところだね、ここは」

「まあ、あのノリは付いていけない時があるが、楽しいなこの学園は。なによりISがあるし」

「一夏は放課後にいつもISの訓練をしているって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、ほぼ毎日しているな。俺ってISが好きなんだと思う。変な意味じゃなくて、サッカーとかのスポーツが好きで、プロになりたいとか、そういう意味の好きだ。だから練習するだけでも楽しい。試合はもっと楽しいが」

「くすくす。一夏は男の子だねえ」

(いいなあ、こういう男の子って)

シャルル、お前も今、男のふりしているんだぞ。

あと、そんなニコニコというかふわふわと笑うな。女みたいに見えるぞ。っていつか可愛いな、くそ。

「ねえ、その訓練、僕も加わってもいいかな？」

シャルルは専用機持ちだ。どんなIS何だろうか。原作知識だと、ヘビーアームズって印象しかない、2世代ISだったはずだしな。試合のような本気の戦いはできないけど、模擬戦とかしたい。

「いいぞ。シャルルのISがどんなISか俺も楽しみだ」

「うん、楽しみにしてて」

でも同じ時間にシャワーを使うことになるとかになるな。

「そつだ、シャワーの順番はどうする？」

「あ、僕が後でいいよ」

まあ、女だし、使ったすぐ後には使われたくないだろ。

「了解、悪いな」

さて、今日の復習と予習、訓練の反省や課題をまとめないと。

「それじゃあ、23時30分には電気切る予定だ。俺はこの後、今

日の訓練の反省やこれからの課題を端末にまとめるから」

「うん、わかった」

思ったより早く、終わったので、就寝するまでシャルルと雑談をした。

「一夏、白式つてすごい極端だね。基本スペックが高く、機動性もあるけど、武器は雪片式型1つだけで接近戦しかできない。でもハマれば強い。それに成長率がすごい。これは一夏の成長が早いこともあるかな」

今日は土曜日の午後、アリーナで箒やセシリア、鈴、シャルルと訓練した。シャルル以外は、珍しく全員に用事があるので先に帰った。現在は残ったシャルルと模擬戦を行ったところだ。あくまで模擬戦なので、無理はしなかったし、短い時間しか戦わなかった。

その後で、自分達のISについて解説していた。とはいえ、さすがに詳細データを見せることはしなかったが。

シャルルのISラファール・リヴァイヴ・カスタムIEIは全ての距離で戦えるいいISだった。

ヘビーアームズのようなISと思っていたが、近接もこなせる。

後付け装備が多く、継戦能力が高く、バランスの取れたISだ。弱点は基本スペックが3世代ISよりやや低いことだ。

そしてこれはシャルルから聞いたが、成長しないISだということ。要は限界まで強化してあるからこれ以上強化はできませんってことだ。（全改造ボーナスなどないぞ）

現段階では3世代ISと同等以上に戦えるが、時が経つほど勝てなくなる2世代最後期IS。たとえ、2次移行しても、3世代ISが完成すれば、1次移行のみの3世代ISにも勝てなくなるだろう。

世知辛い。

「さっきの模擬戦で行った、2世代ISでは出せないスピードでの連続変則機動はデータが集まれば現在の2世代ISのスペックじゃ反応すらできなくなりそうだよ」

「とはいえ、今は3回連続でしか使用できないように設定されているし、とにかく密度の高い訓練でデータを集めるしかない」

「そういえば、射撃とかはできないの？もしできればバランスがよくなると思うけど」

「FCS（ファイアコントロールシステム、自動照準や予測）がないから、練習するだけ無駄。高機動で完全マニュアル射撃を行うとありえない。反動とかも消せないし」

「うわあ。それはまた、極端だ。でも、専用機は同じISが作られたとしても、コアと個人のデータによって全く成長のしかたが変わるし、成長の幅も違うから、一夏と白式はこれでいいのかもね」

「俺もそう思う、不満がないどころか、この白式を気に入っている」

「ははは」

さて、今日のノルマはこなしたし、そろそろ帰るか。

「ねえ、ちょっとアレ」

「ウソっ、ドイツの3世代型だ」

アリーナがざわざわし始めた。

何が起きたのか？ざわついている娘の視線の先を見ると、眼帯さんがいた。

彼女は転入以来クラスの誰とも話さず、いつも冷たい、他者を排斥する雰囲気を出している。難しい娘だ。

一度話しかけられたことがあるが、

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業を成し得ただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

と言われたただけだ。本当に難しい娘だ。

しかし、大会2連覇か、たしか原作一夏が誘拐されて、それを助けたのが千冬さん。結果決勝戦は棄権してしまった。

でも、それでこそ千冬さんだと思う。俺と同年代なのに、厳しくも優しく、大切なものを守るためなら、自らを賭けることができる。そんな千冬さんだからこそ、俺は尊敬しているんだ。

それはラウラ・ボーデヴィツヒという少女も同じなんだと思う。ただ、その尊敬、憧れが行き過ぎている。そして尊敬、憧れがISの強さを重視しているのもあるだろう。

「おい」

ISのオープン・チャンネルで冷たい声で話しかけてくる。

「何？」

「貴様も専用機持ちだと聞いた。私と戦え」

それは嬉しいのだが、彼女は本気でやりあうつもりだろう。望むところだが、ここには人がいるし、全力戦闘なんて問題行為は起かせない。

ISは好きだが、理由もなく違反行為を犯してまで、戦いたい訳ではない。

「それは嬉しい誘いなんだが。全力での戦闘を望んでいるんだろう？だが、ここで戦えば違反行為だし、すぐに中止させられるぞ」

「……………」

「全力で戦う機会があれば、ぜひ戦わせてもらう。だが今は駄目だ。その機会ではないだろう」

「……………ふん。今日は引こう」

さすがにここでは戦いはできないと判断したんだろう。俺とシャルルを一瞥して、眼帯さんはゲートの方へ移動していった。そしてシャルル、なぜ眼帯さんに銃口を向けて、鋭い目つきで睨んでいたんだ？

いくらなんでもさすがに沸点が低すぎだろう。挑発されていたのは俺なんだぞ、友人が挑発されたからといって、銃口を向けるのはやりすぎでは？

まあいい、帰るか。

「やれやれ、もう閉館時間が近いし、帰るか」

「うん。じゃあ、先に戻ってて」

「わかった」

転入した際は男が設備を使用する際の説明をする必要があったから一緒に着替えたが、以後は当然着替えが別々だ。

シャワーを先に浴びた後とかは、なるべく早く早く着替えるようにしたり、スキンシップをとらなかつたりして、気を使っている。

しかし、一番の問題は、寮の部屋でトイレを使用すると、なかぶ

た（座るときに下ろすやつ）が必ず下ろしてあるということ。これが数少ない男性用トイレだと、小と大が分かれており、大のなかぶたが下りていても問題ない。

もっと気をつけようよ。いくらなんでも感が鋭い人だと気づくつて。

気が付いていないふりをするのは疲れる。もういつそ、女バレさせた方が気が楽かもしれない、わけにはいかないか。

まあいい、汗がべっとりして気持ち悪いから早く部屋に戻ってシャワーを浴びよう。シャルルも早く使いたいはずだし。

「ふうー、さっぱりした」

しかし、風呂に入りたいなあ。寮の各部屋にはシャワーが付いているのだが、風呂はない。ちなみにこの学園の寮は全て女性専用である。教員は全て女性。校長、用務員、技術者などはほとんど男性だが、学外から通勤しているのだ。まあ、教員も寮に入っているのは寮の管理、寮長などしかないが。つまり浴場は女性用しかない。そのため、この2カ月間風呂に入っていないのである。やはり風呂は日本の文化だ。入りたい。

家の風呂なら休みの日なら使えるが、時間を使ってしまっからな



あ。

つと、呼び鈴だ。シャルルじゃないのか、誰だろう？

あ、やべ、油断した。服着てない。シャルルが部屋にいるときは洗面所で着替えているんだが、油断したな。

下はこれでよし、上は、

「いないんですかあ？入りますよお！」

ドアが開けられる、山田先生が入ってきた。

「もうっ、いるなら出てくださいよ！織斑、く、ん？」

えー、現在の俺は上半身裸です。

みるみる内に山田先生の顔が真っ赤になっていく。あ、面白い。

「織斑君、男、裸、たくましい身体、抱かれて……」

『プシュー』

と音がした気がする。湯気が出そうなほど真っ赤だ。

ははは、見てるとおもしろいな、山田先生は芸人気質だ。

「一夏、ただいま、シャワー終、わっ、た」

ははは、タイミング悪！

「……一夏、何してるの？」

「……とりあえず、服着ていい？」

「…っん」

ぱぱっと服を着る。

「シャワーを浴びて洗面所から出たら、山田先生が来て、急いで着替えようとしたら、鍵が空いていて、途中で山田先生が入ってきたんだ」

つい早口になってしまったが言いたいことは伝わったはずだ。

「そっか、わかったよ」

それにしても不機嫌だな。なんでだ？

おっと山田先生を元に戻さないと。チョップでもするか、旧式テレビを直すかの如く。

「えい」

「きゃっ、あれ、織斑君？裸じゃなかったの？」

「着替えました。それより何か用があるんじゃないですか？」

「う、すみませんでした。…そうです、用件ですが、大浴場を週に2日は男子専用にすることに決まりました。来週から使えますよ」

おお、これで風呂に入れる。しかし、入る時はハプニングには気をつけるようにしないと。たとえば、日を間違えて女子と鉢合わせとか……危険だ。

「わかりました。山田先生ありがとうございます」

副寮長をしている山田先生が取り決めてくれたんだろう。ボケさえなければすごい人なんだが、普段といい、さっきといい、本当に芸人気質な人だ。

「いえいえ、それでは私はこれで」

「はい、また明日」

山田先生は部屋を出ていった。

「ふう、全く、あの人は」

「…一夏は山田先生みたいな女性が好みなの？」

好みの女性：あえて言うなら、千冬さん？ かなあ、一緒に住んで特に不満は無かったし、むしろ楽しかった。山田先生は、あの乳は凄かった、今でもあの感触は思い出せる。あ、また思い出してしまった。

「一夏、なにか変なこと考えてない？」

シャルルから恐ろしいプレッシャーが発せられる。

「イエ、ソナナコトアリマセンヨ」

この娘、普段はいい子だが怒ると怖そうだ。普段おとなしい子はキレると怖いってやつか。

「…まあいいよ、僕はシャワー浴びるから」

「ん、わかった」

こういう時のマニュアルはすでに作成済みだ。ベッドに寝転んでシャルルが着替える位置の逆向きで携帯をいじっている。これでOKだ。やれやれだぜ。

携帯を取り出し、写真フォルダを開き、ファイルを見ていく。

4月の千冬さんや篤、セシリアと撮った画像、白式を装着している俺の画像、セシリアがブルー・ティアーズを装着してポーズをとっている画像、篤が珍しく部活に出ている画像、鈴と料理を作った時の画像。

1つ1つに思い出があり、この画像を見るたびに思い出すだろう。気がつけばこの世界でこんなにも思い出ができた。つい、笑みが浮かんでしまつ。

「い、一夏、ボディソープが切れているんだけど、替えはないかな？」

すぐ近くからシャルルの声が聞こえる。

ボディソープか、確か詰め替え用のパックがあつたはず。

………あ、あつた。

「今、持ってい、く…よ？」

最近この表現多いなあ。

…肩と腰の間まである長いブロンドの髪。セシリアよりはやや小ぶりだが日本人の標準を超える胸。薄い茶色のポツ。ブロンドの薄いわめ。そして足元のバスタオル。

「だ、誰？」

「誰って僕だよ。シャ、ル、ル」

こんなんで女バレか。油断しすぎだろ。そして大変いいものを拝見させていただき、ありがとうございました。あはははは……はあ。

「きゃあっ!」

シャルルは、胸とアレを隠し、その場でしゃがみこんだ。  
まずは、布団でもかぶせるか。

『バサッ』

「それなら、見えないから」

「あ、ありがとう」

「冷えるといけないから、シャワー浴びてこい。話はそれからだ、  
な？それから、これボディソープの替え」

「う、うん、わかった」

顔を赤くしたまま、ボディソープのパックを受け取り、布団にくるまったまま、洗面所に行ったシャルル。恥ずかしそうな顔が可愛かった。

「バ、バーロー」

なぜかそう言いたくなった。

## 17 (後書き)

最後のバーローをニヤニヤしながら、とてもうまい表現だと感じてしまった。

そして、シャルルを書いているとすごく可愛いと感じてしまい、ラウラが書けなくなりそうです。早くラウラ、シャルルのデレモードを書きたい。

## 18 (前書き)

今日の放映ではシャルルがEDに加わるんですかね？  
早く完全verを聞きたいです。

「……………」  
「……………」

現在の状況、シャルルが女バレしました、以上。  
本当はなかったことにしたいが、無理だろうなあ。夕食の時間が近いし、このまま沈黙しているわけにもいかないか。

「さて、シャルル？」

「う、うん」

「そろそろ、説明してほしいんだが？」

「……………わかった。僕の実家からの命令なんだ」

「前にデュノア社の社長が父って言っていたな」

「うん、その父からの命令。デュノア社は量産機ISのシェアが世界第3位の大企業。でもISの技術・情報力不足に悩まされて、未だ生産できるISが第2世代止まりだから経営危機に陥って、それで3世代のIS開発も遅れてて、この学園で3世代のISとの戦闘データを取るために転入した」

「そこまでは普通の理由だな」

「うん、続けるよ。ただ1人の男のIS操縦者が搭乗時間数時間で



イギリス代表候補生の専用機、3世代ISのティアーズ型を破った。そのIS白式のデータがあれば、3世代ISの開発は他社より優位に立てるかもしれない。その上、専用機持ちの中国代表候補生も破ったって聞くし、白式のデータはどの国も欲しがってるよ」

白式のデータか、白式は篠ノ之博士が手を加えたISのはずだしなあ。俺がIS中毒のせいであぶん原作よりデータが集まってるんだろうし、価値があるんだろうな。

ティアーズ型は、ヨーロッパ圏内で現在の次期主力候補の最優だったはず。まだ本決まりではないし、BT兵器が完成していないから、特殊兵器が完成した国があればそこがトップになる可能性が高い。前にセシリアが言っていた。

確かにBT兵器が完成し、適正なしでも使えるなら間違いなく選ばれるだろうな。最優つてのもわかる。1対1でも複数との戦いでもちろん有利になるし。

「それで男として入学して、俺に近づき、データを手に入れる、か」  
「うん、そうだよ。僕は愛人の子供で、その愛人、母が2年前に死んで、その時父の部下が来て、いろいろ検査を受けた。IS適正が高かったから、そのまま非公式にデュノア社のテストパイロットになっただ」

結構重い過去だ。

「愛人の娘だから、偏見されたこともあるし、本妻の人には殴られたこともあるね。それでも数回しか会ったことのない父からの命令で、男としてここに来たんだ」

昼ドラっすか。

「でも、一夏には女だつてばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び出されるだろうね。デュノア社は……他企業の傘下に入るようになると思う。でも、もうどうでもいいことだよ」

原作的には戦力になつていたはず。いなくなるのは困るかな。まあ、純粋にいい娘だから、手を貸してあげたいのもある。(むしろそっちが大事)しかし同じことばかり言っている気がする。キ〇ガイみたいな娘だったら、容赦なく蹴っ飛ばしたりできるのに。篝、セシリア、鈴、みんないい娘ばかりなのが悪いんだよ。……俺つて八方美人なのかなあ。

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソついててゴメン」

いや、気づいてたし。

「ああ、別に気にしてない」

「ありがと、やっぱり一夏は優しいね」

にっこりと笑うシャルル。しかしその笑顔でも陰りが見える。原作あんま覚えていないし、なんかいい方法ないかなあ。…うーん。

「それでシャルルはこの後どうするんだ?いや、どうしたい?本国に呼び出されると言っていたが、フランスの代表候補生になれる実力を持っているし、巧く立ち回ればこの学園にいられると思うぞ。それに将来はこの学園の教師になるとかもできるはず」

「…いい、一夏は、どうしてほしい?」

戦力的にはいてほしいが、やっぱりこれはシャルル自身が決めることだ。手を貸してほしいならいつでも貸すが。

「俺はシャルル自身が決めることだと思う。できれば（戦力的に考えても）この学園にいてほしいけど、だれかに言われたからとかじやなく、シャルルがこの学園にいたいからじゃなければ意味がない。だから、シャルルがこの学園にいたいと思ったなら、いつでも手を貸すさ」

「一夏、ありがとう。うん、考えてみるよ」

（ずるいなあ、一夏は、優しいし格好いいし、篝さんとセシリアさんがべったりなのもわかるよ。だから、きっと僕は……）

「来月までは俺も黙っておく。今すぐには決められないだろうしな。ずっと黙っている方法もあるが、そうなるとずっと一緒に部屋で住むことになるから、篝とセシリアに悪い。俺の精神もやばくなるし、いつかはばれてしまっただろうしな。」

「わかった。それまでには決めるね」

「よし、なら、夕食にしよう。腹が減っては戦ができぬ。日本のことわざでお腹がすいていたら戦うことができないから、戦うまえにしっかりと食べようという意味だ」

「そうだね、今日は何を食べよかなあ」

「俺は丼ものにしようかな」

「カツ丼とかだね。なら僕も同じものにしようかな」

「じゃあ、食堂に行こう」

「うん」

当然、夕食は箸、セシリアも一緒に食べました。

月曜日、箸、セシリア、シャルルと一緒に登校した。  
教室に入るとこちらを見てざわざわとします。何だろうか？

「一体何があったんだ？」

俺は静寝さんに尋ねた。

「ええと、その、ある噂が広まっているの」

「噂？」

ああ、嫌な予感がする。

「学年別トーナメントの優勝者は、織斑一夏と交際できるって噂」

「は？」

「一夏！？」

「一夏さん！？」

「一夏？」

「学年別トーナメントの優勝者は、織斑一夏と交際できるって噂。その様子だとでたらめみたいね」

そんなんで付き合つとかありえない。そんなんで付き合つなら、すでに筈かセシリアを選んで、関係をはっきりしているよ。

「間違いなく、でたらめだ」

「はあく、ちょっと残念」

本当に残念そうだし。

「こっちはそれどころじゃないんだけど」

「織斑君は学園のアイドルだからね。これくらいはしょうがないよ」

面倒な噂だ。放っておきたい。

(これはチャンスかもしれないわ。優勝して、付き合っていると  
いう既成事実を元に他者を牽制すれば)

(…今の私の実力では、優勝はできないだろう………もっと強くな  
りたい、でもどうすればいい？私は強くなれるのか………)

(一夏が誰かにつきあう？それは…嫌だなあ)

俺が優勝すれば、阻止できるな、どうせやるからには本気でやるし、優勝狙うか。まあ、できなくても所詮噂だし、否定しておけばいい。あまりに酷いようなら、新聞部の先輩と取引(コラムとか載せてくれと要望があったりする)して噂を否定するよう頼むか。しかし学年別トーナメントか、今までより多く戦えるな。楽しみになってきた。

お手洗いからの帰り、教室から一番近いがそれでも距離があるトイレから出て歩いていると、曲がり角の先から声が聞こえた。

「なぜこんなところで教師など!」

この声は眼帯さんか？

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

千冬さんの声も聞こえる。うつ、出づらくなった。この道じゃないと授業に間に合わなくなるし、このままここにいるか。

盗み聞きはまずいんだが、しかたない、二人ともすみません。

「このような~~~~」

どうやら、千冬さんがこの学園にいることに眼帯さんは不満なようだ。

憧れ、信望か。たしか一番対象を理解できない感情だとか、なにかの小説で読んだな。

千冬さんはIS操縦者では伝説となっているほどの人物だ。一見すれば完璧超人に見える。しかし、家事ができないし、お酒を飲んで酔うこともある。(つまみは俺が作った)眼帯さんにとっては神に等しい人なんだろうが、千冬さんは人間なのだ。

「そこまですておけよ、小娘」

千冬の今までにない威圧感たつぷりの声。……………びびった。

「少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

眼帯さんの声が震えている。千冬さんばねえ（ブルブル）

「さて、授業が始まるな。さっさと戻れよ」

いつもの声色に戻した千冬さんに言われ、眼帯さんは去っていった。

千冬さんはなんだかんだでよい教師だ。威圧感たっぷりだが、努力している娘には助言してあげたり、なんだかんだで手を貸してあげるし、厳しいが優しいってところだ。

さっきのはヤクザですら逃げ出しそうな声だったが。

「織斑、盗み聞きとは感心しないな」

気づかれていたのか。

「すみません、悪いなとは思ったんですが、出づらしい、迂回すると授業に間に合わなくなるので、聞いてしまいました。すみませんでした」

「まあいい、おまえもさっさと戻れ」

「はい」

俺は急いで教室に戻った。



件の学年別トーナメント、噂にすぎないとはいえ、あの方が他の娘と噂されるのは嫌だ。

それにあの方に負けたとはいえ、イギリス代表候補生、専用機持ちの意地がある。あの方に強くなった自分を見てほしい。しかし、今のままではあの方には勝てない…特訓、するしかない。

放課後、予約したアリーナに来ると、鈴さんがいた。

「奇偶ですわね、鈴さん」

「セシリア、今日は一夏と一緒にじゃないの？」

「ええ、一夏さんと一緒にいられないのは寂しいですが、学年別トーナメントに向けて特訓しようかと思ひまして」

「へー、そう言えばあの噂って聞いた？」

「学年別トーナメントで優勝したら一夏さんと交際できると言う噂ですわね？」

「そうそう。まあ、あいつのことだし、ただの噂でしょ？」

「ええ、そうですね。それでも優勝は狙いますし、4月に一夏さんに負けてしまいましたから、強くなったわたくしを見てもらうためにも、特訓あるのみですわ」

「一夏との再戦か、私も負けっぱなしでは悔しいし、ちょうどいい機会ね、私と模擬戦しない？あんたとはほぼ互角だしね」

確かに、試合形式での練習は専用機持ちである彼女と行った方が効率的だ。それに彼女とも戦うことになるかもしれない。

「いいですね。その話受けました」

「じゃあ」

私達はISを展開、装着しメインウエポンをコールした。

「では」

鈴さんと向き合い、いざ始めようとした瞬間に、わたくし達の間を砲弾が横切っていた。

緊急回避を行い、砲弾が飛んできた方を見ると、IS名シュヴァルツエア・レーゲンを装着した、ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

以前一夏さんをひっぱっていた女。一夏さんはあまり気にしていなかったが、わたくしはこの女が気に入らなかった。

「どっとうつもりですか？」

「いきなりぶつ放すなんていい度胸じゃない」

両刃青竜刀×双天牙月くを連結して、衝撃砲の照準をあの女に口

ツクして鈴さんが凄んだ。

「中国の甲龍とイギリスのブルー・ティアーズか…ふん、あの男なんかに負けた、負け犬どもか」

この女、調子に乗りすぎですわ！

「喧嘩売ってんの？あんた」

「あまり、調子に乗らないでくださいな。それと一夏さんを侮辱することは許しませんわ」

「ふん。量産機にすら負けていたな、お前達は。所詮、数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国の代表候補生か。せつかくの専用機がもつたいないな」

『ぷつん』

あの女、イワしてやりますわ！

「鈴さん、あの女、わたくしがイワしてやりますわ」

「それはこつちのセリフ、私がボッコボコにしてやるわ」

私達がどちらが戦うか、決めようとしていると、

「は！二人かがりでかかってこい。あの男との違いを見せてやる」

この女は一夏さんとわたくし達を馬鹿にしたのだ。

ここまでわたくし達を侮辱するなんて、蜂の巣にしてあげますわ！

「はあ？スクラップにするわよ」

「二度と侮辱できないよう、徹底的に痛めつけてさしあげますわ」

「さっさとかかってこい」

わたくしと鈴さんは上空に飛ぶと、得物を手に二手に分かれた。

現在、月曜日の放課後。

篤、シャルルと一緒に、訓練するためにアリーナに向かっている。

「それにしても、一夏も災難だね」

あの噂のことか。

「まあな。でも俺が優勝すれば問題ない」

そうだ、もう優勝してやろう。1回でも勝てばより多く戦うことができるし。それに、いまの実力なら、敵は専用機持ちだけだ。

……ああ、でも眼帯さんと戦った後、トーナメントは中止になるんだったか？しかし、原作通りの組み合わせにならずに、セシリアや鈴、シャルルと戦うことに……あれ？なんかトーナメントの形式が違わないか？……駄目だ、思い出せん。

この後の臨海学校？は篤が専用機持ちになって、全員でボスと戦うのははつきり覚えているんだが、それ以外はあいまいだ。

……うーん、なるようにしかならないな。

先のこととはわからんし、今はとにかく訓練あるのみか。

「そうだね、一夏なら十分優勝を狙えるよ」

「そういうシャルルこそ、強敵だ」

（私は、接近戦を得意としている者には勝てる自信がある。後は各クラスの成績優秀者が問題だ。しかし、専用機持ちには絶対に勝てない。一夏はISの強さが全てという感じで人を見ることはない。

でもISで強い方が一夏と距離が近くなっている気がする。どうすれば強くなれる？私は…)

篤？そういえば、最近様子が変だ。

何か悩み事があるのかもれない。しばらく様子をみて、いつまでも様子がおかしかったら、聞いてみよう。

アリーナに近づくにつれて、騒々しくなっていく。何かあったのだろうか？

……セシリアと鈴、眼帯さんの戦いか。結果は眼帯さんの勝ちだっけ？

何かあってからでは遅いし、見に行こう。最悪の場合は仲裁しなければ。

『ざわ……ざわ……』

「なんだ？騒がしいな」

「何かあったのかな？こっちで様子を見ていく？」

観客席か、急いで確認するにはそちらの方がいいか。いや、ピットに行った方が詳細が分かるか。

「模擬戦をしてるようだけど、様子が変だね」

『ドゴオンー！』

急いでピットに出ると爆発音がした。モニターに視線を向けると、煙から影が飛び出してくる。

金色の髪と青いIS、セシリアだ。

離れた位置にボロボロになった鈴がいる。

そして、セシリアの視線の先には、漆黒のISを装着した眼帯さんがいる。

「こんのおー！」

鈴の気合とともに特徴的なアンロック・ユニットの一部が開き、衝撃砲を放った…はずだが、眼帯さんは一切被弾していない。何が起きた？

「実体兵器しか持たないISなど、私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では無力。邪魔だ」

言葉とともにレールカノンから砲弾を鈴に放った。砲弾は鈴に直撃した。

「鈴さん！」

セシリアが危険だと判断し、レーザービットを射出し、四方からレーザーを放ち眼帯さんを牽制する。それと同時にスターライトmk?で狙撃を開始する。ビットと通常兵器での同時攻撃だ。最近できるようになったらしい。もっとも、ビットのみを使用時に比べ、本体とビットともに操作がやや悪くなる。

「ふん、その程度か」

眼帯さんは宙を飛び回り、レーザーを回避していく。

「まだまだあー！」

その隙を狙い、鈴が眼帯さんへ接近する。鈴が接近するとともに

レーザービットをフィンに戻していくセシリア。そして鈴は高速回転とともに双天牙月を振りまわした。

双天牙月が眼帯さんへ当たった瞬間に、眼帯さんは片腕の装甲部分で防御した。

あの威力なら直撃だ。俺はそう思った。

しかし、眼帯さんは一切の衝撃を受けていない。

そして、鈴の高速回転が完全に止まった。

「終わりだ」

次の瞬間、眼帯さんは左手から伸びた刃、エネルギー刃で鈴を斬った。シールドが削られ、装甲がはがれ落ち、鈴が地面に落ちていく。眼帯さんはさらに両肩から射出したブレード付きのワイヤーで追撃した。ワイヤーブレードは合計4本あり、すべて鈴に直撃した。

「うああああ!!」

鈴は地面に落ちた後、沈黙した。

幸い、命の別状はないだろう。おそらく意識もある。しかしISが危険度B以上になり反応しないのだろう。

「鈴さん！くっ、どうやら、実体兵器は無効化されるようですね？」

「そうだ。このシュヴァルツェア・レーゲンのAIC、停止結界の前では実体兵器はすべて無力となる」

反則だろ、それ。それに、あれだけの衝撃を無効できるのなら、自分にかかる反動もすべて無効化できるはずだ。……………すごく欲しいんですけど。



セシリアとブルー・ティアーズなら、戦えるだろ。

俺が戦う場合、雪片式型は実体非実体（シールドのエネルギーを使うが）の両方があるため、無効化はされないだろう。零落白夜なら、当たり所が悪ければ1撃で終わらせる。とはいえ、あのISはかなりバランスがよさそうだ。

「わたくしのブルー・ティアーズはエネルギー兵器中心ですわよ？その余裕いつまで持つと思いますの」

「ふん。稼働率の低いBT兵器など、脅威ではない。せつかくのBT兵器が泣いているぞ」

「やってみなければわかりませんわ！」

「ふん。結果は見えている」

セシリアはレーザービットとスターライトmk？で眼帯さんを集中攻撃する。しかし眼帯さんは冷静に見極め、次々と襲い来るレーザーを回避していく。

強いな、技術なら山田先生以上かもしれない。それと3世代ISのスペックが合わさり、一層強くなっている。

セシリアでもやや分が悪い。

セシリアはスターライトmk？から太いレーザーを放ちながら、レーザービットを戻す。眼帯さんは接近しようとするが、狙撃に集中したセシリアの射撃を回避しながら接近するのは難しく、回避はできているが、少しずつしか近づけていない。

同じパターンが数度続いた。しかし、どちらも何か作戦を思いついたのか、顔つきが変わった。

眼帯さんが先に動いた。レーザービットを戻し、狙撃するセシリアに高速で接近したのだ。

瞬間加速だろう、ブーストエネルギーを溜めて、多量に使用し、瞬時に最大加速を行い、それを一定時間持続させる。

セシリアの狙撃がいくつか命中したが、眼帯さんは両手にエネルギー刃、プラズマの手刀を出現させ、盾にしていた。それに装甲のダメージはそれほど酷くはないだろう。

セシリアは直線で接近する眼帯さんにミサイルビットを放った。しかし停止結界に阻まれ衝撃は無効化される。

煙が晴れると、眼帯さんがプラズマの手刀で、セシリアを斬ろうとする姿が見えた。

セシリアはいつの間にか持っていた近接ショートブレード>インターセプター<で、1撃目を受け止める。しかし、残った手のエネルギー刃がセシリアを襲、えなかった。

「そこですわ!」

おそらくミサイルビットが爆発した瞬間にレーザービットを射出していたのだろう。レーザービットから次々にレーザーが放たれ、いくつかは眼帯さんに直撃したのだ。

「くっ! まだだ!」

セシリアはその隙に眼帯さんから距離を取ろうとするが、眼帯さんはワイヤーブレードを6本同時に射出し、内4本がセシリアに突き刺さった。

「くっ!」

そして再び両者の距離が離れる。

互角、全くの互角。どちらもダメージはほぼ同じ。そして、現在の武装での手の内は見せた。

これからどうなる？

『お前たち、何をやっている。模擬戦をやるのは構わん。しかし他にもアリーナを使用している奴がいるのに、迷惑をかけるな』

両者が再び動こうとした時、アリーナに放送がかかった。

この声は千冬さんか。

『学年別トーナメントで決着をつける。わかったな』

「教官がそうおっしゃるなら」

「わかりましたわ」

『では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！』

眼帯さんはアリーナのピットに戻っていった。

セシリアも鈴を連れて反対側のピットに戻っていった。

保健室のベッドには鈴がむすつとした顔で寝そべっていた。

「なに、あれ、反則じゃない、実体兵器無効化って何よ。甲龍じゃ勝ち目ないじゃない」

ぶつぶつと文句を言っている。

気持ちはわかる。甲龍とシュ、シュヴァルツエア・レーゲンは相性が白式以上に悪い。

標準パッケージでは絶対勝てない。っていうか名前の発音が難しい。

「新パッケージではエネルギー系兵器の追加を要望しておかないと、ドイツには永遠に勝てなくなるわ……ヨーロッパのトライラル参入国家のISは技術力が高いわ…ブツブツ…」

エネルギー系の兵器は、現在はレーザーが主力だ。威力は下手な実弾よりも高い。しかし燃費が悪く、そのためエネルギーの確保のために大型のものが多く。

ぶつぶつとぼやき続ける鈴を横目に、俺はセシリアと話しをしていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。あの女、悔しいですけど、わたくしより技術は上でしたわ。そしてあのまま戦っていたら、負けていたのはわたくしでしょう」

ISのスペックは同等、でも潜在能力はブルー・ティアーズの方が高い。BT兵器は最大理論値で稼働すれば、さらに数を増やし、繊細な動きをスムーズに行えるようになる。

それなら、間違いなくセシリアが勝っていただろう。

しかし、現状の稼働率でも互角に戦っていたが、負けるというのはなぜだろうか？

射撃はおそらく同等、接近戦は眼帯さんが上、機動も眼帯さんが上だが、BT兵器という武装が総合的実力を同等のものにしていた。

「互角だったと思うが？」

「左目の眼帯を外しておりませんでしたわ。遠近感が感じにくいというのがありますが、あの眼はなにか特別な理由で眼帯をしていると思いますわ。つまりあの女はまだ本気ではなかったということですね」

そういえば、左目に特殊能力があったはず、奥の手ってやつか。制約とかあったつけ……いや、たしか何かエピソードがあったはずだけど…駄目だ、駄目だ、思い出せない。

「飲み物を買ってきたよ」

飲み物を買いに外出していたシャルルが戻ってきた。

「鈴さんはウーロン茶、セシリアさんは紅茶だね。はい、どうぞ」

「はあ、ありがとう」

「ありがとう、いただきますわ」

ぶつぶつと言っていた鈴も正気に戻ったようだ。

『ドドドドドドドドドドドド』

なんだ？この地鳴りに似た音は、だんだん近づいてきている。

「なんだ？この音？」

「うるさいわね、なんなのよ」

「何の音でしょうか？」

「すごい音だね」

あ、止まった。と同時に保健室のドア（この学校の扉は全自動）が開く。

「織斑君！」

「デユノア君！」

クラスメイト数人を筆頭に数十人もの子が雪崩込んできた。全員1年生だ。

「ど、どうしたんだ？」

「え、えと、何があったの？」

「「「「これ！」「「「「」

渡されたのは、学内の緊急告知の文書だった。

内容は、学年別トーナメントは二人組で行うと変更されたということ、ペアは任意で決めていいこと、ペアがいない娘は抽選で決めるということが記されている。

そうか、これでトーナメントの形式が変更されたんだ。

「……織斑君！私と組んで！」「……」

「……デユノア君！私と組んで！」「……」

すごい必死だ。しかし、どうするよ？これ。

と、シャルルが困った顔で俺を見ていた。すぐに顔を逸らしたが、これはSOSだったのだろう。しかし遠慮して顔を逸らした、か。箒、セシリアと組んでもよかったのだが、ここはシャルルと組むか。俺以外に女ばれるのもまずいだろうし、今月中は黙っていると約束したしな。

「あー、俺はシャルルと組もうかと思っっているんだが……」

「ぼ、僕と？う、うん、いいよ」

いきなり全員が沈黙する。

「しかたない、か……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男どうしっていうのも絵になるし……ゴホンゴホン」

（織斑×デユノア、キター！）

なんか1人の女生徒の視線がすごく嫌な感じがする。見られると背筋がぞくぞくする。

納得して、女子達は保健室から出て行った。

「や、やれやれだぜ」

「は、ははは」

「一夏さんと組みたかったですけど、今回はデュノアさんに譲りますわ。それに、一夏さんとまた、戦いたかったですし」

セシリアと戦う、か。模擬戦だと、白式の機動性と俺の技術の向上で、気を抜いたら負けるが、集中すればまず負けなくなっている。本気で戦っても、今の状態だと俺が勝つだろうな。パッケージの変更があるか、BT兵器の稼働率が上がれば、どうなるかわからない。しかし、専用機持ち二人がペアって、反則っぽいな。

「しかし、専用機持ち同士がペアってのも、ずるいかもな」

もし、眼帯さんと当たったら、俺1人で倒す。しかし、そのほかの娘と当たった場合は連携して倒した方がいいか。それがこのトーナメントの趣旨だしな。

大会まではシャルルとの連携も練習しておこう。

「しかたありませんわ。一夏さん達が個別に女子と組めば試合にならないかもしれないかもしれませんもの。それに、専用機持ちの実力を身をもって知るのも、必要なことですわ」

確かに、そうかもしれない。

「…ならセシリア、私と組まない？」

考え込んでいた鈴がセシリアを誘う。

「わたくしとですか？」



「そう、今の私では、あいつに勝てない。あんたならエネルギー兵器の予備とか持つてるでしょ。後付け装備でエネルギー兵器を装備すれば、あいつとも戦える。だから、ペアを組んで貸してほしいんだけど」

確かに、白式と違い、甲龍は拡張領域があるからそれも可能か。付け焼刃かもしれないが練習する時間はある。

「ダメですよ」

「……えっ?」「」「」

声が出た方を見ると山田先生がいた。いつの間になっていたんだ?

「鳳さんのISは危険度Cです。ですからトーナメント参加は許可できません」

そう言えばボロボロにされてたしなあ。

危険度Cでの使用はISの自動経験、データ集積がマイナスに働いてしまう可能性が高い。

「う、うう、ぐ、し、仕方ないわね」

すごい悔しそうだ。鈴は負けず嫌いだ、いや、専用機持ちとか代表候補生とかは全員負けず嫌いだろう。たぶん、俺も含めて。

「それでは、わたくしはルームメイトとペアを組みましょうかしら。ではわたくしは話をしに行きますから、これで」

そう言ってセシリアは保健室を出て行った。

さて、今日は訓練できなくなったし、基礎トレーニングを行うか。

「じゃあ、トレーニングを行うから、俺もこれで、シャルル、今夜は部屋で連携について少し話そうか」

「うん、わかった。僕は先に部屋に戻ってるね」

「じゃあ、鈴、お大事に」

「ありがとう、がんばんなさいよ」

「ああ」

俺は今日のトレーニングのメニューを考えながら、保健室を出て行った。

## 19 (後書き)

ラウラのISのAICを設定変更しました。

さすがに原作のは強すぎて、話にならないし、原理がいまいちわかりにくいので……

土日の更新時に変更した設定などをまとめて載せます。

「はあはあ、はあはあ、すくはく、ふうく」

つ、疲れた。

3人の戦い（実質1対1で二人だったが）にあてられたのか、ついオーバーワーク気味にトレーニングを行ってしまった。

走りこみ、竹刀を用いての素振り、器具を使用しての筋トレ。

気が付いたら、すごく疲労がたまっていた。それほど集中していたらしい。

この季節は汗がべたついて気持ち悪い、梅雨か…終われば夏もすぐだな。

夏と言えば、1度オタ友と聖地へ行ったことがあるが、あれは、まさに戦場だった。懐かしいな。

夏か、去年は勉強と家事しかしていなかったな。それに社会人だったから、夏休みとかなかったし、どう生活すればいいのかわからなくなっていたんだよなあ。

今年はどうするかなあ。ISの訓練はするが、学生らしく遊ぶことも必要か。今考えても仕方ないし、夏になったら考えるか。あ、でもセシリアに誘われているし、イギリスに行ってみるかなあ。

さて、息も整ってきたし、部屋に帰ってシャワーを浴びるか。

そういえば、もうすぐ風呂に入れるのか…待ち遠しい。

部屋に戻るとシャルルがいた。

「おかえり、一夏」

「ただいま」

ふう、シャワー、シャワー。ああ、来週が待ち遠しい。風呂に入れるからな。

「シャワー使うよ。シャルル」

「うん、僕は後で使わせてもらおうよ」

シャワーを浴びた後、洗面所で服を着て、ドライヤーで髪を乾かす。

「おつかれ、はい」

手渡されたのは、スポーツドリンク。少し冷たいぐらいなのが俺の好みだ。冷たすぎるのは逆に喉が痛い感じがして好かん。

「ありがとう」

「くぐくと、飲み干す。」

「今日はすごく疲れてるね」

「ああ、あの戦いにあてられて、つい」

「確かに、いい戦いだっただね。3世代IS同士の戦い、今までの武装と違う戦い。特にボーデヴィツヒさんのAICは、鈴さんみたいな基本装備を実体兵器しか持っていないISだと無敵だし、セシリアさんのBT兵器も未完成であれだけの操作ができるし、やっぱり3世代目はすごいね」

「たしかに、厄介だったな二人とも」

AICか、2世代ISでも使えそうだ。もしかしたらどこかに欠陥があったり、エネルギーの消費がすごいのもかもしれないし、コストとかがBT兵器より高いのかもしれない。完成したBT兵器の前では無力になるだろうし。トライアルの結果はBT兵器の動向次第だな。

もし、二次移行して単一仕様能力が発現したらどんな能力になるんだろうか。

いつか、戦ってみたいな。

「そう言えば、一夏はセシリアさん、鈴さんに勝ったことがあるんだよね。データで見たときは信じられない成果だったよ。何倍もの搭乗時間を持つてる二人に勝つなんて、信じられなかったよ」

「あれは、白式のおかげだ。確かに俺も白式にふさわしいように努力はしているけど、まだまださ」

「くすくす」

（白式は幸せ者だね。一夏にあんなに思ってもらって。ちょっと嫉妬しちゃうかな。…あ、そうだった、さっきのお礼を言わなきゃ）

「あ「おっと、夕食の時間だ。食堂に行こう」

「…うん」

今日は基礎トレーニングでしかもオーバワークだったから、腹が減ってしょうがない。多目に食べるか、セット+単品2品かな。

この身体は燃費が悪い。今のところ、運動すればするほど成果は出るが、とにかくお腹が空いてしょうがない。前まではこんなんじゃないなかったが、この学園で身体が鍛えられていくと、いつの間にか食事の量がものすごく増えてしまったのだ。それでも、太らないどころか、体脂肪は落ちていく一方だ。

本気で運動をしている体育会系の身体は、燃費が悪い。よかったこの学園での食事はただ同然で。

夕食後、部屋に戻り、お茶を飲みながら、まったりした時間を過ごしている。

今日の夕食はセシリアが一緒だった。

篤は、あの戦いの後、鈴を保健室に連れて行った俺達とは別れてアリーナで訓練していたはずだ。もしかしたら、その後、今も外で訓練しているのかもしれない。

様子がおかしかったが、トーナメントのことを考えていたのかもしれない。トーナメントが終わるまでは、相談とかしないほうがいいかな？

「あ、あのね、一夏」

「どうした？」

シャルルが話しかけてきたが、なんか、様子が変わった。そわそわしているというか、落ち着きがない。

「遅くなっちゃったけど、その…助けてくれてありがとう」

「えーと、何のこと？」

「ほら、保健室で、トーナメントのペアを言い出してくれたの、すごく嬉しかった」

別に特別なことはしていないんだが、おかげで女子達が男同士ならとあきらめてくれたしな。



「特に気にすることじゃない。こっちも助かったし」

「そんなことないよ。一夏っていつも優し、い。……いつも、そう  
だ、いつも優しい……え？もしかして」

なんだ？一体何をいつてるんだ？シャルル。

俺の眼をじっと見つめるシャルル。一体何が起きてるんだ？

「……一夏、僕が女だったこと、最初から気づいていたの？」

……ど、どうしてばれたー！！！！

やばい、なんて言い訳しよう。どうして気づいたか言い訳しない  
と。……気のせいだったことにすれば。

「その沈黙、やっぱり気づいていたんだね？」

あ、機を逸した。

「……はい、気づいておりました……どうして気が付いていたこ  
とに気づいた？」

「だって、一夏、女の僕が優しいなって思う行動をいつもしてるし、  
僕が部屋にいるときにシャワーを浴びると、洗面所で着替えるでし  
よ。でも、僕がいない時、山田先生が来た時は服を着ずに洗面所か  
ら出ていた。それって、僕が女だから気を付けていたってことじゃ  
ないかな？」

あちゃあ、そんなことからばれたのか。シャルルって鋭いな。

「ああ、そつだよ。推理通りです」

「いつ、いつから気づいてたの？」

「どうする？どうする？」

「転入初日の実習の時の着替えて、シャルルが女だって気づいた。着替えの時、窓ガラスにシャルルの、その、裸体が一瞬見えて、胸に何か着けていたし」

「これなら、理由になるだろ。」

「そつか、あの時か。うん、胸にしていたのは特製のコルセットだよ。一夏は、その、前に僕の胸見たよね？」

「はい、いいものでした。」

「はい」

「その、サイズは標準ぐらいいはあるから、それを抑えるためのコルセットなんだ。結構きつくて、大変なんだよ」

「標準か、日本人の標準じゃないから、結構あつたぞ。なんて言えないし、どんな反応をすればいいんだ？」

「はは、そんな困った顔にならなくもいいよ」

「あ、ああ」

「くすくす」

えーと、俺はどうすればいいんだ？

「一夏ってずるいよね」

わけわからん。

（女だって気づいていて、優しくしてくれた。この年代の男の子は、その、あれだって聞くのに。一夏は我慢してくれていた…あれ？もしかして、女って感じていなかったのかも…聞こう）

「一夏、僕と一緒にの部屋でドキドキした？」

うーん、正直、男のふりしているのをフォローしていたから、そこまで異性とは感じなかった。むしろ、いまの方が異性と感じている。

「それは、あまり」

（がーん、鬱だ、死のう。僕って女の魅力に欠けるのかなあ）

「でも、今は異性として意識しているかな」

だから、余計に気を使うんだが。

「そ、そっか」

（そうなんだ。嬉しいなあ）

さっきからシャルルが百面相している。これがシャルルの素だと

すれば、山田先生並みにすごい奴だ。(面白い方向で)

「そういえば、シャルルって、自分のこと僕って呼んでいるけど、フランスにいたころはどうだったんだ？」

「そういえば一時期、オタ友が僕っ娘萌えにはまっていたなあ。『女なのに自分のことを僕と呼ぶ、そのギャップが萌えるんでござるよ』か。うーん、俺は嫌でもないし、好きでもないかな。」

「ここに来る前は『私』って言ってたけど、男のふりのために徹底的に矯正されたから、すぐには直らないと思うよ。」

「まあ、1人くらい自分のことを僕と呼ぶ娘がいたとしてもいいと思う。なによりキャラが立ってるしね。個性個性。」

「でも、女の子っぽくないかな？」

「いや、女の子だろシャルルは。」

「あー、あのサービスシーンはすごかった。」

「……！エッチ」

「あ、やば、つい思い出してしまった。」

「何か最近こう、お色気が増えている気がする。山田先生、セシリア、篝、シャルル。ちょっと気をつけないといけないな。」

「あー、まあ、その、そういうことだ。」

「う、うん。」

「うわあ、なんだこの気恥ずかしい雰囲気は、どうしよう？」

「あはは、シャ、シャワー浴びてくるね」

赤い顔のまま、シャルルが慌てて言う。

「わかった、外に出ていようか？」

この雰囲気は危険な気がする。それにシャルルの様子がおかしい。まるで……

「いいよ、別に。ただ……の、覗いちゃだめだからね」

可愛い顔と声でそう言っつて、洗面所、シャワールームへ行ったシャルル。

あー、これってかなり好かれていないか？いくらなんでも、この反応は間違いなくある程度の好意があるだろ。

確かに一緒に生活してわかったが、シャルルはいい娘だし、その、可愛い。

しかし、恋してるとはいえないし、筈、セシリアのこともあるし。もしかしたら俺の勘違いだということもある。（思春期特有にありがちな）

……そうだな、学年別トーナメントが終了するまでは、保留にしておこう。

もしかしたらシャルルが原作と違いフランスに戻ってしまうかもしれないし。

強制的に戻されるなら、俺は何か行動を起こすが、シャルルがフランスに戻ると決めたことなら反対はしない。

これはシャルルが決めることだし、眼帯さんのこともあるし、ま

ずは学年別トーナメントに集中するか。

## 20 (後書き)

明日は2回更新の予定 + 設定を載せます。

6月も最終週に入った。

月曜日、今日から、1週間かけて学年別トーナメントが行われる。当然学校行事なので、生徒が来賓客の案内、会場整理、他雑務をこなした。まあ規模の大きい体育祭みたいなものだ。もっとも来賓客には各国の政府の関係者や企業のエージェントなどがいる。

更衣室のモニターを見るが、観客席でも特別に設置された部分には、前回、鈴と戦った時よりも多くのお偉方が席に座っていた。

まさに一大行事だ。

「クラス対抗戦のときよりも多く人が集まっているな。生徒以外の人が多い」

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認、1年は有望かもしれない子のチェックかな」

「なるほどね。個人戦ではなくなったが、それでもIS学園生徒全員の力量が測れる、か」

「まあ、僕達には関係ないか、僕はこの先どうなるかわからないし、一夏は男だしね」

「そうだな、それよりも俺は、ISでの戦いができるってことの方が大きい。ボーデヴィツヒさんと戦う時は、」

「わかってる。一夏が1対1で戦うだよな。代わりにセシリアさんと戦うときは、」



「シャルルが1対1だ。悪いな。せつかく連携の訓練をしたのに」

そう、シャルルとペアを組んでから、毎日連携6：個人技4で訓練を行ってきた。しかし、俺がシャルルにわがままを言って、眼帯さんとは1対1で戦うことにしたのだ。

これが絶対に負けられない戦いならともかく、俺は何か大事なものをかけているわけではない。ただISを、ISでの戦いを楽しみたいだけだ。だから眼帯さんとは1対1で戦う。

ちなみに眼帯さんのペアの相手は、なんと箒である。原作でもたしかそうだった気がするが、はつきりとは覚えていない。

箒はいずれ専用機持ちになるが、今は訓練機で試合に出るので、敵ではない。1年生では適正がもっとも低い部類の生徒だが、現在の技量は、接近戦ではトップクラスというところだ。それでも専用機持ちの敵ではない。

もし、戦うことになったら、シャルルのあらゆる距離に対応した武装の前に苦しみ、負けるだろう。シャルルのIS、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？は拡張領域を原型機の2倍、20もの追加装備が可能だ。そのうえ、拡張領域を活用して、武装の呼び出しを全くのタイムラグなしで行う、ラピッド・スイッチ高速切替という技がある。

これはシャルルが自分で考え、習得した特技で、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の拡張領域があるからこそ行える技らしい。前に山田先生がほぼタイムラグがないクローズとコールを行っていたが、この技は全くタイムラグがない、マシンガン撃つていたと思ったら、ショットガンを撃っていた、なんてことが可能になる。

実際これは厄介だった。マシンガンは威力がないが弾幕に使用できる。白式の高機動の前ではかすりもしなかったが。しかし、その隙について接近したら、いつの間にか持っていたショットガンを近距離でぶちまけられた。相対速度で実体弾の威力が上がり、さらにごくせまいが面制圧が可能なショットガンを撃たれたのだ。その時は模擬戦で負けてしまった。

今の筈では絶対に勝てない。山田先生や千冬さんのような熟練した腕を持っていないと、専用機持ちには勝てないだろう。

そして、定石なら2対1で戦うことになるだろうが、俺はしない。すまん筈、眼帯さんとはどうしても1対1で戦いたい。おまえには悪いが、今回の試合、俺達と当たってもお前とは全力で戦わない。もつともそれはセシリアのペアも同じだが。

「いいよ。一夏はそれでいいんだよ」

にっこり笑うシャルル…まあ、いい。

「さて、1回戦は誰が相手になるかな？」

ISスーツに着替え終わり、互いにISの設定などの最終チェックを行っている。

ちなみにシャルルのISスーツは男装用ISスーツと呼んでいる。これは男のボディラインに見せるように設計、機能があるらしい。確かに、胸とか全くないように見える。

「もうすぐ、決まるはずだよ。それにしても、システムの不具合だなんてこんな時におかしいよね」

ペア変更のせいで、従来のシステムに不具合が発生し、対戦表の作成ができず、対戦表は今現在も作成しているところだ。

「しかたないさ」

もつとも何か作為的なものを感じないでもないが、原作ではこのトーナメントに、敵みたいな組織の陰謀とかはなかったはずである。

「僕は、1番手だと手の内を晒してしまうから、考えがマイナスになっちゃってしまっかな」

「でも、いざ試合に出れば、そんなことは気にしなくなるタイプだよなシャルルは」

「僕だって、代表候補生、専用機持ちだよ。戦いにはそんなものは持ち込まないよ」

シャルルはいざ戦いになると冷静になるタイプだ。専用機持ちでは一番冷静なんじゃないだろうか。眼帯さんは軍人だが、千冬さんに執着するあまり冷静になれていない、すごく攻撃的だ。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターのトーナメント形式の対戦表が表示される。

俺達の1回戦の相手は。ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒ペアだ。

「運がいいのか、悪いのか」

「まあ、懸念していた試合を最初に行えるんだから。運がいいと思うよ」

「そうだな。なら、シャルル、手はず通りに頼む」

「うん、わかった」

俺達は試合会場、アリーナへ向かった。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「1回戦目で当たるとは、手間が省けたな」

現在、俺たちは試合開始前、規定位置で待機している。眼帯さんは早速皮肉を俺に放った。

「そんな余裕はすぐになくなるさ」

訓練で完成したあれを出すからな。

「ふん」

シャルルと篤は、じっとして、開始を待っている。俺たちも同様だ。

『それでは両者、試合を開始してください』

試合開始とともに、俺は雪片式型のエネルギー刃を展開させつつ、眼帯さんへと向かって加速し接近していき、シャルルは箒へ向かって、アサルトライフルを放ち、俺と眼帯さんとは逆の方へ誘導するよつに回避させる。

「これで1対1だ。君もそう望んでいただろう？」

「ふん。わざわざ不利になるとは、馬鹿な奴だ」

「それは、どうかな」

さて、まずは様子見だ。じっくり観察させてもらおう。

俺は通常の加速で、眼帯さんに接近していく。

「ふん！」

眼帯さんは大口径のレールカノンで俺を迎撃する。

精密さはセシリア並だが、連射性は低い。反動を完全に消しているため、精密、連射性があるのだろうが、連射しすぎるとレールカノンの砲身が持たないのだろう。

たしかにすごい射撃だが、セシリアで慣れている俺にとって、回避はたやすい。

「データ通り、機動性は眼を見張るものがある、がそれだけだ！」

もうすぐ、間合いを詰められる距離になる。

しかしワイヤーブレードで4本伸びて迎撃される。ワイヤーが何

か特殊な材質でできているのか、回避した先へ伸びてくる。  
そして、ワイヤーブレードを回避している俺を、レールカノンから高速で放たれるでかい弾頭が襲う。

「ちい！」

瞬時加速を行い、一瞬で短距離を移動し、回避する。

ある程度離れると、ワイヤーブレードの範囲外になったのか、ワイヤーブレードがISに戻っていく。

さて、ここまでは様子見、射撃がレールカノンだけだが、あのISはバランスがいい。よし、トップギアでいくか。

「ふうー、行くとしますか！」

深呼吸とともに、気合を入れて、眼帯さんに近づいていく。

まずは先ほど同じように近づいていく。

「またか、同じ動きか。くだらん」

先ほどと全く同じ展開になり、俺はワイヤーブレードで迎撃される。

先ほどと同じように瞬時加速を行い、短距離の移動を行う。ただし、移動する方向とは逆に瞬時加速を行った後で、2回連続で移動方向に瞬時加速させる。以前セシリア戦で行った機動。しかし、データがそろい、また俺の技術の上昇により、さらに繊細に行えるようになったこの機動は、1度目の機動で、少しの間残像が見えてしまい、文字通り眼に映らなくなる。

ペアを組んで以降のシャルルとの訓練で、習得した機動だ。少し身体に負担がかかるし、失敗するとただ速く移動するだけなので、眼帯さんには丸見えになるだろう。

この機動は白式の機動性を完全に発揮している機動だ。1次移行での限界機動であり、後は連続で使用できるようにするだけだ。これが俺と白式の力。

「な、消え!？」

隙だらけだ!

眼帯さんはすこしだけ反応していたが、ワイヤーブレードは残像の俺を追っていた。

俺は眼帯さんの左後ろから雪片式型の斬撃を放つ。

「せい!」

眼帯さんの左腕に当たった。

「くっ!」

追撃しようとしたが、眼帯さんはスラスターで回転して、右手に展開したプラズマ手刀を回転ながら俺に放った。

「あぶ、」

危ないという言葉を途中で飲み込み、スウエーでかわし、ウイング状のブースターを使い後方へ移動し、距離を取る。

しかし、瞬時に俺をワイヤーブレードが追いかけてくる。眼帯さんはすでに俺を正面にとらえ、レールカノンの照準を合わせようとしていた。

対応が速い!

俺は零落白夜のエネルギー刃を最小出力にし、高速変則機動の制限を見つつ、回避に専念する。

3、2、1…よし、高速変則機動の使用ができる。  
俺は先ほどと同じ展開にするつもりだった。

「認めない。おまえが私より強いなどと私は認めない！…お前に勝つためなら、この出来損ないの左眼でも使つてやる！負けない！お前には！」

眼帯さんが、眼帯を外す。  
そこには金色に光る眼があった。

「…織斑君、圧倒的ですな」

一瞬ぶれたと思つたら、ラウラを攻撃していた一夏がモニターに映っている。それを見ながら山田先生は感嘆の声を上げた。

「…そうだな、あの残像が見えるほどの機動力は攻撃、防御を無意味にしてしまう。錬度が高くて反応ができない。そして、零落白夜により耐久力すら意味がなくなる。白式の機動力を超えるISとそのじゃじゃ馬の手綱を握れる搭乗者が現れない限り、織斑と白式は1対1の試合形式では化物と言えるような強さを手に入れつつあ



る。我が弟ながら恐ろしいな」

同じようにモニターを見ながら、しかし冷静に一夏の強さを解説する千冬。最後の一言には少しだけ感情がこもっているように山田先生には感じられた。

「この試合は決まりでしょうか？篠ノ之さんもデュノア君にはさすがに勝てないだろうし」

「篠ノ之もこの2ヶ月間、がんばっていたが、さすがに専用機持ちには勝てないだろう。それに、デュノアとは性格上相性が悪い」

別のモニターには箒とシャルルの戦いが映し出されていた。

箒は一度も攻撃を命中させられずにいた。シャルルは常に距離を保ち、複数の装備を瞬時に持ち替えて、次々と攻撃し、箒を全く近づけさせない。箒は、一度は特攻じみた攻撃を行ったが、箒の近接ブレードでの斬撃を、シャルルは近接ブレードで迎撃し、瞬時に武器を持ちかえ、近距離からショットガンを放ち、箒は大ダメージを受けた。

そして、もはや防戦一方になっている。打鉄のシールドや防御力で何とか持っているだけだ。

「あ、篠ノ之さんの負けですね」

モニターが箒のシールド残量が0になっていることを映していた。

「あとは、織斑とボーデヴィツヒか。どうやらデュノアは二人の戦いには介入しないらしいな。あくまで1対1にこだわるか」

モニターには、負けた箒と勝ったシャルルが二人一緒に地面に近

い位置で宙に浮き、一夏とラウラの戦いを見ているのが映っている。

「これは、ボーデヴィツヒさんは何を…」

モニターには眼帯を外し、金色に光る左眼を露わにしたラウラが映っていた。

「ほう、ここまでですか。これはどうなるか分からなくなった」

冷静にしかし、楽しそうに言う千冬。

「織斑先生あの眼は？」

「ドイツの機密になるから簡単にしか言わない。あの眼は動体反射を著しく向上させている。織斑の機動も見えるようになるだろう」

「そんなものがあるなんて、しかし、これでわからなくなりましたね」

「ああ、だが、決着はすぐに付くだろう」

モニターには動体反射の向上により、一夏の機動に反応し、一夏を追い詰めているラウラが映っていた。

これはやばい、眼帯さんが眼帯を外してから、反応性がとてつもなく上がっている。

先ほど眼帯さんを追い詰めた機動にも反応し、さらにレールカノン、ワイヤーブレードでの攻撃がより精密に行われる。こちらは回避するだけで精一杯だ。

さて、これを打破する方法は1つ、高速変則機動の制限の一部力ツトすること。

一時的に制限を一部カットし、連続で高速変則機動を行う、ただし、俺の身体に一定以上の異常が出ればISに設定された制限が強制的にISに機動を制限させる。そして俺は棄権にされてしまうだろう。

連続高速変則機動で俺の身体が持たなくなる前に倒す。これしかない。俺はもうシャルルに倒されている。後は眼帯さんを、俺が倒すだけ。

俺は攻勢に出れないため、実体剣モードにしてある雪片式型を握り締めた。

「俺と白式を、止められると思うな！」

俺は声を上げ、気合を入れるとともに、かつてセシリア戦で行った時と同じように、瞬時加速を連続で使用し、回避と前進を行い、眼帯さんに接近していく。あのときはすぐにGで身体がきしみ苦しんだが、今はまだ何ともない。

「さらに速くなったか！だが、貴様の動きは見えているぞ！」

近距離に入るころ、ワイヤーブレードが6本、俺を襲ってきた。瞬時加速を上下左右前後になんども行い、回避して接近していく。クロスレンジ！これで勝負は決まる！

俺は零落白夜を発動させる。

「俺が、勝つ！」

前回と同じように眼帯さんの左後ろに回り込む。

「その動きは通用しない！」

眼帯さんは回転し、右手のプラズマ手刀で斬りつけてくる。

「これが俺と白式の速さだ！」

さらに瞬時加速による停止と加速を行い、回転している方向とは逆の方向へと移動する。眼帯さんは回転しているために俺を捕らえることはできていない。

「はああー!!」

常に連続で瞬時加速を使用しているためか、慣性の中和が間に合わなくなり、Gできしむ身体を押して、渾身の一撃を叩き込む。

アンロック・ユニットと眼帯さんの腰にある装甲、そして逆のアンロック・ユニットを雪片式型が切り裂いていく。

そして装甲が弾け飛び、アンロック・ユニットに大きなひびが入った。

『試合終了。勝者 織斑一夏、シャルル・デュノア、ペア』

勝った。

俺は、身体の芯から痛みを感じながら、雪片式型を実体剣に戻した。その瞬間に、制限がかかり、強制的に機動が制限される。

しかし、試合はもう終わっている。俺達は勝つ、

「あああああああつ！！！！」

眼帯さんの叫びとともに、シュヴァルツエア・レーゲンが変わっていく。一部の装甲がパージされ、レールガンが分解されて、中から雪片式型そっくりの実体剣が出てくる。その柄を眼帯さんがつかみ、そしてそれ以外の武装もパージされる。そしてパージされたパーツが変形して、眼帯さんの顔にバイザーが、身体には甲冑がセツトされ、口から上が見えなくなる。

現れたのは、黒い翼を持った黒い騎士のようなISだった。

## 21 (後書き)

主人公は最強（最強は千冬さんでFA）ではないが、強くなければ  
とっているので、こうなりました。

それにしても原作2巻の戦闘は、原作で一番まいちだった……  
ヒロインが可愛いからいいんですが。

アニメ版は最高ですね、ヒロインが可愛いすぎだし。

(こんなところで負けるのか、私は……)

人工合成された遺伝子から作られ、人の温もりなど知らずに生きてきた。

ただ兵士として必要な技能と心のみを教えられてきた。

誰よりも優秀な兵士としての性能を手に入れていた。それが私の存在意義だった。

しかし……ISが現れたことにより、この忌まわしい左眼、『ヴオーダン・オージェ』の移植手術を行うことになった。理論は完全だったが、制御不能になるという結果は、私の存在する意味を失わせた。

この眼に常に眼帯を行わなければならなくなり、それはISの操縦技術に影響し、私はトップの座から転落した。そして私は出来損ないの烙印を押された。

隊員からの侮蔑、嘲笑。研究員からの、出来損ない、価値がない、失敗作という評価。存在する意味を失い、私は闇の中にいた。

そんな私に光を、希望を、生きる意味を与えてくれた人、織斑千冬。あの人の教えで私は部隊内最強の地位を手に入れた。だが、それはもう私の生きる意味ではなくなっていた。

私は、教官のようになりたかった。

常に強く、凛々しく、堂々と、自分という存在の意味を疑いもしない、人を超越したような存在だと感じた。

その姿に憧れた、教官のようになりたかった。

教官がただ近くにいるだけで、生きる力が、勇気が、私の中から湧いてくるのを感じた。

でも、教官が弟のことを話するときだけ、優しそうな笑みを浮かべる。それは教官がただの人間だということの意味していた。





暴走か。そうだ、原作でもこれは起きていた。どう対応したのかはもう覚えていないし、どっちにしる俺は俺なりにやるしかない。どうす、

『ガキン！』

眼帯さんが変形前以上のスピードで加速し、俺を斬りつけてきた。何とか、雪片式型で防ぐが、雪片式型が弾かれた。眼帯さんはすぐに、上段に雪片もどきを構え、俺を斬りつけてくる。

これは防げないと判断し、俺は後方へ回避した。さて、どうする？いまの俺と白式には機動の制限がある、瞬時加速は1回使用するだけで10秒間ほど使用できなくなる。避ける、避ける、避ける。

次々と俺を襲ってくる眼帯さんの斬撃を避けていく。斬撃、機動の技術は見事だが、俺を攻撃することに執着しすぎて、直線的な動きになっていく。動きが読みやすい。そして、変形前よりも速いが白式より遅い。ISから、先ほどのダメージが抜けていないのもあり、時折、機動がおかしくなることもある。

「一夏！大丈夫?!」

シャルルか。

「ああ、大丈夫だ」

シャルルはマシンガンを撃ち、眼帯さんを牽制しながら移動し、

俺の傍で止まった。

「どうするのー夏？」

『非常事態発令！トーナメントの全試合を中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒は直ちに避難すること！繰り返し！』

「とっつことらしいよ」

シールド残量はまだある、少しの時間なら零落白夜で攻撃できるだろう。

俺は、どうする？どうしたい？

怪我をしている。機動に制限がかかっている。俺を執拗に狙っている。ならこのままシャルルに力を借りて時間を稼ぎ、教師が鎮圧に来るのを待つ？

そうだ、そうするべきだ。試合は終わっている。前の中ボスとは違い、逃げる術がある。原作のように眼帯さんにフラグが立たない。そうだ、俺には戦う理由がない。だから、逃げるべきだろ、常識的に考えて。

でも……………俺は、逃げたくない。負けたくない。

馬鹿げてると思っても、ここは戦うべきだ、戦って勝て、と、本能がそう言うんだ。

は、ははははは、俺は、こんなにも、負けず嫌いだったのか？

ISは、俺が知らない、俺の一面を引き出してくれた。

ああ、こっつ自分、嫌いじゃない。

「俺は、1対1で決着をつけたい。すまないけど、手を出さないでくれるか？」

「はぁー、本当に！っと、一夏は、もう、しょうがないなあ」

マシンガンから口径の小さいライフルに持ち替えて、連射していきながら、呆れた顔をした後、苦笑した。

「いいよ。ただし、もし何かあったら、すぐに加勢するからね」

「ありがとう」

「それと、約束して。絶対に負けないって」

「ああ！約束する。俺は絶対に負けない」

本当にありがとう、シャルル。

「じゃあ、僕は後方に下がるね」

シャルルがライフルを撃ちながら後方へ下がっていく。そして一定距離から離れると、射撃を中断した。

眼帯さんは、すぐさま俺に向かって加速し、接近してくる。

零落白夜を最大出力で展開する。

勝負は一瞬、次の攻撃で決まるだろう。

俺は眼帯さんを真正面に捉え、雪片式型を上段に構え、動かずにブリストをためる。

すまない白式、無理をさせる。

『負けないで』

なぜだろうか、白式がそう言っている気がした。

そうだ、シャルル、そして白式のためにも、

「俺は、俺は、俺は………」

眼帯さんが、雪片式型を中腰に構え、少し離れた間合いから加速して斬撃を放とうとする。その瞬間に、俺はブーストを最大出力を超える出力、故障するくらいの出力で、瞬時加速を行い、間合いを詰めた。

「俺は！負けない！」

眼帯さんが、居合に似た剣閃の、独特の斬りを放つ瞬間に、俺は眼帯さんのバイザーを、甲冑を、真つ二つに斬り裂いた。

バイザーの下にあった眼帯の顔には、赤色の眼と金色の眼があった。一瞬だけ、眼があう、二つの眼は、捨てられた子犬のような、悲しそうな眼差しだった。

すぐに眼帯さんのISが待機状態になり、眼帯さんは意識を失った。

俺は雪片式型をクローズして、眼帯さんを抱きかかえる。眼帯さんの身体はとても細くて軽かった。

「こんな身体で、あんなにも……」

意識を失っている眼帯さんの顔は、とても悲しそうな表情をしている。眼から、少しだけ涙が出ている。

しょうがない、また同じことをしている。でも、俺にはこうすることしか思いつかない。

「悪いな、俺はこんなことしかできない」

意識を失いながらも泣いている眼帯さんを、ギュッと抱きしめ、

銀色の髪を撫でた。

俺はゆっくりと、地面に降りて行き、地に降り立った。

「うっ！」

か、身体、特に内臓？が痛い。やばい、今までに経験したことのないほどの痛みだ。し、死ぬる……う

『ゲバア！』

げ、吐血したあ！

「悪いな、俺はこんなことしかできない」

誰の声？……織斑、一夏の、声、だ。

ギュッと抱きしめられる……温かい。

髪を撫でられる……すごく安心する。

これが、人の、温もり？

教官を思うと、湧き出る力とは違う。温かい思いが心を満たす。人の、温もり。

織斑一夏、私に人の温もりをくれる存在、ずっと、一緒にいてほしい。

「うん……」

「ここは、私は、どうしたのだ？」

「気がついたか」

教官の声。

身体を動かそうとすると、身体中に痛みが走った。

「私は……」

「全身に打撲と筋肉疲労がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

どうして、こんな怪我をした？私は織斑一夏に負けて……そう、  
だ。その後で、何かに…

「何が…起きたのですか……？」

私は痛みを我慢して、上半身を起こす。ベッドのそばには教官が、  
そして私の隣には、なぜか織斑一夏が寝ていた。

「他言はするな。機密だ」

「はい」

「VTシステムは知っているな？」

モンド・グロツソ（ISの世界大会）の部門優勝者（Valkyrie）の動きをトレースするシステム。研究・開発が進められていたが、IS条約で研究・開発・使用、全てが禁止されたシステムだ。

「それが、お前のISに積まれていた。巧妙に隠されていた。一定の条件がそろえば発動するようになっていたらしい。ドイツ軍には委員会の強制捜査が入るだろう」

私が、私が教官みたいになりたいと望んだから、発動したんだろう。何にもなれない私が、教官になれるはずなのに、分不相応に望んだから……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

「お前は誰だ？」

私は誰なんだろうか？何なんだろうか？

「わからないか？ならば、これからラウラ・ボーデヴィツヒになればいい。この学園に3年間は在籍しなければならぬ、これからのいろいろな経験ができるぞ。お前は生きているんだ、ならば死ぬまで悩めばいい。生きて、いろいろ経験して悩め。なに、時間はたっぷりあるんだからな」

私は、ラウラ・ボーデヴィツヒは今、これからはじまるんですね。教官……ありがとうございます。

「それに、こいつの姉は、私一人で十分だ。まったく、心配させて……」

そう言って、教官は、とても大事そうに、宝物を触るかのように織斑一夏の頭を撫でる。

教官をじつと見ていたら、私と教官の眼があった。

「あ、……んん！では私は仕事に戻る」

照れ隠しだろうか、咳払いをして、教官は赤い顔のまま、部屋を出ていった。

前ならば許せなかっただろう教官の表情、その原因の織斑一夏。でも、今は、羨ましかった、そんな表情ができる教官が。

そして、いらいらした。織斑一夏が教官に触れられていると、いらいらした。



でも、今は、織斑一夏を見ていると、ドキドキする。顔が熱い。織斑一夏は、私に温もりをくれる存在。

この感情は、何だ？私は、そう、私は……織斑一夏が、好きだ。この感情が恋なのか？……そうだ、これが恋なんだ。私は、織斑一夏に恋している。

「織斑一夏、好きだ」

『チユ』

む、ついキ、キス、あ、ファーストキスだ……んん！してしまっただが、これからどうすればいいのだろうか？わからない……そうだ、クラリツサに教えてもらえばいいのではないか？

クラリツサ・ハルフォーフ、22歳。階級は大尉。私が隊長を務めるIS配備特殊部隊、シュヴァルツェ・ハーゼの副隊長。私のシュヴァルツェア・レーゲンと同型のIS、シュヴァルツェア・ツヴァイクを専用機として与えられている。コミュニケーションをとってこなかった私と違い、部隊を面倒見よく牽引する、頼れる副隊長だ。

そうだ、隊長を助けるのは副隊長の役目だな。よし、プライベート・チャネルで連絡を……

えーと、なぜ、俺の隣で眼帯さんが寝ているんだ？  
…とりあえず起きよう。

「う」

起き上がろうとしたら、身体に鈍い痛みが走った。が、起き上がれないほどの痛みではないので起き上がる。

「一夏？気がついたか？」

「千冬さん？」

千冬さんがベッドのそばの椅子に座っていた。それと、なぜか俺の隣で眼帯さんが寝ていた。

「俺は確か、ISが変形したボーデヴィツヒさんと戦って、勝った。で、その後、エネルギー切れでISが解除されて…」

「そうだ、そして気絶した。全く、心配したぞ」

ああ、そうだ。吐血したな。生まれて初めての体験だ。アニメとかで見ると、格好いいシーンだなと思っていたが、あんな痛み、二度と味わいたくねえ。

「一夏……無理はしないでくれ……頼むから……」

あ、千冬さんの眼が潤んでいる。

こんな姿、普段なら絶対に見せないのに……そうか、俺が憑依したことで記憶喪失ということになっている。それは、千冬さんが一度一夏を失っているのと同じだ。

もし、俺が死んだら、この人は泣くのだろうか？……それは、嫌だな。女性の涙は苦手だ。それが千冬さんならなおさらだ。

「千冬さん、ごめん」

「……次からは無理はするなよ。まあ、今回のことは仕方ない面もある、お前が無理をしなかったら、こいつは壊れていたかもしれないからな」

眼帯さんを見て、そう言う千冬さん。

しかし、幸せそうな顔で寝ているな、眼帯さんは。っていつか、どうして隣に寝ているんだ。

「えーと……なんでポーデヴィツヒさんがとなりで寝ているんです？」

「はあ、治療のためお前から引き離そうとしたんだが、ポーデヴィツヒがお前の手を強く握っていて離れそうになかったから、急いでいたからそのまま治療して、一緒にベッドで寝かせていた。ちなみにお前の怪我は、吐血したわりには大したことがないそうさ。オルコットと戦った時と同じ程度の怪我だそうさ」

嘆息し、額に手を当てて、千冬さんは話してくれた。

(どう見ても吐血するほどの怪我ではなかったが吐血した……白式の仕業かもしれない可能性が高い……か)

その程度の怪我だったのか、めちゃくちゃ痛かったし、もっとひ

どいことになっているかと思つてた。

「明日、また検査するが、おそらく寮に戻れるだろう。だが、しばらくは部屋で安静することになるだろう。そしてしばらくは流動食だろうな。無理をした罰だ」

「う、そう、ですか」

1週間もすれば直るだろう。我慢我慢……はあ。

「さて、私はこれで帰る。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

千冬さんは部屋を出て行った。

ふう、今回は大変だったな。でも、何とか乗り切った。しかし、もっと強くなりたい、千冬さんに心配させないくらいには強くなりたい。

まずは怪我が治るまではデータを見て、今後の訓練メニューを考え、て……あ、やべ、寝む、い……zzz……

## 22 (後書き)

ようやく原作2巻が終わりに近付いています。

3巻は恋のバトルと、もっとHな表現を入れたいです。

## 設定（22話の時点）（前書き）

原作の設定がわからない部分は、作者の妄想から設定されているので、ほぼ原作通りと表記しています。

## 設定（22話の時点）

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

織斑 一夏

中の人が、朝起きたら一夏に憑依していた25歳のSEとなっている。

家事スキルは原作とほぼ同等。

地の文では混乱していたり、ネタを言っているが、表情に出さなため落ち着いている（と思われる）。

ロボットアニメ、SF小説が好きだった（熱狂するほど好きなわけではなく、趣味の範囲）。

現在はIS中毒者になっている。

元の世界ではオタクが友達だった（数人でつるんでいた）。聖地に行ったことが一度ある。

元の世界では実はそれなりにモテていたが、女性と付き合つのが面倒で、男といる方が気楽でいいと言って、付き合っていた女性を振ったことがある。

白式

原作との違いは機動力が段違いに上がっていること。装甲も若干薄くなっているため、当たれば終わる。またブーストエネルギーの消費も早い。

一夏からの好感度がかなり高い。

上記以外はほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

### 織斑 千冬

原作一夏と憑依一夏は別人だと判断している。

憑依一夏（現在の一夏）を否定せず、肯定している。ただし、中の人のことは知らない。

原作よりも若干優しい性格。

上記以外はほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

### 篠ノ之 篤

フラグは原作通りだが、ISでの訓練において、一夏の面倒を見る必要がないので、原作より実力が上がっている。告白済み。

上記以外はほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

### セシリア・オルコット

フラグは原作通りだが、ISでの訓練において、一夏の面倒を見る必要がないので、原作より実力が上がっている。告白済み。

上記以外はほぼ原作通り。

### ブルー・ティアーズ

BT兵器の最大稼働時にビームの軌道を操る、これができなくなっている。

上記以外はほぼ原作通り。



\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

鳳 鈴音

原作と違いフラグが立っていない。そのため、現在は仲のいい女  
友達の位置にいる。

上記以外はほぼ原作通り。

甲龍（シエンロン／こうりゅう）

ほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

シャルロット・デユノア

ほぼ原作通り。

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？

ほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ほぼ原作通り。

シュヴァルツエア・レーゲン

AICがPICの発展型になっている。実体兵器無効化と反動無  
効化が行えるだけで、対象を任意に停止させることはできない。

VLTシステム作動時、高機動接近戦仕様になり、装甲がパーシ

されるように設計されている。ISが完全変形してフルスキンにな  
ったりはしない。

上記以外はほぼ原作通り。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「はい、一夏、あ〜ん」

「……あ〜ん」

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

俺は今、寮の部屋の自分のベッドで、身を起こした状態で、シャルルの手で食事を食べさせてもらっていた。

昨日の朝、眼帯さんが寝ているときに検査を行ったが、ほとんど怪我（内臓）は直っているとわかったため、即座に寮の部屋に戻った。

部屋にはシャルルがいて、俺の看護をしてくれた。

そして、今日、食事（流動食だが）が食べられるようになり、食事をしようとしたら、シャルルが「食べさせてあげるね」と言い、スプーンを奪い取って、「あ〜ん」と言いだしたのだ。

ちなみに箒とセシリアは、今日は部屋には来ていない。昨日は俺の部屋にずっといたが。

箒は、今日は会場の手伝いだそうだ。

セシリアは今日は試合がだそうだ。学年別トーナメントは中止になったが、1回戦のみ行うことになったらしい。1回戦はアリーナで1週間かけて行う予定だったため、シャルルは1週間することがなくなり、俺の看病をするつもりのようにだ。他の娘は試合や会場の手伝いなどしているそうだ。

ありがたいんだが、これはなあ。なんかシャルルが色ボケしてる感じがする。

「シャルル？その、ありがたいんだが、自分で食べるし、恥ずかしいし、だから、その」

「迷惑、だった？」

泣きそうな顔で言うシャルル、眼が潤んでる。  
く、箸やセシリアに悪い、ここは断るんだ。よし、言っぞ。

「いや、全然、助かるよ」

俺え……。

「よかった。なら、あ〜ん」

嘘泣きかよ！シャルル、恐ろしい娘！

……なんて、冗談を言ってる場合じゃない、か。  
シャルルにはつきり言おう。

箸とセシリアに言ったことを、伝えよう。

あ、冷めてしまうし、食べてからにしよう。丸二日食べていないから、腹が減ってしょうがないんだよ。

「ごちそうさまでした」

「食器片づけてくるね」

食器を片づけに食堂に行くシャルル。

シャルルは、こういうのに手慣れていて、しぐさがなんか家庭的なんだよなあ、この娘。

そう言えば、転入してすぐのころは箸の扱いに慣れていなくて、食事が取れなくて結局フォークやスプーンを使っていたな。その後、部屋で箸の訓練をしたんだよなあ。懐かしい。

ふうー。お茶を一杯啜る。さてそろそろ戻ってくるな。

部屋に戻ってきたシャルルがベッドに座り、俺は姿勢を正した。

「シャルル。話がある」

「何？一夏？」

「シャルルは、俺に好意を抱いているだろう？」

「うえ？！……え、あ、その……う、うん……」

(い、一夏に気づかれていたの？うう、どつしよう、いきなり、うう)

もじもじと照れている。う、どうしてこう、可愛い娘ばかりなんだ。心臓が悪い。

「箒とセシリアにも言ったんだが、俺は、今はESに専念したいんだ。だから、他のことは考えられない。その、あきらめてくれないか？」

(え……嫌だ。嫌だよ、そんなの。一夏はもう僕の居場所なんだから、じゃないと僕は……)

「一夏、今はって言ったよね。なら、いつかは告白したら受けてくれるようになるの？」

うーん。そう、だな。箒、セシリア、シャルル、俺に好意を持つてくれている娘。

俺は、いつかけじめをつけるべきだよな。

正直にいえば、みんなとてもいい娘で、もしもこれが普通の学校

に通っていたなら、すぐにOKするぐらいだ。むしろこっちからお願いたいくらいだ。

だから選ぶ、選ぶと言うとすごく自意識過剰で、嫌味だけど、選ぼう。好意を持ってくれている娘達の中から一番好きな娘を、選ぶ。もしも、俺に好きな娘ができなかったら、みんなから選ぶ。と言うより、今はみんなが好き（ある程度は異性として）と言った感じだし。

もしかしたら、全く違う娘を好きになるかもしれないが、その時はみんなに正直に伝えよう。その結果、たとえ殴られても、嫌われても。

そうだ、この学園に入って1年経った日、4月1日に伝えよう。今決めた、そうしよう。

後で、箒とセシリアにも伝えよう。

「決めた。俺は来年の4月1日に、俺に好意を持ってくれている娘達の中から、一番一緒にいたい娘を選ぶよ。もしかしたら、それまでに、俺にもっと好きな娘ができるかもしれないし、俺に愛想を尽かすかもしれない。すごく不誠実な感じがするけど、でも、俺は決めた」

「わかった。来年の4月1日だね。一夏……僕の話はシャルロットって呼んでほしい。それが僕の本当の名前なんだ」

シャルロットか。

「わかったよ、シャルロット」

「織斑一夏さん、僕は、シャルロット・デュノアは、あなたのことが大好きです。だから、覚悟してね。一夏を絶対に僕のものにするから」

(一夏のいる場所が僕の居場所、僕の心はそう決めたんだ。だから、絶対に一夏は僕がもらっていく)

「あゝ、よろしく」

は、恥ずかしけど嬉しい。

「うん！あ、そうだ、ならもうこの部屋で一緒にはいない方がいいね。明日、先生達に『シャルル』のことを伝えるよ。その今日はまだ、この部屋で」

「わかったよ」

仕方ないか、なんか、気恥ずかしい。明日からはまた一人か……。……あ、風呂入ってない、せっかく大浴場が使用できるようになったのに。

来年の4月1日に、はつきりと誰かを選ぶと決めた日の翌日。H Rのみを行うため、俺はいつもの登校時間（それなりに早い）に教室に来た。ちなみに今日の試合はHRが終了してから、行うことになっっているそうだ。

セシリア、箒も一緒だったのだが、シャルロットは先に行っってと言い残し、食堂で別れた。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生がふらふらと教室に入ってきた。これは新しいギャグのつもりなのだろうか？

つつこむべきか、笑うべきか、それが問題だ。

「今日は、皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介済みというか……はあ……」

転校生……あゝ、シャルロットとしてくるのか。ちょっと思い出したわ。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

やっぱりシャルロットか、声が心なしか高く聞こえる。

スラリと伸びた綺麗な脚が見えるミニスカートを履いた美少女が入ってきた。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願ひし



ます」

ぺこりと礼をするシャルロット。  
それを見ていた、クラス全員が呆然としている。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですよ。うう、寮の部屋割りの組み直し、書類が増える……あはは、はははは……」

乾いた声で笑う山田先生。

そう言えば、このクラス、男の俺が居る事といい、専用機持ちの多さといい、学園始まって以来の問題クラスじゃないのか……山田先生、ご苦労様です。

まあ、所詮他人事ですがね。

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

(そんな、カップリングが、BLがああ)

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「っておい、何かまた背筋がゾクつとしたんだが？  
ざわざわと話していたが、一斉に教室は喧騒に包まれた。

「一夏」

「一夏さん」

両肩が誰かの手で掴まれた。ギリギリと言う音が聞こえるんだが、

一体どんな握力をしているんだ。  
誰か、は声でわかりました。

「どづいうことか、説明してもらおうぞ」

「どづいうことか、説明してもらいますわよ」

うーん、これはやばい、久しぶりのSYU・RA・BAだ。  
とりあえず、他意はないこと、事情があったこと、あと決意した  
ことを話し、うまく納めるか。

「織斑一夏」

眼の前から声がして、ハッと意識を戻すと、眼帯さんがいた。ど  
うやら、騒いでいるところで教室に入ってきたようだ。全然気がつ  
かなかった。

「ボーデヴィツヒさん？」

「ラウラでいい」

「あ、ああ、ラウラ。なら俺も一夏でいい」

「わかった、一夏」

何だっけ、たしか原作だと、この後で、嫁がどづとかいう話、が

『チュ、ペロ、ピチャピチャ』

キス、ラウラにキスされた。しかも舌挿れおったでこの娘。

「お、お前を私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

そうそう、こんな話だったよ、いやあ、やっと思い出せた。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にする」

日本の文化を間違えている、典型的な外国人的な発想だな。  
うん、ていうかね、もうね、ダメぽ。

「一夏？説明してもらおうか？」

どこから出したのか日本刀を俺の頬に当てて、凄む篤。

「一夏さん？説明してもらえませんか？」

スターライトmk？の銃口をこちらに向けて、凄むセシリア。  
どうする？どうする？どうする？……ってちゃんと説明して話  
しかない。そしてラウラにも話を聞かないとな。

ふう、とりあえず、HRが終わったら、俺の部屋で話をするか。

「二人とも？HRが終わったら、俺の部屋で説明するよ」

笑顔で怒っている二人の眼をそれぞれ見て言う。

人と話すときは眼を見て話す。俺にとっては当たり前のことだ。  
これは元の世界でも同じだった。そして誠実に意思を込めれば、意  
思が伝わる。

「む、わかった」

「わかりましたわ」

よし、約2ヶ月の付き合いもあり、二人は俺が真面目な話をしようとしていることがわかったのだらう。

武器を納めて引いてくれた。

「ラウラも、聞きたいことと話すことがあるから、HRが終わったら、ついてきてくれ」

「嫁の言うことだからな。わかった」

…天然というか、昨日までと全然違っぞ、この娘。原作でもこんな感じだったか？しかし、ベロチュウか、この身体だと初めてだが、中の人的には初めてではないから、そこまで驚かないんだが、こんな教室の中で、公衆の面前ですることじゃないだろ。俺に露出趣味はない。だいたい恋人じゃないんだぞ。それに、ラウラは美少女だから許されるんだ。これが某所の、いやこの考えは辞めよう。

「一夏？」

今度はシャルルか。

「にこっ」

はは、可愛いんだが、すごく怖い。何を言っているのかわからないが可愛くて怖い。

「僕の前でキスするなんて、それは挑発しているのかな？」

「いや、したんじゃないかとされたら。っっていうか見ていただけろ」

「うっ」

拗ねているのも可愛いんだが、今は納めてくれ。  
山田先生の口からエクトプラズムが出かけている。

「篤さん、セシリアさん、ボーデヴィツヒさん、一夏は僕がもらって行くから。これは宣戦布告だよ」

「上等ですわ！一夏さんはわたくしがもらっていきますわ。絶対に負けませんわよ」

「一夏は私がもらって行く！お前たちには負けん！」

「一夏は私の嫁だ！貴様らにはやらん！」

『バチバチ』

火花が散っている。

そしてさらにざわめく教室。

今日この時から、恋のバトルは本格的に始まったのだった。

### 23 (後書き)

こんな展開になりました。

これなら「END」とか書けそうなので。

ただ、ちよつと駆け足すぎかなと自分でも感じました。もっと主人公の気持ちの変わり方を濃密に書けたらよかったのになあ。

1日1話更新して、完結させることが目標なので、修正はできませんので、こんな展開で進んでいきます。

御容赦ください。

あの騒ぎの後、4人が席に戻り、山田先生を復活させたら（チップで）、HRが再開された。

明日は通常授業（座学のみ）があること、明日と土日は、整備のためにアリーナ、訓練機の使用ができないこと、来週は臨海学校があるため、明日端末に臨海学校に必要なものと臨海学校での行動予定を載せること、今日試合や会場の整理がない生徒は、学園寮で待機しているか、アリーナで観戦をしていることを山田先生から伝えられ、HRが終わった。

本来は試合がない生徒はアリーナで観戦するのが規則なのだが、先日のラウラの件で、対応が忙しく、待機もありになったらしい。それだけ教師、関係者は忙しいらしい。

だから、教室を出ていく山田先生の後ろ姿は、がっくりうなだれていて、哀愁が漂っていたのだろう。

通常の仕事に加え、ラウラ、シャルロットの問題のために増えた仕事があるんだろう。副担任だし、副寮長でもあるし。

大変そうだが、社会人とはそのようなものだ。PGやSEなどの職業はデスマーチなどと言う戦いもあるのだ。あれは、非道いものだった。残業代が増えるのは嬉しいが、なんども繰り返していたら確実に過労死してしまう。

この世界では将来どうしようか。いや、それ以前に、将来に自由があるのかわからない。ISさえあれば俺はそれでいいのだが、どうなるのかなあ、このままIS学園に拘束されるのかもしれない。なんて、将来のことを考えていても仕方ない。

それよりも、この雰囲気はどうにかしないと………幕、セシリア、シャルロット、ラウラの4人が俺を囲んでいる。

そして、それぞれが牽制し合っている。

「はあ……とりあえず、みんな何か用事があるとかはないか？」

「ないな」

「ありませんわ」

「ないよ」

「ない」

「じゃあ、このまま俺の部屋に行こう」

俺が席を立ち、歩いていく、箒達は俺を囲むようにして、ついてきた。

これじゃあ見世物になったみたいだ。いや、見世物か、痴話喧嘩みたいなことを起こしていたんだしな。…やれやれ。

俺は自分のベッドに座り、箒達はシャルロットのベッドに座って



いる。

「さて、まずは何から話そうか？」

「まずは、シャルロットさんのことが聞きたいですわね」

「シャルルは偽名で本当の名前はシャルロットで女だったが、理由があつて男として転入してきた

。途中で俺に女だとはれたが、理由があつたので、俺は6月中は黙っている約束した。それから、セシリアが懸念するようなことは特に何かあつたわけじゃない」

「ですが、シャルロットさんは先ほど」

「そのことは後で話すことに関係しているから、後で」

「一応は、わかりましたわ」

これで、1つは片付いた。

「次は、」

「ボーデヴィツヒさんのことが聞きたいな」

シャルロット、笑顔が怖いぞ。

「私のことはラウラと呼べばいい」

前までのあの全てを排斥するような雰囲気、ラウラから完全に

なくなっている。これは、いい変化だと思う。あの天然がなければ、  
だが。

「俺にはわからないので、ラウラ、さっきのキスと、嫁にするとは  
どういうことが説明してくれないか？」

「わかった。私は一夏のことが好きだ。だからキスをして、嫁にす  
ると宣言した」

なんてぶっ飛んだ思考だ。

「どうして、そんな考えになる！？一夏はお前のことは、好きでも  
なんでもないんだぞ！？」

「私がそうしたかったからだ。それに私はこうするのが一般的だと  
聞いたぞ」

素直と言うか単純というか、まっすぐにつっ走るって感じた。見  
ていて微笑ましい、俺に害がなければ、だが。

「ラウラ、その常識は間違っている」

「む、そうなのか？」

「そうだ。キスは恋人、先ほどの嫁になれと言った発言に同意した  
ら、してもいいんだ。先ほどのキスは、ラウラがその歳で軍人とい  
う特殊な環境だったことを考慮して許すが、これからはやめてくれ」

いきなり、一般常識がどうこう言っても通じなさそうだし、とり  
あえずこんな感じで諭すか。

「む、わかった。私も、一夏に嫌われるのは嫌だからな」

「とりあえず、ラウラが俺のことを好きだということはわかった。で、だ」

みんなの顔を見回す。

「昨日シャルロットに話したが、俺は来年の4月1日に、俺に好意を持ってくれている娘達、ここにいる4人の中から、一番一緒にいたい娘を選ぶ。それまでに、俺に好きな娘ができるかもしれないし、みんなが俺に愛想を尽かすかもしれない。でも、そうじゃなかったら、必ず4月1日に答えを出す」

ふう、と一息つく。

「傲慢な考えかもしれないが、これがみんなの好意に対する答えだ」

もし、嫌われたら寂しくなるが、ISのことと恋愛のことを考えたら、俺はこうすると決めた。後悔はしない。

「一夏、前にも言ったが、私はお前が好きだ。だから、結ばれる可能性ができただけでも嬉しい。きっと私を選ばせて見せる」

篝。

「一夏さん、わたくしの想いは変わりませんわ。あなたのことが好きです。わたくしを選ばせてみせますわ」

セシリア。

「一夏、昨日言ったよね、僕はあなたのことが大好きですって。だから、絶対僕を選ばせて見せるからね」

シャルロット。

「一夏、私はお前のことが好きだ。だから嫁にすると宣言した。ならばもう一度言う、お前のことが好きだ。だから私を選ばせて見せる。そして嫁にする」

ラウラ。…嫁にする、は変わらないんだ。

「みんな、改めてよろしく」

本当にみんないい娘達だ。

その後、喧嘩はしないこと、俺や他の人に迷惑はかけないこと（俺の部屋に特別な用事がないのに来たり）などしないことが決められた。

もつすぐ昼食なので、食堂に移動しようとしたところ、山田先生が部屋に来て、シャルロットは1年生寮の部屋に変わると連絡に来た。

そして、その後、みんな一緒に学食で食事を行い、現在、シャルロットが部屋で荷物をまとめている。

「じゃあね、一夏。1か月間楽しかったよ」

「ああ、それじゃあ、ラウラと仲良くな」

「うん」

そう、シャルロットはラウラと同じ部屋になったのだ。原作でもこうだったはずだ。シャルロットは社交的というか、優しい性格なので、ラウラともやっていけるだろう。

「一夏、いつでも、部屋に来ていいからね」

そう言って、シャルロットは部屋を出て行った。

部屋を見渡すと、たった1か月のことだったのに、妙に部屋が寂しく感じられた。が、そのすぐ後で、解放感を強く感じた。

さすがに一緒の家で暮らすのと、一緒の部屋で暮らすのは違う、プライベートもへったくれもあつたもんじゃない。寂しさよりも解放感が強くなるわな。

シャルロットには悪いが、ストレスになっていたな。やっぱり自分だけの空間は必要だな。

「んんっ、ふうっ」

ぐぐと思いつきり伸びをした。

さて、これからどうするかな。

訓練、トレーニングはまだ禁止されている。外には出れない。…

……あれ？俺って……他に趣味がないのか？ISは趣味とも言えるが、それ以外でしたいことがない。

料理は好きだが、今はする時じゃない。

テレビ、ニュースは見るが、それ以外は音楽代わりにテレビを点けているだけだ。

本、ISの教本しか読まない。

それ以外にすることは……ない、ない、ない。

この2ヶ月、ISと出会ってから、ISのことばかり考えていた。それは楽しいからいいんだが、さすがにちょっとこれはまずいかなあ。

まあいい、そうだな電子書籍でも買って暇をつぶすか。ネットから、ドラマなんかを視聴するのもいいな。

鈴は試合に出れないはずだから、部屋にいるかもしれない。何かお勧めのものはあるか聞いてみようかな？

織斑一夏。再会したが、記憶がなくなっていた幼馴染のことを考える。

落ち着いていて、優しく、ISでの戦いは強くて、格好いい。

一度は振られたが、それでも好きだと私は言った。でも、私の片思いできつと脈はないと思ってた。しかし、来年の4月1日に私達の中から選んでくれると言ってくれた。きつと私達以外の娘達からは距離をとるだろうから、すごくチャンスだ。

一夏と一緒にいたい。

あの姉のせいで、一夏と別れ、家族と別れ、なんども引つ越しさせられ、そして社会的ではない私は、あまり友達も作れなかった。

記憶をなくした一夏は、私の話を聞いてくれて、一緒にISの訓練をして、セシリアと喧嘩するとしようがないなあと苦笑しながら仲裁してくれて、そしていつも一緒にいてくれた。

一夏が好きだ。一夏のことを考えると、ただそう思う。

でも、一夏が選ぶと言った4人のうち私だけが、ISの技術は拙く、専用機を持たず、戦いでは一番弱い。

一夏はそんなことは気にしないとと思う、でも、すこしでも一夏にアピールするためには、ISでの強さが必要だ。

だから、私に孤独を与えた人、姉を頼る。

なぜか、学園に入学したら、どこからか届いた姉の電話番号。

携帯電話のボタンを、記されている電話番号の順に押す。

『プルルル、プルルル』

「やあやあやあ！久しぶりだねえ！ずっとずーっと待ってたよ！」

相変わらず、私、一夏、千冬さんと話す時はハイテンションだ。

複雑な思いを殺し、私は声を出す。

「……姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、代用無きもの、筈の専用機が。もちろん用意してある

よ。最高性能にして規格外仕様。そして、白と並び立つもの。その期待の名は『紅椿』」

紅椿、それが私の専用機の名前。

これで、私も同じ舞台に立てる。」

「と・こ・ろ・で、いつくんはどうだった？記憶喪失と聞いて、正直中身が違うならどうでもいいと思ってたけど、ちーちゃんや篤がこれだけ執着するんだもん、ISの戦いも強いらしいし、お姉さん、ちよつと興味が湧いてきたな」

「普通の奴ですあなたが興味を持つような奴ではありませんだからこのことはさっさと忘れた方がいいです」

もし、姉が一夏にあつたらどうなるのだろうか？

一夏は、千冬さんとも違った、何かを超越した精神的な強さがある。それが包容力となっていて、あの落ち着いた雰囲気を出しているんだと思う。

もしも、あの包容力が、姉を受け入れるほどの広さを持っていたら、きつと姉は一夏に執着するだろう。それは、嫌だ。

「くふふふ、そんなに早口になるほど焦っちゃうんだ。うんうん、紅椿を渡す時に会っちゃお。そうだ、お土産も持っていこうかな？」

く、絶対碌なことにならない。こうなった姉は止められない。

「用件はそれだけです。では」

く、力を手に入れることはできたが、何かを代償にってしまった気がする。



姉が来る時は一夏には注意しておこう。なんにも行動させなければいいはずだ。

ともかく、これであいつらと同じ舞台に立てる。これからは一夏と一緒に訓練して、強くなってみせる。

そして、来年の4月1日、一夏に私を選ばせてみせる。

## 24 (後書き)

東のキャラは、なんか書きやすいです。

「おはよう」

食堂の前にいるラウラ、箒に挨拶をする。

「「おはよう」」

箒はいつも朝が早い、真剣による鍛錬をしているそうだ。

俺もどちらかと言えば朝は早い方なので、箒とはいつも朝は一緒だ。セシリアはいるときといない時があり、鈴は朝は一緒ではない。シャルロットがいないが、先週末までは俺と一緒にだったから、朝に弱いということはないのだが、今日はいない。寝坊とかかもしれない、環境が変わったしな。

ラウラは軍人なので、時間を守ることができるのだろう。昨日の夕食時、俺に朝はいつ起きるのか聞いていたから、俺を待っていたのだろう。

「箒は相変わらず、朝が早いな」

「一夏も早いと思うぞ」

そうは言っても俺は早朝に訓練とかはしていないからな。それにしても箒は何だか明るくなっている気がする。悩んでたことが解決したのかな？ま、元気になったのならいいか。

「ラウラは、軍人だけあって、時間はきっちり守りそうだな」

「当然だ。軍隊は、まずは時間厳守することを教える。朝起きれない

い奴がいたら、小隊全員がしごかれる。もつとも私の隊はIS専門部隊だからな、全員女性であるため、普通の軍隊とは違ふところもあると思う」

うーん、厳しそうだ。いくらISがあるとは言っても軍隊には入りたくないな。でもIS専門の部隊か、どんな部隊だろうか、ちよつと興味があるな。ラウラのような強さを持った人が何人かいるのだろうか？

「IS専門部隊か、どんな感じなんだ？」

「部隊名はシュヴァルツェ・ハーゼだ。ドイツ国内にある10機のISのうち、3機を保有している最強の部隊だ。興味があるのか？一夏ならば、いつでも歓迎するぞ。入隊したいと言えば、国も諸手をあげて歓迎してくれるぞ」

「い、一夏!？」

(それならば、自動的に私を選ぶことになる)

さすがに、それは政治的にまずいだろ。

「軍隊に入りたいというわけではなく、ただIS専門の部隊に、ラウラのような強い人がいるのか興味があっただけだ」

「ふむ、私と同等と言えるのは、副隊長のクラリツサがいる。私のシュヴァルツェア・レーゲンの姉妹機、シュヴァルツェア・ツヴァイクを専用機として持っている」

「へえ、シュヴァルツェア・レーゲンの姉妹機か、3世代ISだな

「？」

「ああ、AICもあるが、シュヴァルツェア・レーゲンと違い、標準装備は射撃兵器が多い。私とエレメントを組んで戦える、相性がいいISだ。クラリツサもいい腕をしている」

IS専門部隊か、見てみたいな。

どんな訓練をしているのだろうか？軍隊に興味はないが、ISの訓練方法とかには興味がある。

「そうだ、ならば体験入隊はどうだ。一夏ならば許可されるだろう」

体験入隊か……夏休みになったら、セシリアのイギリス行きと合わせてドイツにも行けるか？うーん、海外旅行か、学園に許可を取る必要があるかもしれないが、意外に大丈夫かもしれない。目的の国が積極的に説得とか、歓待してくれるだろうし。

「そうだな、機会があれば行ってみたいな。ドイツも観光してみたいし」

「そうか、ならば、上申しておこう。返答が来たら伝える」

「わかった」

「……一夏は、ラウラと仲が良いのだな」

(やはりISが話題だと、一夏は饒舌になる。姉を頼った私の判断は間違っただけじゃなかった)

箒、拗ねるな。

「すまない、ISのこととなると、つい我を忘れてしまう」

「むう、一夏のIS馬鹿」

ありがとう、褒め言葉だ。

「ははは、それは俺にとって褒め言葉だよ。と、朝食にしよう。時間गतつと混んでくる」

「わかった」

「了解だ」

と言うわけで朝食を摂る。

今日は何を食べようかな？ようやく、固形物が食べられるし、やはり和食にしよう。とくに食べたいものがない時は、和食が一番だ。

「一夏は、今日は和食なのか」

「筈は、相変わらずか」

「小さいころからの習慣だからな、私はこれでいい」

「ラウラは、パンとサラダ、フルーツか。栄養がありそうだ」

パンはクロワッサン、サラダはトマト、レタスにドレッシングをかけたもの、フルーツは、リンゴ、パイナップル、オレンジの一口サイズのもので、皿に盛り付けてあるものだ。結構ボリュームがある。

「しっかりと食べないと、力が出ないからな」

ラウラは、小柄で細身だが、同じ体型の鈴以上に力があるだろうし、軍で鍛えられているのだろう。前は抱きしめたら、すっぽり入ってしまうほど小さく感じたのだが、活動しているラウラは、前のような排他的な雰囲気がなくとも、鋭い雰囲気で、見た目より大きく感じる。

「うむ、それは同感だ。よく食べて、よく運動することが大事だと思うぞ」

「その通りだ。身体を作る基本だな」

にしては、この二人、全然体型が違うのだが、うん、まあ、個人差だよな。

回りを見渡すが、席はガラガラだ。食堂が開く時間ちょうどだからな、まあこんなものだろう。とはいえ、ちらほらと人が見える。俺達はすぐ近くの席に座った。俺の前に箒とラウラが座る形だ。

「いただきます」

味噌汁、焼き魚（鮭）、白米、卵焼き、緑茶。これぞまさに和食って感じの朝食だ。

久しぶりの固形物、口に含む、うん、うまいなあ。よく噛んで、じっくりと味わう。うまい。

「一夏、そんな顔をしてどうした？とくにいつもの和食セットと変わらないが？」

「昨日までの3日間、おかゆしか食べていないから、つい、な」

「そ、そうか。それは大変だったな」

箒、あれはつらいものだ。三食おかゆだけ、しかも味付けは塩だけだった。ああ、今日の昼食と夕食は何にしようかなあ。

「……………」

?ラウラがこちらをじっと見ているが、何なんだろうか?

「ラウラ?どうした?」

「その、箒だったか?私も使えるようになった方がいいのかと考えていた。一夏が嫁になった場合」

のことを考えると、使えるようにした方がいいか」

「箒か……シャルロットみたいに特訓するか?」

部屋で特訓したんだよなあ。持ち方を教えて、動かし方を教えて、ペットボトルのキャップとかをつかむ練習して、食事も箒で食べるようにして、集中的に訓練したんだよなあ。

そう言えば、一時期かなり上達したなあ。コツでもつかんだんだろうか?

「一夏が教えてくれるのか?」

「まあ、俺でよければ」



「む、私も手伝おう」

(二人だけにするのはまずい)

箒……別に對抗しなくてもいいのに、まあいいか。

箒は箸の使い方がとても綺麗だ。あまりに箸の使い方が汚い人と、食事をしていると気分が悪いからな。綺麗に使う方がいい。千冬さんも、箸の使い方は綺麗だったんだよなあ。部屋は汚かったが。

箒は姿勢も綺麗だし、セシリアのような気品ではなく、日本文化を感じさせるといっつか、武家の娘的な雰囲気がある。俺も日本人だからか、何気ないしぐさについて反応してしまうといっつか、綺麗だなと感じることがある。

ちなみに、オタ友の一人に自分の部屋で食事をしない、させない奴がいた。コレクションに少しでも汚れが付くと嫌だからだそうだ。部屋もすごく清潔にしていたが、そんな理由でかい！と一度突っ込んでしまったことがあった。

「そうだな、箒は箸の使い方がとても綺麗だしな。俺は、和食を食べる時に、箸の使い方があまりに汚い人とは食事をしたくないな。まあラウラやシャルロットは、文化の違いがあるから別に気にしないが」

「いや、嫁(予定)の言うことだ。篠ノ之、綺麗な箸の使い方を教えてくれ」

「わかった。日本人として、箸を綺麗に使ってほしいからな。協力しよう」

この二人は、こう実直的なところが似ているよなあ。うん、仲好きことは良きことなりってね。

「さて、食べ終わったな」

「うむ」

「完了だ」

「じゃあ、」「」「ごちそうさまでした」「」

さて、登校まで少し時間があるな。とはいえ、することはないし、早めに登校するか。

「俺はこの後、準備が終わり次第、登校するが、箒やラウラはどうする？」

「私も一緒に行こう。準備はすぐに終わる」

「私も同行させてもらおう」

「そうか。なら、20〜25分後に寮の出入り口に集合だ」

「わかった」

「了解」

「じゃあ、また後で」

3人で雑談を交わしながら登校した。

それから予鈴が鳴るまで、セシリア、クラスメイトを交えて雑談をしていた。

雑談の話題は臨海学校のことだった。1日目は、各自用意した水着を着て、海で遊ぶことが許可されているので、土日に新しい水着を買いに行くとか、浴衣が着れるので楽しみとか、そんなことを話していた。

先ほど予鈴が鳴ったが、ただ一人登校していない生徒がいる。シャルロットだ。しっかり者で俺と一緒に部屋だった一カ月間も寝坊なんてしなかったのだが、何かあったのだろうか？

『プシュ』

「ま、間に合った！」

教室のドア（自動ドア）が開き、入ってきたのは、ミニスカから伸びる生足が、艶めかしい魅力を持っているシャルロットだった。

「おはよう、シャルロット。今日は遅かったがどうした？」

まだ、先生達が来ていないので、声をかける。

「い、一夏、おはよう。寝坊しちゃったんだ、あはは、ははは」

(言えない。夢の中で、一夏ともう少しであんなことしそうになつて、夜中に目が覚めて眠れなかったなんて、言えないよ)

まあ、詮索してほしくなさそうだから、しないでおくか。

『プシュ』

自動ドアがまた開いた。

入ってきたのは、高めの身長、黒髪、ピチっとしたスーツ姿が凛々しい女性。千冬さんだった。相変わらず美しい。

千冬さんが入ってきたのを確認したクラスメイト達は、雑談をやめ、ササッと自分席に戻っていく。それは俺とシャルロットも同様だった。

『キーンコーンカンコーン』

チャイム、本鈴が鳴った。シャルロット時間ぎりぎりだったんだな。

「さて、SHRを始める。遅刻、欠席者はいないようだな」

千冬さんは、教室を見渡して、手早く出席を取った。

「アクシデントにより、学年別トーナメントは1回戦のみだったが、それぞれに経験したものがあろう。連携で勝利した者、個人技

で勝利した者、敗北した者。だが、お前たちはまだまだひよつこだ。勝利した者は慢心せず、敗北した者は悔しさをバネに、それぞれ研鑽を積み。1年後、再び行われるトーナメントでその成果を見せられるようにしろ」

山田先生と違い、やはりこういう締めは千冬さんだな。クラスメイト達も、しっかりと千冬さんの言葉を心に刻んでいるようだ。…まあ、千冬さんが恐ろしいことも理由であるが…

「トーナメントの話はこれで終わりだ。次は来週から始まる、校外特別実習期間の話だ。各自、端末に記載してある必要な物をそろえ、忘れ物などはないようにしろ。それと、数日間だが、学校を離れることになる。IS学園の品位を落とすようなことはするな。外面だけでも装っている。自由時間も羽目を外しすぎないようにしろ。以上だ」

必要なもの……水着が必要だな。自由時間は海に行こう、と当然のごとくセシリアを筆頭に、クラスメイト達から誘われている。

俺も久しぶりに海に行くからなあ、楽しみだ。元の世界では大学に入ってから一度も海には行かなかったし、社会人になってからは、スキューバダイビングで一度だけ行ったことがあるだけだ。あいつらは完全にインドアだったからなあ。海にみんなで行くことなんてしなかったな。夏季休暇は土日含めて7〜9日間しか休みがなかったしな。

日曜日にも買いに行くか。そうだ、久しぶりに鈴を誘うか。鈴は俺に好意を抱いていないから、案配だろう。他の娘だと全員一緒に行くことになりそうだ。遊びに行くのならいいが、買い物も大人数でいくのは遠慮したい。

それに女性の買い物に付き合うのは勘弁してほしい。あれは面倒だ。千冬さんみたいに買う物を決めていて、即断即決ならいいのだ。

が、前の世界では、本当に面倒だった。デートなら、ぶらぶらする意味でウィンドウショッピングもいいのだが、買い物に付き合つてと言われ、ついて行つたら、すごい時間（携帯いじつてたら、電池切れおこすぐらい）待たされたとか、もうね、いい加減にしろ、と言いたい。というか言つてやったのだが。……ふう、この話も面白い。

とりあえず鈴を誘おう。俺は服とかのセンスは悪くはないと思うが、やはりファッション関係は女性に聞いた方がいい。鈴は一般的な女性のファッションセンスをしてるはずだから大丈夫だろう。

あ！それと篝の誕生日プレゼントを買わないといけない。これはもう買うものは決めている。白式のデータでお金があるので、香水（ブランドものだが学生用の5、6千円もの）とリボンに決めた。これは、土曜日に買うことにしよう。さすがに他の女性と一緒に、好意を持ってきている別の女性へのプレゼントを買うのは駄目だろ、男的に考えて。

しかし、7月7日が誕生日とは、なかなかおもしろい。最悪な誕生日はクリスマス、正月だろうな。中学の時、友人に正月が誕生日の奴が1人いたのだが、祝いごとのイベントと誕生日を兼ねているせいで、他人より損だと冬休みが近づくとたびに言っていた。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

静寂さんが質問した。

静寂さんは弁当を作るので、朝早くに起きる。今日も俺達が登校してから、すぐに教室に入ってきた。以後は一緒に雑談していた。

静寂さんやのほほんさんは比較的よく話すクラスメイトだ。  
のほほんさんとは、夕食時によく合う。休みの日も俺が訓練から帰るころに、学校から出てくるのほほんさんとよく鉢合わせする。のほほんさんは生徒会に所属しているので、生徒会の仕事を放課後や休みの日もこなしているらしい。ぼけぼけとしていて癒し系なのだが、実はしつかりものなんだろうか？  
と、今は山田先生の話だな。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は、私が今日1日は代わりに行う」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行っているんですか！？いいな」

「ずるい！私にも」

「あー。泳いでるのかなー。」

なるほど、山田先生がシャルロットのことで鬱っていたが、出張の予定があつたからか。忙しい時期に仕事が増えたんだから、社会人経験が少ないとああなるのも無理はない。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行ってるんだ。遊びではない」

『はい』

そろって返事をする大半のクラスメイト達。このノリ、まさしく学生だ。

## 25 (後書き)

原作3巻目に突入しました。

いつも応援、感想ありがとうございます。

応援、感想を読むとモチベーションが上がるので、助かっています。

また、誤字の指摘もありがとうございます。

そして、毎度誤字があつてすみません。

これからもD・ISをよろしく願います。



「はあ」

私、凰 鈴音は悩んでいた。

悩みの種は、学年別トーナメントの2週間ほど前、ラウラ・ボーデヴィツヒに惨敗したことだ。

中国代表候補生という地位は、私にとって目標などではなく、結果として手に入れたものだった。給料が入ってくるために、なつたら得する程度の認識だった。そして、一夏に会うための手段に変わっていった。

今はそれほど執着はしていない。しかし、だからと言って、簡単に負けてやるのは嫌だ。ましてや、あのような惨敗で、平気でいられるほど私は腐ってはいない。

私は、負けず嫌いなのだろう。だから、ラウラ・ボーデヴィツヒには雪辱を果たしたい。

しかし、いまの甲龍ではどうあがいても勝てないだろう。なにせ、通用する武器が1つもないのだから。

トーナメント前に届いた攻撃特化パッケージは、衝撃砲を2門増やし、弾丸を熱核で覆うことができるようにするものだ。連射性、面制圧力、威力が増すことになる。しかし、これは実体兵器の部類に入る。弾丸自体は防がれてしまうのだ。これでは、勝てない。

「はあ」

……今は仕方ない、か。しばらくはお預けだ。ドイツのIS、A ICについては報告しておいたので、次のパッケージは対ドイツを目標にして作られるので、それを待つしかない。

よし、切り替えよう。来週の臨海学校のことを考えよう。

クラスメイトは海に行くのが楽しみだと話していた。私は……それほど楽しみではない。なぜなら、胸が、胸が、く、くそう。

この学園の生徒は顔で選んでいるんじゃないかと思うくらい美形の娘が多い。そして、スタイルがいい娘も。私は、クラスで底辺を争う存在だ。……はあ。

水着は一人で買いに行こう。サイズがばれるだけでも嫌なのだ。

……………帰るか。

私は、生徒の大半がいなくなった教室を出ようとした。

『プシュ』

教室を出ようとしたら、ドアが開いた。

平均以上の身長と、上の中から上の中ぐらいの美形顔、背はまっすぐ、落ち着いている、気遣いができる、ISは素人だったくせに、公式戦では専用機持ちに今のところ無敗という強さ、評価が高得点な奴、織斑一夏が入ってきた。

幼馴染だったが、再会したが一夏は記憶喪失になっていた、その後紆余曲折を得て、現在は友人という形で落ち着いている。

一夏はそれなりに鈍感だが、一定以上の好意がある娘（友人である二人とか）は、好意に気づいて放っているらしいが、どうやら事情があるらしい（ある理由で振ったが、以後も思い続ける形らしいと聞いた）。

友人二人以外（好意や憧れ、アイドル感覚の女子達）には一定の距離をとっているあたり、本人もそれなりに意識しているようだ。

私は一夏に異性を感じていない。いや、少しは感じているのだが、そこまで強くないので、一夏もそれを感じているのか、友人二人とは違った距離だが近くにいます。

ある意味一番近い距離にいるのは私なのかもしれない。ちょっと嬉しい。昨日は、『今流行していることって何なんだろう？』とか携帯で話していた。どうやら、ISの訓練ができなくなっていて暇

らしい。

一夏が怪我をしたあの試合を見ていたが、一夏は強かった。私と戦った時以上に成長している。恐ろしい奴だが、それもわかる気がする。だってこいつはIS馬鹿だからだ。こいつとはよくISの訓練を一緒に行うが、よくもまああれだけ熱心に行えるものだ。あの熱意があれば、異常なほどの成長も頷ける。

この教室には一夏の知り合いは私しかいないので、私に会いに来たのだろう。しかし、教室まで来るなんて何のようなんだろうか？

「鈴」

「一夏、何の用？」

「ちよつと、相談があるんだが」

「なんか、大事なこと？」

「いや、日曜日に買い物に付き合っただけだし、頼む」

「何買うの？」

「水着」

「いや、水着ぐらい自分で選べば？」

「昨日気づいたんだが、俺はどうやら世間の流行に疎くなったり、常識が鈍っているのかもしれない。この女だけの学園で生活しているのと、ISに集中しすぎたのかもしれない」

なるほど、昨日の話で気になったのか。

別にそれはいいのだが、私も水着を買いに行こうと考えていたのだ。どうしよう?……よし、スタイルがいいクラスメイト達と買っていくよりはましだろう。それに、一人で買いに行くのは寂しすぎる。

「じゃあ、ショッピングモールに行きましょう。服はああいうところを買った方がいいわ」

「わかった。お礼に何かおごるよ」

「なら、ショッピングモールの中のデザート専門店でおごりね」

そういえば、やけ食いをしていなかった。ちょうどいい、甘いものを食べてストレスを発散しよう。その後で運動すればいい。幸い私は太りにくい。(代わりにまったく成長しない……)

「わかった。じゃあ、日曜の14時に寮の前に集合。これでいい」

昼食は少なめに取ることにしよう。

「ん、わかった。なら日曜の14時に寮の前に集合ね」

「じゃあ、俺はこれで帰るが、鈴はどうする?」

「いや、遠慮しとく。私はちょっと駄弁ってから、帰るから」

それに、窓から4人がこちらをじーつと凝視している。なんか増えてない?1人は実は女だったシャルロット、もう一人は、あのラウラ・ボーデヴィツヒだ。なんであんなにたんだろうか?噂によると、昨日、いきなりディープキスして嫁にする宣言をしたらしいが、

本当なのだろうか？……日曜日に一夏に聞いてみよう。

「わかった、じゃあ、また日曜日」

「じゃあね」

一夏は4人に囲まれて帰って行った。  
っと、気づくとクラスメイト達が私をじっと見つめていた。

「な、何？」

「鈴音さんって、織斑君と仲いいよね」

「そうそう、日曜のことってさ、デートみたいなもんじゃない？」

「だよー」

「うらやましい」

デートって、そ、そんなわけないじゃない、そ、そう、ただ買い物に付き合っただけで、そのお礼でおごってもらっただけよ。

「違っつて、私、みんなみたいにあいつに憧れとか持ってないし、異性としては興味ないし」

「とかなんとか言っちゃって、実は、みたいなの」

「ありうるよね、あの織斑君なら、コロっと墮とされちゃいそう」

う、そりゃたまたまにドキッとするけどな。

「ないないって」

「えー？」

「そうかなー？」

私を見て、にやにやと笑うクラスメイト達。そりゃ、今の一夏もちょっといいかなー？とは思っけどさ。ってああ、ちがう、何をその気になってるんだ私！

あいつは友達、それだけなんだから。

土曜日、千冬さんの部屋を掃除した後で、箒の誕生日プレゼントを買いに行った。

香水はラン　　のエ　　・　　・　　ジュ、30mlを、リボンは青いシンプルなものを買った。計1万円近くで済んだ。値段は前の世界とほぼ変わってないっぽかった。

ついでに水着以外に臨海学校で必要なものも買っておいた。今はその帰りなのだが、寮の近くで箒と遭った。

「箒、買い物？」

「あ ああ、臨海学校で必要なものを、一通り買って来た。一夏は？」

「うん」

さすがにここでプレゼントを渡すのは何か違うし、やっぱり当日って、当日は臨海学校じゃないか……まあ持って行って渡せばいいか。

(一夏に見せるためとはいえ、アレを買った後だと、恥ずかしい。駄目だ、一夏の顔が恥ずかしくて見れない)

「わ、私は荷物をまとめないといけないから部屋に戻る。それじゃあ」

「ああ、じゃあな」

箒は何か焦っているのか、早足で歩いて行った。何だったのだろうか? ?お手洗いとかかもしれないし。放置しておいた方がよさそうだ。

は、恥ずかしかった。

今日、私は臨海学校に必要なものを買うために、ショッピングモールに出かけた。初日は海で遊べるらしく、一夏もクラスメイト達に誘われて、海に行くことになっているようだった。だから、水着を買おうと思い、IS学園の学生向けの店に入った。

いろいろ選んでいたが、一夏に見せるためと考えていたら、かなりきわどいビキニを買ってしまった。

私は同世代の娘に比べて、胸が大きい。肩は凝るし、運動していると邪魔なので、小さい人がうらやましかった。しかし、どうやら一夏は胸が大きい女性の方が、異性として意識するようになるので、初めてこの胸に感謝した。

初めてISスーツを着て一夏の前に立った時、一夏の視線は一瞬胸にいつてから、すぐに逸らした。その後、一夏はあまり身体を見ないようにしていた。

異性として意識されていると感じたら、ドキドキして嬉しかった。先日に起きた、一夏の選ぶ発言は私に希望を感じさせた。だからこそ、姉を頼ったのだが、それだけで一夏に選ばれるわけではない、もっと私をアピールしなければならぬ。

前に一夏の料理を食べてから、密かに料理の練習を行っているが、なんとか味見しておいしいと感じるものを作れるようになってきた。もっと一夏に自分を知ってほしい。

そう思ったら、勢いでビキニを買ってしまったのだ。

一夏に偶然遭ってしまったが、下着と変わらない、いや下着より面積が少ないかもしれない、そんなビキニを持っていると思ったら、恥ずかしくなってしまった。つい逃げるように部屋に戻って来てしまった。

こんなので、当日私はこのビキニを着て、一夏の前に姿を現せる



のだからか？

……すごく無理そうだな。が、がんばろう。

26 (後書き)

ラウラの戦闘シーンが見れますね。うれしいです。

日曜日の午後、14時の少し前、俺は寮の前で、鈴を待っていた。それにしても熱い、もう夏だ。まだまだこれから熱くなると思うが、昔、子供のころを思い出す。あのころは30度で炎天下などで扇風機で涼しく感じたものだ。それが今は40度近い温度になるからなあ。温暖化は進んでいるようだ。

ちなみにこの世界では、すごい技術（笑）で温度は緩やかに下がっていつている。そりゃISなんて技術があるし、言っちゃいけないが、元は小説の世界だし……この話題は危険だ。やめよう。

「待った？」

「いや、全然。ちょっと先に来ただけだから」

5分〜10分前に行動するのは社会人の基本です。

「そ、じゃ、行こっか」

「ああ」

つかず離れずの距離で隣あつて、歩く。

今日の鈴の格好は、いつも通りのツインテール、薄い青色のシャツの上から薄い紫のようなピンク色の上着を羽織っている。下はズボンに黒いストッキングを履いている。陽に当たりにくい格好だ。

たしかに、今日はいい天気、悪く言えば日差しがきつい。女性なら一段と気を使うのだろうな。

俺は、白い半袖のシャツの上に青色の上着を羽織っている。下はスラックスだ。

半袖でも熱い。

「それにしても、熱いわねえ」

ダルそうに鈴が呟く。

「ああ、まだ夏に入ったばかりなのに、この熱さだ。今年の夏も暑くなりそうだ」

「はあ、熱すぎるのも問題よね。5月に転入してきたときが一番過ごしやすかったわ」

「それは同感、夏だからある程度熱いのは季節を感じさせるから、いいんだが、限度があるよな」

「でも、こう暑くなってくると、夏だって感じるわね。それに夏だって感じるって真っ先に夏休みを思い浮かべちゃうわよね」

ああ、懐かしい。そうだよなあ、小学生のころはもうすぐ夏休みだー、って日にちを数えていたっけ。いざ夏休みになるとあっという間に終わっちゃうんだよなあ。

学校のプールに行ったり、ゲームをしたり、旅行で海に行ったり、盆踊りとかで踊らずに、屋台に夢中になったり、思い出すなあ。

あ、俺は記憶喪失だから昔の思い出があっちゃまずいか。

「長期間の休みで浮かれるんだろうな」

「そうそう。それで、気づいたら、もう1週間になるんだけど、宿題が終わっていなかったりするのよね。……あ、あんたは、その」

「あー、いって、気にしなくても。それより昔どついつ風に夏休みを過ごしていたのか、教えてくれないか？」

「ああ、うん、わかった」

歩きながら、鈴が昔日本にいたころの夏休みの思い出を聞いた。大半が一夏と一緒に行動していたらしい。一夏の親友とその妹と一緒にプールに行ったりしていたそうだ。

「じいね」

ショッピングモール（レゾナンスというカッコいい名前）の中には女性専用のブティックみたいなちよつとお高い店があり、IS学園の生徒はそこで服を買うことが多い。のだが当然男である俺は一般の店で買うことになる。

ちなみにレゾナンスは駅と一体化している感じだ。ちよつと都会に住んでいる人ならわかってもらえるだろう。

IS学園の関係者や、それ以外でも電車に乗ればすぐに来れるので、ここはものすごく繁盛している。とはいえ、あまりに人ごみが多くなるので、人ごみが苦手な人は、少し離れたところにあるデパートを利用する。

店に入ってすぐに男性水着売り場に行く

「じゃあ、さつさと買いましよう……えーと……ん、これでいいんじゃない？」

鈴が選んだのは、薄い黒の生地メーカーか何かの文字があるトランクスタイルの水着だった。

特に変じゃないし、これでいいか。あ、あとサポーターも買っておこう。……もしもの時のためだ。

ちなみに1万円近い代金でした。水着って全然使わないのに高いよな。

「よし、ありがとう、鈴」

「別にお礼を言われるほどのことじゃないわよ。それよりさ、この後、その、私さ、水着を買いに行きたいんだけど」

「えーと、ここの店の女性用売り場で？」

「うん、その、まあ、いいじゃない。ついでよ、ついで」

なんか理由がありそうだが、聞かれたくなさそうだし、いいか。

「わかった。じゃ、どこで待ってればいい？」

「……一緒に来てよ。似合うかどうか見てほしいんだけど」

「うえええ！？なんでさ？」

「いや、さすがにそれはちょっと」

「いいじゃない。…それとも、あんたは私の水着姿は見る価値もないっていうの」

あゝ、何か、鈴が何を気にしているのかわかった。うん、これは深く聞くまい。本当はよくないが、断れなさそうだから、了承する。

「わかった、わかった。だからそんなに凄むな」

「う、わかればいいのよ」

ふう、何か後で気の利く言葉で、コンプレックスを和らげるか。確かに胸が大きいほうが、俺や一般男性は好きだろう。しかし、鈴の抱きしめるとすっぽり腕の中に入れてしまう身体は、それはそれで魅力的だと思う。小動物をつい可愛がってしまうような可愛さと言うか、なんというか、とにかく鈴は鈴で魅力的だということ。これを、うまく言葉で伝えられればいいのだが。

「これと、これ、それとこれかな。サイズは、うう、これね」

女性用水着売り場に着くと、鈴は手早く水着を選んでいく。サンブルを3つ選び、それぞれ試着するようだ。

「じゃあ、感想聞くからね」

試着用スペースに鈴は入っていった。

しかし、女性用の試着用スペースの前で待つ、男。これじゃ、まるでカップルみたいだな。さすがにこれはあの4人にはれたら、言い訳できないような気がする。ま、まあこんなところで偶然遭うわけないし、大丈夫だ。

「ちよつと、そのあなた。これ、片づけておいて」

別の試着用スペースから出てきた女性が水着を渡してくる。

明らかに女である自分は偉いと勘違いしているタイプの人だ。俺はモンスターペアレンツにからまれた教師のようだ。

「すみませんが、連れの女性が居るので、お断りします」

「はあ！男が女に逆らうって言うの！ふざけんじゃないわよ」

明らかに異常レベルMAXのタイプだ。このタイプは同じ女性からも嫌われているぐらい偏見がひどい。しかも不細工だし。

「あんた、私の連れに何してんの」

鈴が試着用スペースから出てきて、仮称、勘違い不細工に凄む。

水着に着替え終わったらしい。

スポーティーなタンキニタイプ。小柄だが、フットワークが軽くて活動的な鈴に似合っていると思う。

「ふん！あんたの躰がなっていないから、私が躰けてあげてるのよ」  
「！」

「はあ、そんなことあんたに関係ないでしょうが！」

「男のしつけをするのは女の義務よ。あんたみたいな子供のために教えてあげてるんだから感謝しなさい」

「うわあ、もうこれ　　ガイレベルだろ。どっかに隔離して欲しい



くらいだ。

「はん、私、ISの中国代表候補生だけど、あんたはIS操縦できるの？」

「な、わ、私は…、か、関係ないでしょ！大人が子供に教えてあげてるのよ！口答えしないの！」

『ブチッ』

「女性が優遇されてんのは、私達ISを操縦できる女性がいるからでしょうが！ISを操縦できないあんたが偉そうにするな！」

あ、鈴が完全に切れた。鈴は、大人だからという理由で偉そうにしている人間が大嫌いだそうだ。さすがにこれ以上はまずい、止めるか。

「調子のってん」そこまで

鈴の前に立ち、鈴が女性を見えないようにし、また女性から鈴を隠す。

「鈴、問題を起こすと厄介だ。それと、あなた、中国代表候補生と問題を起こせばどうなるか、わかりますよね？」

「ぐ」

「わかりましたね。なら、ここで終わりです」

「……ふん！」

鼻で荒く息をしながら勘違い不細工はどこかに行った。  
全く、災難だった。

ああ、鈴がフラストレーションが発散できずにいて、今にも爆発しそうだ。

「鈴、助けてくれてありがとう。それとその水着似合ってるよ」

クサイセリフだが、効果はあった。

「…ありがとう。はあー、あんたは大人よね」

「あんなゴミのことなんて考えるだけ無駄だ。それに、今の俺は世界でただ一人の男のIS操縦者だからな。問題が起きても、もみ消されるどころじゃないだろ。あの勘違い不細工は、最悪の場合塀の中か隔離でもされたんじゃないか？」

勘違い不細工を覚えているだけでも、俺が損してる感じがするだろ。美観的に考えて。

「ぷっ、勘違い不細工って」

「いや、それ以外に表現できないだろ」

「あはははは、確かにそうよね！」

そう、あんな奴のことは早く忘れるに限る。

「そうね、あんな奴のことは忘れましょ。んじゃ、次の水着に着替えるから」

「わかった」

3つの水着（タンキニ、ワンピース、セパレート）に着替えた鈴を見たが、一番似合っていると思ったのは、タンキニタイプだ。やっぱり鈴は活動的な格好が似合うと思う。

「最初のタンキニタイプのが一番似合ってたと思う」

「じゃあ、これにしよう」と

感想を伝えると、あっさりとタンキニタイプに決めた。

「あー……ちょっと聞いていい？」

（恥ずかしいけど、思い切って聞いてみよう）

「何？」

早くここから出たい。さっきの騒ぎのせいで、店員や数人の客が

こちらを見ているし、っていつか店員、さっきの騒ぎに気づいてたのなら助けるよ。

「その、さ、やっぱり、女は胸が大きい方が魅力的なのかな？」

ああ、やっぱり気にしてたんだ。

もう直球で伝えよう。早くここから出たい。

「たしかに、大きい方が魅力的に感じることが多い。でも、前に鈴を抱きしめたとき、すっぽり腕の中に入ってしまう身体がすごく可愛いと俺は感じた。それぞれ魅力があるんだから、鈴はそのままでもいいと思う」

まるで口説いているようなセリフだが、鈴があまりにも気にしているし、言うしかないだろ、友人的に考えて。早くここから出たいのもあるが。

（あ、やば。キュン、ときた。私は幼馴染の一夏が好きだったはず、でも、もう会えないと理解してしまっているから、少しずつ思いが薄れていく。でも、今の一夏はすぐそこにいてじわじわと、うっ、どうしよう、これってやっぱり、恋してるかも）

「あ、ありがとう」

「だから、あまり気にしない方がいい」

「わかった。もうちょっと自分に自信を持つてみる」

（それに、胸が小さくても今の一夏は気にしないんだよね。これは嬉しいかも）

ふう、どうやら胸のコンプレックスは弱くなったようだ。めでたしめでたし。だから早くここから出よう。

「はあ、こんなところで何をラブコメしているか、馬鹿者」

千冬さんの声だ。

声がした方を見ると、頭を押さえた千冬さんと顔を真っ赤にしている山田先生がいた。

## 27 (後書き)

アニメは(原作もですが)シャル優遇されすぎですよ。可愛いからいいんですが。

早くラウラのデレが見たいです。

「その、ですね。恋愛をするのは構わないんですが、このような場所ではちやつくのは、他のお客さんに迷惑ですし、IS学園の品位を貶めることになりますので、自重しないとダメですよ」

顔を赤くしながらも俺達に説教をする山田先生。

「すみませんでした」

確かに、あれはいちやついていたと思われるな。早く出たいからとテンパっていたせいで、あまりにもアレなセリフを吐いていたかもしれない。

もうどうでもいいか、何かもう強制イベント突入って感じだしなあきらめよう。

「ところで、山田先生と千冬さんはどうしてここにいるんですか？」

「私達も水着を買いに来たんですよ」

ブティックみたいな店に行けばいいと思うんだが、どうしてこの店に来たんだろうか？

「千冬さんが、めんどくさいからここでいいと言ったので、こちらの店に来たんですよ」

よほど顔に出ていたのか、山田先生が俺の疑問に答えた。

「どこで買おうと同じだ。それにこちらは学生が少なくて静かだし

な

ああ、だからめんどくさいってことなのか。それに先週は忙しかったのも理由だろうな。

「其処でコソコソしている奴ら、出てこい」

あらぬ方向を向いて、問いかける千冬さん。

「タ、タイミングを計っていたのですわ」

「そ、そうタイミングがつかめなくて」

千冬さんの視線の先にある、服がずらりと並べてかけてるところから、セシリアとシャルロットが出てきた。どうやら俺と鈴を尾行してきたらしい。全然気づかなかった。

「全く、お前たちは。はあ、あまり問題を起こしてくれるな」

頭を押さえて、嘆息する千冬さん。

セシリアとシャルロットはシヨボーンとしていた。

「すみません」

「さっさと買い物を買わせて退散するでしょう」

確かに、なんか注目の的って感じた。人が少なくて助かったな。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので、鳳さん、オルコットさん、デユノアさ



ん、ついてきてください」

山田先生が有無を言わず、三人を連れてどこかに行ってしまった。

もしかして、俺と千冬さんに気をつかったのだろうか？しかし、俺と千冬さんは別に仲が悪いわけでもないし、なんでだろう？……まあ、あの山田先生のことだから特に深い理由はないだろう。

「……全く山田先生は余計な気を遣う」

なんか理由があるのか？

「一夏。どっちの水着がいいと思う？」

千冬さんは、専用のハンガーにかけられた白と黒のビキニを見せて、俺に問いかけた。

どっちも似合うと思うが、大人の女性である千冬さんは、個人的に黒が似合うと思う。白のビキニよりも、意外性がある白のワンピースで色気と清楚さを兼ねる姿とか見てみたいが、それはいつかの機会に取っておこう。きつとこないと思うが。

「黒の方ですね。大人の女性としての色気がありますし、スタイルのいい千冬さんなら、なおさら見映えすると思います」

「そうか、ならばこちらにするか」

千冬さんは、白い方の水着をかけてあつた場所に戻した。

「それにしても、モテモテだな一夏。あのボーデヴィットですら、お前の前では恋する乙女になると聞いたぞ」

「ラウラは、いい意味で純粹ですよ。天然と言ってもいいですけど。まああの天然も度が過ぎていなければ可愛いと思いますよ」

「そんな風にあいつを変えたのはお前だぞ。それに、篠ノ之やオルコット、デュノアもか、どう責任をとるつもりだ？」

顔が笑っているので、冗談で言っているのだろうが、責任か……。

「あー、それは、んー……」

千冬さんになら、あのことを話してもいいかな？まあ簡単な概略だけならいいか。

「実は、あの4人、同じクラスの専用機持ち+篝の中から一番好きな人を1年後の4月1日に選ぶと宣言したんですよ」

「ほう、それはまた。思い切ったことを、しかし……」

（それは、いずれ確実に一夏が他の女のものになるということか？……それは駄目だ。いや駄目ではないが、しかしあの1年間のような生活は二度とできなくなると思うと、駄目だと言いたい）

「何ですか？」

ピクピクと眉が動いて、プレッシャーを感じる。

「いや、お前が出した答えなら、それでいいと思うぞ」

（ふう、かつて弟だった存在で、今は弟みたいな家族、か。私はこ

いつにどういふ感情を抱いているのだろうか？弟？家族？異性？弟だと答えたいが……ふっ、こつまで執着してしまうとな………これでは学生達のことを馬鹿に出来んな）

「では私は、支払いに行ってくる。おまえは外で待っている」

「わかりました、では」

あー、これはこのまま千冬さんと一緒に行動すればいいのか？すまん鈴、おごるのはまた今度にしてくれ。

心の中で鈴に謝りながら、俺は1時間に満たない時間でイベント満載だった店から出た。

「ラウラ、一夏と鈴が一緒に出かけるのを見たって、のほほんさんからの情報が入ったよ」

「む、鳳とか？しかし私達以外で、一夏に明確に好意を示している人間はいないはずでは？」

「そうだけど、もしもがあったらじゃ駄目なんだよ。もしもいい雰

困気になるようなことがあれば、乱入するよ」

「……了解した」

「あら、奇偶ですわね。わたくしもご一緒させていただきますわ」

「うん、いいよ。じゃあ、いくよ。目標は一夏と鈴がいい雰囲気になつたら阻止すること」

同室になり、常識に疎いのであろう私の世話を焼いてくれるシャルロットに連れられ、セシリア（セシリアでいいと言われた）とともに私達は織斑一夏と凰鈴音を尾行していた。

シャルロット、セシリアの二人は、凰は一夏のことを異性として好意を抱いてはいない、と言っていたが、あれはどう見ても、恋人同士に見える。

実際の距離はつかず離れずだが、話をしている二人は自然体に見えた。おそらく、価値観が似ているのだろう。どちらも日本の中流階級の常識を持っている。だから話が合うのだろう。

確かに一夏は凰のことを異性として意識していない。凰が一夏に明確な好意を抱いていないので異性として意識していないのだろう。あれは他人からデートに見えてもただの買い物なのだろう。

しかし、だからと言って、あれは許せない。が、ここで何かことを起こせば、一夏に迷惑がかかる。それに、今の状況では一夏が凰に好意を抱くわけがないし、凰も同じだろう。

許せないが、様子見だ。

「一夏さん、浮気ですか？後でおしおきですわよ」

「一夏、浮気なの？ふふ、ふふふふ」

この二人、あまりのカップルぶりに理性が飛んでいる。いや、尾行を続けられる程度には残っているのか。たしかに、一夏には何か罰が必要だが、この二人と同じ行動をしていては一夏との距離が近づくことはないだろう。ここは、私だけ寛大な態度で許してやれば、二人よりも印象が良くなるはずだ。

『!~~~~~!』

『~~~~~!』

む、一夏達は揉めているようだ。

どうやら、男性蔑視がいき過ぎた女にからまれているらしい。

私達が出ていったら余計にこじれるだろう。私はISで威嚇するぐらいしか対応ができない。そしてこういう時に頼れそうなシャルロットは、完全に頭に血が上っている。

「あの女、一夏さんにあんなことを！何様のつもりですの！」

「うん、殺っちゃおうか」

さすがにここで出ていくのはまずいだろう。二人を止めないと。

「待て、ここは」

む、女が店を出て行った。どうやら一夏が対応したらしい。こういうトラブルも冷静に対応できるとは、さすが私の嫁（候補）だ。

そして、凰が水着の試着を再開した。

しばらく、見ていたが、凰の水着を選び終わった。そして一夏と凰は何か話している。

なにか、甘い雰囲気漂ってくる。

「なにやら、いい雰囲気になっていきますわね」

「セシリア、乱入しよう」

「ええ、いきますわよ。シャルロットさん」

二人が一夏達へ近づいていく。私も一緒に行った方がよかったか？  
…む、一夏とシャルロット達の反対側から近づいてくる二人は、  
教官と山田先生か。出ていくのはやめた方がいいか。

離れたところから見ていたら、山田先生にシャルロット、セシリア、鳳が連れて行かれた。

残ったのは、一夏と教官だけ。どうやらこのミッションは完了したらしい。とはいえ、今店を出ようとしたら、二人と鉢合わせしてしまう。

仕方ない、水着でも見ていよう。

…そういえば、私は水着を持っていなかった。しかし学園指定の水着があるし、買う必要はないだろう。

『ラウラは……純粹………可愛い………』

『ボンッ』

不意に聞こえてきた一夏の声に私の顔が熱くなった。鏡を見れば真っ赤になっているだろう。

か、可愛い、私が純粹で可愛い……一夏は私のことそう思っていたのか。……嬉しい、嬉しいぞ。

こ、これは誰かに、クラリツサに自慢、いや報告しなければ。  
私は、プライベート・チャンネルを開いた。

『受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

『わ、私だ……』

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、なにか問題が起きたのですか？』

私は現在の状況を、どもりながらも伝えることができた。

『隊長、チャンスですね』

『む』

『隊長は少なくとも嫌われてはいない、いや好印象を持たれていると思います。いきなりディープリキスしたことで積極性は伝わったはずです。ここでは包容力があることを印象付けましょう。尾行に加わっていたことを正直に話し、嫉妬したことも話してから、でも仕方ないから許してやるぞと言えば好感度はアップです。この選択肢で、他の娘より一歩リードできるはずです。（織斑一夏の人間性から、似たようなタイプの攻略対象と照合し判断できる）それに、日本には浮気は男の甲斐性と言言葉があります。女は寛容でなければいけないということでしょう』

『了解した。しかし、浮気はしてほしくないぞ』

クラリツサも言っているし、私の判断は間違っていないかったな。しかし、浮気は嫌だ。

『ならば、それも正直に話しましょう。隊長の属性は、変則素直クール、軍人少女ですから、気持ちはいつも正直に言った方が良く思います』

気持ちはいつも正直に、か。『一夏、好きだ』を挨拶にでもすればいいのか？…駄目だ、改めて好きだと言うのは恥ずかしい。これはやめておこう。

『そう言えば、隊長。今は水着売り場にいるのですよね？』

『そうだ』

『水着はどのようなタイプを選んだのですか？』

『学園指定の水着でいいと判断したのだが』

『何を馬鹿なことを！』

『！？』

『たしか、IS学園では旧型スクール水着でしたね。それも悪くない。悪くはないでしょう。男子が少なからず持っているマニア心をくすぐると思います。しかし、織斑一夏はISスーツと言う似たような格好で見飽きているため、印象に残らないでしょう』

『ではどうする？』

『我に秘策あり、です』

私は、クラリッサに従い、とある水着を購入した。  
レジに持っていく時、すぐく恥ずかしかった。



現在、寮に帰っている途中である。

その後、セシリア達と一緒に尾行していたらしいラウラを含めたみんなで、デザート専門店で、おやつをとることにになり、鈴含め、女子全員におごった。

千冬さん、山田先生の分も払おうとしたのだが、『学生が気を使いな』と言われたので、引き下がった。

女子達におごったのは、鈴とデートしてるようにしか見えなくて、二人が怒っていたからだ。

「一夏さん、わたくし、浮気する男は去勢してしまえばいいと思っ  
てますのよ。ほほほ（怒）」

「一夏、僕ね、愛人なんて作る男は去勢しちゃえばいいと思うよ。  
ふふふ（怒）」

うん、ゴメン。俺も浮気してるような気分だった。今後は女子と二人きりで出かけたりはしません。さすがに今回は、言い訳できません。すみません。

ラウラも同じように怒ると思っていたのだが、心ここにあらず、と言った感じだった。どうしたのだろうか？……そういえば、昨日の幕と似たような反応だったな。

しかし、千冬さん含め、女性はなぜ甘いものが好きなのだろうか？

千冬さんも一般の女性と同じく、甘いもの、デザートが好きだ。ただ、どちらかと言えばビターな風味が好みだ。チョコも苦めが好きだし、甘いものを摂る時はコーヒーを飲む。

前に、バレンタインデーのある週にチョコを渡されたので、ホワイトデーにクッキーを作ったのだが、食後にコーヒーを飲みながら、ポリポリ食べていた。その前のクリスマスにもケーキを作ったのだが、これもコーヒーを飲みながら、パクついていた。

人が近くにいると見せてくれないので、盗み見ていたが、少し笑顔になってデザートを食べるのだ。あの時は、千冬さんがすごく可愛く感じたなあ。

…おっと、考えていたら、寮についてしまったようだ。

「おまえら、臨海学校で今日のような真似はするなよ」

「じゃあ、先生たちはこれで」

そう言って、千冬さん達は先に寮に戻っていった。

「一夏、今日は楽しかったわよ、じゃあね」

「一夏さん、夕食は一緒に摂りましょう。では、また後ほど」

「一夏、夕食は一緒に摂ろう。じゃあ、後でね」

「一夏、その、私は……いや何でもない。夕食は一緒に摂るぞ。ではな」

（水着のせいで、恥ずかしくて、何も話せなかった。いや、落ち着いてから、駄目だ、この機会を逃せば話せなくなりそうだ）

「わかった。じゃあ、また夕食の時に」

ふう、今日はイベント満載で疲れたな。まあ、同じくらい楽しかったが。

さて、明日の準備をもう一度確かめるか。昨日準備しておいたの  
で、後は水着だけの状態だったが、もしかしたら忘れ物があるかも  
しれないしな。

っと、呼び鈴がなった。誰だろうか。

ドアを開けると、ラウラがいた。

「一夏、その、先ほどの鈴と二人で出掛けた件なのだが……」

う、まだ蒸し返すのか？

ラウラがうつむいてるため、どのような表情をしているのかわか  
らない。怒っているのか？

(正直に、話す。正直に、話す)

「その、尾行したのは悪かった。だが、別の女と二人きりで出かけ  
るお前を見たら、身体が行動していたんだ。お前は私達のことを考  
えてくれていることはわかるが、その、浮気するようなことは、で  
きればやめて欲しい。私はきつとすごく嫉妬してしまうから……」

う、いくら好意を抱かれておらず、友人だと言える鈴とはいえ、  
二人きりで買い物に行ったことへの罪悪感が湧いてくる。

同時に、背が低いため上目づかいで俺に話すラウラがすごく可愛  
く感じる。

「う、その悪かった」

「こ、今回のことは許すが、次は私もどうなるかわからないぞ」

「わかった」

「で、では、私はこれで失礼する」

やべえ。ちょっとドキツとした。

箒やセシリア、シャルロットのようなお色気イベントがあったわけではないのに、ラウラがなんかすごく可愛く感じる。

……うん、シャワーを浴びよう。

ISの訓練が行えなかったことや選ぶ宣言のせいで、思考が恋愛モードに入っている感じがする。

来週、臨海学校から戻ってきたら、ISの訓練を集中的に行つて感を取り戻そう。

……あ！臨海学校つて、ボスみたいなやつと戦うじゃないか。すっかり忘れていた。いや最近は恋愛モードのせいで、思い出す暇がなかったんだ。

…ボスカ、おそらく出てくるだろうな。俺が原作から乖離しすぎてる行動、たとえば人を殺したり、失踪したりしなければ、原作とほぼ同じ状況が発生する。

仮称 ボスが来るのは間違いないだろう。

どうしようか？もう1週間ほどISを動かしていないぞ。これで戦闘できるのか？……何とか、やるしかないか。

いつもこれだが、今の俺はIS学園の生徒とはいえ、学生だし、世界を革新できる力とか持っていないのだ。その時その時、全力で戦うしかない。

とりあえず、明日は楽しもう。

そして戦うことになったときは、躊躇せず、戦闘に集中する。

俺と白式のを信じ、あきらめなければどうにかなる、どうにかできるはずだ。たとえ、千冬さんのような人が相手でも。

とはいえ、明日は海か…楽しみだ。

28 (後書き)

原作と乖離しすぎないように、似たような展開にオリを混ぜる。

一部セリフ、地の文が原作とほぼ同じようだったり、表現が似ていたりしてしまう。加減が難しいです。

4巻の夏休みは完全オリ展開になると思います。

「海っ！、見えたあ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスメイトが声を上げる。

臨海学校初日、天候にも恵まれて快晴。遠くに見える砂浜は綺麗なものだ。人がまばらに見える。この時期は、家族連れなど居ないし、学生も夏休みに入っていないので、今日はIS学園1年生専用のビーチになりそうだ。

もしかしたら、IS学園の生徒が来るので、人払いがしてあるのかもしれない。

「うわあ、綺麗な砂浜だね」

「わたくしが所有しているプライベートビーチには負けますが、いいところですね」

さすが金持ちと言うか、プライベートビーチまで持っているのかセシリア。

「そうだな、綺麗な砂浜だ」

現在俺はバスの一番後ろの五人で乗れる席の真ん中に座っている。右にセシリア、その奥に箒。

左にシャルロット、奥にラウラ。

このような順で席に座っている。

箒、ラウラはぼくとしている。昨日、一昨日に見た状態だ。席を決める時もこうだったので、席順はすんなり決まった。

移動中ずっとセシリア、シャルロットと雑談を交わしていたが、

簿、ラウラは話を振ってもろくに反応しないので、放置していた。とはいえ、このままの状態でいられるわけにもいかないなので、後で話をしよう。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

逆側の席に座っている娘と話していたり、席に半立ちになり後ろの娘と話していた娘たちがさっと、千冬さんの言葉に従った。相変わらず千冬さんは千冬さんだ。

それから数分で旅館に着いた。

やはり予算がすごいのか、高級旅館ではないだろうが、すごくきれいな旅館だ。それに大きい。

というか、毎年学園が使用しているなら、それだけでかなりの儲けになるだろう。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いします」」」

100名以上の生徒が一斉に挨拶する。なんか学生特有の懐かしいノリだ。

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元気があってよろしいですね。それではお部屋にどうぞ」

「部屋に荷物を置いたら、そのまま自由時間だ。端末に載せてあった情報通りに行動しろ。むろんわからないことがあったら、教師に聞け。海に行く際に着替える場所や食堂なんかの場所もわからなければ従業員のの方に聞け」



従業員に従って、旅館に入っていく。女将さんは、千冬さんのそばで何か話していた。

女将さんは、30代ほどの千冬さんには及ばないものの美人な人だ。千冬さんとは違った意味で色っぽい。と観察していたら女将さんと眼があつた。

「あら、こちらが噂の………?」

噂って、俺そんなに注目されているのか?毎年学園が利用している旅館だから、IS学園事情に詳しいのかもしれない。

「ええ、まあ。今年は1人男子生徒がいるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子じゃありませんか。しつかりしてそんな感じを受けますよ」

だつて中身は千冬さんと同じ歳だし。千冬さんのほうが精神は成熟しているけどね。

「それは、どうも。織斑一夏です。よろしく願いします」

とりあえず、眼があつたことだし、挨拶と会釈しておく。

「はい、じ丁寧にどうも。清州景子です」

女将さんは丁寧なお辞儀をする。やっぱり色っぽい。なんか京都でお水やってそんな感じた。

「まあ、何か問題を起こす奴ではないので、その点は安心ですが」  
（ただし、あの4人が絡めばどうなるかわからん。幸い同じ部屋だし、何も問題は起きないだろう）

「あら、織斑先生が信頼しているなんて、よほどしつかりしているっしょるのね」

うーん、くすぐったい。中の人的にも年下だし、それに、この女将さんはどんなに歳をとつても男を子供扱いしそうだ。そしてそれが自然に受け入れてしまいそう。

おっと、次は俺達のクラスが移動する番だ。4組から移動しているので1組は最後になる。

「では、次は自分たちが移動する番なので、これで」

「はい、当旅館を堪能して行ってくださいね」

中に入ると、和風と言った感じの旅館だった。そして外見同様綺麗にしてある。うん、絶対高いぞこの旅館は。

靴を収納して箱に鍵をかけて、スリッパに履き替える。

部屋に移動するんだが、俺の部屋は、千冬さんと同室だった。

個室だと、俺の身体（貞操ともいう）が安全ではないので、教員で家族の千冬さんと同じ部屋になったというわけだ。

うん、正しい判断だ。あの4人は、いつもの状態なら何も行動しないだろうが、テンションが上がったりして、夜這いと言うこともありうる。そして、俺もそのまま、致しちやいそうなのがもっとやばい。なのでこの判断は正しい。

「ね、ね、ねー。おりむ〜」

このゆったり癒し系ボイスはのほほんさんか。相変わらずダボダボな制服を着ている。そして、こちらに移動してくる速度がひどくゆっくりだ。

うん、癒される。

「おりむーって部屋どこ？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

その言葉で周囲にいた生徒たち全員の眼が俺の方を向いた。なにこれ、怖い。

「織斑先生と同じ部屋だ。教員で家族だから一緒の部屋になった。男1人の部屋じゃなにかとまずいと判断したんだと思う」

「ううー、いくら私でも、織斑先生がいる部屋には遊びになんていけないよ〜」

同時に、周囲にいた生徒が全員肩を落とした。さっきまで、生徒全員の眼が獲物を狙う眼だったぞ。怖い。

「というわけだ。何か変な行動を起こした奴は私が直にしごいてやるからな」

「……は……い……」

意気消沈。これしか言葉が浮かばない。

「では織斑、行くぞ」

「はい」

千冬さんについていき、生徒たちに割り振られた部屋とは離れた練にある部屋の前についた。

「この部屋だな」

中に入り、部屋の中を一通り確認していく。

広い間取り、外側の壁がなく窓になっている。窓からのぞく景色は海が見渡せる。

トイレ、バス、洗面所が全て個室になっている。浴槽も大きく、一人なら寝ていられるような大きさだ。

「いい部屋ですね」

「ああ、教師の特権だな、学生よりワンランク高い部屋だ」

まあ、この世界の日本は好景気だから、こういう贅沢もOKなのだろう。

「織斑、風呂の話だが、大浴場は時間交代となっていて、お前が使える時間は、女子が入る前の30分ほどの時間だけだ。3日間大浴場は男女両方とも、女性専用になっている。割り当てられた時間以外で風呂に入る場合は、この部屋のをええ」

「はい」

「では、これからは自由時間だ。好きしろ、と言ってもお前のことだから、海に誘われているのだろう?」

「はい、いろいろな人から」

アイドル的に扱われるのも、もう慣れたな。

「私達教師も連絡や確認などが終わったら、自由時間と言う名の監視があるからな。後で海に行くだろう。昨日お前に選ばせた水着を着ていくから、その、楽しみにしている」

「……はい」

千冬さんの水着姿、しかも昨日のあれか……やべ、すげえ楽しみなんだけど。

さて、俺は一足先に海に行きますかね。待つてる人がたくさんいるだろうし。ふう。」

「織斑先生、ちょっとよろしいですかー？」

「ぶっぞ」

山田先生がドアを開け、部屋に入ってくる。

「わあっ！織斑君！どうしてここに！」

相変わらずこのボケっぷり、安心の芸人気質だ。

「あっ、ついつい忘れていました。織斑君は織斑先生と一緒にお部屋でしたね」

「山田先生。これはあなたが提案したことでしょうか？浮かれて何か問題を起こす生徒がいるかもしれないんですから、しっかりしてく

「ださい」

「は、はい。すみません。がんばります〜！」

山田先生え……。仕方ない慰めるか。

「山田先生、仕事はできるんですから、もう少し自信を持てば、落ち着けるようになれますよ」

「織斑くん、ありがとね〜」

眼がうるうるしている。だが色気などを全く感じない、むしろすごくイジリたくなる。

「でも、いつものボケを見るのが実は楽しみだったり」

「はう〜」

ガクつと頭を垂れる。このリアクション面白いな。

「織斑、そこまでにしろ。山田先生、いい加減にしないと、怒りますよ」

「は、はい！わかりました！」

さすがに仕事の邪魔になるな、俺はさっさと海に行こう。

「じゃあ、俺はこれで」

「大丈夫だと思うが、羽目を外し過ぎないように」

水着やタオルなどを入れたバックを持って、俺は海へ向かった。

「箒もこれから海へ行くのか？」

「あ、ああ、そうだ……」

(う、これからあの水着を着ると言うのに、ここで一夏に会ってしまつとは……)

更衣室があり、海へ直通している別館へ向かう途中で箒と会った。相変わらず、様子が変だ。

しかし、もっと変なことが眼の前にある。

道端にウサギの耳が生えている。しかも『引っ張ってください』という張り紙がしてある。

旅館のイベントとか……じゃないよな、さすがに。

ならば、原作を思い出せば……ポクポクポク、チーン！無理だ、こんな細部まで覚えてねえよ。

篠ノ之束は、たしか、箒の専用機を持ってくるはずだから、これは違つだろつし……駄目だ。もういい、引っ張ってやる。そして、

詰まらんボケなら、ボケ殺しを実行してやる。

(たぶん姉の仕業だ、一夏と会わせるわけにはいかないのに、うう、駄目だ恥ずかしくて、一夏の傍に居られない！)

「箒、これ引き抜くぞ」

「わ、私は先に行くから！」

箒は足早に去って行った。顔が真っ赤だったが、一体何でああなっているのだろうか？俺が原因なのか？

と、まずはこれをどうにかしよう。それから箒に追い付けばいい。せーの！

ウサミミを引つ張つたら、地面からするつと抜けた。危うく尻もちをつきそうになった。

つか、これだけ？なんにも楽しくないんだが、これ。もっと驚くようなことをしないとリアクション取れないだろ。

「一夏さん？何をしていますの？」

「セシリアか、うん、何でもない」

なんか馬鹿らしくなった。もうどうでもいい。

『キイイイイン……』

ん？何か音が、どんどん近付いてく、るって、危なっ！。

『ドカーン！』



何か地面に激突したようだ。  
煙が晴れると、そこには人參が地面に突き刺さっていた。しかも  
デフォルメ調の。

「に、にんじん……？」

セシリアが呆然としながらも、口からそう漏らす。なんだ、この  
展開。もう、わけわからん。

「あつはつは！引つかかったね！いつくん！」

人參が真つ二つに割れて、中から人が 腰まである長い髪、たわ  
わに実つた巨乳、青と白のワンピースを着た女性、ぽやつとした美  
人が出てきた。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に  
撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶい  
ぶい」

なんか、某機動戦艦の艦長並のテンションだな、この人。つまり、  
変人。

「ってこの人誰だ？…って篠ノ之束だろうなあ、原作でも変人とし  
て書かれていたし。こんな人間が何人もいてたまるかってーの。」

「えーと、どなたですか？」

「記憶喪失つてのは本当だったんだねー、私を忘れてるなんて、悲  
しいなあ」

言いながら、俺の手にあるウサミミを奪い取り、頭に装着した。

「…どうやら記憶喪失になった前の知り合いっぽいですね」

「うーん、いつくんには聞きたいことがあったんだけど、篝ちゃんの用事を先に済ますかな？ 篝ちゃんはどこにいったの？ さっきまで一緒だったよね？ トイレ？」

「海に行ったのではないかと思いますが」

それより名前教えてもらってないんですが。

「この私が開発した篝ちゃん探知機ならすぐに見つかるからいいや、じゃあねいつくん！ 後でお話聞かせてもらおうから」

『ゾクリ』

うつ、今『お話』と言う言葉を聞いた瞬間、すごい悪寒に襲われた。なんか魔王と言う単語が脳裏をよぎったんだが、一体何なんだっただらうか？

篠ノ之博士（仮）は、ダウジングロッド型の篝ちゃん探知機を手にとどこかへ行ってしまった。

「い、一夏さん、あの方は一体何だったんでしょうか？」

「……か、考えるのはやめよう。うん。俺達は誰にも会わなかった」

うん、俺は水着に着替えに行こうとしたら、篝とセシリアに会った。それだけだ。

「で、ですが、部外者がここにいるのは……」

「それより、海に行こう。セシリアの水着姿楽しみだなあ」

「まあ、一夏さんつたらー！」

「じゃあ、俺は男だから、あっちで着替えてくる」

「では、また後で」

俺達の海はこれからだ！……ふう、なんか初日、しかもまだ午前中から疲れた。もう部屋で寝ていたい。ああ、千冬さんの水着姿が心のオアシスだ。

29 (後書き)

本日の更新は1話のみになります。

女子だけする会話が丸聞こえな女子の更衣室の前を足早で歩き、俺専用に使われている一番奥の更衣室へ移動する。

胸がどうか、水着が大胆だとかはいいのだが、無 がやばいとかは聞きたくなかった。

どうにか、更衣室にたどり着いた。

ささつと着替え、海へ移動する。

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！わ、私の水着姿変じゃないよね！？大丈夫だよね！」

「わ、わ。身体かっこいい。贅肉が全くないよ、鍛えてるね」

「織斑くん、後でビーチバレーしようよ」

もう、慣れたので、営業スマイルして対応しよう。

「いいよ。ただ、待ち合わせしている娘がいるから、また後で誘って欲しい」

「わかったよー」

しかし、どいつもこいつも、可愛いしスタイルがいい。アイドル養成学校でも通じそうだ。

特に外国産の方たちはきわどい水着を着ているし、日本人離れしたスタイルは反則だろう。

眼がいかないようにして、早足で砂浜に足を踏み入れた。  
熱い。

でも、懐かしい。海ってこんな感じだったなあ。

回りを見渡すと、ビーチには女、女、女しかない。しかも、全員水着で露出がすごい。これは、いつもと同じようにしていたら、ちよつとやばいかも、一部が反応しないようにしなければ。

ああ、男と一緒にいたら、男だけの馬鹿な話できたのに……。  
まあいい。さて、まずは軽く体操してつと、……………これでよし。

「一夏、何やってんの？」

後ろから声をかけられた。この声は鈴だ。

後ろに振り向くと、昨日選んだタンキニタイプの水着を着た鈴がいた。

しかし、一部が少ないため、安心して見ていられる。

「体操をしてた」

「真面目な奴ね。まあいいわ、じゃあさっさと泳ぎましょつよ」

鈴は…泳ぎが得意そうだ。障害物もないしな。

「ねえ、何か変なこと考えてない？」

む、勘づくとは鋭いな。まあいい。

「いや、さっき箒とセシリアに会ったんだけど、まだ来てないなと思つて」

まあ、女性は着替えるのに時間がかかるからしょうがないか。

「ふーん。あ、あれ、セシリアじゃない？」

鈴が更衣室の方を指さす。指の先をたどっていくと、ブルーのビキニを着て、腰に薄い青色のパレオを巻いたセシリアがいた。さすが外国、ヨーロッパ産だけあって、すごいスタイルだ。白い肌もシミ一つない。うーん綺麗な身体だ。

「だな」

「しかし、どうしてこう、あいつらは身体が……」

やっぱりあれを見せられたら、自信なんてなくなるよな。ちょっとフォローするか。

「鈴、昨日言ったこと忘れたのか？」

「う、わかったわよ。とりあえず気にしないことにする。せつかく海に来たんだし、楽しまないかね」

それに、鈴まであんな身体をしていたら、俺がどうにかなっていったと思う。鈴、俺の精神の安定のためにもそのままいてくれ。

「一夏さん、お待たせしましたわ。鈴さんも一緒にでしたのね」

「ばったり会ってね」

「と、ところで、一夏さん。ど、どうですか？」

セシリアは恥ずかしそうにしながらもポーズをとった。うーん、

やっぱり綺麗な身体だ。

「その水着似合ってるよ。ブルー・ティアーズで見慣れているけど、やっぱりセシリアには青が似合うよ。」

「あ、ありがとうございます。」

もじもじとして可愛い。今日は、何かみんな雰囲気がいつもと違うな。これが夏と海の魔力か……。

「あー、いい雰囲気のところ悪いけどさ。あれって箒じゃない？」

またまた鈴が更衣室の方を指さす。指の先をたどっていくと、黒いラインがある白のビキニを着た箒がいた。

セシリア以上の胸が、今にもこぼれ落ちそうなほどきわどいビキニだ。普段から運動をしているからか、無駄な肉（胸は無駄ではないのだ）がなく、セシリア以上のスタイルだ。16でこの肢体は原則だろ。

「ま、負けましたわ……」

「気、気にしない、気にしない」

二人はぶつぶつ言っている。それほど女として嫉妬を覚えるほど、箒はいいスタイルをしている。

視線をそらせないほど見惚れてしまう。

「い、一夏！そ、そのどう、だ？」

もじもじとしながら、俺に感想を聞いてくる。



「最高、かな」

「そ、そうかそうか、最高か。え？さい、ことう？一夏に、最高って、言われ、た……」

みるみる顔が真っ赤になり、箒は倒れた。

何とか、支えるが、箒、どうしよう？

……、とりあえず、セシリアが持ってきたビーチパラソルとシートを設置して、そこに寝かせよう。それと飲み物を置いておけばいいか。

「セシリア、鈴、箒が倒れた」

「はっ」

「えっ」

「たぶん、この水着を着るのにすごく緊張したんだろう。それでビーチパラソルとシートを設置して、そこに寝かせようと思うんだが」

「わ、わかりました。すぐに設置しますわ」

「わかったわ、手伝う」

テキパキと作業を行い、ビーチパラソルとシートを設置し、箒を寝かせた。

やっぱり女の子だからか箒は軽かった。そして、眼のやり場に困った。

「さて、俺は等を看てるよ。二人はどうする？」

「なら、私がひとつ走りして、飲み物持ってくる」

「頼む」

「じゃ、行ってくる」

鈴は風のように走っていった。

「セシリアはどうする？」

「そ、その……………い、一夏さん！サンオイルを塗ってください！」

「pardon?……………はっ、一瞬気を失っていた。」

サンオイルを塗るって、俺だって男だし、了承したい、が……………周囲の女子達の視線が俺に集中している。つまり、了承すれば、もれなく周囲の女子達にも塗るはめになる。

これは断った方がいいな。

「こ、これは！き、昨日の罰ですわ！」

う、そう言われると、塗らないといけない気になってきた。それに今ので、女子達も何かの罰ゲームとかそんな理由があると思ったのか。あきらめムードになっている。

「うーん、罰ゲームとかかな？」

「私も塗ってほしかったなあ」

「いいなあ」

聞こえない。俺にはなにも聞こえない。

「……わ、わかった。塗るよ」

「は、はい。ではよろしくお願いしますわね」

パレオを脱ぐセシリア、なんかストリップみたいで色っぽい。うう、さつきから、精神障壁ががりがり削られていく、このままじゃまずいことになりそうだ。塗り終わったら、絶対に海で泳いで煩惱を退散させなければ。

「さ、さあ、どうぞ」

セシリアはブラの紐を解き、水着を手で押さえながら、篝の隣に寝転んだ。

背中には何もなく、無防備な状態。弾力のありそうな胸は押しつぶされ、妙にエロい。そして、尻と太ももはこれまた凶悪だ。肉が付いているが太っているわけではなく、女性特有のムッチリした感じで、とてもエロい。そしてすらりと伸びた足は細く、普段タイツで守られている生脚は犯罪的なエロさだ。

この身体をむさぼりたい、心ゆくまで味わいたい……………はっ！煩惱退散。煩惱退散。煩惱退散。

よし、さつきと終わらせよう。

「じゃあ、塗るから」

手にサンオイルをたらし、セシリアの背中に塗っていく。

「ひゃん！？い、一夏さん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

前の世界でも経験したことがない。つい焦ってしまふ。

「悪い。こういふのは初めてなんだ。つい焦った」

「は、初めてなら仕方ないですわね。それに一夏さんがこういふことで焦っているなんて、ちょっと嬉しいですわ」

まあ、なんだかんだで中の人はすごく年上だしね。男女関係はいろいろ経験してるし。

言われた通り、手で温めてから塗る。

しかしこの、すべすべでいて吸いつくような肌は、危険だ。

うう……はあはあ、やばいもう我慢が……。

『ぬりぬりぬり』

よし、終わった。さあ海へ行くぞ。

「せ、セシリア、終わったよ」

「せ、せっかくですし、脚と、お尻もお願いしますわ」

脚と尻？脚と尻？脚と尻？うう、くぬう。

『プチン』（理性が切れる音）

……もう、いいか。小せえよな、理性とか、常識とか……。

「はい、そこまで」

頬に冷たいものが押しあてられた。  
はっ！俺は一体何をしようとしていた？

「一夏、ほら飲み物」

「あ、ありがとう」

冷たいスポーツドリンクを飲む。

……ふう、落ち着いた。鈴が来てなかったら、危なかった。もう少しでセシリアを襲っていたかもしれない。襲うなんて普通なら犯罪だ。しかし、あの4人は襲ったら、そのまま人生の墓場まで一直線だ。さすがにそんなことで『選んだ』ことにするのは嫌だ。

（もう、あと少しで一夏さんが手に入りましたのに。そ、それにわたくしだって恥ずかしかった。もう1度同じことなんてできませんわ）

「一夏、泳いできなさいよ。セシリア、私が塗ってあげるわよ」

（さすがにあれは阻止してあげないとね。それに、一夏を好きだ、とは自覚できないけど、取られるのは嫌なのよね。……はあ。ほんと、私の想いはどうなってるんだろう？）

「じゃあ、俺は泳いでくる。鈴、箸を看っていてやってくれ」

「わかったわ」

「では、鈴さん、お願いしますわ」

「じゃあ、塗るわよ」

「ひゃ！ちよ、ちよっとちゃんと温めてから塗ってくださいな！」

セシリアにサンオイルを塗っている鈴を後ろに、俺は海の中へ入っていった。

冷たくて気持ちいい。潮の匂いと塩の味がする。

久しぶりに入ったけど、海は楽しいし、気持ちいいな。

さて、泳ぐか。

### 30 (後書き)

はあ………現実で、自分がバカなせいで、酷い目に会いました。  
もうこのSSを書くことでストレスを発散します。

よって、昨日できなかったので、今日は2回更新します。

数分の間、海を軽く泳でいた。今はぷかぷかと浮いている。

先ほどのことを思い出す。

箒、セシリアのスタイルに見惚れ、セシリアにサンオイルを塗っているとき、理性が切れかけた。

俺だって、男なんだ。ましてやこの身体は16歳なので、もによもによが旺盛なのだ。

いつもは、精神的障壁を張って何とかそうゆうことは考えない、意識しないようにしている。が、たまに部屋で、発散することだっである。

今回はやばかった。

夏だからか、海だからかはわからないが、みんな解放的になっている。俺もそうなんだろう。

そして水着の露出度が高い、1週間ほど、ISで発散できていない、などの条件が重なり、今の俺は色気で誘われれば、理性が切れてしまうだろう。

これで『選んだ』ことになったら、全員色仕掛けをしかけてきたり、泥沼化する可能性がある。それは避けたい。

ふう、早くISを動かしたい。あと帰ったら、部屋でいろいろ発散しないと爆発しそうだ。

さて、理性も元に戻ったし、今の状態なら、先ほどの様にはならないだろう。みんなのところに戻るか。箒の様子を見に行かないと。

「あ、一夏。ここにいたんだ」

呼ばれて声がした方を振り向くと、シャルロットがいた。

そして、シャルロットの後ろには謎のバスタオル怪人がいた。



「その、バスタオルは何？」

「あはは、これはね、ほら、出てきなつてば、大丈夫だから」

『だ、大丈夫かは私が決める……』

バスタオルでいまいち声がわかりにくかったが、ラウラの声だ。

「もしかして、ラウラか？」

『そ、そうだ』

「あー、もしかして水着姿を見せるのが恥ずかしいのか？」

『そ、それは』

「……はあ、そうなんだよー夏。僕が手伝ったんだけど、全然変じやないし、大丈夫だって言ってるのに、もう」

無理強いしてさっきの筈みたいになつたら大変だし、残念だけど、ラウラが嫌なら仕方ないかな。

「そうか。まあラウラが嫌なら仕方ないんじゃないか？」

「えー、せっかく着替えたのにそれはないよ。ほら、ラウラ、ここで勇気を出さないでどうするの？」

『し、しかしな』

「まあまあ。さっき筈がすごい大胆なビキニを着ていたんだが、俺

に見せたのが恥ずかしくて気絶しちゃったんだ。だから、あまり無理強いしない方がいいと思うんだが」

『む』

「へえ、箒さんがそんな水着をねえ。それで一夏はどんな感想を？」

「最高、と」

「へ、へー。そんなにすごかったの？」

「同性からしたら、自信をなくすくらいには」

「う、確かに箒さんは学園でもトップクラスのスタイルを持ってるし」

『……………』

いきなりバスタオルが宙を舞った。

バスタオルが地面に落ちると、黒のビキニ、それもシースをふんだんにあしらった物を着て、長い銀髪をツインテール？をアップにした髪型のラウラがいた。

俺が見ているとわかると、顔を赤くさせて、もじもじしている。

普段の軍人的な雰囲気は全くなく、むしろ恥じらう姿が、ギャップにより凶悪的に可愛いと感じてしまう。

「その水着と髪型似合ってる。可愛いよ」

うん、でもこれなら、理性には影響しない。

それにしても可愛いな。この生き物。

「社、社交辞令なぞいらん……」

ラウラはぶいっつと顔を背けて言うが、顔が赤いし、照れていると分かる。

やっぱり可愛いな。

「いや、誰が見たって可愛いと思うよ。な、シャルロット」

「うん、僕もさっきから可愛いって誉めてるのに全然信じてくれな  
いんだよ。髪は僕がセットしてあげたんだ、せつかくだからおしゃ  
れしないとねって」

「なるほど。シャルロットもその水着似合ってるよ」

イエローの生地、ワンピースかセパレートかわかりにくいけど上下  
に別れていて、紐が背中クロスしている。箒には負けるが、セシ  
リアと同じ外国産の豊かな胸が見える。露出しすぎず、さりとして色  
気もある。

うん、適度に色っぽく、健康的な可愛さだ。

「そ、そう？えへへ」

シャルロットももじもじし、ラウラも同様なので、会話が途切れ  
てしまう。

「……………あ、そう言えば、箒の様子を見に行くんだった。一緒に来  
るか？」

「うん」

「ああ」

「じゃ、行くか」

俺は箒達がいる方へ向かい歩き出した。

ビーチパラソルとシートが設置されているところに戻ると、意識を取り戻した箒と、シートに寝転がっているセシリアがいた。鈴は箒が意識を取り戻したので、泳ぎに行ったようだ。

「箒、起きたか」

「一夏、さつきはすまなかった。その、この水着を着るのは恥ずかしくて…緊張して、つい」

「いや、その水着を誰のために選んだかわかるし、似合ってるし、いいよ」

やばいな、正視できない。

「そ、そうか」

(く、同じビキニだけど負けましたわ……)

(うう、同じ歳であるスタイルは反則だよ……)

(かわいい、かわいい、かわいい……)

「おりむらくーん！」

「「「あーそーぼー！」」」

先ほどビーチバレーをすると約束した女子と、一緒にいた友達。そしてなぜかのほんさんがいた。

ビーチバレーか、約束していたし、やるか。そして、その掛け声、小学生みたいだ。

「いいよ。じゃ場所取ろうか」

「あ、僕も一緒するよ」

シャルロットも参加するようだ。

「わたくしは、このままここにいますわ」

セシリアは不参加か。

「わ、私もここにいる……その、この水着だと運動はできない……」

確かにポロリしそうだ。

「……………」

ラウラはなんかおかしくなっている。

「ラウラ?」

「……………わ、私もここにいる……………」

ラウラも不参加か。

「じゃあ、5人でやるか。場所はあっちの空いてるところでいいんじゃないか?」

ということではビーチバレーの開始である。  
ネットを広げ、線を引く。

「じゃあ、始めようか?組み合わせはどうする?」

「そっちは織斑君、デュノアさんペアで、とりあえず1セットずつとかでメンバー交代でいいんじゃない?タッチは3回まで、スパイク連続禁止、キリのいい10点先取で1セット」

「OKだ。サーブはそっちからでいいよ」

「ふふふ、我が魔球を受けよ!」

ジャンピングサーブを打ってくる、スピードと角度がいい。バレー部とかだったたりするのかもしれない。

「任せて！」

シャルロットがレシーブし、ボールが宙に上がった。勢いが完全に消えている。なんでもそつなくこなすなシャルロットは。

俺はボールが落ちてくる地点へ移動し、ボールをネット際に落ちるようにトスを上げた。

「シャルロット！」

シャルロットは高くジャンプして、スパイクを放った。

「いくよ！そーれ！」

ブロックが間に合わず、コートに落ちた。1点先取だ。

「やるー！じゃ今度はこっちの番」

あれから、何度かメンバー交代をしながらビーチバレーをしていた。

動作が遅いのほんさんが足をひっぱたりしているので、ほぼ2

対2の状況で接戦だった。楽しむためにやっていたので、のほほんさんのプレイにいらつくことはなかった。むしろ、何かが癒された。なにより、のほほんさんは相変わらず着ぐるみのような水着？を着ていて露出が少ないので、その、乳揺れが見えないので、助かるのだ。

他の人、特にシャルロットなんかは、スパイクを打つ時ジャンプしているのも、もろに乳揺れが見えてしまう。見ないように視線を違うところへ向けるとボールも見えなくなるので、意識しないようにしてたら精神的に疲れた。

「ふう、結構な時間やってたね。そろそろお昼の時間かな？一夏は午後はどうするの？」

「うーん、昼食を摂った後は少し、休んでから疲れるまで泳ごうかな。その後はちょっと周囲を散歩しようかな、と思ってる」

「そっか、散歩するなら僕も一緒でもいい？」

「いいよ。でも、他のみんなもついてくると思っけどね」

たぶん間違いないだろう。

「ははは、そっだね」

（ちょっと残念だなあ。二人きりになれたらいいのに）

「おりむー、早くご飯食べよ〜」

おっと、のほほんさんが呼んでいる。篝達も誘わないといけいな。



「おっと、箒達も誘ってくるから、先行ってていいよ」

「わかったー」

「じゃあね織斑君」

「楽しかったよー」

のほほんさん達は旅館に戻っていった。

「じゃあ、箒さん達のところに戻ろっか」

「ああ、あ、織斑先生」

箒達のところへ戻ろうとした俺の眼に入ってきたのは、昨日選んだ黒のビキニを着た千冬さんだった。千冬さんも俺に気がついたのか、俺達の方へ歩いてくる。

「織斑、楽しんでるか？」

「はい」

「そうか、それは何よりだ。それでどうだ？」

水着の感想を聞いているんだろうな。

感想……女神さま？

長身だが、箒と同じく鍛えられていて、無駄な肉がない。そのためにすわりとしたスタイルがより凛々しく見える。大きな張りのあるだろっ胸の大部分が見えている。露出度が高い水着で大人の色気

が漂っているが、いやらしさを感じない。まるで女神のような肢体だ。ようなじゃなくて、女神でいいんじゃないかな、と思う。

「ブリュンヒルデ、戦女神とはよく言ったものですよね。女神みたいですよ。正直千冬さんのその姿は反則だと思います」

お世辞じゃないし、このセリフがクサイとか思えない。口が自然に褒めてしまう。千冬さんの水着姿はそれくらいの衝撃的な美だ。

「ま、まったく、口ばかり達者になりおつて……ふん、まあいい。褒められて悪い気はしない。では、私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらおうとしよう」

(真顔で言っている、本気でそう思っているなこいつは。まあ、悪い気はしないというか嬉しいな……まったく、こいつはどうしてこゝも女を墮とすポイントを的確に攻めてくるんだ)

確かに、女子だけとはいえこの集団をまとめるのは大変そうだ。

「おつかれさまです。じゃあ、俺達は箒達と一緒に昼食を摂ってきます」

「ああ、飯はうまいぞ。期待しておけ」

刺身とか、日本食だろうな。それも取れたたてで、高い食材のものがありそうだ。うん、楽しみだ。

千冬さんと別れ、俺達は箒達のところに戻っていく。

「織斑先生、すげーい」

「きれいだし、かつこいいよね。お姉様、素敵」

「私もあんな風になりたいなあ」

「さすがに努力してもあれは無理でしょ」

千冬さんを見た娘達は口ぐちに感想を言い合っている。っていうか褒め言葉しか聞こえない。その敵しさから恐れられているが、相変わらずの人気だ。

それに、あれはもう完成された美だ。きっと嫉妬する気も起きないだろう。それにしても美しかった。先ほどまでの色ボケが全て吹き飛んだ気がする。それほど鮮烈だった。

「一夏つて、織斑先生が好みのタイプなの？」

千冬さんの姿を脳内で反芻していたら、シャルロットが聞いてきた

「好みのタイプとは違うが、うーん、もし千冬さんと結婚したら円滑にやっついていけると言うか、幸せな未来しか想像できないくらいには相性がいいとは思ってるかな」

まあ、でも肉体的には実の姉だし、禁断の関係とかにはならない。たとえ千冬さんから迫られても俺は拒否……できなさそうだ。とにかく、そういうことだ。深く考えないようにしよう。

「うう、でも、織斑先生なら仕方ないかな。実の姉だし、禁断の関係とかはないよね？」

「さすがにそれはない」

シャルロットって結構むっつりなのか？禁断の部分で顔が赤くなつた。なんか変なことを想像してそうだ。

（でも、織斑先生は一夏を信頼してるし、一夏も織斑先生を信頼している。それに姉弟だからじゃやない何か特別な絆が見えるし……もしかして大穴で織斑先生を選ぶとか……あ、ありそう。一夏はああ言ってたけど、織斑先生が一夏は渡さん、とか言ったら最悪の場合……が、がんばろう）

### 31 (後書き)

たまっている誤字は深夜にでも直します。  
明日も2回更新できればいいなあ。  
なのでこれからがんばって書いてみます。

食堂のような場所で食べた。夕食は宴会場で行うらしい。もっとも、IS学園の生徒は多国籍なために、テーブルも用意されているそうだ。

昼食は新鮮な魚の刺身だった。セシリアは生の魚を食べることにすごく驚いていた。しかし、無理をして食べたが、それなりにいける、と何とか食べることができた。生徒の中には当然食べられない人もいたので、サンドイッチなども少数だが用意されていた。

同じ外国人のシャルロットは俺と同室だった時に和食は一通り食べていたので、刺身は問題はなく、ラウラは訓練でまずい飯を食べていたことがあるため、それに比べればと言って食べていた。

昼食の後はへとへとになるまで、鈴やシャルロットと一緒に泳ぎ、その後は、篝達と一緒に散歩したりしていた。

そして夕食の時間になるまで、のほほんさんや静寂さんなどのクラスメイトも交えて、ラウンジのような場所で雑談をしていた。

そして現在、夕食の時間である。

俺の隣の席に誰が座るかで問題が起きそうだったが、じゃんけんの結果、左隣にセシリアと右隣にシャルロットが隣に座ることにな

った。

箒、ラウラは向かいの席になった。ちなみに席は正座か、足を崩す形で座ることになっている。それが駄目な人は隣の部屋のテーブル席に座る。

さっそく料理が運ばれてきて、千冬さんの音頭で、生徒と教師が一齐にいただきますといい、夕食が始まった。

カワハギの刺身、肝付き、小鍋、山菜の和え物2種類、赤だし味噌汁（大根と浅蜷）とお新香、白米。これが夕食のメニューだった。俺は料理を一口ずつ食べる。

おいしい。

学食や寮の食堂よりもうまいと感じる。

使っている食材の鮮度が違う。

学食や寮の食堂も材料は産地直送とか、高い食材を使用している。間違っても某国産とかの食材は一切使用されていない。それほど気を使っているが、やはり鮮度が違うと、こども味に差が出る。いや、鮮度を活かした料理を作れる料理人が作っているのだろう。いい腕をしている。この旅館にふさわしい腕なのだろうな。

前に千冬さんと出かけた時に食べた料理と違い、洗練された料理だ。どちらが優れているかじゃなく、どちらもそれぞれのおいしさがある。そして洗練された料理としてこの旅館の料理は、学食や寮の食堂のものよりも凄かったと言う事が。

また一口ずつ食べるが……うん、おいしいな。

「すごくおいしいね、一夏」

「ああ、何から何まで、獲れたての素材を使用している。白米もふくららしているし、味噌汁も浅蜷が潮の味を出していて海を感じさせる。これぞ和食だって言える料理だ」

「そうだね、普段和食を食べない娘も食べてるしね」

シャルロットと下品にならないように話しながら食事を摂る。シャルロットは正座も平気だし、箸の使い方もそこらの日本人より綺麗だ。

「うむ、家庭で食べる料理ではないが、こういうところで食べるものとしては満点だな」

箸は、背筋をぴつと伸ばし正座で食事を摂っている。それにも浴衣も似合っている。大和撫子という言葉が似合う。食事の動作も綺麗だ。

「ふむ、確かに深い味わいがする料理だ。日本食か、これからは食べてみるか」

ラウラはまだ、箸が使えないので、フォーク、スプーンで食べている。他にもそういう娘はちらほらという。正座は平気らしい。

「く…むう…はう」

セシリアはさっきから、変な声を出しながら、ちまちまと食事をしている。というか、腕、いや脚が震えている。正座がきついらしい。そして脚を崩すのは、絶対に嫌だそうだ。

「セシリア、無理せずにテーブル席へ移動したらどうだ？」

「で、でもせつかく一夏さんの隣を勝ち取りましたのに」

「そう思ってくれるのは嬉しいが、せつかくの料理がもったいないだろう？だから、ここは俺の言うことを聞いてくれ」



「……わ、わかりました、名残惜しいですが、しかたありませんわね。では私はテーブル席に移動しますわ。きゃー！」

脚が痺れていたのだから、立とうとしたセシリアが足を崩し、倒れかけた。とつさに半立ちになり、セシリアを支える。

「おっと、大丈夫か？」

「うう、脚が痺れて、動けませんわ」

しょうがないな。

(シャルロット)

(大丈夫、僕に任せて。こんなところで抱きつくなんて、阻止するから)

「じゃあ、僕がセシリアを連れていくよ」

ささっと、セシリアを俺から引き離して、その後で支えるシャルロット。流れるような動作だった。

「俺が膳を持っていくよ、ゆっくり歩いてついてくればいい」

俺は膳から、お盆？を離して、テーブル席へ運ぶ。

「一夏さん、シャルロットさん、ありがとうございます」

(む)残念ですわ。でも、さっき一夏さんに抱きとめられましたか

ら、まあ、いいですわ)

セシリアはその後、テーブル席で夕食を摂った。

俺は、隣の席が空いたので、今からでも隣の席に座りたいと女子が騒いだが、千冬さんの一喝で、すぐに沈静化された。

その後、篝、ラウラ、シャルロットと、今日の感想などを話しながら、楽しく食事を摂った。

夕食後、ラウンジのような場所で篝達と少し話をした。

その後、温泉に入った。

海を一望できる露天風呂を1人で使用したが、女性用の浴場からきゃいきゃいと声が聞こえ、女子だけの会話が聞こえ、かなり居心地が悪かった。そして広い浴場に1人でいると寂しくなった。男友達が欲しいと強く思ってしまった。

修学旅行では、男だけでエロい話とかしたりしたものだ。はあ、本当に寂しいな。

今は、部屋の窓際のテーブルとソファのような座り物に座って、真っ暗になった景色を見ながら、お茶を飲んで黄昏ている。

『ガチャ』

ドアが開かれた音がしたので、ドアを見ると、浴衣姿の千冬さんが部屋に戻ってきた。

千冬さんの浴衣姿、すこし色っぽい。

「織斑か、戻っていたのか」

「はい、お茶いります?」

「ああ、もらおう」

『コポコポコポ』

反対側に座った千冬さんにお茶を入れる。  
しばらく、沈黙が続いた。でも、苦痛じゃないし、落ち着く。それにさっきの寂しさがなくなっていた。

「一夏」

「なんですか?」

一夏と呼んだから、プライベートな話か。

「あの4人から選ぶと言っていたが、もし、お前に好きな奴ができたらどうするつもりだ?」

「その時は、4人に正直に伝えます」

「しかし、あいつらがそれであきらめると思うか？」

「あゝ、それはありそうですけど、俺も線を引いて接するようにします」

「では、もし、だれも選ばなかったらどうする？」

それは、……ハーレムENDとかになりそうだ。

「それも正直に伝えます。でも、そんなことを言ったら、共有資産とかにされそうですけど」

「それは、冗談にならないぞ。ありえそうだ」

(むしろ、そうなる方が自然に感じてしまう。ただ一人の男である限り、いずれは特別に重婚も許可されるかもしれない。……私はどうするべきだろうか？一夏が選んだのならそれでいいと思っているが、心のどこかでこいつは私のものだとも思っている)

千冬さんが考え込んでしまった。

このモテ方は異常だが、そこまで考えるほどの事態なのか？1年間も一緒に暮らしていたので、ある程度は千冬さんの感情を読むことはできるが、今の千冬さんがなにを思っているのかさっぱり分からない。

(考えても答えはでない、か。全くこいつは、こんなに私を悩ませて、少しからかってやるか)

「ふう、暑いな」

そういつて千冬さんは、胸元を開けた。  
豊かな谷間が丸見えになる。もう少して、全部見えそうところで、元に戻した。…残念だ。

「ふ、どこを見ていたんだ？一夏」

あ、やばい。

「えーと、それは……」

う、完全にばれてるし言い訳できない。しかし俺だって男だし、あらかじめこういうイベントが起きるのがわかっていれば、反応しないが、今は不可抗力だ。男の本能的に考えて。

千冬さんが前振りなくこんなことをしてくるなんて思わなかったんだ。まったくの不意打ちだからこそ、反応してしまった。

「まったく。そんなに見たいのならば、言えば見せてやるぞ？」

そういつて、千冬さんは胸を強調するポーズをとった。

うえ、千冬さんの胸が丸見え……それは、見たい。しかし、さすがにそんなこと言えないだろ。それに千冬さんの顔が笑っているし。

「千冬さん、からかわないで下さいよ」

「ははは、すまんすまん」

まったく、この人は。

(ふう、もし、見たいと言われたら、雰囲気の流れられて見せていたかもしれない。危なかった)

はぁ、ドキドキした。心臓が悪い。

「む、ちょっと待て」

千冬さんが立ち上がりドアを開けた。

「」「」にぼお！」「」

すると、ギャグ漫画にありそうな声が出た。

開けられたドアを見ると、箒、セシリア、鈴がいた。

温泉に入り、さっぱりしたので、少し旅館の中を歩いてみようと思っ  
て歩いてみる。

今日は楽しかった、海で泳ぐのは、プールで泳ぐのとは違った楽し  
さがある。

今日のことを思い出しながら、歩いていたら、箒とセシリアがい  
た。

二人は、ドアに耳を付けていた。中の会話を聞こうとしているらしい。一体この二人は何をやっているんだろうか？

「あんた達、一体なにをやってるの？」

「あら、鈴さん」

「これは、その、一夏が……」

一夏か、なるほど。こいつらは一夏のことになると頭がおかしくなることがあるからなあ。確かにあいつは良い男だと認めるが、さすがにここまで変な行動をするのはどうかと思う。恋する乙女は盲目と言うのかな……あ、でも私も昔似たようなことを、く、黒歴史は思い出しちゃだめね。

「ふーん。ま、いいんじゃない？織斑先生に怒られる覚悟があるなら」

「そ、それでも」

「間違いがあつてからでは遅いんだ」

「「と、言う訳で」「」

二人はまた、ドアに耳をくつつけた。しかし、一夏と千冬さんか、二人はプライベートではどんな風に話しているんだろうか？………よし、私もやってみよう。少しだけなら大丈夫だろう。

『ふ、どこ…見ていた……？一夏』

『……………。そんな…見たい…………ば、……………見せてやるぞ』

ちよ、なんかやばいことになってない、これ。

「一夏さん…」

「一夏…」

『…、ちよっと待て』

あれ、これって……

「」「」にぼお！」「」「」

ば、ばれたのね。痛い。

ドアを思いっきりぶつけられた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「え、えーと……………」

「こ、こんばんは…」

「す、すみません…」

あ、逃げなきゃ。

と思い後ろを向いて走り出そうとしたら、私は浴衣の裾を踏まれた。篝、セシリアは首根っこを掴まれている。

「盗み聞きとは感心しないが、まあいい。入っていけ」



「「「え?」「」」

「ああ、一夏、ボーデヴィツヒとデュノアも呼んで来い」

千冬さんは何をするつもりなのだろうか?

「それと、お前はその後少し外に出ている。少しこいつらに話がある」

…まあ、千冬さんなら変なことはいないだろう。そして一夏に出ていけと言ったのと、あの4人を呼んだとすると、一夏の恋愛話の話かな?

「わかりました」

一夏が出て行って少し経った後、シャルロットとラウラ(そう呼ぶと言われた)が部屋に来た。

### 33 (前書き)

展開、セリフなどが原作とかなり似ていますが、原作三巻分は話の都合上、三巻の銀の副音戦以降はオリ展開をしますが、後数話は原作と似たような表現、展開が続きます。御了承ください。

あまりにも原作と同じすぎだという意見、改善策などがありましたら、感想にて意見をお願いします。

一夏に好意を抱いている4人と凰に部屋に集まってもらった。勢いに任せ集まってもらったが、軽く牽制しておこう。一夏はそう簡単にはやらん、私が認めるくらいの女になれ、と。さて、どう切り出そうか？

「おまえら、何か話せ。いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「いえ、その……」

「し、しかし織斑先生とこのように話すのは、昔以来で……」

「ぼ、僕は初めて話すし、一夏のお姉さんだし……」

「教官とは、このようにお話ししたことがないので……」

ふむ、確かに、こいつらとは教師としてしか接していなかったな。しかし、今は一夏の姉として接している。

「まったく。しょうがないな。今はプライベートだ。楽にしろ」

「で、ですが……」

仕方ない、飲み物でも出すか。備え付けの冷蔵庫にはいろいろ飲料が入っていたはずだ。

「ほら、飲み物だ」

中に入っている物を適当に取り出し、渡す。

「……い、いただきます」「……」

全員飲んだようだな。

「さて、全員飲んだようだし、私はこれを飲ませてもらおう」

缶ビールを取り出し、ゴクゴクと飲み干す。

一夏の作ったおつまみが欲しくなる。最近酒を飲む時は、購買で買ったものをつまみにしている。しかし、やはり一夏の作ったものの方がおいしく感じる。私の好みの味つけだからなのと、一夏が作ったということが調味料になっているのだろう。

凰以外の4人はどうやら酒を飲んだ私に面喰っているようだ。凰は昔何度か家で会ったことがあるので、驚いてはいない。

たしかに、教師としての私しか知らない奴ならこのような反応をするか。

「おかしな顔をするなよ。今はプライベートだ。私だって酒くらい飲む」

「そ、それはわかりますが」

「し、しかし」

「今は仕事なんじゃ……」

「……」

(確かに家ではこんな性格だったけど、でも、基本怖いよね、千

冬さんは)

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

それに素面では話せないしな。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

まずは一夏のどこを好きになつたかだな。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

「わ、わたくしは、その……私より強い殿方が理想でしたので、あの方は理想の男性そのものでしたからですわ」

オルコットは、ISの試合で勝ったことが原因か。

「わ、私は、その、ISの訓練での必死な姿と、試合で見せた強さ。そして同情からとはいえ、何かと気にかけてくれたからです」

篠ノ之は、篠ノ之を忘れている一夏がそれを気に病んで、落ち込んだ篠ノ之を支えたのが原因だな。

「僕、私は……やさしいところ、です。…女だと気付いても黙っていてくれて、ばれないように密かに気を使っていてくれたことがあって、それでその時完全に、その、堕ちました」

なるほど、あいつは早くから女だと気づいていて、デュノアにもそれを黙っていたのか。特殊な環境でそのようにされたら、堕ちる

か。

「私は、温かいところです。私が負けた時、抱きとめられたと思いますが、そのときの温もりがとてもあたたかくて、離したくないと思いました」

温かさか。ラウラには感じたことがないだろうからな。まして、ラウラが負けた時、壊れてしまいそうだったからな、あのように抱きしめられたら堕ちるだろうな。

「え、あたしは別に……いい友人だとは思ってます」

しかし、こいつと一夏は何度か二人きりで出かけているし、他に男がいない環境で、一夏と一緒にいたらいつかは堕ちるだろう。

「なるほど、確かにあいつは家事も料理もできるし、ISでの強さは異常なほどの速さで成長している。それでいて気がきくし、何気ないところで優しくできる。優良物件だ」

全員がこくこくと頷く、凰も頷くほどには一夏を意識しているのだろう。

「ふ、欲しいか？」

「「「「「!?!?」「」「」

「「「「く、くれるのですか!?!?」「」「」

「やるか馬鹿」

そつだ、あれはまだ私のモノだ。

「あいつが欲しければ、もっと女を磨け。私から奪う覚悟がない奴にあいつはやらんぞ」

そつだ、だからもっと女を磨け。あいつが欲しいなら、私があいつをあきらめられるくらいの女になってみせろ。

しばらくラウンジでのほんさんと雑談を交わし、部屋に帰ったら、千冬さんだけが部屋にいた。何を話していたのかわからないが、酒とかを飲んでいたみたいなので、親交を深めたのかもしれない。特に気にするようなことではないと千冬さんに言われたので、気にしないことにした。

その後、千冬さんと学園でのことを話したり、ISのことについて話を聞いたりしていたら、夜も遅くなったので、就寝した。

そして翌日、合宿2日目になった。

今日は午前から夕方まで1日かけてISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。もっとも1年生のデータを取ったところであり意味はないので、1年生に各種装備を体験させるのが主目的だろう。

ただし、専用機持ちは搬入された装備を非限定空間、アリーナ外

での使用データを取ることになるため、忙しくなる。もっとも白式は新装備などないので、非限定空間での使用データを取るだけなので、他の専用機持ちよりは楽だ。

白式に射撃装備を作成することも検討されたらしいが、それよりも機動性がどこまで高められるかに注目されたらしく、射撃装備のデータは今のところ必要ないことになっている。

それにスロットが全部埋まっている、FCSがない、など問題があるため、特別に射撃装備を作成するのは時間がかかりすぎる問題がある。要は、スロットがなくても後付け装備できるようにする、新技術を開発しないといけなくなるのだ。

そんなわけで当分は白式には新装備が作られることはなく、パッケージでブースターなどを増設するだけにとどまるだろう。

「よつやく集まったか。      おい、遅刻者」

1年生の99%（欠席者が数人いるので）が集合しているなか、一人だけ遅れてきた少女がいた。銀色の髪と眼帯をしている少女、ラウラだった。

ラウラは千冬さんに呼ばれて身を竦ませた。

「は、はいっ」

ラウラは観光や昨日のような遊びをしたことがないのだろう、だから疲れているのかもしれない。

経験したことのないことをするのは、思っている以上に精神的に疲れる。ストレスなどは感じないが、ただ疲れるのだ。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。~~~~~（以下略）」



ラウラがコア・ネットワークについて説明している。

コア・ネットワークは宇宙空間における相互位置情報交換のために作成された。操縦者同士の会話や各種データのやりとりができる。もちろん専用の通信機器での情報のやり取りもできる。

そして、コア同士が非限定情報共有を行うことで、コアが独自に自己進化する糧になる。

たぶん使用している技術は量子通信みたいなものだと思う。

しかし、コアの自己進化ってデビ・ガムみたいなISがそのうちできたり、するわけないか。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

ラウラはドイツで教官していた千冬さんを知っている。おそらく今よりももっと恐ろしかったんだろうな、さすがにそんな千冬さんは見たくない……軍服姿の千冬さん……いいかもしれない。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISを順に使用し、装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

『はい』と生徒全員が返事をする。

100人以上いる生徒と数名いる教師全員がいるこの場所は、ISの非限定空間での使用のために設置された場所だ。

崖に囲まれていて、ヘリなどで空から来るか、水中トンネルを通って来るかしないと来れない場所で、さらに立ち入りが禁止されており、監視カメラや警備員が常駐している。

水中トンネルから運ばれた数多くの装備がそこかしこに積み重ねられている。

生徒たちはIS、打鉄とラファール・リヴァイヴに乗り、それぞれ

れの振り分けられた場所でISの装備を試していく。

俺は、特に新装備などないので、ただ非限定空間での機動を試す。最高速度がどれくらい出せるか、どれくらい持続させられるかなどを試すことになっている。

さ、俺が試験を行う空域は、あ、すぐ近くだ。

「ああ、篠ノ之。おまえはちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄の装備試験を行う順番待ちをしていた筈が、千冬さんに呼ばれて千冬さんの方へ向かう。

それを見ながら白式を展開させようとした瞬間、

「お前には今日から専用機

」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

でかい声が響いた。この声…篠ノ之博士か。

記憶から消したはずの昨日のことを思い出してしまう。

ぶっ飛んでいる人だよなあ。これで山田先生みたいに芸人気質な人だったらよかったのに。

篠ノ之博士はISっぽい何かを装備してこちらにすごいスピードで走って、いや低空飛行して千冬さんの方に向かって来る。

「…束……」

千冬さんはげんなりした声で篠ノ之博士の名を呼んだ。

「やあやあ！会いたかったよ！ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう

！愛を確かめよ　　ひでぶ！」

千冬さんに飛びかかった篠ノ之博士をアイアンクローで捕まえる千冬さん。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬ、ちーちゃんの愛が痛い」

「何が愛だ」

そんなやりとりをしながらも篠ノ之博士は千冬さんのアイアンクローから自力で脱出した。

「やあ！」

「……どうも」

うわ、箒がすごい複雑な顔をしている。

呆れ、憎しみ、親しみ、感謝、諦め、わかるだけでもこれだけの感情が顔に浮かんでいた。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん。特におおばいが」

それは正論だと思います。あれはいいものだから。

『ガン！』

箒がなぜか持っていた刀で篠ノ之博士の頭部をぶっ叩いた。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……うう、妹の愛が痛い」

ふう、つまらない漫才を見てるみたいだ。

やはり山田先生のボケが一番だな。

「え、えっと、この合宿では関係者以外」

「んん？ISの関係者なら、この私が1番のはずだけど？」

「え、はい、あの、その、そ、そうですね……うう」

山田先生弱いなあ。

まあ篠ノ之博士がビッグゲームすぎるからしょうがないか。

「はあ、東。自己紹介くらいしろ。これでは装備の試験が遅れる」

「えー、めんどいなあ。私が天災の東さんだよ、はろー、終わり」

『天才』だよなあ？何か別の意味に聞こえた気がするんだけど……。

そしてざわざわと騒ぎ出す生徒達、まあ、行方不明の天才科学者がこんなところにいたら、そりゃ驚くよなあ。

「騒ぐな！お前らはテストを続ける。こいつは無視していい。東、もっとまじな自己紹介はできんのか？」

「こいつ、とはひどいなあ、らぶりい東さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

ふう、漫才にしては質が悪いな。千冬さんの突っ込みはいいんだが、篠ノ之博士のボケがわざとらしすぎる。

「あ、あの織斑先生。こういう場合はどうしたらいいんですか……？」

「こいつは無視して、山田先生は各班のサポートを頼みます」

「わ、わかりました」

「むう、ちーちゃんが優しい。おっばいかおっばいがいけないのか」

見た限りでは、篠ノ之博士も千冬さん並かそれ以上ある。

そして、なぜ手がわきわきと動いているのか、しかも視線が山田先生の胸にいつて、獲物を狙う眼になっている。

「じゅるり」

篠ノ之博士はよだれが垂れる擬音を自ら言っつて、山田先生に飛びかかるうとした。

『ゲシ！』

「いい加減にしろ」

千冬さんがヤクザキックで篠ノ之博士を蹴った。篠ノ之博士は頭から地面に突っ込んだ。ボケではない、千冬さんは本気で蹴っつたらしい。

「それで、頼んでおいたものは……?」

箒の問いを聞き、眼がキラーンと光り、立ち上がった。眼鏡をかけていたら、マッドサイエンティストにしか見えないな。そのうち、こんなこともあるうかと、とか言いそうだ。

「それはすでに準備済みだよ。3・2・1」

『ズドーン!』

衝撃音とともに金属の塊が地面に落ちてきた。

「なぜなに? IS」

「って、ちっがーう!」

あ、やべ。あまりにつまらんボケが続いていたせいか、つい突っ込んでしまった。

「い、一夏が壊れた」

箒、俺だってこんな突っ込みしたくなかった。

「いっくん! ナイス突っ込みだよ! お姉さん感動したよ!」

なぜか握手を求められたので、俺は力なく握手した。ゲフー。

「と、ボケはここまでにして、と」

そして、塊、箱が開かれ、中が見えるようになる。  
箱の中には真紅のISが存在していた。

「これが、篝ちゃんの専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ！」

紅椿か、たしか完全な4世代ISだったか？

篝の専用機だけあって、打鉄のような武者らしさを感じさせる。結構かつこいい、まあIS全般は機能美がこれでもかと言うほどいいからな。デザインがいいのは女性専用だからなのかな？

しかし、紅椿か……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：！

ああ、そうだ。この感覚、しばらくISを操縦していなかったから忘れていた。すごく燃えてきた。早くISを動かしたい。戦いたい。

俺は、紅椿の調整を始めた篝と篠ノ之博士を尻目に、白式を展開する。

瞬時に白式が展開される。

うん、この感覚1週間ぶりだ。

さて、大空を思いつきり飛びますかね。

白式での最高速度での移動と持続時間のデータを取り、少し休憩しようとして地上に降り、ISを待機状態に戻した。

水分補給しながら、周りを見ていたら、篠ノ之博士が話しかけてきた。

「いっくん、いっくん。白式見せて」

「えーと、織斑先生？」

見せても大丈夫とは思いますが、確認のため千冬さんに声をかける。

「構わん、そいつを止めようとするだけ無駄だろう。害はないのだから許可する」

千冬さんはとてもめんどくさそうに許可した。まあ、常時あのテンションでいられたら、こんな対応になるか。

「じゃ、データ見せてね。とりゃ」

篠ノ之博士は白式の装甲にコード刺した。

すると、ディスプレイが空中に投影される。

「うーん？すごく不思議なフラグメントマップを構築してるね。今までにないパターンだよ。いっくんが男だからかな？」

ディスプレイを見るが、専門的すぎて何を意味しているのか、さっぱりわからない。



「あ、あの！篠ノ之博士！ご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしければ私のISを見ていただけませんか？」

セシリアが篠ノ之博士に、眼を輝かせながら声をかけた。

「は？君誰？パツキンの知り合いなんて私にはいないんだよ。今は幼馴染が久しぶりに再会する感動のシーンなんだよ。うざいんだよ、邪魔なんだよ、はい、消えてください」

うわあ、すげえ毒舌。

「ほらほら、さっさと消えろ」

セシリアが涙目になって、しょんぼりしながら帰って行った。：  
後で慰めてやろう。そう思うほどに後ろ姿が、不憫だった。

そして、セシリアのあまりの扱いに、篠ノ之博士に声をかけようとしていた生徒たちは、各班の順番待ちに戻っていった。

「さて、邪魔者は消えたね。これで、話ができるよ。実はいっくんに聞きたいことがあったんだ」

なんだろうっ？

「なんですか？」

「いっくんは今、記憶喪失なんだよね？」

「はい」

この世界が元の世界では小説として描かれていて、朝起きたらなぜか主人公になっていたことは誰にも言えない。

織斑一夏か……鈍感で、優しい、やる時はやる、ハーレム系ライトノベルの主人公。この世界では実在の人物だった。しかし今は俺が織斑一夏に憑依し、存在を乗っ取った。だが、元に戻れると言われたとしても自分の意思で戻らない。たとえ、元の織斑一夏に恨まれても。

でも、千冬さんにだけは全てを話さないといけない気がする。そうだ、あの人にだけは真実を話さないといけない。それに、もし『選ぶ』なら、真実も一緒に告げた方がいいだろう。

それで俺の存在が恨まれたとしても、俺は……。

「なら、いつくんがどういう存在なのか、いつくんがわかっている範囲で説明してほしいなあ」

存在か……そうだな。

「かつて織斑一夏だったモノ、今は違う織斑一夏という存在。千冬さんをはじめとするいろいろな人のおかげで、今は俺が織斑一夏だと自信を持って言える。そして、元の織斑一夏に戻れる可能性ができたとしても、戻らない。なぜなら俺が織斑一夏だから」

篠ノ之博士の先ほどまでポケを連発していた眼をじっと見つめながら、はつきりと言う。

篠ノ之博士の眼を見つめていると、恐怖が湧きあがってきた。

眼はさっきのように笑っているが、その奥に好奇心が見える。だが、その好奇心はあらゆることを見抜いてしまいそんな感覚を受ける。それは常人には耐えられないモノだろう。心を、存在を、真理を見抜く眼。千冬さんの厳しさから来る恐怖とは全く違う、本能へと襲いかかってくる恐怖だ。

怖い。

だが、存在が変わるといふ事態に比べれば、あの、自分の存在がつかめない、現実感が湧かない、生きているのかも分からなくなり、そんな感覚に比べれば耐えられる。

それに、もう織斑一夏は、『俺』だと思っている。

俺はじっと、篠ノ之博士の眼を見つめる。

「……………」

「……………」

この人には感謝している。

なぜならこの人がいなければ、俺はISに、白式に出会えなかった。この世界がISが存在していない世界だったら、俺は自殺していたかもしれない。

千冬さん、白式、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。いろいろな人達のおかげで俺は俺でいることができた。そのいろいろな人達の一人が篠ノ之博士なんだ。

「篠ノ之博士には感謝しているんですよ。あなたはISを作ってくれた。もしISが存在していなかったら、日々を無気力に過ごして生きていると言えない人生になっていたかもしれないから。先ほど言ったいろいろな人の一人が篠ノ之博士ですよ」

（一部真実を話していなさそうだけど……………この眼、ちーちゃんとは違った人を超越した様な強さを感じる。それに、じっと見ていると……………格好よくて可愛い。昔のいっくんじゃなくなったのは記憶喪失、完全に事故が原因だし……………うん、このいっくんなら、許しちゃう）

「もし無気力になっていたらとしても、千冬さんがそんなこと許すわけがないし、その時は千冬さんが結婚する時まで、専業主夫でもしていたかもしれないけどね」

（そして、前のいっくんよりシスコンがひどくなっている件について）

じつと眼を見つめていたら、篠ノ之博士の眼に見える感情が、変な方向へ感情を変化させている気がしてきた。なんだ、昔こんな感情の眼をどこかで……。

「……きゅん」

「は？」

何？今なんかへんな擬音が聞こえたんだが、気のせい、だよなあ？

「いっくん。私のことはお姉さんと呼んでくれたまえ、さあ、ハリー、ハリー！」

せつかくシリアスだったのに、一瞬でギャグモードになった。はあ、もうどうにでもなーれ。

「……姉さん」

「も、萌えー！……はあはあ！いっくん萌え萌えだよ！最高だよ！東さんもう我慢できないよ！い、いただきまーす！」

え？あ、そうか！あの眼は、オタ友達と同じだ！萌え狂っている人の眼だ！

『チュ、ピチュピチュ、チュパチュパ』

??????、??????、!?!?!?!?!?!?!?!?!?!、!!!!!

「つて！何をしているか貴様はー！ー！」

『ドガン！』

何かを粉碎したような音がした。

その音で正気に戻ると、地面にぶっ倒れている姉さ、篠ノ之博士と、拳を突き出している千冬さんがいた。

..... ?????? ?

…えーと、何があっただけ? …… 篠ノ之博士がいきなり奇声を上げたと思ったら、俺にベロチューをしてきて、それで千冬さんが篠ノ之博士をぶっ飛ばしたと……… ふう、俺に平穩は与えられないのか?

なんでこう次から次へとイベント満載なんだ? …… はあああ。深くため息をついた。

「さて、東、なにか言い残すことはあるか?」

「……ごちそうさまでしたー！」

親指を立てて、満足そうな顔で、そうおっしゃりやがった篠ノ之博士。

「KO・RO・SU」

そして千冬さんは鬼になった。

『1 Hit……5 Hit……10 Hit……』

エターナルコンボが炸裂した。

そして、気が付いたら、ズタボロにされた篠ノ之博士と、荒い息でそれを見ている千冬さんがいた。

「はあ、はあ、はあ。まったく！、なんでこんなことになるんだ！  
？東、次はないぞ！一夏、おまえはもう少し自重しろ」

（だいたい、私は一度も姉と呼ばれたことがないんだぞ、なぜこいつが姉と呼ばれなければならないん

だ！一夏も一夏だ！ぽんぽんと女を墮とすな！）

え、俺が悪いの？

そりゃベロチューされたのは、俺に隙があつたからだと思うが、篠ノ之博士は別に俺のことを異性として感じていないはず。ギャグ（存在が）+弟萌えだからとか言うんじゃないんですかね？

ラウラの時もあったが美人は得だよなあ。

篠ノ之博士は、千冬さんとは違う種類の美人だから大人の女だから、こんなことをされても、男の本能がむしる得したと思っつてしま

う。

それに篠ノ之博士は香水でも付けているのか、いい匂いがした。

あと、何か飴でも舐めていたのか、苺のような味がした。

あえて言うなら、ごちそうさまでした？って感じた。

「ふう、これほどきついちーちゃんのおしおきは久しぶりだね、あの時以来かなあ」

「東、これはあまりにもやりすぎだ」

千冬さんが本気で怒っている声だ。先ほどと違い平静に聞こえるが、先ほどよりも凄味があるので、より恐ろしい。

「にははは、ごめんねいっくん、おねえさん暴走しちゃったよ。あ、それと私のことは東姉と呼ぶように」

姉さんって、中の人的に同じ年なんだが……はあ、仕方ないな。

「わかりました、東姉」

あ、やっぱり恥ずかしい。

でも、他の呼び方とかは却下されそうだ。この人怒らせるというか、拗ねらせる？となんかめんどくさそうだし、我慢するしかないか。……はあ、そのうち慣れるだろう。

「うい、ついえ危なあ！」

いきなり、篠ノ之博士改め東姉がいた場所に刀、ISの装備が出現した。

「姉さん……殺す」

赤いIS、紅椿をまとった箒が修羅の眼で東姉を見ていた。先ほどは箒が斬撃を放つたらしい。しかも本気で。

「ははは、その、箒ちゃん？お姉ちゃん本気で死んじゃうから、許してほしいなあなんて……駄目？」

「……………」

『ブウン!』

「マ、マト ックスー!!」

無言で斬撃を放つ箒。そして変なポーズでそれを避けた束姉。箒がこうなっているのは、嫉妬と言うか、俺が絡んでいるからこうなっているのだろう。それは嬉しいし、束姉にベロチューをされたのは俺に隙があつたからなので、強く出れないが、さすがに見ているだけというわけにもいかない。止めよう。

俺はISを展開し、箒の前に立った。

「箒、えーと、その……ゴ、ゴメン。謝るので、ここは抑えてくれないか?」

「……………」なら、お願いを一つだけ聞いてほしい」

無理なことは言わないだろうし、いいか。

「わかった。可能なことなら」

「大丈夫だ。夏休みにあるところへ行ってもらっただけだからな。帰ったら話す」

(せっかく、今まで練習してきたのだし、恥ずかしいが、あれを見せよう。そして、その後はお祭りでデート……………よし、いける!)

「ふいい、いづくん助かったよ。それと箒ちゃん、後でお話しようか。大丈夫、箒ちゃんのためになる話だからね」



(ふふふ、いっくんを手に入れるのは、私じゃちょっと分が悪いから、篝ちゃんと組んで分け合えばいい。うんうん、いーじゃない！)

にやにやと笑う束姉。

うわぁ、なんか、すげえ嫌な予感がする。絶対この人トラブルメーカーだよ。

そして、それが俺に集中しそうな予感がひしひしと感じる。

………ふう。なんかため息をつくことが多くなった気がする。

### 34 (後書き)

こたつでうとうととしていたら、寝てました。更新が遅れました。すみません。

束はつついっつい変態キャラになってしまっ。しかし、書きやすいです。

「篝ちゃん、試運で、おっと、そのまえにいつくんにもプレゼントがあるんだった」

束姉がなにやら空中で手を動かして操作すると、紅椿の入っていた箱の後ろ側が開いた。中には白い翼があった。

「じゃじゃーん、これが白式の高機動パッケージ、雪風だよー！」

白式の高機動パッケージ！雪風！？

……ん？雪風、束……ゆきかぜのたばね？なんか聞き覚えが…何だっけ？

「おまえ、こんなものまで作っていたのか？」

千冬さんが珍しく驚いている。

「そっだよー。紅椿と一緒に作ったんだよ。いつくんの能力をより活かしてくれる、束さんお手製のウインググスタードよ。内部には改良したPICを設置して、Gはほとんどかからないようになっているんだよ。これならいつくんは怪我しないよー。それにエネルギー効率も、操作性もさらにアップだ！どう？どう？すごい、すごいでしょー！」

すごい、あの限界機動をリスクなしでできるのか。

「すごい……早速使いたいですけど、千冬さんいいですか？」

「はあ、いろいろ面倒なことになるが、しかたないか。それに上が知れば、すぐにでもデータを取ろうとするしな。許可する。…それと織斑先生だ」

「あ、はい。すみません」

さっきからの騒ぎと驚きのせいで、素で千冬さんと言ってしまった。

「じゃあ、早速セットするからね、いっくんISを出して」

「はい」

ISを展開すると、束姉が何やら機具を取り出し、作業を始めた。

「ふんふんふん」

妙に音程が外れている鼻歌を歌いながら、作業をしていく。

「ふんふーん、ふーん。っと、よし完了！」

数分で終わったが、早くないか。

「は、早くないですか？」

「赤いウサミミを装備しているときの束さんは、普通の3倍の速度で作業ができるのだ！」

あ、本当に赤くなっている。

「つて、赤い彗星かよ！」

「い、一夏がまた壊れた」

(姉さんがいると、一夏が壊れる。…………いや、これは私が知らない一夏の一面、それを姉さんが引き出したんだ。姉さんは一夏に惹かれていたんだろう、いくらなんでもあんな、キ、キスはしない人だ。むう、だから、一夏に会わせるのは嫌だったんだ。私は、この人にだけは一夏を取られたくない。でも、こうなったら止められないし、私が、選ばれればいいだけだ。デートのチャンスもできたし……………うう、でも、恥ずかしくて、昨日のようになっただろうし(う……………)

あ、やべ。また突っ込んでしまった。

だめだ、この人のペースに巻き込まれると、俺は突っ込みキャラになっちゃう。

ちがう、どちらかと言えば俺はポケキャラだ。ふう、俺に突っ込みをさせるとは東姉恐ろしい奴だ。

「いつくん、ナイス突っ込みだよ。えへへ、私達相性がいいのかな？」

ポケと突っ込みという点では、たぶんいいんだろう。

一度ポケにポケを返してみようか？という反応するのか、全くわからん、普通に突っ込みしてくるかもしれないし、さらにポケで返してくるかもしれない……………って、なんで漫才のことを真剣に考えているんだ。駄目だ、この人のペースに巻き込まれると、自分のキャラが分からなくなる。

「じゃあ、早速使ってみて、それと篝ちゃんは試運転をしてみよう」

「では、行つてきます」

「試してみます」

俺は新しく装備された雪風を試すため、空へ上がった。

データをぱつと見ただけでも、エネルギー消耗が15%は抑えられ、高速連続機動でもGがかからない。すごいスペックだ。

それに、なにか特殊な機能が付いているっぽい。後で聞いてみよう。

まずは、瞬間加速で最高速度を試す。

これは変わらないが、エネルギーの減りが遅く、継戦能力が高くなっている。

次に高速連続機動を試す。

右左右と瞬時に加速させ、残像が残るほどのブレを出す。それを少しずつ間隔を短くしていき、連続で行っていく。

すごい！

俺の思う通りに、まったくGがかからず動ける。まるで、空を舞っているかのように、自由に、速く飛べる。

ははははは、はははははははは、最高だ！

「最高だ」

眼がこのスピードに慣れていく感じがする。

ああ、いいな、この動き、俺の理想かもしれない。これを体験したら、もう、他のISなんて使えなくなるかもしれない。白式はやっぱり最高だ。

白式が俺にアジャストする、この感覚。

ああ、気持ち良すぎて、なんか、やばい気分になってきた。

俺って変態なのか……いや、久しぶりに白式を展開して、さら

に新装備だからこうなっただけだ。うん、俺は変態じゃない。俺は変態じゃない。俺は変態じゃない。

ふう、そろそろ、降りるか。

ゆっくりと地上に降りようとしたら、アラームが響いた。表示された方向を見るとミサイルポッドが箒に撃ち込まれたようだ。ミサイルポッドは実弾ではなく、模擬弾みたいだ。

「やれる！この紅椿なら！」

箒が左手に持っていた刀を1回転するように振った瞬間、刀の軌道上に赤い何かが発生し、ミサイルポッドが全て落とされた。

あれが紅椿の武器か。

刀でありながら、中距離で集団にも通用しそうな攻撃が行えるのか、いい武器だ。右手の刀にも、同様のことができるのだろう。左右で形状が違ったため、同じでは武器ないはずだ。

さきほどまで生徒が話をしたりしているため、ざわめいていた空間が一瞬で静かになった。皆、紅椿を見つめていた。

俺はそれを眺めながら、地上に降りた。

束姉は紅椿に眼を奪われている生徒、教師を満足そうに見ていた。千冬さんは……そんな束姉を厳しい、敵意がある眼で見ている。

なんだろう？なにかあるんだろうか？

原作では……だめだ思い出せない、というより、束姉が敵かどうかもわからない。明確な敵はテロ組織みたいな奴らで、束姉は幼馴染以外の人間はどうでもいいという人だったはず、たしか原作一夏はテロ組織みたいな奴らに襲われて怪我とかしていたから、束姉なら一夏を傷つけたりしないはずなので、仮称、テロ組織とは関係ないはずだ。

なら、これは、千冬さんのこの眼は何を意味しているのだろうか？

原作知識が全く通用しないことなのかもしれない。いつかわかる時が来るのかもしれないし、来ないのかもしれない。

考えても仕方のないこと、か。

「た、大変です！お、おおお織斑センセっ！」

山田先生がまたテンパっている。

またいつものボケか？さあ、今度はどんなリアクションをするんだ？

「どうした？」

「こ、こ、こここれをつ！」

なんか、いつもの雰囲気じゃない。何か事件でも起きた……あ、原作のボスか！

二人は手話でやりとりを始めた。そして何か決定したのか、山田先生が走り去っていく。

「全員注目！」

山田先生が走り去っていくと同時に、千冬さんが大声で言うと、生徒全員が集まっていく。

比較的傍にいた俺は、ISを装着したまま、千冬さんを注視した。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班はISを片づけて旅館へ戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「なんで……？」



『ざわざわ』 『ざわざわ』 『ざわざわ』

不測の事態に生徒たちはざわざわと騒がしくなる。

俺は原作知識があるのといろいろハプニング慣れしているから冷静でいられるが、普通はこうなるだろう。突発的な大事が発生したらパニックになる人の方が多いだろう。

「とつとと戻れ！以後許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「「「「は、はい！」「」「」「」

全員が慌てて動き、次々に撤収を始める。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！それと、篠ノ之もだ」

「はい！」

篤は気合の入った返事を返した。

呼ばれたことが嬉しいのだろう。だが篤は戦えるのか？試合と違い命を落とす確立のほうが高い、今の篤では危険だ。後で注意した方がいいかもしれない。

ボスは全員で戦っても勝てない強さだったはず。原作は二次移行でパワーアップしたから勝てたが、あんな偶然に期待するなんてナンセンスだ。今持っている力で戦うしかないだろう。

やるしかない。

35 (後書き)

36話になっていたので修正しました。orz

「では現状を説明する」

俺達、専用機持ちは旅館の宴会用の広間に集められた。4組の専用機持ちの娘は専用機の整備のため本国に帰っていたところなので、ここにはいない。

余談だが、4組の娘は学年別トーナメントでセシリアと戦い敗れてしまったらしい。そのときに受けたダメージのせいでオーバーホールが必要になったらしい。

照明を落とした広間に空中投影ディスプレイが浮かび、地図やデータが表示されている。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

銀の福音、それがボスか。しかしなんでアメリカとイスラエル？

「50分後、ここから2キロ先の空域を通過することが、衛星の追跡でわかつた。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた」

50分、か。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。が、これは任意での参加とする。お前たちは軍人でない、拒否権がある。また、いくら専用機持ちだからといって素人がどこまで通用するかはわから

ん。命を落とす危険がある、すこしでも迷いがあるならば拒否しろ、迷いがある奴はいない方がいい」

拒否権か……さすがにみんなが危険なのに、一人逃げるとか、ありえないだろ。それに、もし皆が死んだら、俺はきつと自殺するほど後悔する。

だから、当然参加だ。

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは拳手をするよように」

「はい」

セシリアが手を挙げた。

「目標ISの詳細データを要求します」

「わかった。ただし、機密のため、情報が漏洩した場合、査問会にかけられ、最低2年間の監視がつけられる」

「了解しました」

千冬さんがデータを開示した。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型、36門の砲身を同時展開し、ISからのエネルギーで生成された弾丸を発射する、機動力もわたくしのブルー・ティアーズより高い」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介よ、これは。あたしの甲龍じゃ追いつけないし、たぶん衝撃砲も当たらないわね」

「この特殊武装が厄介だね、機動力、耐久力がない機体で接近されたら一瞬で蜂の巣になるよ。リヴァイブの防御パッケージでも、連続、接近射撃は避けられないけどね」

「このデータでは格闘性能が未知数だ。偵察は行えるのですか？」

俺と篤以外の全員が意見を交わしている。

「無理だ。この機体は超音速飛行を続けている。最高速度は2400km/hを超える。アプロチは1回が限界だろう。もし失敗したら、エネルギーが切れるまで、どれだけ被害が出るかわからん」

「つまり、1撃必殺の攻撃ができ、それを当てることのできる機体で当たるしかないですね」

全員が俺を見る。

たしかに俺が戦うしかない、最悪の場合は少しでも時間を稼ぎ、エネルギー切れを起こさせて、継戦能力を奪うか。

「俺がやるしかないってことですよね？」

「そうよ、あなたの機動と零落白夜が適任よ」

「ですが、問題がありますわ」

「どつやって一夏を運ぶかだね。エネルギーは少しでも節約した方がいいね」

「目標に追い付ける速度が出せるIS、そして超高感度ハイパーセ

ンサーが必要だろう」

超でハイパーっていうネーミングはどうかと思う。

「では、作戦の具体的な内容に入る。白式を除くISで最高速度がもつとも速い機体はどれだ？」

シュヴァルツェア・レーゲンの試合の時の変形した状態なら可能だが、それはもう無理だし、甲龍も最高速度は遅い、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？も最高速度は速くない。ブルー・ティアーズが白式の次に速いか。

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズです。強襲用高機動パツケージ、ストライク・ガンナーがありますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ならば、オルコットにけって

「待った待った。その作せ

上から束姉の声が聞こえた。

天井を見ると、束姉が天井にひっついていて。まるで忍者のようだ。

「山田先生、部外者をつまみだせ」

「は、はい。あの、篠ノ之博士、とりあえず、降りてきてください……」

「とっつっ！」

空中で回転して着地、

「へぶう！」

失敗していた。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦がありませんぜ」

「出ていけ、そして死ね」

うわ、すごく頭にきているな千冬さん。

「ふふふ、ここは紅椿の出番だよ！」

「はあ、さっさと説明しろ」

千冬さんは、怒りを通り越して呆れたのか頭を抑えながら促した。

「紅椿は展開装甲を装備しているので、ちょこつと調整すればスピードはばっちりだよ。ほら、詳細スペックデータ」

東姉は何か操作し、ディスプレイが空中に投影される。そしていろいろなデータを見せながら説明する。

「展開装甲っていうのは、この天才の束さんが作った第4世代型I

Sの装備なんだよ」

詳しくは覚えていないが、調整するだけで、何かに特化した機体と同等の能力を持つ、万能のISだったか？

「第4世代型ISは装備の換装無しで全領域・全局面展開運用能力を獲得したISなんだよ。現在、第4世代型ISは白式と紅椿の2機だけしか存在しないよ」

やっぱり白式も第4世代型か。

「白式の雪片式型で試作して、うまくいったので紅椿の全身のアーマーを展開装甲にしてあります。それで、紅椿と一緒に作った雪風も展開装甲で作ってあるよ」

そうなのか、雪風も展開装甲なのか。これなら原作のようにピンチ、復活とかしなくても倒せるか？

「ちなみに紅椿の展開装甲は雪片式型よりも発展したタイプだから、攻撃・防御・機動すべてに対応してます。即時対応万能機ってやつだね。雪風の展開装甲は最低限の防御と後は全て機動だけに割り振ってあるので、万能ではないけど、紅椿の機動力を大幅に超えてます。これが特化型の強みだね」

東姉と千冬さん、俺以外のこの部屋にいる全員が啞然としている。それほどの事態だ。なんせ第3世代型ISの試作がようやく作られ、そのデータの収集が始まったばかりなのに、第4世代型ISが既に存在しているのだ。そりゃ驚くだろうな。

「うん、もう最強っすね。でも、いつくんならともかく、今の筈ち



やんじや最大稼働することなんて不可能だからね。それでも第3世代型ISと同等の戦力になるよん」

すごいな、これが天才か。

まあ、俺には好意的なのであまり気にしない。第一印象が変人だからな、そつちのほうは俺には大事だ。突っ込みキャラなんて俺のキャラじゃないだろ。

「あれれ、みんな黙っちゃってどうしたの？お腹でも壊した？」

みんな呆然としている。それほどショックだったのだろう。

しかし、この人のやることは自然災害だと思って、気にしない方がいい。考えても無駄ってやつだ。

「東、言ったはずだ。やりすぎるな、と」

「ごめんね、ちーちゃん。つつい熱中しすぎちゃったんだよ。あれ？いつくんは驚かないの？」

言い訳をしないと……よし、これでいこう。

「東姉ほどの天才なら何をやってもおかしくないし、白式がなぜ高いスペックだったのかわかってすつきりしましたよ。素人の俺が代表候補生に勝てるくらいでしたから」

「にははは、でもでも、それはいつくんの力によるところも大きいと東さん思っな」

たしかに原作一夏より、通常戦闘だと強いかもしれないが、俺には奇跡とか起こせないしな。やはり白式のおかげだ。最高の相棒が

いてくれたからこそ勝てたと思う。

「白式のおかげですよ。俺に才能があっても、それを引き出してくれたのは白式ですから」

「うーん、ま、いつか。作った甲斐があったってモンですよ」

そのことは何度でもお礼を言いたい。うん、白式は最高ス。

「それにしても、この事件、10年前の白騎士事件を思い出すね」

白騎士事件。原作通り起きた事件。ISが現行兵器を凌駕した事件。ハッキングされ、2341発のミサイルがすべて日本を目標に発射された。

しかし1機のIS、白騎士に2341発のミサイルがすべて落とされた。

そして、戦闘機による捕獲作戦もISには通じず、そのまま白騎士は姿を消し、追跡することもできず事件は終了。

これで原作通りのはずだ。

おそらく、ハッキングした犯人は東姉だろう。そして白騎士は千冬さん。

まあ、この事件が俺に何か影響を与えることはないので、どうでもいい。千冬さんは千冬さんだし、東姉は、よくわからんが俺の敵にはならないだろ。

いまは、銀の福音のことだ。

「ふう…話を戻すぞ。東、紅椿の調整にはどれくらいの間がかか  
る？現状のスペックから考えて織斑の移動は紅椿で行う」

「う、わ、わかりましたわ」

「調整は7分もあれば余裕だね、ブイ！」

ピースと言う束姉。なんだかなあ。

セシリアもがんばっているし、ブルー・ティアーズも悪い機体じゃない。むしろ白式と紅椿が異常なんだ。うーん、やっぱり後で慰めてやろう、まあ息抜きに付き合うくらいならいいだろ。

それに、焦りすぎてもよくないし、セシリアはプライドが高いっていうか言動がちよっとアレだが、努力している姿を俺は知っている。実家のことかもいろいろやっているし、4人の中では一番多忙な娘だ。

厚かましかったかもしれないが、束姉にISを見てほしいと言ったのは、自分がブルー・ティアーズを使いこなせていないことを気にしているからだしな。ま、この戦いが、無事終わったら考えるか。

「では本作戦は織斑一夏、篠ノ之箒の両名による目標の追跡及び撃墜とする。作戦開始は30分後。各員、準備にかかれ。1秒でも無駄にするな」

皆自分にできることをしに行った。

俺はまずは、エネルギーの補充と調整をしないといけない。

…………… エネルギーはこれでよし、調整は…………… 特に問題なし。雪風も問題なし。オールグリーン。

後は、戦闘についてか。

高速戦闘状態。

学園など限定空間での使用は通常ブースターなどがリミットされている。なぜなら、アリーナで高速戦闘状態を使用すれば一瞬でバリアにぶつかってしまい動かすどころじゃなくなる。

高速戦闘状態はISの最大速度を出せるが、速すぎて、限定空間では使用できないのだ。高速戦闘状態に、通常使用状態で動くのと

同じ感覚で動かしたら、一瞬で壁にぶつかっていたという感じだ。

高感度ハイパーセンサーが感覚を鋭敏化し、一瞬回りがスローモーションになり、感覚が高速戦闘状態に適合されるらしい。例えるとG の超加速みたいなものだ。

そして、実弾の威力が相対速度で上がっているが、俺は高機動で相手の攻撃を回避しつつ隙を見つけ攻撃するスタイルだから、いつも通りの戦闘をすればいい。

そう、いつも通りに観察し、隙を見つけ攻略する。

現在の時刻、午前11時30分。天候は快晴だ。

俺と箒は、銀の福音への移動距離が一番短いであろう地点、砂浜にいた。

「じゃあISを展開させるか」

「ああ、紅椿」

俺と箒はISを展開させた。

「じゃあ、箒、失礼する」

「あ、ああ」

俺は箒の背中に乗り、肩を手でつかんだ。

この状態で、銀の福音まで箒が近づき、戦闘空域に入ったら、俺が零落白夜で短期決戦を狙う。それが作戦だ。回りの海域、空域はIS学園の教師、元代表候補生やそれに近い実力だった人たちが封鎖している。邪魔が入らない代わりに助けも来ない、はずなのだが、何かひっかかる。原作知識もそこまで覚えていない。1度負けることは覚えているのだが……

「一夏、どうした？行くぞ」

考えても仕方ないか。

「ああ、大丈夫だ」

「しつかりしろ。おまえが作戦の要なんだぞ。大丈夫だ。私の紅椿と一夏の白式が一緒なら必ず勝てるさ」

箒のことも心配だ。

俺は初めて白式を操縦した時ハイテンションになっていたが、あれは試合だったから命の危険とか考えてなかった。箒も同じようなテンションになっているが、これは実戦なんだ。

中ボス、ラウラとの戦いで命の危機を感じたが、ある程度俺は冷静に戦えた。それは訓練などで白式の性能を発揮できるようにしたからだ。

しかし、箒は紅椿を操縦するのはこれが初めてだ。いくら4世代ISで高性能だからと言って、そう簡単に勝てるわけがない。なのにこの浮かれようだ。

旅館で話をしたが、紅椿のことで浮かれていて、何も聞かえていないようだった。これではミスをするかもしれない。

……しかたない、か。もしものことが起きないように、俺が短期決戦で決着をつければいい。箒は俺が守る。

「ああ、わかった」

『織斑、篠ノ之、聞こえるか?』

オープン・チャネルから千冬さんの声が聞こえる。

「はい」

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけよ』

「了解です」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればいいのですか？」

『そつだ。が、お前は専用機を使い始めてからの実戦、訓練の経験は皆無だ。それに一夏との連携も取れないだろう。無理はするなよ』

「わかりました。できる範囲で支援します」

意気込んでいるが、それは浮ついた感情からくるものだろう。やはり危険だ。だが、ここにきては中止するわけにはいかない。最悪の場合、銀の福音のエネルギーが切れるまで、どれだけ被害が出るかわからない。ここで止めないと、俺も、冨も後悔することになる。見知らぬ他人とはいえ、見殺しにするのは、俺の精神衛生上良くない。後悔しない戦いにしなければ……。

『織斑』

『はい』

プライベート・チャンネルで千冬さんが話しかけてきた。

『篠ノ之は浮かれているようだ。あれでは何かミスをするかもしれない。フォローしてやれ』

『了解』

『頼む』

『では、作戦開始！』

そして、オープン・チャンネルで千冬さんの号令の元、作戦が始まった。

「一夏、飛ぶぞ」

一瞬で上空数百メートルまで飛翔した。  
これが高速戦闘状態か。これは限定空間で使用できないわけだ。

「では、いくぞ！」

「了解だ」

一瞬最高速度まで加速し、飛行していく。

これが展開装甲か。完全に使いこなせれば、敵はいなくなるだろう性能だ。高速戦闘状態だからわからないが、通常戦闘状態でも白式並の速度が出せるだろう。高速連続機動は筈には無理だと思いが、努力次第ではできるかもしれない。それに加え、攻撃、防御にも切り替えることができる。恐ろしいISだ。

しかし、白式以上に燃費が悪そうだが、エネルギーは持つのだろうか？

「見えたぞ、一夏！」

高感度ハイパーセンサーの視覚情報が伝わり、銀の福音が見えた。銀色のフルスキンのIS。背中から大型の翼が生えている。あの翼が大型スラスタ兼広域射撃武器である新型システムで3世代兵器になる。

多方向同時射撃ができるとあったが、イメージがつかめなかったので、ショットガンみたいなもんだと思うことにした。要はすべて



回避してしまえばいい。

「このまま接近する。一夏！集中しろ！」

「ああ……今だ！」

雪片式型をコールし、零落白夜を発動させ、瞬間加速を最高速度の8割程度の速度で行い、銀の福音へ間合いを詰める。

雪片式型を上段に構え、間合いに入ると同時に斬撃を放とうとする。

しかし、間合いに入る瞬間に、

『敵機確認。迎撃モードへ移行。銀の鐘、稼働開始』

電子的な合成音声が聞こえ、銀の福音はスラスターで後方へ回避しようとした。

「甘い！」

俺は後方へ回避した銀の福音を見て、さらに加速し、最大速度まで上げて間合いを一気に詰め、雪片式型で袈裟斬りを放つ。

しかし、銀の福音は右腕で上げて防いだ。

『ガキイン！』

と音がして、銀の福音の右腕の装甲が弾け飛び、白い肌の腕が見えた。

俺は追撃を行うため、そのまま、二の太刀を繰り出そうとしたが、曲線的な機動で銀の福音は回避しようとする。

「速い！でも、白式より遅い！」

俺は連続で高速変則機動を用い、残像を残しながら、直線的な機動で間合いを詰める。

高速戦闘状態のため、いつも以上にGがかかりP I Cではとても抑えられないかっただろうが、雪風により、全くGがかからない、それに心なしか操作性が良くなっている感じがする。

「せいっ！」

銀の福音は今度は左腕で防いだが、先ほどと同じように、装甲が弾け飛ぶ。

しかし、攻撃されながらも、銀の福音は翼を広げる。

『警告、敵射撃体勢』

広がった翼の装甲の一部が開き、中から銃口が見えた。  
回避だ！

「ちい！」

左へ移動する残像を残して右へ移動する。

先ほど俺がいた空間と、残像があるだろう方向へ光の弾丸が飛んでいき、爆発していった。

爆発する弾丸。これがISのエネルギーで生成された弾丸らしい。実弾と違い、エネルギー切れになるまで打ち続けることが可能なのだろう。そして、消費するエネルギーはおそらく少量だ。

これなら、二世代ISや機動力、耐久力が少ないISを単騎で相手取ることができる。たしかに広域殲滅が可能だが、俺と白式には通用しない。

銀の福音は、接近しながら翼を開き、光の弾丸を射出しようとするが、俺は先ほどと同じように、連続で高速変則機動を行い、残像を残した逆の方向へ移動する。

先ほどと同じように、検討違いの方向へ弾丸は射出される。

銀の福音は、ラウラと違って俺の動きを捉えることすらできていない。

俺を発見しようとしている銀の福音へ瞬時加速を使用し、一瞬で接近し、銀の福音の横側から斬撃を放つ。

間合いに入った瞬間に反応され、スラスターで少しだけ回避されるが、雪片式型は銀の福音の右の翼を切り裂いた。

『ggghfcべおいhfせび!!!』

電子音声でノイズのような声で叫びを上げる銀の福音。  
すぐに回転し、後方へと逃げていく。

「逃がすか!」

銀の福音は明らかに速度が落ちている。

曲線を描き、海面すれすれに移動しようとする銀の福音へ、俺は瞬間加速を行い、間合いを詰めていく。

みるみる内に追い付いていき、あと少しで間合いに入るといところで、いきなり、眼の前に白い何かが見えた。

「な!?!」

慌てて急停止する。

なんだ?!何が、起きた?!

ISからデータが送られてきて、すぐに判明した。白い物体は船だった。

なんでこんなところに船が？封鎖していたんじゃないのか？

『警告、敵、射撃体勢』

「しまっ

完全に混乱していた俺へ向けて、光の雨が襲った。

「うわあああ！！！！」

装甲が弾け飛び、俺は高熱に襲われた後、海面へ叩きつけられた。俺は、負けた。

少し離れた場所で一夏が戦っている。

曲線的な機動でひらひらと舞いながら回避している銀の福音と比べて、一夏の機動は直線的な機動だが、速さが1ランク上で、しかも残像を残すため、必ず数秒見失ってしまう。

銀の福音がどれほど複雑な機動で回避行動を行おうと、一夏は確実に追い詰めていく。

右腕、左腕の装甲が弾け飛び。銀の福音は防戦一方だ。

すごい。

紅椿を手に入れたからわかる。

一夏は強い。

先ほどまで、歓びで浮かれていた心は一気に冷めた。

遠くから見ているだけでも、一瞬見失うのだ。

接近戦など行ったら、何も反応できないだろう機動だ。

銀の福音が広域射撃を行うが、全く見当違いの方向へ撃っている。

私も一夏のように強くなりたい。

女として隣にいたいこともある。しかし、武道武術を嗜んでいる身として、血が騒ぐのだ。

一夏と戦ってみたい、と。

今の私が戦ったら、絶対に負けるだろうが、いつか戦いたい。そう思いながら、私は一夏の一挙一動を見続けていた。

あ！一夏が銀の福音の片翼を切り裂いた！

もう、これで決着はついただろう。銀の福音に勝ち目はない。

逃げていく銀の福音を一夏が追っていく。片翼がなくなった銀の福音は遅く、すぐに一夏は追いついていく。

「な！なぜ止まる！？」

とどめを刺そうとして、間合いを詰めようとした一夏がなぜか空中で急停止した。

そして、無防備の一夏へ向けて、一斉に光の弾丸が放たれ、爆発した。

一夏は、白式の装甲がぼろぼろになり、海面に叩きつけられた。

「一夏！」

逃げていく銀の福音を無視して、私は一夏の元へ加速した。

PICにより、海面すれすれで浮いている一夏を抱きとめる。

一夏はところどころ火傷を負っている。

一夏……。

『前方に未確認物体確認、解析、船だと判明』

ISから送られてきたデータで、前方を見ると確かに船が存在していた。

なぜこんなところに船がある？さっきまでは全く見えなかったし、ISも反応していなかった。く、一体何が起きているんだ？！  
違う、そんなことより助けを呼ばないと、一夏が危ない。

『織斑先生！一夏が！一夏が！』

一夏がいなくなるなんて、絶対に嫌だ。

「一夏！すぐに助けが来るから、しっかりしろ！」

私はそう叫ぶことしかできなかった。

### 37 (後書き)

超音速の件について。

原作を読みなおし、wikiで音速と超音速について調べましたが…… 原作完全に間違っていました。

最低でもマッハ1.2〜5.0が超音速なのに450km/hとか…… 明らかにミスってる……。原作は何か特殊な表現なのか、個体とか気体とか関係しているとかわからないので、このSSではwikiで調べた音速は標準大気中1225km/hとします。

超音速なので、約1500km/h以上の速度になります。

夜の更新時に、誤字修正、レス返しを行うので、その時に一緒に訂正しておきます。

一夏……。

私の目の前には一夏が力なく横たわっていた。

爆発が何度も襲い、一夏はシールドと絶対防御を突破されて、熱波に焼かれた。その手当てをされ身体中に包帯が巻かれている。

一夏が銀の福音に負けた後、私は織斑先生の指示に従い、一夏を抱きかかえたまま旅館へ戻っていった。

そこで、織斑先生に状況を報告した。

織斑先生は船の話の辺りで、何かに気づいたのか、眉をひそめ一瞬どこかを見ようとしたが、私がいることに気が付き、すぐに頭を振った。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ』

織斑先生はそう言って、一夏の手当てを指示し、他の教師たちへの指示をしに行った。

一夏。

私は一夏を見つめ、ISSーツの上に穿いたスカートを握り締めた。

どうしてこんなことになったんだろう。

一夏と銀の福音の戦いは、私が出る幕などなかった。むしろ私が戦闘に参加していたら、一夏の邪魔になっていたかもしれない。

一夏は強かった。もう少しで銀の福音を倒せていたんだ。

なのに、あの船のせいで一夏は、あの船のせいで………違う、あの船のせいだけではない。

私をもっと強かったら、一夏と一緒に戦えるほど強かったら、そうすれば一夏はこんな目に遭わないですんだはずだ。



違う、確かに私は弱いかもしれないが、紅椿の力があれば、困く  
らいにはなれたはずだ。でも、一夏は私を戦闘に参加させようとは  
しなかった。

それは、私が、紅椿を、力を手に入れたことで浮かれていたから  
だ。

私は、力を振るわずにはいられなくなる時がある。だから、剣術  
で己を律することができるようにならなれた。そのはずなの  
に、私は力を手にしたことに浮かれていた。

いろいろな原因が重なって一夏は傷つき倒れている。その原因の  
一つは、私が力を手に入れて浮かれていたことだ。

私は………これからどうすればいい？どうしたい？………前までの  
私なら、ISを捨てていたかもしれない。

でも、今の私は、『この一夏』に恋をした私は、逃げたくないと  
思っている。力を律したいと思っている。だって、その力があれば、  
少しでも一夏に近づけるから。

………そうだ、私には信じられる力が1つだけある。一夏を思う  
だけで、湧き上がってくる力が。

『ガチャリ』

音がした方を見ると、ドアが開かれており、鳳の姿が見えた。

鳳は部屋に入ってきて、一夏の向こう側に座った。少しだけ一夏  
を見ていたが、

「ねえ、あんたさこれからどうするの？」

と、私に向かって言った。

「どうするって、何をだ？」

「たとえば……銀の福音を倒しに行くとか？」

銀の福音を倒す、か。

……倒したい。

そうすれば、この力に溺れることはないと確信できるから。そして強くなれるから。

私は強くなりたい、一夏のために、そして私のために。

「できることならそうしたいが、何か手はあるのか？」

この様なことを言うのだから、何か考えがあるのだろう。

「へえ、一夏が負けて、落ち込んでいるのかと思ったけど、これなら大丈夫ね。手はあるわ、今ラウラが」

『ガチャリ』

ドアが開き、軍服を着たボーデヴィツヒが部屋に入ってきた。

「銀の福音の居場所が判明した。ここから30キロほど離れた小さな無人島、いや岩礁か、に目標を発見した」

手に持っているのはブック型の端末だろう。それを使用して探したのだろう。さすがは軍人と言うこと

となのだろう。

「さすが、特殊部隊の隊長ね」

「お前の方はどうなんだ？準備はできているか？」

「当然。もう済んでるわよ。だからここに来たんだし。シャルロツトとセシリアは？」

「それなら、すぐに」

『ガチャリ』

ドアが開き、セシリアと、デュノアが部屋に入ってきた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ」

「じゃあ、作戦会議ね。私達で絶対に墮とすわよ」

凰の声に、私達はそれぞれの顔を見て、頷いた。

ここは、どこだ？

気が付いたら、俺は波の音が聞こえる砂浜に立っていた。

太陽の熱で熱くなっている砂浜、潮の匂いと波の音。遠くを見ようとすると、景色がぼやける。

ここはどこだろうか？俺はなぜここにいるのだろうか？

……駄目だ。考えようとしても頭がぼやける。

「。　　」

歌声が聞こえる。

綺麗な声で、元気に歌っている。

声が出た方へ、足が勝手に進んでいく。

「ラ、ラ　　ラララ　　」

どれくらい歩いてきたのかわからないが、気が付いたら、歌を歌っている少女が近くにいた。

波打ち際、白い少女は踊るように歌っている。

少女の白い髪は太陽の光を反射し、輝いていた。

この少女は誰だろうか？俺の知り合い。いやそれ以前に俺は、誰だ？

俺は\*\*\*\*\*？それとも\*\*\*\*\*？

……名前が、思い出せない。

考えようとすると頭がぼやける。

わからない……今は何も考えずに、少女の歌を聞いてみよう。

「ララ　　ラ　　」

俺は、まるで椅子のようになってる木に座り、眼を閉じて少女の歌だけに意識を集中した。

草も生えていない、小さな島。いや大きな岩と言った方がいいかもしれない。

そこには、片翼をもぎ取られた、銀の福音が膝を抱えるように座っていた。

『キイイイン』

「？」

不意に聞こえてきた音に銀の福音が反応する。

直後、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

5キロほど離れた場所に、ラウラはISS、シュヴァルツエア・レィゲンを纏い浮かんでいた。

ラウラは初弾が命中したことを確認すると、すぐさま次弾を発射した。

ラウラは砲戦パッケージ、パンツァー・カノニアを装備している。

パンツァー・カノニアは80口径レールカノンを両肩に2門、

物理シールドを左右、正面2つで計4枚装備する。AICにより、80口径というレールカノンの発射の反動を完全に殺し、精密、連射性が増す。長距離からの狙撃を行うことができ、近、中距離ではシールドによる耐久力で相手の攻撃を防ぎつつ、ワイヤーブレードで絡め取ることができ。しかし、機動力が激減してしまうという弱点がある。

片翼を失っている銀の福音は、それでもラウラの砲撃を回避しながら、接近していく。

「あんな状態でやるな！だが、」

ラウラは全く焦っていない。思っている以上に 銀の福音が弱っているのもある。

それ以上に、今の彼女には、

「もらいましたわ！」

仲間がいるからだ。

『おーhのーくぁん』

銀の福音はもう少しでラウラに接近できそうな距離で、突如現れたレーザーの直撃を受けた。

強襲用高機動パツケージを装備したセシリアが、ラウラに気が取られている銀の福音にステルスモードで接近、完全に捉え、大型レーザーライフルから極太のレーザーを放ったのだ。

「次は僕の番だよ！」

セシリアの背中に、ステルスモードで乗っていたシャルロットは

銀の福音に急接近し、近距離でショットガンを放った。

全弾が命中し、衝撃で銀の福音が吹き飛ばす。

『!?!?!? ?!?!』

銀の福音は、音にならないマシンボイスで悲鳴を上げ、逃げようとするが、

「逃がさないわよ!」

超音速で移動していた箒の背中に乗っていた鈴が、一瞬だけ突撃し、衝撃砲を放つ。

機能増幅パッケージを装備した甲龍は、衝撃砲が4門に増えている。さらに弾丸を熱核で包み威力を増している。

一定数の連射が可能な衝撃砲から熱核衝撃弾が発射され、辺り一面を襲う。

衝撃砲を全弾撃ち尽くすと、銀の福音はところどころ装甲が剥がれ落ち、焼け焦げ、ぼろぼろの状態になった。

銀の福音はそれでも逃げようとするが、

「これで、終わりだ!」

箒は左右に持っている刀を上段に構え、クロスさせるように振り下ろした。

残っていた翼が斬り落とされる。

「終わったか……」

箒がそうつぶやいた瞬間、銀の福音から衝撃波が発せられ、箒達はその場から吹き飛ばされた。

体勢を整えた箒達が銀の福音を見ると、銀の福音の周りが青く光り、帯電している。

「これは、一体……？」

「！？まずい！これは二次移行だ！」

二次移行を知っているラウラが叫ぶが、遅かった。

『ガアアアアアアア！！！』

獣のごとく咆哮を上げて、銀の福音が再生する。

もがれた翼が生え、装甲が再生し、銀色に輝く。翼が大きく分かれていき、4枚に増えた。そして腕からはISからのエネルギーで生成された爪が生え、銀色に鈍く輝いた。

銀の福音はゆっくりと箒達を見回し、止まる。そして、次の瞬間、その場から消えた。

「なっ！」

もっとも離れていたラウラのところへ一直線に接近していく。

そのスピードは、一夏と白式以上だった。残像を出すような細かな制御はできないのだろうが、あまりの速さに、皆、思考が一瞬遅れる。

すぐにラウラは、シールドで防ごうとし、他の4人は援護しようとするが、銀の福音はラウラの至近距離から、4枚の翼からエネルギーで生成された羽を連続で射出した。

次々とシールドに突き刺さり、爆発する。あっという間にラウラはぼろぼろにされてしまった。

それでも、攻撃の手をやめない銀の福音。



「ラウラさん！」

セシリアが援護のために遠距離からレーザーを放つが、銀の福音はすぐさま回避し、今度はセシリアに向けて4枚の翼を広げた。

そして、エネルギーの羽を次々に射出する。

「きゃあああ！」

逃げようにも、射出速度が速く、さらにあまりにも広範囲に異常な連射性で放たれるエネルギーの羽はよけようがない。

ラウラのように至近距離から攻撃されているわけではなく、入射角が広いため、それほど命中はしなかったが、ブルー・ティアーズは元々耐久力がないため、ラウラ同様にぼろぼろにされてしまった。

「鈴！合わせて！」

「わかった！」

両手にマシンガンを持ったシャルロットと、衝撃砲を展開した鈴が一斉に弾幕を張る。

しかし、銀の福音はくるりと回転して迎撃態勢を取り、4枚の翼から、エネルギーの羽をシャルロットと鈴に向けて連射する。

「そんな！」

「なんて制圧力なの！？」

マシンガンの弾はエネルギーの羽に弾かれ、核熱衝撃弾はエネルギーの羽と相撃ちになり爆発させるが、連射性が違いすぎる。二人

モラウラ、セシリアと同じように、エネルギーの羽の嵐に巻き込まれてしまう。

「「きやああ！」」

「くっ、なんて強さだ」

一人無事な箒は、銀の福音のあまりの強さに驚愕する。

「紅椿、私に、皆を守る力を、貸してくれ」

(私は弱い、だから力を貸してくれ、頼む！紅椿！)

箒は、心から紅椿に願った。

「くっ！来る！」

無効化した4人よりも残った箒を優先したのか、銀の福音が箒に接近していく。

それを確認した箒は、刀を構える。

その瞬間、紅椿から金色の粒子があふれ出し、まるで金色に輝いているかのように見えるようになった。

「紅椿、ありがとう。これなら、いける！」

箒は感覚で理解していた。この状態の紅椿はエネルギーが切れることはない、と。

箒の戦いが、始まる。

38 (後書き)

次回、スーパー第タイム。

箒は、右腕の展開装甲を防御に回し、銀の福音の72門の砲門から一斉に連続で射出されるエネルギーの羽を防ぎ、回避しつつ隙を伺う。

(く、展開装甲で防いでいるのに、なんて威力だ！でも紅椿なら！)

箒は、爆発がすぐ近くで何度も起きて、心が怯みそうになる。しかし、紅椿を信じ、防御に専念する。

やがて銀の福音は、展開装甲の堅い防御に焦れ、至近距離から射撃を行おうと、音速まで加速して接近しようとした。

「隙あり！」

箒は、射撃が止んだ瞬間に、左手に握っている空裂でエネルギー刃を飛ばした。

予想だにしない攻撃に銀の福音は動揺するが、そのスピードで無理やり回避する。しかし体勢を崩し、減速してしまう。

箒はすぐさま展開装甲を利用した加速で、銀の福音の最高速度にも負けない速度を出し、移動しながら乱舞を舞っているかのような斬撃を次々に繰り出した。

「たあああ！！は！せい！せい！」

エネルギー刃が何発も放たれ、幾重にも重なって結界のようになる。

避けようとするれば容易に回避できたが、銀の福音は迎撃することを選択した。しかしそれは、悪手だった。

72門の砲門から一斉に連続で射出されるエネルギーの羽は、エネルギー刃に触れると爆発を起こした。しかし、箒の放ったエネルギー刃はそのまま銀の福音に襲いかかる。

銀の福音は咄嗟に回避しようとするが、足、翼をエネルギー刃に斬られ、一部装甲が弾け飛ぶ。

『アアアアア！！！』

しかし、銀の福音は獣のような雄叫びを上げ、それでも強引に箒へ向かって加速し、接近していく。

箒も銀の福音へと音速で接近する。互いに加速しているため一瞬で距離が詰まる。

「はあああ！」

箒は、間合いからやや外れた距離から、右手に握った雨月で気合とともに刺突を放った。

しかし、銀の福音は突きが放たれる瞬間に急停止し、後方へと移動しながら、翼を開いた。

このままでは、箒は近距離から恐ろしいほどの弾幕に襲われるはず……だった。

しかし、次の瞬間、青色の光が銀の福音の腹部を直撃した。

雨月からレーザーが発射されたのだ。

まるで、刀身が伸びているかのようにレーザーが放たれ、銀の福音に襲いかかっていたのだ。

『オオオオオ！！！』

その衝撃で、銀の福音は悲鳴を上げ、動きを止めた。

絶好のチャンスに、箒はさらなる追撃を行う。

「せい！はっ！せい！」

左の空裂で飛ぶ斬撃を放ち、右の雨月でレーザーを放つ。

移動しながら、次々に攻撃していく。

一撃一撃が高い威力を持っている、エネルギー刃とレーザーが次々に銀の福音を襲う。

『ウウオオオ！！！！』

銀の福音は次第に防戦一方、いや動くことすらできなくなっていく。

翼で身を守るようにし、さらに腕から伸びたエネルギー爪を盾にして、箒の猛攻に耐える銀の福音。しかし、高威力のエネルギー刃とレーザーは威力がほとんど減退することなく襲いかかり、装甲が次々に弾け飛んでいく。

ぼろぼろになっていく銀の福音を見て、箒は近距離からの雨月の刺突でとどめを刺そうとする。

左の空裂でけん制しつつ、少しずつ近づいていき、一定の距離に達した瞬間に急加速した。

「これで！終わりだ！」

そして雨月の刺突が、銀の福音の胸部に突き刺さった。

そしてゼロ距離からのレーザーが、

「！？」

放たれなかった。

「な！？エ、エネルギー切れだ！？！？」

絢爛舞踏、エネルギーを増幅する事ができる紅椿の単一仕様能力、そのあまりの機能ゆえに、適性が低く錬度も低い今の箒では、戦闘中に使用することは不可能な絶対にアビリティー！。

箒の思いに応え、紅椿がかけたシンデレラの魔法が、この局面で、きれてしまった。

箒に決定的な隙ができてしまう。

銀の福音は今までのダメージと、レーザーこそ出なかったが、雨月の刺突を胸部に受けている。ぼろぼろだが、それでも翼を広げ、72門の砲門からエネルギーの羽を一齐に箒に向かい放った。

「…………一夏、私…………」

俺は、波の音と、少女の歌声を聞いていた。

どれほど、そうしていたのかわからないが、不意に歌声が止んだ。疑問に思い、眼を開けると、少女は空をじっと見つめていた。

何の変哲もない空。

どうしたのだろうか？

俺は気になったので、少女に問いかけてみようと思ひ、少女の近

くへと歩いていった。

「呼んでる…行かなきゃ」

俺が声をかけようとする、少女そう呟き、消えた。

どこに行ったのだろうか？

ここはどこなんだろうか？

俺は誰なんだろうか？

一度疑問に思うと、次々と疑問がわき出てくる。

しかし、それらの答えは俺には出せなかった。

『やぎーん、やぎーん』

寄せては返す、波の音が聞こえる。

歌声は聞こえなくなったが、波の音だけでも聞いていようと、再び先ほどの場所に戻り、眼を閉じようとしたり。

「あなたは、誰ですか？」

が、誰もいないはずの後ろから声をかけられた。

後ろを振り向くと、膝下まで海に浸かっている女性が立っていた。

白く輝く甲冑を身に纏った騎士。大きな剣を自らの前に突き立て、

その柄に両手を預けている。セイバーのようなポーズ……セイバー

って何だっけ？

そして、その顔は眼を覆うガードに隠されて、下半部しか見えな

い。しかし、全体的なシルエットが女性だと感じられる。

「あなたは、誰ですか？」

もう一度同じ問いをかけられる。



「だ、れ……?」

俺は誰だ?

俺は\*\*\*\*。いや\*\*\*\*。

俺は、俺は、思い出せ、俺の思い出を、

『どうして?別れるなんて言うの?』

君は束縛しすぎるんだよ。今は一緒にいて、苦痛なんだ。もう無理だ。

『\*\*君、あのプロジェクトでの活躍が高く評価されて、今度君の昇級が決まったよ。脱落者が出たあのデスマーチを支えたんだ、当然の結果だよ』

\*\*マネージャー。あれは地獄でしたね。でも昇進しても、またいつか第2第3のデスマーチが……。まあ、給料は月給の2.5倍ほど出たから、貯金にはいいし、身体も大丈夫だし、うん、このままこの業界でいいや。

『\*\*\*氏の料理は、相変わらずのクオリティでござる』

『や 夫スレでや 夫の立場にいるような人ですね。わかります』

『飯食べたら、アイマス2の男キャラを削除する方法についての会議を再開するんだお。りっちゃん待っててね、もうすぐ助けてあげるんだお』

オタ友1、オタ友2、オタ友3。他の男と違って、恋愛とか妬み

とかなくて付き合いやすかった。初めは暇つぶしにアニメでも借りようとしたのが付き合いの始まりだったな。ラノベとか、ガンダムとか、や○夫スレとかいろいろ教えてもらったし、いつも馬鹿騒ぎしていて、楽しかった。

そうだ、俺は\*\*\*\*\*だ。

「本当に？」

騎士が問いかける。

本当に？

俺は\*\*\*\*\*なのか？

もっと思い出すんだ。俺の大切なモノを……

『この料理うまいな。いつも助かる、\*\*』

千冬さん。

俺の大切な人。

……この人に、俺は全てを話さなきゃいけない。

………？

全てって何だ………？………そうだ、全て、俺の存在が犯した罪。

俺は……

『\*\*、前にも言ったが、私はお前が好きだ』

篝。

『\*\*さん、わたくしの思いは変わりませんわ。あなたのことが好きです』

セシリア。

『僕はあなたのことが大好きです』

シャルロット。

『お前のことが好きだ。だから嫁にする』

ラウラ。

俺を好きだと言ってくれた娘達。

『\*\*\*、あらためてよろしくね』

鈴。

友人の距離がすごく気楽に付き合える娘。

みんな、俺の大切な人達。

俺は、\*\*\*。

そうだ。

今の俺は、おりむらいちか、織斑一夏だ。

「それがあなたの名前？」

「ああ、俺は織斑一夏だ」

「最後の選択です。あなたは誰ですか？」

決まっている。

「織斑一夏だ」

そうだ。俺は織斑一夏として生きる。

元の世界にも未練はある。でもそれ以上に、大切な人達ができてしまった。

だから、例え、元の織斑一夏の存在を、殺しても、俺は織斑一夏として生きる。

「そう……」

静かに女性は頷いた。

「だったら、行かなきゃね」

また、誰もいない後ろから声をかけられる。

先ほど消えたはずの白い少女が、後ろに立っていた。

無邪気な笑みで俺を見つめている。可愛いな。

「ほら、ね？」

俺の手を取り、にっこりと微笑む。

「さあ、あなたを、あなたの助けを待っている人がいるよ」

不意にISを纏い、ぼろぼろになっている皆の姿が、脳裏に浮かんだ。

「皆を、大切な人達を、守りたい。」

今の俺が存在できた理由、大切な人達を、守りたい。

そう、思った瞬間、世界が、輝き始めた。

「ありがとう」

この世界から消える前に、少女と騎士に、知らないはずなのに、なぜか知っているような気がする二人に、お礼を言った。  
それを聞いた二人が微笑んだ、気がした。

39 (後書き)

ギップリヤ。

このネタ知ってる人いるかな？

戦闘が長く続かないので、もっと深い描写で書けるようにしたいです。

気がつくとも布団の中で眠っていた。

どうやら、銀の福音に負けて、その後でここまで運ばれたらしい。………夢を、波の音と白い少女と白騎士の夢を、見ていた気がする。しかし、ぼんやりとしか思い出せない。

原作でもあったイベント、俺はそれを体験したらしい。ただ、白騎士から問われたことは、今の『俺』だったからの問いだった。

そうだ、皆を助けに行かないと、速く行動しなければ。すぐに白式を呼び出し、窓から飛び出す。

白式から表示された空域（30キロほど離れた空域）へ極超音速、マッハ5以上の速度で向かっている。

原作通り？なのか、白式は二次移行した。

俺にアジャストした力、圧倒的な機動力を手に入れた。

反応性が増し、さらに精密に操作できるようになり、PICがラウラのAICを参考に進化して、俺に対しての慣性を完全に消せるようになった。

増設された雪風の展開装甲から粉雪のような粒子が放出され、エネルギーを消費するとともに、極超音速へと加速できる。この粒子放出加速は、空気に消えていく雪のような粒子から取って、淡雪とでも名づけよう。

これが白式の第二形態・白光<sup>びやく</sup>。その機動はまさに白い光そのものだ。

本当に、白式は最高の相棒だ。

白式の詳細データを見ながら移動していると、数十秒で戦闘空域へたどり着いた。

『ISの反応を確認。該当IS、紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍ラファール・リヴァイヴ・カスタム？、シュヴァルツェア・レーゲ

ン、各操縦者の生命反応を確認。紅椿以外のISは危険度Bに達しています』

白式からデータが表示される。

皆ぼろぼろだ。

どうやら、今は箒が一人で頑張っているようだ。

戦闘の様子をISが拡大し、網膜に見えるようにした。

……強いな、金色に光っている紅椿が異常なエネルギーを生成している。これが紅椿の単一仕様能力なのだろう。

今の箒の実力では使いこなせないのだが、箒の思いに紅椿が答えているのだろう。まさに操縦者とISが一体となっている。

そうだ。本来、それが単一仕様能力発動の条件でもある。

このまま箒が銀の福音を倒してしまうかと思ったが、とどめを刺そうとした紅椿のエネルギーが突如きれてしまった。

まずい！間に合え！

「おおおおおおおつらあつ！！！！」

俺は、4枚に増えた翼を広げ、箒へ近距離からあの広域殲滅射撃を放とうとしている、銀の福音へ向かって、蹴り（ライダーキック）を放った。

あまりの衝撃で吹っ飛んでいく、銀の福音。そしてそのまま海に没していった。

しかし、反動でこちらも足の装甲が吹き飛んだ。さすがにあの速度のまま攻撃したのはまずかったらしい。

「一、夏？……一夏！どうして？！身体は、傷はっ……！？」

箒が俺を見ると、掴みかかってきた。それほどびっくりしたのだらう。



「大丈夫。もう平気だ」

「うう、良かった……良かった、本当に……」

う、泣かれた。それほど心配かけたんだな、俺は。  
ごめんな、箒。

「心配かけてごめん、箒」

「い、いや、お前が無事だったのならそれでいい」

涙を湛えながら、俺を見つめて箒はそう言った。

ああ、駄目だ。あの夢のせいかな、箒が妙に愛おしい。このままギョツと抱きしめてやりたくなる。身体で存在を感じたくなる。

「い、一夏？そんな眼で見ないでくれ、わ、私……」

（なぜそんな眼で私を見つめているんだ？これでは、私を求めているようにしか見えない……）

だ、駄目だ。もう限界だ。抱きしめよう。

「感動の再会のところ悪いんだけど、まだ戦闘中なんだけどね。――  
夏」

後ろから声がして、振り返ると、すぐ近くでシャルロットが、呆れた顔で俺達を見ていた。

「まったく、僕だって心配したんだからね」

シャルロットはそう言って、俺を見つめる。

「うん、心配かけてごめん。シャルロット」

「もう、一夏は本当にずるいよね」

(嫉妬していても、こんな風に話しかけられるだけで、嬉しくて嫉妬なんてすぐに消えてしまっただもん。本当にずるいよ)

何が？

呆れた顔をするシャルロット。……可愛い。

駄目だ。今度はシャルロットを抱きしめたくってきた。

「わたくしは、一夏さんはあの程度でやられるほど軟ではないと思っておりますわ」

セシリア、相変わらずの話し方だ。でも安心する。

「で、でもまあ、万が一のことがあるかもしれないですし、心配しましたのよ一夏さん」

素直じゃないところも可愛い。

「ごめん、セシリア」

「そうだ。私の嫁になる男がそう簡単には、死なないに決まってる。私もお前の無事を信じていた」

ラウラ。

「だ、だが、傷モノになっっていないか心配したのも事実だ」

「ごめん、ラウラ」

傷モノって、ははは、相変わらず天然なところがあるな。  
でも、それが愛おしく感じる。

「まったく、まだ戦闘中よ、集中しなさいよ」

鈴……あれ、鈴も抱きしめたくなくなるぞ？なぜだ？

うん、あの夢のせいだ。きつと誰かれなく抱きしめたくなくなっ  
てるんだろう。我慢我慢。

「わかってる」

「まあ、無事で何よりね。一夏」

「ありがとう。鈴」

みんな……。

そうだ。

皆がいたから、皆に出会えたから、今、俺はここに存在している、  
織斑一夏としてここにいられるんだ。

ありがとう。

………銀の福音、たぶん束姉に暴走させられているんだろうが、  
それでも、皆を傷つけたことは許せない。だから、楽にしてやる。  
俺に敗北の味を教えた借り、そして大切な人達を傷つけた借りを、  
返す。

もう負けない。俺は誰にも負けない。

みんなを守りたい。負けないことが皆を守ることにもつながる。  
だから、俺は強くなる。誰よりも。

「みんな、後は俺に任せてくれ」

「し、しかし」

「一夏さん……」

「はあ、本当にずるいなあ」

「むう、だが」

「なんで、あんたはこう……」

「頼む。俺は、絶対に負けない。だれにも負けないから、頼む」

一人ずつ、俺の意思を込めて、皆の眼を見つめながら、頼み込む。

「  
「  
「  
……  
「  
「  
「

「わかった。一夏。おまえを信じる」

「わかりましたわ。あなたを信じます」

「もう、一夏がそう言うなら、僕はいつだって味方するよ」

「一夏、私もお前を信じる。お前は強い」

「はあ。あんたはこうなったら止まらないんでしょ。ならしよすが

ないわね」

「ありがとう、皆」

『警告、敵、接近』

ISから警告された次の瞬間、海面から、銀の福音が現れた。俺に向かつて一直線に向かってくる。箒達は散開し、後方へと、退避していく。さて、雪辱戦と行きますか！

「当たるか！」

銀の福音が音速で接近し、エネルギー爪で斬り裂いてくるが、それを後方へ回避し、難なくかわす。

後方へ回避した瞬間、銀の福音は翼を広げ、あの広域殲滅射撃を放とうとした。

「遅い」

しかし、後方へ回避した加速がなかったかのように、俺は前方へと加速し、銀の福音へ間合いを詰め、雪片式型で斬撃を放った。

『おおお！！！』

衝撃で装甲が吹き飛ぶがお構い無しに、咆哮を上げ、銀の福音はエネルギー爪で斬りつけてくる。

しかし、俺はまた、後方へと回避する。

先ほどと同じ展開になり、今度は俺へと加速し、エネルギー爪による斬撃を続けて行おうとする銀の福音。

「遅い」

しかし、銀の福音が右手のエネルギー爪で斬撃を放つ瞬間に、俺はさらに後方へと回避。

続けて銀の福音が左手のエネルギー爪で斬撃を行う瞬間に、前方へ加速し、雪片式型で斬撃を放った。

反応性、精密さが異常なほど増した白式は、相変わらずスピードと比べると装甲が薄い。相対速度も上がるため、一発喰らえば、絶対防御が貫かれそう。しかし、そんなデメリットを覆してしまう、この速さは本当に反則だ。

攻撃される前に攻撃できてしまうのだ。

時間軸が違っている感じ。相手の動きがスローとは言わないが、それに近いほど動きが見えている。

どんな機動も隙だらけに見える。

いつでも、斬撃を当てることができる、と確信してしまう。

白式、お前は本当に最高だ。

しかし、どうやって倒す？

燃費が悪いため、短時間で倒さなければならぬ。

それに、ここまで移動するのに、エネルギーをかなり消費している。

エネルギーを温存するためには、零落白夜での攻撃は避けたいところだが、このままではブーストエネルギーも尽きてしまう。

ならば、やはり零落白夜だ。

白式に応えるためにも、次で決める！

「いくぞ！」

零落白夜を発動させる。と同時にヒュンヒュンと、自分のいた空域を連続高速変則機動で飛びながら、残像をたくさん作りだし、銀

の福音を攪乱する。

……今だ！

ある程度残像を作り出してから、瞬間加速で、一瞬だけ極超音速へと突入し、刹那、銀の福音を切り裂いた。そして、すぐさま停止し、銀の福音へと振り返った。

反応すらできず、銀の福音は斬り裂かれた。

そして、ISが危険度Dに達して、強制的に待機状態へと戻っていく。

ISが消えると、ISスーツを纏った金髪の女性が現れ、海に落ちていった。

俺は金髪の女性を抱きとめ、息を吐いた。

「ふうー。勝ったな」

一見したら、楽勝だと言える内容だろう。しかし、その実辛勝と言えるのだ。

白光は異常なほど機動力が上がったが、その分燃費が最悪だ。零落白夜と淡雪を合わせて使うと、数分と経たずにエネルギーが尽きる。現に今だって、シールドエネルギーは20ほどしか残ってない。

白式・白光は超短期決戦用なのだ。

とはいえ、この速度に反応することができるISや操縦者はいないので、不意打ちとかされない限り、一瞬で勝てる………うん、原則だな。千冬さんとか、元・現代表の中でもトップクラスの實力者が4世代ISを手に入れたら、負けそうだが……まあこれは例外だろう。

白式が俺に覚えてくれた力だ。今以上に使いこなして見せる。

いつか、この力でIS467機の頂点に立ちたい。

篤達が、こちらに向かってくるのを見ながら、俺はそう思った。

## 40 (後書き)

白式は強化しすぎかなと思いましたが、原作の雪羅も機能は違いますが同様なので、こっぴりました。明日ぐらいに設定を更新しておきます。



「作戦完了」と言いたいところだが、お前たちは独自行動により違反を犯した。本来なら、反省文の提出と懲罰用のトレーニングでもさせるのだが……結果的に目標を無力化できた功績と織斑の負傷に関してはこちらのミスと言うことで、今行っている説教のみとする」

無事、銀の福音を無力化し、操縦者である金髪の女性、ナターシヤという名でアメリカの代表らしい、を助けた俺達を待っていたのは、千冬さんの説教だった。

大広間で全員正座させられ、腕を組みご立腹の千冬さんに30分以上も説教されている。

足がしびれてつらいが、それ以上にだるく感じられる。どうやら思っていたよりも疲労が大きかったらしい。

怪我はほとんど治っているものの、すごく腹が減っていて、貧血を起こしそうだ。

それに眠い。

……。

「あ、あの、織斑先生？もうそろそろそのへんで……。怪我人もいますし。それに織斑君の顔色が……」

は！？今、一瞬だけ意識が飛んでいた。

「ふん……」

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しますね。あ、織斑君は別室で診断を受けてくださいね。の、覗いちゃだめですよ」

そんなことしませんし、する余裕もありません。

「じゃあ、水分補給をしてくださいね」

山田先生はそう言って、各人にぬるめのスポーツドリンクを渡していく。

俺は受け取るとすぐにグビグビと飲み干した。

「ふう〜」

とりあえず、エネルギー補給をしたら、だるさも軽くなった。

「すごい飲みっぷりですね、じゃあもう一本どうぞ」

山田先生にもう一本手渡される。なんか今の山田先生はいつもと違うというか、できる人に見える。この気配りといい……緊急事態の緊張が山田先生からポケをなくしているのかもしれない。

そんなことを考えながら、今度はスポーツドリンクを一口ずつゆっくりと飲んでいく。

「……………」

はあ〜、生き返る。

ぼ〜としていたら、視線を感じたので、視線をたどり眼を向けると、千冬さんがこちらをじーっと見ていた。

「なんですか?」

見ていると言うよりも、睨んでいるように見えたので、声をかけ

る。

説教ならさつき受けたし、なんなのだろうか？

「……その、全員無事に帰ってきて、よくやったな」

すぐに背中を向ける千冬さん。

褒めてくれたのだろう。だが、さきほど説教をした手前もあり、バツが悪いのだろう。

二人きりのときの千冬さんなら素直に褒めてくれるだろうが、教師モードの千冬さんなので照れているのもある。

『千冬さん』に褒められるのは当然嬉しいが、『織斑先生』に褒められるのも嬉しい。

なんとなく照れてしまう。

「……」

「……」

照れくさくて、互いに何も話せない。が、こんな雰囲気もいいだろう。

俺はやっと、気が休まるのを感じた。しかし、

「それじゃ、診断を始めるので、脱いでくださいね」

山田先生のこの発言が、全てを台無しにした。

俺、まだ居るんですけど!?

「ちよ、ちよっと、まだ俺がいますよ!」

「あ……す、すみません。織斑君は別室に移動してください」

まったくこの人は、ちょっと感心したらこれだよ。  
はあ、まあいい。さっさと別室に向かいますかね。  
俺は、身体を隠しながらじーっとこちらを見ている5人の視線から逃げるように、部屋を出て行った。

現在夕食の時間だ。

診断の結果、全員軽傷と診断され、大事なかった。

その後、教師陣は以後も仕事があるので大広間に残り、俺達生徒は各自の部屋に戻った。

すぐに白式・白光のデータを見てみたかったが、さすがに疲れていたのか、布団に横になっただけで眠ってしまった。

そして、夕食の時間だからということ、部屋に戻ってきた千冬さんに起こされた。

で、今に至る。

「ね、結局何が起きていたの？教えてよ」

「……機密だから、ダメ」

シャルロットに生徒たちが数人群がり、事件のことを訊いている。あの5人の中で、一番話しが聞きやすそうなシャルロットに聞いているのだろうが、あれでシャルロットは実戦とか、こういう事態になると、冷静？冷徹？になるので、口を割ることはない。

箒は言っちゃんだが、友達が少ないので、今も俺の隣で静かに夕食を食べているし、ラウラも転入してからしばらくはアレだったので、同様だ。

セシリアは1日目の夕食と先ほどの千冬さんの正座のせいか、正座がトラウマになっているので、テーブル席で夕食を摂っている。

別クラスの鈴もシャルロットと同様になっているが、鈴も口を割ることはないだろう。

もっとも聞いている生徒達もそれをわかっていて、あえて騒ぐためにそうして……いるわけないか。

ぺちやくちやと話す生徒達を見ながら、ゆっくりと食事を摂る。

本当にこちらの料理はうまいな。

今日のメニューはほぼ昨日と同じだが、カワハギの刺身ではなく、どこかの産地直送の地鳥の焼き鳥がある。

脂がのっているが、ギトギトした感じがしない。明らかに市販のものとは違う。

空腹のおかげでご飯がすすむ。

ついご飯のお代わりをってしまった。ちなみに箒とラウラもご飯のお代わりをしていた。

「一夏、今日はありがとう。その、お前のおかげで助かった」

「いや、俺こそ、格好悪いところを見せたな」

あのハプニングがあったからと言って、隙を見せるなんて、訓練が足りない証拠だ。

今後は不意打ちとか、1対多とかの訓練をしないとイケないな。

「いや、そんなことはない。おまえは、その、格好良かったぞ」

「ありがとう」

ちよつと恥ずかしいけど、嬉しい。

「そうだ、一夏は格好よかった。それよりも駄目なのは、私達の方だ」

ラウラは悔しそうに言った。

「5対1でかかって、負けたんだぞ。いくら二次移行したからといって、あれは無様だった」

「そうだな。私も紅椿のおかげで戦えたようなものだしな」

そう言って反省し始める二人。

「それを言ったら、俺だって白式のおかげで戦えているんだぞ」

俺は高機動戦での判断や、状況把握、空間把握能力はそれなりに高いのかもしれないが、白式のおかげでそれが活かしているんだ。

俺自身の技量はまだまだだ。

「確かに、お前たち二人のISは4世代だから強いと感じるかもしれない。しかし、それを引いてもISの性能を活かしている……違うな、ISとの相性がいい、操縦者とISが互いに理解し合っているだけでも言うのか。それが、二人の強さの理由だと思う。特に一夏と白式を見ているとそう思う。二次移行したあの粒子を放出する加

速も単一仕様能力と同等のものだろう」

……確かに、打鉄と違って白式は展開すると、ひとつになる感覚がする。あれはフィッティングのおかげだと思っていたが、初期化状態の白式からして一体感があつたし、相性が良かったからあの感覚があつたのだろう。

そして、白式が俺も知らなかった俺の特性である機動力を活かすようにフィッティングし、俺がその性能に恥じない技量を手に入れるため訓練を行った、それが結果的により相性がより良くなつていったのだろう。

2世代までの専用機は、3世代のように操縦者のイメージ・インターフェイスを重視していないため、技量が高くてもISとの相性が良くないため、二次移行しても単一仕様能力が発現しなかったのかもしれない。

ISでの戦力はIS自体の性能、操縦者とISの相性、操縦者の技量で決まるのか知れない。

それなら、俺が原作一夏よりも強いのも分かる。

白式の性能は同じだが、俺が白式の性能を活かせる訓練を重視しているから、操縦者とISの相性は良くなっているのだろう。操縦者の技量については、ISをより楽しんでいる、いやIS中毒になるほど俺がISが好きだから、学習能力がより上がっているのだろう。好きこそものの上手なれと言っし。

「そうだな、ISと操縦者、互いの力を合わせられるような在り方が、単一仕様能力を発現させるのかもしれないな」

「ああ、私は一夏と白式を見てそう思った。私も、一夏達のようにシヴアルツェア・レーゲンとそのような関係になれるだろうか…

…?」

「なれるさ、今のラウラなら、きっと」

そうだ。先ほどのような考察ができ、ISを、専用機を好きになれるなら、きっとできる。

(紅椿……お前は私を認めてくれたのか？ならば、私はお前にふさわしい力をつけてみせる)

「おっと、話が長くなってしまったな。そろそろ夕食を再開しよう」

「ああ、冷めてしまっしな」

「うむ、了解だ」

また黙々と夕食を食べる。

ちなみにシャルロット達はなぜか、Hな話(誰々の胸がでかかったとか)をしていた。一体なんでそんな話になったんだろうか？謎だ。



#### 41 (後書き)

修正、コメ返しなどは深夜に行います。

## アンケート（終了）（前書き）

3/5 終了、結果を追記しました。  
御協力ありがとうございました。

## アンケート（終了）

現在4巻分を書き始めていますが、完全にオリ展開になっていきます。

4巻分は現在決まっているヒロイン個別の話になっていきます。

現在決まっている正ヒロインは、篝、セシリア、シャルロット、ラウラ、鈴、千冬です。

4巻分で新しくヒロインの追加をできるので、アンケートをお願いします。

以下の3つから1つ選んでください。

アンケートの答えは感想にお願いします。

1、ヨーロッパ圏出身ヒロインの出身国への旅行に山田先生が一夏と一緒に行動する。

2、上記旅行へはアメリカのISテスト操縦者ナターシャが一夏と一緒に行動する。

3、追加なし、クラリツサ、チエルシーをサブヒロインに昇格する。

（セシリアルトハーレムEND、ラウラルトハーレムENDフラグ）

全て書こうとすると、作者はパンクしてしまいますので、選ばれなかった選択肢については完結できたら、追加する形になります。

## アンケート結果

1、12

俊さん、クレバスさん、闇の皇子さん、回路焼付機さん、不知火さん、那由他さん、ヒロさん、カロンスさん、ragodessaさん、ラングレー?さん、masaさん、Defortiteさん、

2、11(10)

鹿島 ヒロさん、mnfさん、ユウトさん、シンさん、リンドウさん、無貌の者さん、錆びた刀さん、nsmtさん、jimさん、はるきよさん、御神楽 湊さん(メールにて)

3、10

ウイング00カスタムさん、まさきさん、蒼天さん、Aquaさん、水撒き兄さんさん、DBさん、色の放浪者 Hさん、空さん、ルーファスさん、ゆゆゆさん

4、無効票

ロックさん(千冬ルート)

と言うわけで、山田先生を正ヒロインにすることに決まりました。

元日本代表候補生の実力をヨーロッパにて披露+ドッキリハプニングで互いの高感度アップを書きます。

またナターシャは完結後の短編などで登場させます。

アンケート(終了)(後書き)

接戦でした。

「あ、箒。後で用があるんだが、いいか？」

夕食を摂った後、30分ほど男性用の大浴場が使用できるため風呂に入ろうと思い、部屋に戻ろうとしたが、あることを思い出し、箒を呼びとめた。

「？ああ、いいぞ」

「箒もこの後大浴場に行くんだろ、なら、1組が使用できる時間が終わった30分ほど後で、玄関で待ってるよ」

「わかった」

これでよし、と。

さて、まずは風呂に入って疲れをとるかな。

風呂から上がり、部屋で涼んだ後、約束の時間より少し早くに、玄関に移動した。

それから数分経った後、箒がやってきた。

「すまん、待たせたな」

「いや、俺が早く来たただけだ。時間はちょうどいい。それじゃ外に出ないか？」

「ああ」

ゆつくりと、波の音が聞こえてくるのを聞きながら、歩く。

さて、どう話を切り出そうか。夜で波の音だけが聞こえるというのがよい雰囲気のため、言いたしにくい。

とりあえず、何か話をするか。

「今日は疲れたな」

「ああ、お風呂に入っていたら、眠りそうになったぞ。きっと今日は熟睡するだろうな」

「そうだな。でも、戦いが終わった後だから、きつと気持ちよく眠れるさ」

「うん」

よし、いつまでも話していても仕方ないし、本題に入ろう。

俺が立ち止まると、箒も立ち止まった。

そして俺は、腕に抱えていた紙袋を渡して、言った。

「箒、誕生日おめでとう」



「…………え？あ、そうか、今日は私の誕生日だったな。あ、ありがとう、嬉しい」

箒は紙袋を嬉しそうに受け取り、笑顔を見せてくれた。

『ドキン』

う、やばい。

また、あの妙に可愛く見えるモードだ。一体俺はどうしてしまったんだ？

すぐく、ドキドキする。

…………もしかしたら俺は、思ってる以上に、みんなに魅かれているのかもしれない。

しかし、みんなに対してこんなことになっていたら、選ぶ時が大変だ…………。俺って節操無しだ。ちよつと落ち込む…………。

「中を見ていいか？」

「ああ」

箒は、がさごそとシールを剥がし、中からプレゼントを取り出した。

「これは、青色のリボンと、香水か？」

「そうだよ、早速つけてみて。ああ、吹きかけた下をくぐる感じで」

シュッと音がした後、強い甘い匂いが漂ってくる。

そして、箒は吹きかけた下をくぐり、浴衣に匂いがついていく。

「う、これ、匂いが強くないか？」

「少し待ってくれ。そうだな、ちょっと歩こうか？」

黙々と歩いていき、砂浜まで降りてきた。

暗い波も見えない海から、波の音が聞こえる。それがもの悲しく感じる。

さくさくと砂浜を歩いていき、10分ほど経った。  
すると、

「あ、いい匂い」

と箒が言った。

この香水は最初はきつく感じるが、時間がたつといい匂いになる。もっとも香水はそんなものかもしれないが。

潮の匂いもするが、箒の近くにいと、少しの甘さと清潔感、そしてちょっと大人っぽい感じがするいい匂いが漂ってくる。

「うん、いい匂いだな。一夏、ありがとう……嬉しいが、その、高かったんじゃないのか？」

「ブランドものだが、高校生用のだから1万円もしない。リボンと合わせて、1万円近くしかしないさ。白式のデータで一般のサラリーマン並みに給金を貰っているから、大丈夫だ」

「そうか……うん、ありがとう、一夏」

「喜んでもらった様で何よりだ」

「うん。……あ、そうだ、今日の朝に言っていたお願いについて何

だが……」

「……ああ、あれか」

東姉のキスの時に言っていたな。あの人もすごい濃いキャラだった。原作だと、今後はもう会うことはないはずだが……なんかやな予感がする……。

「その、夏休みに私の実家の神社で夏祭りが行われるのだが、その時に私が神楽舞を踊るのだが、それを見に来てくれないか？それで、その、舞が終わったら、一緒に祭りを楽しまないか？」

夏祭り、か。うん、楽しそうだ。

昔は神社でやっていた盆踊りとかに行っていたのに、もうずっと行っていなかったな。屋台とかあの雰囲気を楽しんだよなあ。

それと箒の舞か、箒は和風がすごく似合うから綺麗なんだろうな。うん、それも楽しみだ。あの日本文化の独特な感じが好きなんだよ。

「ああ、いいよ。楽しみだなあ」

「そ、そうか」

(よし、がんばって舞の練習をしよう。失敗なぞ絶対にできん)

「さて、そろそろ帰ろうか？」

「うん」

ちょっといい雰囲気のまま、俺達は旅館に戻っていった。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても48%かあ。思ってたよりもいいなあ。いつくんと毎日訓練してるって話だし、それで予想よりも上だったんだね」

空中投影のディスプレイを眺めながら、東は無邪気に微笑む。

「んー……ん、ん」

鼻歌を歌いながら、別のディスプレイを呼び出す。

白式の一次形態と二次形態の戦闘映像が流れる。

東は岬、いや崖の上、落ちないように設置されている柵に、海側を向くように腰掛けている。足をぶらぶら揺らし、鼻歌を歌いながら、映像を見ている。

「それにしても、驚いたなあ。いくら白式に雪風を付けたからといって、銀の福音はあんな簡単に倒せないはずなのに、倒しそうだったんだもん、いつくんの実力、才能かあ……」

東は一夏のことを思い浮かべる。

昔は普通の少年だった。

妹と仲が良く、束とも面識があり、束が興味を持つことができる人物だった。

記憶をなくしているため、もう興味が薄れていったのだが、昨日再会、いや初めて会ったのだが、いい男で、前以上に興味を持つてしまった。

天才であるが故の思考、それは異端だ。故に万人が受け入れることはないだろう。

そんな束を叱ってくれる千冬、どうしても可愛がってしまう妹、そして弟みたいな一夏。この3人だけが束の世界に入ってきて面白いと思えた人間だった。

しかし、今の一夏は、束を受け入れてくれる包容力がある。千冬とは違った何かを超越した強さを持っている。

もし、千冬が男性だったら、惚れていただろうが、女性だったので親友という関係になった。もっとも束は百合でも構わないのだが、千冬は受け入れないから無理だ。

しかし、出会ってしまった。千冬とは違った強さを持つ男、束が興味を持てる男と。

「うーん。いつくん、いいなあ。子供作りたいなあ」

ISは束の作品であり、子供である。

一夏との間にできた子供ならば、どのように成長するか、見てみたいと思う。

もちろん、その子供も3人と同じように、束が興味を持つ人物、大切な人カテゴリーに入るだろう。

しかし、その愛はやはり人とは違った。

異端の愛情。

もっとも、一夏が束を本気で愛してしまえば、きっとその異端も消えていくだろう。それくらいには束は一夏に好意を抱いていた。

「何を言っている。おまえには絶対一夏はやらん」

東の背後にある林から千冬が姿を現す。

千冬は漆黒のスーツに身を包み、いつも以上の威厳が、まるで闇の王のように千冬を感じさせる。

「ひどいなあ、ちーちゃん。恋愛は人の自由だよ」

「お前が言っな」

東は背を向けたまま話す。

互いがどんな顔で話しているか、見なくてもわかる。

立場や経験、思い、いろいろな出来事があったが、それでも二人は親友だった。

「白式か、まるで白騎士のようだな」

千冬は空中に投影されているディスプレイを見て、そう言った。

「そうだね、でも、それは当然だよ。だって」

「白式のコアは白騎士のコアと同一だから、だろう？」

「正解です。さすがちーちゃん」

「あの操縦者の生体再生能力は白騎士の能力だったしな、ちょっと考えればわかる」

「ふふふ。もしも、コア・ネットワークで白騎士と暮桜が情報をや

り取りしていたら、同じ単一仕様能力を開発してもおかしくないよねえ？」

千冬は何も答えない。が、束はお構いなしに続ける。

「あのコアは初期化したはずなのに、おかしいよねえ。私が確実に初期化したから、間違いないはずなのに、なんでだろう。束さんにもわからないや」

「不思議なこともあるものだな」

二人は星空を見上げた。

夜空には幾多もの星が輝いていた。

「…そうだな、私も例え話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが推測を言うなんて、珍しいねえ」

「例えば、とある天才が1人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする、そうすると本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「でも、それだと、ISがなぜ動き続けているんだらうかねえ。私にもそれはわからないんだよねえ」

先ほどのわからないと言った表情と違い、本当にわかっているのかわからないのか、わかりにくい表情で束はそう言った。

「……まあいい、次の例え話だ」

「多いね」

「ふん、嬉しいだろう？」

「うい」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機とISの暴走事件だ。暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「でも、その妹が出る幕はなかったんじゃない？」

「…もしも天才の妹がデビューする前に事件が解決してしまわないように、いろいろ細工されていたんだろう。例えば、ある船をステルスで包み込み、逃げようとした暴走ISがそこを通るようになっていたとか、暴走したISを衛星で捉えられなくなる時があるとか、な」

「ふふ、それは、すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて12カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した天才が、な」

二人はそれから数分間、沈黙を続けた。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」



ふいに、東は千冬に問いかけた。

「そこそこにな」

表情を変えず応える千冬。

「そっか」

「」

崖から吹き上げる風が、いきなり吹き出した。  
その風の中で東は何かを呟いたが、その言葉は風の中に消えてい  
った。

## 42 (後書き)

入院するため、予約投稿です。

3/5土曜には退院しますので、その日にアンケートの結果を発表します。

今日は臨海学校の最終日。

最終日は、朝食を食べた後、訓練機と専用装備の撤収作業を行い、バスで学園に戻るだけだ。

現在バスの中で、例によって5人席の真ん中に座っている。

昨日はあの後、布団に入ったらすぐに眠っていた。まあそれくらい疲れたので、当然かもしれない。しかし熟睡していたのか、朝、起きることができず、千冬さんに起こされるといふ珍しい経験をした。

もっとも『一夏、起きろ』と声をかけられて、揺さぶられただけだが、今まで千冬さんに起こされたことなどないので、ちよつと新鮮な感じがした。

まあ、よく眠ったおかげで、疲れはとれた。

明日からは、また訓練を再開しなければ……そういうえば、前にラウラと話していた時に体験入隊の話が出たが、あれはどうなっているのだろうか？前は行けたら面白そうとしか考えていなかったが、今はできることなら行きたいと思っている。

訓練方法などを体験したいし、ラウラの副官と戦ってみたい。二次移行した白式はさすがに反則的な強さなので、機能を一次移行程度まで抑えれば、よい経験になる。もっと訓練を、実戦を、行いたい。そして強くなりたい。

ラウラと、後はセシリアにも聞いてみるか。

「ラウラ、セシリア。話があるんだが、いいか？」

俺の左右隣りの席に座っているラウラと隣の席に座っているセシリアに声をかける。

ちなみに筈は右側の窓際、シャルロットは左側の窓際だ。

「何だ？」

「何ですか？」

「前に言っていた体験入隊の件だが、どうなっている？セシリアと一緒にイギリスに行った帰りとかに行ければいいと考えているのだが、どうだ？」

「む、その話しか。それならば許可は取れた、むしろ来てくれといった感じだな。白式との戦闘データなど、簡易データでも欲しいらしいな。お前のデータがあれば、いずれ男でもISが使用できるかもしれないか思惑があるのだろう」

「そうか、なら学園に戻ったら、日時とかいろいろな手配とか、計画を立てよう。セシリアもそれでいいか？」

「はい、大丈夫ですわ。でも、軍に興味があるのでしたら、イギリス軍のIS専門部隊に渡りを付けることもできますが、どうですか？」

「頼めるか？昨日のことがあったし、強さに貪欲になっていくのが、自分でもわかるんだ。もっと経験を、実戦を、と心の中の自分が望んでいる。そんな感じがする」

（あ、あら。この顔つき、とっても男らしいですわ／＼）

（う、この顔つきは、反則だ。眼が離せない／＼）

「どっしした？」

二人がいきなりおかしくなったんだが、何か変なことを言ったか？フラグ的な発言はしていないはずだが……？

「な、なんでもありませんわ」

「そ、そうだ。た、ただ、これ以上強くなられてはなかなか追いつけないと思ったただけだ」

確かにそうだが、二次移行すれば、ラウラのIS、シユヴァルツエア・レーゲンはかなり強力になるだろう、それにラウラがあの左眼を使えば、全力で戦っても負けるかもしれない。

セシリアのIS、ブルー・ティアーズはもっとも将来性がありそうな兵装だ。ビットはシステムが洗練されれば、ブルー・ティアーズが一次移行のままでも苦戦しそうだ。限定空間での戦闘ならうかつに動けなくなりそうだしな。

「俺の場合ISの性能が強さの大半になっているからな。もっと自分の技量を高めたいんだ。俺が白式を一番うまく操縦できるんだ、って言えるようになりたい」

ア ロ・レイみたいだね。

「なれますわ、一夏さんなら」

「ああ、きつとな」

「はは、そうならいいな」

そのためにはやはり訓練と実戦だ。

「では、わたくしは実家のつてを通じて、いろいろ調整してみますわ」

「私もクラリツサを通じて、実戦に近い訓練などを行えるように調整しておこう」

「ありがとう」

うん、楽しみだ。ああ、でもそれだけじゃ損だな、せっかく海外に行けるのだし、観光もしたい。

「そういえば、観光とかも案内してもらえるのか？せっかく国外に行けるんだから、観光もしたいな」

「あら、それなら大丈夫ですわ。うちの家の者にイギリスの観光名所や隠れた名所などを回れるプランを立てさせますわ」

「それならば、クラリツサに頼んでおこう。ついでに部隊のものを護衛として同行させるついでに、休暇を取らせるか」

うん、余計楽しみになってきた。

海外はアメリカしか行ったことがないからな。

あれは疲れたけど、楽しかったなあ。

また、楽しめるなんて、この世界に来て、何気に嬉しいことだ。

元の世界では、もう旅行とかするような機会はなかっただろうしな。

（私もついていきたいが、姉のせいでいろいろと制限されているから無理だろうな。まあいい、私は夏祭りの時が勝負だ。二人きりだし、二日あるし、これなら……）

(うう、フランス代表候補生の僕がついていくわけにもいかないし、どうしよう？このままじゃリードされてしまうよ……こうなったら……ああして……こうして……実家を利用すれば……よし！)

「い、一夏、ならさ、ついでにフランスにも来ない？」

話しに入ってくるシャルロット。

しかし、フランスかあ、そりゃ行けるなら行きたい。3つの国に行くなら1つの国で、1週間程度滞在して、期間は夏休みの半分くらいになるか？

「行けるのなら、行きたいな」

「なら、僕が実家に話を付けておくよ。実家なら、ISの開発工程とか見れるし、ISの開発についても知っておいても損はないと思うよ？それに、もしかしたら、一夏の考えたISとかが開発されるかもしれないよ。白式の実戦データだけでも渡せば、間違いなくいい待遇で迎えられるしね。模擬戦とかもデータが取れるんだからOKが出るはずだよ」

ISの開発か……それはちょっと面白そうだ。さすがに白式以外のISを使う気にはならないが、もしかしたら自分の考えた兵装(スパロボ的な)とかと戦える……やべ、ちょっとわくわくしてきた。

「それは、面白そうだ。でもシャルロットは実家と、いろいろあったし、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。任せて。それにビジネスとして考えれば悪い話じゃないから、たぶんうまくいくよ」

しかし、これでは好意を利用している気がして何かすつきりしないし、何かお礼ができればいいのだが………思いつかない。考えておくか。

（よし、後は僕の交渉次第。これならリードされないし、うまくやれば僕がリードできる）

（シャルロットさんですか？まあいいですわ、これでイーブンですし。イギリスならチエルシーがいますから、一夏さんを墮とすプランを立ててもらいましょう）

（シャルロットもか。うーむ、クラリツサに言って、一夏を墮とすプランを立ててもらおうか）

（海外ならある程度長期になるな、その間一夏に会えないし、むう………そうだ、夏祭りの設営の手伝いを頼むか。人手が足りないと頼めば、一夏なら受け入れてくれるだろう。食事とかは出すし、同年代の男子と一緒に作業できるしな。一夏は女だけの学園にまいつているみたいだし、いい気分転換になるだろう。後で二人きりの時に言おう、聞かれたら邪魔されそうだし）

なんか、4人から変なプレッシャーを感じる。このプレッシャーはたぶん恋愛がらみだろう。もう慣れたから気づく。

うーん、でも、そうだなあ、それぞれの出身国について知るのはいい刺激になるかもしれないな。それに学園以外でどういう生活していたとか、いろいろ知ることができるのもあるし、ISだけじゃなく、恋愛のことも進展がありそうだ。

あ、海外に行くことになれば学園の許可が必要になるだろうな。今でもいろいろ問題があるって話だ。研究機関に引き渡せとか、I



Sは我が国のものを使用しろとか、そういう話が出ては消え、出ては消えと繰り返しているらしい。

帰ったら、千冬さんに相談するか。よし、そうしよう。

というわけで学園に戻ってきた。

たった2日ぶりだが、旅行から帰ってきた時とかは、妙に懐かしく感じるんだよなあ。

バスから降りて全員集合し、千冬さんから、3日間のことや、これからのことを聞いてから解散した。

とはいっても全寮制だから、このまま部屋に戻るだけというもの何か変な感じがする。

修学旅行とかは普段学校以外で会っていない奴と、一緒の部屋で寝るとかが学校行事の旅行って感じがしていいんだが、ここは全寮制だしな。

それ以前に女性だけだし、やっぱり男の知り合いが欲しい。……はあ。

まあいい、それより、千冬さんに海外旅行？（訓練とか体験するし、研修か？）の話しをしなければ、さて千冬さんは……まだ仕事があるか。まあ当然か。

なら、夜にしよう、21時近くなら部屋に居るはずだし、その時間帯に部屋に訪問しよう。

さて、部屋に戻るか。

現在夕食を摂っている。

今日は4人＋鈴とクラスメイト数人（のほほんさん含む）で夕食を摂ることになった。

席は人数が多いため、椅子に座るタイプの席に座った。

ファミレスとかにある、ソファのような席は円のタイプや、四角のタイプがあるが、10人近くも座れないので、これに座ることになった。

席順は真ん中に俺、右隣に篝、さらに奥にのほほんさん。左隣にセシリア、さらに奥に静寂さん。正面にシャルロット、シャルロットの右隣にラウラ、左隣に鈴が座っている。それ以外の娘もその奥に座っている。

夕食のメニューは、一昨日、昨日と和食中心だったので、俺は洋食セットを頼んだ。今日の洋食セットはハンバーグとライス（パンとライスが選べる）、サラダ、コンソメスープだ。

篝は相変わらず、和食セットを、セシリアは俺と同じ洋食セットを、シャルロットはカレーライスとサラダを、ラウラは親子丼とサラダを、鈴はラーメンとサラダを頼んだ。他の娘もそれぞれメニューを頼んでいる。

「ふう、うまい。この味が何か帰ってきたって感じがする」

「そうだな、さすがにあの高級な感じは毎日食べる気がしないしな」

「それに、昨日のことがありましたから、臨海学校が長く感じてしまいましたものね」

「そうだね。実際は二泊三日だけだったのにね」

「まさか、学園であのような事態があるなど、思ってもみなかったな。まるで任務を遂行しているときみたいだった」

「そうよねえ。いくら専用機持ちでもあんな事態に出くわすなんて滅多にないわよ」

「おりむー、大丈夫だったー？あ、ここに居るし大丈夫だねー」

「皆さんご無事で何よりです」

……これだけ人がいると誰が話しているのかわからなくなってきそうだ。

ちなみに今の発言は、上から、俺、箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、鈴、のほほんさん、静寂さんだ。

俺の隣側に座っている人達は、少し身を乗り出して、俺の方を向いて話している。行儀が悪いが、今は楽しく食事をする時だから、何も言わない。なんだかんだで行儀がいいし。少なくとも食べながら話すとかはしないし。

さて、まずは箒に話を振ろうか。

「箒、明日の放課後は一緒に訓練しないか？紅椿の性能を見てみたいんだ。それと、ラウラも付き合っただけ欲しいんだが、いいか？訓練についてアドバイスをしてくれると助かる」

ラウラはやはり、一番この中で技量が高いので、アドバイスも的確だろう。シャルロットでもいいのだが、ここが一番技量の高いラウラに頼んでおく。

「む、いいぞ。ラウラ、私にもアドバイスを頼めるか？」

「了解した。4世代ISの性能がどれほどのものか見せてもらおう」  
「わたくしもお付き合いしたいところですが、しばらくは実家の用事がありますので、残念ですわ。今週末も用事がありますし」

セシリアは公の部分が大変だからな。実家はものすごい富豪で企業やら持つてるし、バイオリン、最低限は社交界に顔を出さないといけないしな。

「大変だろうが、がんばれ、セシリア」

「ふふ、これはわたくしのすべき義務ですもの、つらいと思ったことはありませんが、逃げ出したいとは思ったことはありませんから、大丈夫ですわ。一夏さんの応援があれば百人力ですし」

うん、いい表情だ。輝いてるね。

「あんたは大変よね」。私は一般家庭で生まれてよかったわ」

「そうだね、華やかそうで憧れちゃうけど、実際はものすごく大変そうだしね」

鈴はなんだかんだ言いながら、いろいろこなしちゃいそうだけだな。シャルロットもそうだ。ってかシャルロットがお嬢様だったら………やべ、何かいいかも……。

「皆さんお忙しそうですね。本音さんも生徒会のお仕事があるのでしょっつ？」

「そつだよー、まあちょっと大変だけどー、わたしも事情があるし、がんばってますよー」

あー、そういえば生徒会長とか、原作だと後でいろいろイベントがあるんだっけ？生徒会がどうかこうとか

顔を見たことはあるが美人だったな。でも、人をからかうことが好きそうであまり近づきたくはないタイプだった。原作……なんか敵、組織のIS操縦者と戦って勝ったんだっけ？もう全然覚えてないや。

でも、やっぱり……楽しいよな、この学園は。

ISがあつて、いろいろなことが起きて、本当に楽しい。

「でも、今つてすごく楽しくないか？皆と出会つて、ISで戦つて、いろいろないイベントがあつてさ」

なんてちょっとクサクサかったかな？

でも、これが正直な気持ちなんだよなー。昨日のあの緊迫した状況も今となつてはいい思い出だし。

「そう、だな。確かに楽しいな」

(そして一夏、その表情はやめてくれ、格好よすぎる／＼)

「確かに、大変なこともあります、楽しいですわね」

(一夏さん、格好良すぎですわ／＼)

「うん、とっても楽しいね」

(一夏、その表情はズルいよ／＼)

「ああ、楽しいな。こんな思いは初めてだ」

（一夏、その表情は卑怯だ。正視できない／／／）

「わたしもー、楽しいよー」

（おりむーの表情、反則だよー／／／）

「ISの操縦とか大変ですけど、楽しいですよね」

（織斑君ってやっぱり素敵ね／／／）

うん、やっぱり帰ってきたって感じがする。こんな風にいつも俺は食事を摂っているのだ。わいわいと楽しいのでいいが、たまには一人で静かに食べたい時もある。

今度、一人でどこかに食べに行こうかなあ。実家のそばに食堂があったし、行ってみようかな？

夕食後もお茶を飲みながら、皆と話しをした。

9時ちょっと前にお開きになった。明日からは通常授業に戻るからだ。もし土日なら、このまま10時過ぎまで話していたらうな。女の子は、何時間も話していても楽しいんだろうな。たまになら付き合ってもいいが、さすがに毎日あったらしんどそうだな。

さて、部屋に戻って歯を磨いたら、千冬さんの部屋に行くか。研修旅行、修行？のことを話して、許可とか取れるのか聞かないとな。

部屋に戻り、洗面所で歯を磨く。

……そういえば、親知らずを抜くのに入院して手術を受けて抜いたが、この身体の場合、どうなるのだろうか？注射だけで抜ければいいんだけどなあ。痛くないからといって放置していると、社会人になってからだと病院とか行きにくくなるから、面倒なんだよなあ。なんて、ふとしたことで前の世界でのことを思い出した。

歯を磨き終わったので、千冬さんの部屋に行くとしますか。

呼び鈴を鳴らすと、ジャージ姿の千冬さんが出てきた。

「なんだ、お前か。どうした？」

「ちょっと相談したいことがあるので、今いいですか？」



「ああ、入れ」

「お邪魔します」

中に入った。

……旅行鞆が未だしまわれていない。これはきつと面倒くさくなつて、そのまま放っておくフラグだろう。仕方ないので、土曜日にも、掃除と荷物などの整理をするか。

「で？何を相談したいんだ？」

「えー、夏休みにセシリア、ラウラ、シャルロットの出身国に観光を兼ねて、各国のIS部隊の訓練などを見せてもらったり、模擬戦を行ったりする旅行に行く計画を建てているのですが、俺の社会的な事情からIS学園に許可を取るべきだと思ったので、報告に来たんですが」

「……それは、また、面倒なことだ」

千冬さんは眉をひそめ、そう言った。確かに余計な仕事を増やしているな。しかし、行けばきつと強く成れるだろうし、恋愛絡みでも、何か進展や心境の変化があるかもしれない。わがままになるが、行きたいのだ。

「ふう、面倒だが…お前が決めたことならば文句は言わんさ。それにお前にやる気があるのに、それをそぐようなことは教師としても、姉としてもできん。上に報告し、指示を仰ぐことになる。私の一存ではどうしようできんぞ」

「はい、もし、政治的なことで行けないなら、その時は諦めますよ」

いくらなんでも、そこまでして行くわけにはいかない。いろいろな人にすごく迷惑がかかるからな。

「そうか、まあ、おそろくだが、大丈夫だろう。お前が滞在する国は、まず賛成というかむしろ積極的に支援してくれるだろう。しかし、他の国がゴネるかもしれん、いや、むしろ結果として行く国が増えるかもしれんな」

それは、ありうるな。

「とはいえ、夏休みの間だけですし、2週間ぐらいは家に戻りたいですね」

箒との約束もあるし。

「そうだな。まあそれも伝えておく」

(しかし、何か問題が起きるかもしれんし、私も行けるか……？ 駄目なら山田先生について行ってもらうか、一夏は明らかに女として意識していないし、安牌だろう)

「じゃあ、お願いします」

頭を下げる。

「ふ、気にするな。思えば初めてじゃないか？ お前が私にわがまを言うのは」

そう言えばそうだ。1年一緒に暮らしていたが、互いに精神が大

人だからというのもあったし、俺が罪悪感を抱いているのもあったしで、わがままとか、どうしても譲れないこととか言ったことはないな。

「そういえば、そうですね」

「ふむ、少し嬉しいかもしれん。おまえは何かにつけてソツなくこなすし、家事などは全部お前任せだったからな」

「なんですか？それ？」

「なんでこんな表情をするのだろうか？わからん。姉だからだろうか？俺には弟や妹がいなかったからわからないな。」

「何、保護者の戯言さ」

「ああ、なんか、あまりに手がかからない子より、少しは手がかかる子の方が…って奴か。」

「ふ、まあいい。では、旅行の件は報告しておく」

「はい、お願いします。じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そのまま部屋に戻り、顔を洗い、ベッドで横になる。

旅行の件はどうやら、何とかかなりそうだ。

後は明日からの訓練か、とりあえず、ラウラに二次移行のデータを見てもらい、アドバイスしてもらおう。

今日は、今から寝る前までデータを見ておこう。

#### 44 (後書き)

アンケートにて結果を公表いたしました。

臨海学校から帰ってきた次の日、木曜日。

俺と、箒、ラウラはアリーナにて、軽くISを動かして、その後でISのデータを見てもらっていた。

「ふむ、展開装甲を攻撃特化にした、雪片式型と、機動に特化した雪風。シールドエネルギーを使用し、零落白夜と淡雪の発動が可能か。通常の雪片式型と雪風を使用しての、できるだけ消耗を抑えた戦い方と、短期決戦を目標とした戦い方の2種類に分けて訓練すれば良いと思うぞ」

高機動からの零落白夜による短期決戦は今まで訓練してきた通りの方法でいい。長期戦の訓練か、最小限の動きで避けたり、エネルギーが尽きかけているときは通常の雪片式型だけで攻撃をすることになる。

長期戦の訓練は、今までは訓練メニューに入れていなかった。勝つためには短期決戦型を目標にする必要があったからだ。しかし、二次移行したのだし、消耗を抑えた戦い方も覚えておく必要があるか。

「短期決戦を目標とした戦い方は今まで通りでいいと思う、後は錬度を上げるだけだろう。長期戦は、ブースト、スラスターをできるだけ使用せずに回避すること、また斬撃を思った通りの部位に当てられるようにすることが必要だ。これは短期決戦でも役に立つだろう」

なるほど精密な斬撃か。これは前々から思っていたんだよなあ。

訓練方法は……竹刀を振って身体に覚えさせた後で、ISに反映

するか。今まで通りだが、少し重点的にメニューを立てるか。

長期戦用の訓練メニューは、精密な斬撃ができるようになってからだな。

「ラウラ、ありがとう。じゃあ、次は筈の番だな」

「よろしく頼む」

「……紅椿は、4世代だというだけの性能がある。その上、篠ノ之専用に作ってあるので、私から言うことは、基礎を何度も反復することだ。おまえは適正が低いし、一夏のように学習能力が特別高いわけでもない。もともと剣が使えるが、そのイメージをISで実践する力がない。機動などもかなり無駄がある。今は何とか紅椿の性能のおかげで戦えると言ったところだ。それだけ紅椿の性能が高いということだな」

「う、そうか……」

「とりあえず、まずは、ISを瞬時に展開できるようにすること。次は、剣を持たず、飛ぶこと、急加速、急停止を覚えること。それから覚えやすい機動を覚え、剣の使い分けを覚える。雨月、空裂は初見の相手には有効だが、表に出た以上、そんな相手はもういないだろう。レーザーは直進だし、エネルギー刃の放出も剣を振った先に飛んで来るため、攻撃の軌道自体は読みやすい。雨月はレーザーライフルを使用して感覚をつかめば、命中率も上がるだろう。空裂は今までにない兵器のため、お前自身が使いやすいように訓練するしかない」

「うーん、筈の動きはなんと云ったらいいのか……雑、だった。」

「アリーナの中だと、高速戦闘モードとは違い、より精密な動きが

必要になる。たとえば急停止とかだと、高速戦闘モードは性能差で無理やり加速、停止すればよいが、アリーナ内などの限定空間だと、調子に乗って速度を出しすぎると、急停止できずに遮断シールドにぶつかってしまったりしてしまう。

一昨日の戦闘は火事場の馬鹿力と、高速戦闘だったから、性能差で何とかなかったのだろう。

箒は、打鉄なら簡単な機動や接近戦ぐらいはできたのだが、紅椿の機動力戦闘をすると、あらぬ方向へ行ってしまったりする。紅椿の性能が高いが故に起きてしまうのだ。

それに、今までと違いISを展開しなければならない。

「わ、わかった……」

箒はラウラにぼろぼろに言われ、気落ちしている。

「まあ、努力あるのみだ。これから一緒に訓練していけばいいさ」

「そう、だな。よし、ならば、早速訓練開始といこうではないか」

「まずは、加速と急停止だ。それと簡単な機動を教えるから、今日はそれを反復しろ」

「わかった」

ラウラの簡潔でわかりやすい指導の元、箒は訓練を始めた。

さて、俺も訓練を行うか。まずは通常モードの雪風で高速変則機動をどれぐらいできるか試してみるか。

仮想敵を宙に設定、投影し、その周囲を残像を出しながら飛び回る。

1、2、3、4……

何度も続けているが、前の様にGがかからない。それにブースト、スラスターのエネルギーの減りが遅い。

束姉から渡された時に簡単に試してみた時も思ったが、すごい。それに加え、二次移行してさらに繊細に操作ができるため、高速変則機動しながらも周囲の状況を把握できる。

しかし、これだけ早いと剣筋が変になりそうだ。

やはりこれからは剣を重点的に訓練しなければいけないか。

俺は、仮想敵に部位を設定し、高速変則機動をしながら、狙った部位へと雪片式型を振るっていく。

しかし、思った通りのところに当たったり、微妙にずれたり、かするだけの時もある。

今日はこの訓練だけ行うか、アリーナが使用できない時間になったら、竹刀を振って、それからシャワー、夕食だな。

「ふう〜、疲れた……」

俺は寮の外で、竹刀を何度も振り続けていた。

思った通りの部位へ攻撃できるように何度も同じ箇所へと竹刀を振っていた。

より速く正確に斬撃が放てれば攻撃力アップにつながる。そう思うと、単調な練習でも集中できるし、やる気が出る。



ISに関わる練習は、俺にとって強くなるための近道だ。

だから、つい集中しすぎてしまったのか、気が付いたら、もうすでに夕食の時間になっていた。

食堂は時間が決まっているが、購買は就寝時間前までやっているため、そこで買えばいいのだが、やはり食堂の方がおいしいので、急いでシャワーを浴び、食堂へ急いだ。

食堂の前には、篝、ラウラ、シャルロットがいた。ああ、しまったな。

「一夏、遅いぞ」

「悪い」

アリーナを出る時に、篝、ラウラと夕食を一緒に取る約束をしていたが、遅れてしまったのだ。

いくらなんでも、集中しすぎだった。今後はこういうことがないようにしなければ…。

それと、シャルロットはラウラと同室だから一緒にいるのだろう。

「集中しすぎて、時間が経っていることに気が付かなかったのだろ  
うっ」

ラウラが仕方がないと言った風に俺を見る。

「ああ、その通りだ。すまなかった」

ひたすら謝る。

「まあいいさ。私はお前のことを理解しているからな。許すぞ」

「な、わ、私も許すぞ！」

って二人とも、こんなところで張りあうなよ。

「わ、わかったから、早く食堂に入ろう。時間がなくなる」

「む、わかった」

「了解だ」

そして、シャルロット、やれやれって表情はなんだ？  
俺はじとじとした眼でシャルロットを見る。

「ふふ、ごめんね一夏」

「全く、何が楽しいんだか……」

「くすくす、ごめんごめん。さ、食堂に入ろう」

（あの二人は仲好くなったと思ったら、一夏のことになるとこれだもん。一夏も罪な人だね。まあ、私もその一夏に魅かれた一人なんだけど……うん、今のところ私が一番一夏を理解しているよね）

今日は、この3人と一緒に夕食を食べた。

次の日、金曜日。

俺はアリーナで、箒、シャルロット、ラウラと一緒に訓練していた。

箒の訓練をシャルロットが見て、俺はラウラと模擬戦を行っていた。

今回の模擬戦は接近戦のみで、一定以上の距離を離れてはいけな  
いルールだ。

とにかく、連続で攻撃、回避することを主眼にしており、判断を  
早くし、機動を精密に行わなければならない。

ラウラの右手のプラズマ手刀をギリギリでかわし、左手のプラズ  
マ手刀で攻撃される前に、雪片式型

でラウラの攻撃した右手を狙い、斬撃を放つが、高速回転して、左  
手のプラズマ手刀で弾かれる。

互いに隙を見つけては、仕掛け、仕掛られては回避し、隙を作り  
出していた。

「ふう、一息つくか」

「ああ」

ビットに戻り、水分を補給する。

「やっぱりラウラは強いな。白式の高機動を活かせなければ、やはり俺の負けだったか」

「それは経験値が違うからな。私が何年ISを動かしてきたと思っている」

ま、当たり前か。でも、ちょっと悔しい。模擬戦だとしても負けるのは、いい気分ではない。

「だが、それでも、お前の学習能力、いや集中力はすごいぞ。集中しているから、より学習能力が高まっている」

「まあ、ISは動かしているだけでも楽しいからな。身体が、心が勝手に集中してしまうのさ」

「それがお前の強さ、か」

……あれ？そういえば、なんで眼帯を外さないのだろうか？制限とかあったか？そう言えば詳しく聞いていなかったな。

原作も覚えていないし、聞いておいた方がいいか。ラウラも気にしているみたいだな。聞くことで、助けになればいいのだが。

それに、模擬戦で全力状態の強いラウラと戦いたいと言うのもある。

「ラウラ、そう言えば、左眼について聞いていなかったけど、聞いていいか？」

機密とかあるのか？だとしたら言わないだろうな。

「……いいぞ、一夏は特別だからな。だが、ここでは言えんな。夕

食の後に部屋に行っていいか？」

うーん、ちょっとまずい気がするが、シリアスな話だし、恋愛を絡めないだろうし、いいか。

「わかった。じゃあ夕食の後に、俺の部屋で聞こう」

「了解だ」

#### 45 (後書き)

体調がしんどいです。後2、3日で治るらしいのですが……っらい。  
今日は1回のみ更新とさせていただきます。

夕食後、予定通りラウラが部屋を訪ねてきた。

ラウラは、部屋に入ってくるなり、そわそわしている。一体なんだと言っのたろうか？

「どうしたんだ？」

「その、夜に一夏の部屋で二人きりと言っのは、まだ、そういう関係ではないし、そういう話をするわけでもない、しかし、妙に、気恥ずかしく感じるのだ」

ちよつと恥ずかしがりながら、そう言ったラウラは、その、まあ、ちよつと可愛かった。ラウラはこういう色ボケしているというか、デレているときと、普段の軍人然とした雰囲気ギャップがすごい。だから余計に可愛く思えるのたろうか？

つと、そう言っ話をするために呼んだわけじゃないんだ。

「じゃ、早速だが、左眼のことを話してくれないか？」

「ああ。わかつた」

ラウラは眼帯を外し、金色の眼を露わにして、話した。

「この眼は、肉眼を疑似ハイパーセンサーにするために、ISの技術を流用し、ナノマシンが注入されている。前に試合の時に使用したが、動体反射を著しく向上するために、見えなかつたお前の機動でも見ることができるようになったのだ。……しかしこれは、ON、OFFの切り替えが出来なくなつていて、常に発動状態だ。失敗作

なんだよ私は……」

重いな。

「……私は遺伝子強化試験体、人工合成した遺伝子と人口子宮から産まれてきた存在だ。遺伝子強化は、今は全世界で研究、実現が禁止されているし、遺伝子強化体は9割方ISを動かせなくなるため、ISの登場によりもはや不要な技術になったがな」

コーディネイターってわけか。

「いくつか作られた遺伝子強化試験体。その中で、特別優秀だったんだ私は。ISも初期の適正こそ低かったが、奇跡的に適合していた。他の遺伝子強化試験体は9割方適正自体なかったし、あつても私よりも低かった」

スーパーコーディネイター、いや適正がないなら、この場合はカナードのような存在か？しかし、そんな存在だったのか、すっかり忘れていたな。というよりそこまで深く設定を覚えている奴っているのか？

「しかし、生身での経験が活かせるため、適正が上がれば、最強のIS操縦者が産み出せるのではないかと考えられ、この眼に強化することが決定した。しかし、失敗した。日常でも発動しているため、負担がかかるし、眼帯を付けたら、右眼だけで見なくてはならないから、遠近感がつかめない。私はISの訓練部隊でトップの座から落ちた。皆、私を失敗作、出来損ないと言って嘲笑ったよ……」

それは、あんな性格になるはずだ。



「そんな時、織斑教官に会った。そして、織斑教官の訓練のおかげで私はトップの座に戻り、今は専門部隊の隊長をしているというわけだ」

……なんて言ったらいいのだろうか？正直言葉が思いつかない。

「あゝ、その、なんて言ったらいいのか……駄目だ。何も言葉が思いつかない……すまん」

「いや、構わない。同情も慰めもいらなからな、ただ……一つだけ聞聞いてもいいか？」

「何だ？」

「…この眼を見て、どう思った？」

どうって……何も思わなかったな。いや、中二病を實現するとか、ちょっと格好いいと思ったな」

「そ、そうか。格好いい、か」

（気持ち悪いと言われなくて良かった。格好いいというのも、褒め言葉だしな。これは、好印象だということだろう……よかった）

あ、どうやら口に出してしまっていたみたいだ。うかつな……。

「と、言うわけで話は終わりだ。私は過去のことはもう気にしていない。今は、一夏、お前のことしか考えていないからな」

ラウラは胸を張って言っているのだが……なんか微笑ましい。

ラウラの言葉は嬉しいが、これだけでラウラを選ぶ気にはならない。

本当に俺は優柔不断だ。いつそのこと、もうこれでいい、と簡単に決められる決断力があればな……それはそれで不誠実だが、いつまでも答えが出せないのはもつと不誠実だ。まあ期限を決めてあるから、じっくりと考えるか。

「ありがと。いずれはつきりと答えを出すから、すまないが待っていてくれ」

「ああ、わかっている」

『ジリリリ』

呼び鈴がなったが、誰だろうか？

「はい」

ドアを開けると、千冬さんがいた。

「む、ボーデヴィツヒもいるのか……こんな時間にお前の部屋で二人きりとは、そのことについていろいろ『ハナシ』たいが、まあいい。一夏、旅行の件だが、話すことがあるのでボーデヴィツヒ、オルコット、デュノアを連れて私の部屋に來い。ボーデヴィツヒはここにいるから、手間が省けたな」

話の部分で、すごいプレッシャーに襲われた。さすがにこの時間に二人きりはまずかったか。千冬さんは『選ぶ』ことについて知っているし、いくところまでいってしまう可能性もあるしな。

まあ、今回は真面目な話だったので、いいか。

「わかりました」

「では、私は部屋で待っているぞ」

そう言って、千冬さんは出て行った。

「旅行のことか、一体何の話だろうか？」

「ああ、一昨日の夜に、先生に国外に行けるのか相談したんだ。その許否についてだろう」

「そうか、ならば早くあいつらを迎えて、織斑教官の部屋にいく」

「ああ、ラウラはシャルロットを頼む。俺はセシリアを連れてくる」

「了解。ではな」

千冬さんの部屋にセシリアを連れて行き、部屋の中に入ったら、千冬さんと、ラウラ、シャルロットと、なぜか山田先生がいた。

「来たか。では早速だが、お前たちが夏休みに計画している旅行についてIS学園が決定したことを話すぞ」

「はい」

「各国の思惑がいろいろ錯綜した結果、旅行は許可された」

（やりましたわ）

（よし、これで…）

（プランを本格的に…）

「そうですね、良かったです」

「が、だ」

何かあるのか？

「…山田先生が引率兼護衛としてお前と行動を共にすることになった」

とても複雑そうに千冬さんは言った。

「えーと、そういうことですので、織斑君、その、よろしくお願いしますね」

申し訳なさそうに、しかし、嬉しそうに山田先生はそう言った。

仕事を兼ねているとはいえ、国外に行けることがそんなに嬉しいのだろうか？

( 山田先生なら安心ですわね )

( 山田先生なら特に警戒しなくてもいいよね )

( 山田先生なら障害にはならないだろう )

「いささか頼りない気がするが、何かあったら山田先生の指示に従うこと、それと移動に関しては各国の軍がVIP用のジェット機を用立ててくれるそうだ。月曜日までにどこの国から回るか、など計画を立て、それを提出すること。以上だ」

いささか頼りないの部分で、山田先生はがくりとうなだれた。相変わらずよいリアクションだ。

「わかりました。なら皆、明日の夜にでも、俺の部屋で計画を詰めようか？」

「はい、夕食後ですわね」

( 一夏さんのお部屋、久しぶりですわ )

「うん、その時間は開けておくね」

( 一夏の部屋か、ちょっと前までは一緒に… )

「了解だ」

( 一夏の部屋か、いずれ私の部屋にもなる… )

「それと、山田先生？」

「はい？」

「山田先生も、一緒にしてほしいのですが。いいですか？」

「はい、わかりました。いいですよ」

「では、解散」

と、計画を立てる予定が決まったところで、千冬さんの声で解散した。

皆、部屋に戻っていく、俺も部屋を出ようとドアの前まで来て、あることを思い出し、千冬さんの方へ振り返った。

「織斑先生、明日の午前中ですが……」

「なんだ？」

「この部屋の掃除と、整理などをしますから。いいですか？」

「う、…頼んだ」

(いつものことだが、世話を焼いてくれるのは嬉しいが、これでは女としてどうかと思ってしまうな)

周囲をちらっと見てから、バツが悪い表情をして了承する千冬さん。

うん、一見すると綺麗にしているように見えるが、よく見ると結構散らかってるし、実はクローゼットの中とかはごちゃごちゃし

てるし、それはバツが悪くなるわけだ。

臨海学校での事件の際の、あの厳しい表情からはこんな私生活を送っているなんて、誰も想像できないだろうな。

「じゃあ、また明日伺いますから」

明日の午前中は俺の部屋も掃除、整頓するか。午後は訓練だな。夜は計画を詰める、と。これで明日の予定は決まったな。

「ああ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

「じゃあ、旅行のことについて、細部まで計画を立てようか」

土曜日の夕食後の21時ちょっと前、セシリア、シャルロット、ラウラ、山田先生が俺の部屋に集まった。

椅子が足りないので、ベッドにも座ってもらい、飲み物を渡し、話を始めることにした。

「まずは、どの国から行くか、だね」

「俺はどの順番でもいいが、皆はどうだ？」

「僕もどの順番でもいいよ」

「私もだ」

「わたくしは、できれば最後にしてほしいのですが。一夏さんが来る前に、家の仕事を片づけておきたいので」

なら、ドイツ、フランス、イギリスの順番でいいか。

「それならドイツ、フランス、イギリスの順でいいか？」

「うむ、決定だな」

「いいよ」

「わかりましたわ」



「じゃあ次は、期間を定めるか。各国には1週間ぐらい滞在しよう  
と思っっているんだが、どうだ？」

「そうだな、初日と最後の2日は観光に、4日間は軍で体験入隊を、  
これでいいか？」

「うん、僕も同じ予定になると思うよ」

「わたくしも同じですわね、ただ本邸でオルコット家主催のパーティーを開くので、半日ですが軍の見学ができなくなるかもしれませ  
んわ」

（このパーティーは外堀を埋めるために必要だ、とチエルシーが言  
っていましたし、これは譲れませんわ）

「それでいいよ。そこまで軍のことに時間を詰めて考えることはな  
いさ」

上流階級のパーティーか、テレビとかでしか知らないから、ちょ  
つと興味がある。まあ俺が主賓というわけでもないのだし、雰囲気  
を楽しめばいいか。

全部で3週間、まあなにか問題が発生するかもしれないけど？帰  
ったら箒の神楽舞を見るから、IS学園の夏休みが始まるのは7月  
15日から、夏祭りがあるのは8月15日の週の週末だから……って  
15日が週末じゃないか、1週間余裕を取って7月17日に出発で  
いいかな。

「出発する日は7月17日でもいいか？」

「とすると、7月17日にドイツへ、7月24日にフランスへ、7月31日にイギリスへ、そして8月7日にここへ戻ってくる、となるか」

「うん、それでいいよ」

「はい、大丈夫ですわ」

「山田先生は何かありますか？」

「いいえ、何もありませんよ。今決めたことはそのまま大丈夫です」

よし。次は……

「細部についてですわね。まずは泊まる場所ですが、イギリスではわたくしの本邸に泊まってもらいますわ。軍の見学や観光などは、専用の送迎車で送り迎えをいたします」

「フランスでは、ホテルに泊まってもらうことになるね。後は専用の送迎車で移動だね」

「ドイツでは、軍の宿舎に泊まってもらうことになる。客室用だから、特に問題ないはずだ。体験入隊はそのまま軍で行い、観光は専用の送迎車で行う。戦車などに乗りたいたうのであれば、それでも大丈夫だぞ」

戦車か、中がどんなふうになっているかぐらいは見てみたいな。

「さすがに、戦車で移動するのはちょっと遠慮したいが、しかし乗ってみたいとは思っているぞ。やっぱり普通に暮らしていたら、経

験しないことだから、一度くらいは見てみたいし」

「そうか、ならばそれも伝えておこう。体験入隊の時に機密以外ならいろいろと見せてやれるからな」

(クラリッサの助言では、IS以外に少しでも一夏の興味を引くものは把握し、用意しておかなければいけない、と言っていたからな)

後は……とりあえず決めるのはそれくらいか、詳細な移動時間や、何時何をするのかも向こうが決めてくれるだろうしな。

「後は、皆の決めたことに従うよ。体験入隊の中身とか、観光するところとか」

「任せておけ、クラリッサに頼んで、ドイツを理解してもらえような観光プランを計画させている」

(もちろん私のアピールの機会もな)

「うん、任せておいて」

(観光のことも大丈夫だし、アピールについても一応秘策があるしね)

「オルコット家の力を総動員して、一夏さんをお迎え致しますわ」

(一夏さんにはいずれ、婿として来てもらいますから、未来の当主のためにも、チェルシーを筆頭に皆張りきっておりますわ)

「と言うことで山田先生、これでだいたい決まりました」

「はい、7月17日ドイツへ、7月24日にフランスへ、7月31日にイギリスへ、そして8月7日にIS学園へ戻ってくる。宿泊場所は、ドイツは軍の宿舎、フランスはホテル、イギリスはオルコットさん宅。各国での活動の詳細は後日に決定ですね。はい、大丈夫ですよ」

うん、こんなもんだな。

「それにしても、仕事とはいえ楽しみです。では、私は織斑先生にこのまま報告しに行きますね。では、おやすみなさい」

(それに織斑君と一緒に行動する……まるで新婚旅行みたいです……  
：／／／)

「……おやすみなさい」「……」

仕事とはいえ楽しみ、か。まあ、問題が起きなければただの旅行だしな。その気持ちはわかる。

出張で仕事が早く終わったから、ついでに観光していくとか、何か得した気分になるよなあ。まあ、逆に何もできずに深夜まで残業、そして朝一で帰るとかはつらいんだが……。

さて、山田先生が部屋を出て行ったし、決められることは決めたし、このままお開きにするか。

「じゃあ、解散だ。あ、ラウラ、シャルロット。明日の午後は一緒に訓練をしないか？白式の能力を限定して、1対2での戦いをやってみたいのだが、大丈夫か？セシリアも誘おうとは思ったが、まだ用事があるんだろう？」

今日の昼も寮にいなかったし、本当に大変そうだな。

「ああ、了解した」

「うん、大丈夫だよ」

「はい、明日で一応は終わりますが、まだ明日いっぱいは所用がありますわね」

「そっか、がんばってくれ」

「はい、ではおやすみなさい」

「おやすみ、また明日の訓練で会おう」

「おやすみなさい、一夏」

「ああ、おやすみ」

3人も部屋を出て行った。

さて、旅行のことは置いておいて、明日は一日中訓練するか。

ちなみに千冬さんの部屋の中は半日かけて徹底的に綺麗にしておきました。

戻ってきたら、また掃除しないとな。

それと家の掃除もしないといけないな。きっと埃だらけだし、千冬さんじゃ掃除……できるわけないしな。

夏休みの前に、一度家の掃除もするか。うん……15日に家に帰って掃除して、16日は家にしよう。で、17日に出発か。荷物は着替えぐらいで大丈夫だし、お金も向こうで換金してもらうか。

さて、データをまとめたら、今日はもう寝よう。

と、考えていたら、呼び鈴が鳴った。  
誰だろうか？

「はい」

ドアを開けると箒がいた。

「箒か、何か用か？」

こんな時間に何かあるのだろうか？

「う、うむ。少し相談したいことがあるのだが、いいか？」

うーん……まあ、真面目な話っぽいしな、しょうがないか。

「ああ、いいよ」

「では失礼する」

（一夏の部屋……相変わらず綺麗な部屋だ。）

先ほどまで、皆に出していたペットボトルを片づけ、新しいのを  
取り出す。

「はい」

「ありがとう。しかし、4本もペットボトルが置いてあったが、何  
かあったのか？」

「さつきまで、旅行のことについてセシリア達と話していたんだ」

と俺が言うと、ピクピクと筈の眉毛が動いた。まあ、自分だけハブにされているのは嫌だろうな。しかし筈の場合、一緒に行くことはできないだろう。束姉の関係者で、束姉が最近筈に接触しに来たし、紅椿なんて専用機、しかもどの国にも属していないISをもらったし、間違いなく国外などには行けないからなあ。

「…そうか、少し思うところはあがあるが、楽しんでくればいいのではないか？」

あれ、意外に大人だな。もつとこう、いじけたり、怒ったりするかと思っただが、どうしたんだろうか？

俺は原作一夏ほど鈍感ではないためか、原作のような暴力は振るわれないが、それでもむくれたり、落ち込んだりと、情緒豊かなところが筈にはある。

しかし、今は怒りもしないし、それほどむくれたりもない。うーん、謎だ。

(ここで一夏に当たってもしょうがない。私は私で動かせてもらう)

「一夏、その相談したいことなのだが…」

「ああ、何だ？」

「ああ、夏祭りの件なのだが…その、叔母さんに連絡したら、人手が足りないと言われて、誰か手伝ってくれる人はいないかと相談されたのだ」

まあ、あまりこういう手伝いをする人はいないよなあ。昔はその

町の町内会とか、学校行事で手伝いとかあったのだが、今はもうないか。

「そこで、一夏、夏祭りの設営を手伝ってもらえないか？もちろん無料じゃない。食事は出るし、夏祭りでの屋台で使用できる無料券も貰える。…引き受けてもらえないだろうか？」

(引き受ける引き受ける引き受ける引き受ける)

うーん、戻ってきた次の週からなら、大丈夫かな。こういうのは学生の内に楽しんでおくべきだしな。社会人になってからじゃ、なかなか参加できないし。

よし、引き受けよう。

……しかし、簪から、妙なプレッシャーを感じるのはなぜだろうか。心なしか髪の毛が浮いてる気がする……うん、気のせいだな。「ああ、引き受けさせてもらおうよ。でも、8月7日にIS学園に戻ってくる予定だから、その次の週の、15日くらいか？からしか手伝えないぞ」

「ああ、それは大丈夫だ。設営は8月10日から始まるからな。夏祭りは15、16日だ」

なら、大丈夫だな。まあ、もしも旅行中に何か重大な事件が起きたら、その時は仕方ないと諦めてもらおう。

「ああ、なら大丈夫だな。よし、わかった」

「うむ、では頼むぞ。私は神楽舞の練習があるから、そう手伝えないが、地元の町内会から手伝いに来る人がいるからな、その人達と



一緒になって作業をすればいい。それに大半が力仕事だから、少ないが若い男性もいるぞ」

……ああ、やっと、男性の知り合いが作れるのか……学園に入る前の学校では、俺の精神状態がちょっとダウンーだったから、人付き合いは良くなかったし、この学園でやっと前向きに生きていけるようになったら、同年代の女性しかいなかった。

……やっと、やっと、同性の知り合いができる。こんなに嬉しいことはない。女性にはいつでも会えるから。

(ふふ、喜んでいるようだ。これなら好感度も上がっているだろう。一夏を一番理解しているのは私だな)

「それは楽しみだな。さすがに女性だけしか接していないと、感覚がおかしくなってきたる気がするからなあ。うん、ありがとう」

(う、こんな不意打ちで笑顔を見せるなんて。て、照れる……)

箒に礼を言うが、つい笑顔になってしまふ。

それだけ嬉しいんだ。やっべ、なんかテンションが上がってきた。

「い、いや、手伝ってもらうのはこちらだ。礼を言うのはおかしいぞ」

「ははは、そうだな」

確かにそうだな！

「で、では、私はこれで失礼するぞ。おやすみ」

「おやすみ」

篤は静かに部屋を出て行った。

その後も、なかなかにやにやが止まらなかった。

今日は7月15日、俺は約1年を過ごした家に戻ってきた。もつとも、あさつてにはドイツに行くことになってるし、IS学園入学後も数回だけ家に来たが、掃除とか、荷物を取りに来ただけなので、またこの家で過ごすと思うと少し感慨深い。

「まったく、また掃除を手伝ってくれなんて、しょうがないわね」

「はは、悪いな」

前と同じく鈴と一緒に来ている。

掃除を本格的に行いたいの、また鈴に手伝ってもらうことにしたのだ。

あの4人も来ると言ったのだが、セシリアはイギリスにもう戻る必要があったし、ラウラは明後日の準備がある、そしてシャルロットもなぜか用事ができたらしくフランスに戻っていった。

残るは箒だが、紅椿を巧く扱えないため、学外に出ることはなるべく控えるということで今日は来ることができなかった。

そのため消去法で鈴だけが残った、というわけである。

ちなみに鈴は今日はお泊まりである。掃除のお礼として、昼食はおごり、夕食は俺の腕によりをかけた料理を御馳走するつもりだ。

これが許可されたのは、今日は千冬さんが家に帰ってくるからだ。つまり、何か起きる可能性は絶対にゼロである、だから、鈴のお泊まりが許されたのだ。それと、家事の類が得意でない千冬さんは今日1日で掃除を終わらせられるのなら、という魂胆もあるのだから。

しかし、鈴もいくら俺が仲のいい男友達で、千冬さんがいるからといって、泊まってまで掃除を手伝ってくれるなんて、ちょっと警

戒心が足りないんじゃないだろうか？

まあ、それだけ信頼されていると思っておいっつ。

「さて、早速だが、始めようか」

「わかったわ」

「ふう、とりあえず、2階は終わったわね」

「ああ、後は1階だが、その前に食事にしようか？」

「そうね、ならシャワー浴びるわよ」

「ああ」

って、この展開はちょっとまずいかも。

あの時と違い、妙に鈴を意識してしまう………鈴はスタイルは小柄でちよつと（かなり）足りないが、見るからに元気いっぱい、可愛いいし………平常心、平常心。

「一夏、出たわよ」

「あ、ああ。じゃあ、ササツと浴びてくる」

「別に急がなくてもいいけどね」

俺はシャワーを浴びて、色っぽくなった鈴をなるべく見ないようにして、そそくさとバスルームに移動していった。

(?……もしかして、一夏、私のこと意識してない?………やば、嬉しい、かも)

なんとか、シャワーを浴びることで平常心に戻った。

ふう、危ない危ない。

臨海学校の時から、やっぱり俺はおかしい。

篝、セシリア、シャルロット、ラウラ、鈴、そして千冬さんを見ると、不意にドキツとすることがある。

これって、ちょっと気になるアイツって感じだよなあ………って、6人もかよ！俺って……節操なしだ。駄目な男だ………ははは、はあ。

これも白い少女と白い騎士との会話のせいだ。俺の本心を引き出した？いやそれを増幅したというか、とにかくここまででは思ってい

なかったはずだ。

大事な人たちだが、愛とか恋じゃなかったんだが、それに関連付けられている感じがする。しかもそれが自分にとって自然だと感じている。……持て余してしまうな、この感情は。

慣れていくしかない、か。

それに、これはいい変化だしな。たぶん。

「それでどこに食べに行くの？」

「うーん、どうしようか？」

あ、でも前にこの近くに食堂があったことを思い出したな。うん、そこでいいか。

「なら、確か近くに食堂をやっているところがあったはず、そこでいいか？」

「あ、うん。私はいいけど、一夏は……いいの？」

鈴の歯切れが悪いが何かあるのか？すぐくまずいとか。

「うん？何が？」

「いや、何でもない」

（そっか、五反田食堂のことは覚えていないのか。まあ、この時間ならあいつらもないし、会うことはないでしょ。それに、今の一夏と会っても、もうどうにもならないわ……あれ？そっか、私、いつの間にか、今の一夏のことを自然に感じてる。昔の一夏を忘れたいわけじゃないのに……どうしてだろう？）

「なら、早く行こうか」

「……あ、うん」

鈴の様子がおかしいが、本当に食堂には何かあるのか？

ま、反対しているわけじゃないし、大丈夫だろう。

『ガラガラ』と、昔ながらの横向きのドアを開けて食堂に入る。食堂の名前は食事処 五反田食堂だ。

「はい、いらっしや、一夏あ!？」

ターバンのようなものを頭に巻いた、たぶん今の俺と同年代の男性が俺を見て声を上げた。

「それに鈴か！久しぶりだな。二人とも」

えーと、誰だろう、原作に……あ！もしかして、一夏の親友で、何度か原作にも出てきた人か!？

「はあ、なんであんたがいるのよ、学校は？」

鈴が額に手を当てて、そう言った。

…ああ、このことがあるから、様子がおかしかったのか。

「うちの学校はもう休みだ、でお前らは？それに一夏、お前事故つてどっかに入院していたって聞いてたが退院したのか？つうか連絡ぐらいしろよ」

ああ、俺が憑依する前の一夏の知りあいにはそういうことになってたか。

「あー……ちよっと、部屋に上がっていい。話しておかなければならないことがあるの」

「？まあ、いいぜ、積もる話もあるしな」

記憶喪失だと正直に言うか。

もう、憑依関係のことは気にはなるが、そこまで深く考えることもないしな。もっとも、千冬さんにはいずれ全て話すつもりだが。

「じゃあ、案内しなさい」

「まったく、お前は変わらねえなあ」

しかし、同年代の同性と話せるなんて、やっべ、テンションがおかしくなってきた。

ああ、どんな風と話せばいいんだ？

うーん……駄目だ全くわからん。その場のノリで話すか？……うん、そうしよう。



「で、話ってなんだよ？」

飲み物を用意し、座布団に姿勢を崩して座り、話が始まった。

「一夏のことなんだけど……」

俺が言つべきだろ。元友人的に考えて。

「実は、俺、事故の時に記憶喪失になったんだ。ま、日常のことはある程度はわかったんだけど、エピソード記憶とか完全に吹っ飛んでいて、しかも医者の話だともう記憶は戻らないって話なんだ」

「は………はああー！！！？？？」

うん、驚くよな。普通。

「あー、そう言うことだから、まずは自己紹介したら」

「あ、ああ、まだ頭が理解していないがわかった。俺は五反田弾、

お前とは中学の時同じクラスになって、鈴と俺とお前で良く三人でつるんでたんだ。この食堂にもお前は良く食べに来てたしな。かなり仲は良かったと思うぜ」

「そうだったんだ、えーと、よろしく？五反田君」

「いや、弾でいい。おまえにそう言われると、鳥肌が立つ」

「じゃあ、よろしく弾」

ああ、この女性と違う同性故の気軽な感じがたまらない。

「つか、お前本当に記憶喪失なのか？」

「ああ、本当。まあ、それでちょっと精神的に不安定になっていてさ、転校して、その後受験の時にどう間違ったか、ISに触ったら、起動してそのままIS学園に入学。で今に至る、と」

「うわ、とんでもない展開だな。つか、IS学園って女しかないんだろ、羨ましいぜ」

「まあ、みんな可愛い娘ばかりだけど、女性だけ特有の話とか普通に聞こえてくると、げんなりするよ。まあ、もう慣れてしまったけどね」

「っていうか、なんであんたらはそんな自然に話してんのよ」

鈴から突っ込みが入る。でも、そんなの関係ねえ！やっと同性と話ができたんだ。その理由のまえに突っ込みなど意味がないのだ。

「いや、別に記憶喪失つっても実感がわかないし、俺的には久しぶりに再会しただけって感じだからな」

「いやあ、俺はやっと同性の友人ができて、今すごく幸せだからさ、はっはっは」

「はあ、これが男の友情なの？なんか間違ってる気がするわ」

鈴が額を抑えて咳いているが、どうでもいい。

俺は1年半ぶりにできた同性の友人に浮かれていた。

弾と会話を続けていようと思ったが、食事をしに来たことを鈴が思い出し、とりあえず食事を摂ることになった。

五反田食堂の定食のメニューは、白米、肉と野菜を甘辛く炒めたもの、味噌汁、ホウレンソウのおひたし、たくあん。

食べてみたが、いかにも大衆食堂な味がし、雰囲気と相まって、すごくおいしく感じた。

「しかし、お前がIS学園にねえ」

「ま、偶然が重なった結果だし」

「でも、なるべくしてなった感じじゃない。千冬さんの弟だし、あんた、なんだかんだ言ってかなり強いし。公式戦は一応無敗でしょ」

銀の福音には一度負けたが、あれは公式戦じゃないしな。

「うわ、こいつそんなに強えの！」

「うん、あたしも負けちゃったし」

「あれはISの相性のおかげだったんだが」

「それでも、よ」

「は、なんだかんだ言って、結構楽しくやってるじゃねえか」

「ああ、ISは楽しいよ。一度でも操縦したら、あれはクセになる」

ISは最高。これだけは譲れない。

《おい、こいつなんかおかしなもん食ったのか?》

《いや、今の一夏はものすごくIS馬鹿だから》

ひそひそと二人が話しているが、何なのだろうか?

「鈴はどんくらい強いんだ?」

「あたしは中国の代表候補生よ、専用機も持つてるわ」

「へえ、お前が代表候補生か…ってお前もかなり強いんじゃないか?」

「そうね、同年代では上から数えた方がいくらいね」

「でも、その鈴に勝ったのか一夏、マジで強えな」

「一夏と試合をしたのは全員が代表候補生で専用機持ちよ。つまり同年代で一番強いわね」

「ま、暫定的なものだし、皆伸びしろがあるから。それにISの性能のおかげでもあるし」

「はあくがんばってんなあ」

「ま、楽しいからね、つい熱中してしまうんだ」

「はは、いいことだと思っぜ……と・こ・ろ・で、女だけの中でお前一人が男なんだろ、もう告白とかされたんじゃないかねえのか？」

いくら弾（もう親友扱い）とはいえ4人に好意をもたれ、俺もいずれ答えを出そうとしている、とは言えないし、適当に濁すか。

「あゝ……まあ、学園のアイドルみたいな感じの扱いだ。最初はなんか疲れたけど、まあ今は慣れたかな」

「こんなこと言ってるけど、こいつめちやくちやもてるわよ」

そこまでではない、確かにモテ期到来って感じだが、みんな理由があつて、それに俺が関わったりした結果だ。

まあ、愛想をつかれていないってことは、俺自身が好かれてるとわかるけどね。だからこそ安易に答えを出せないんだよね。4人が本気で俺を好きになってくれているとわかるから余計にね。

「まあ、ちよつとは、てところだよ」

《つか、鈴。たしかおまえも……》

《あー、まあいろいろあつて今は仲のいい異性の友達って感じかな（つても、だんだん魅かれて行ってるんだよねえ。はあ、まずいなあこの状態は、ちよつとしたことで一気に墮とされちゃいそう。ほんと、なんとかしないと……）

《ん？ある程度とはいえ好意に気付くって、今の一夏は鈍感じゃねえのか？》

《うん、昔よりはまじって言ったところね。一定以上の好意やわかりやすい行動すれば気付く程度、かな》

「まったく、うらやましいぜ」

うらやましい、か……そう言えば、試合とかイベントがある時は生徒に渡される入場券があれば、見学できたはず、次にあるのは、学園祭か……襲撃があったけど、大丈夫かもしれないし、誘ってみるか。

「なら、一度学園に来るか？学園祭とかイベントの時は俺が入場券を渡せば、来れるよ」

「おつ、まじか！？なら頼むわ。噂のIS学園を見れるなんて、いやぁ楽しみだな。」

うんうん、親友は大事にしないとね。

話していたら、皆昼食を食べ終わった。

「これからお前らはどうすんだ？」

「家の掃除をしないといけないんだ」

「IS学園は全寮制なのよ。だからこいつの家、ずっと掃除してない状態なの、それで午前中も掃除してたわ。あたしは手伝いよ」

「あゝ、あの人は掃除できなさそうだしな」

ああ、千冬さんのことか。それくらいには千冬さんのことを知っているのか。

そうだ、掃除が終わったら、家に来てもらうのはどうだろう？同性の友達は夜通し騒ぐとかそういうのが普通だろう。鈴もいるが、中学は一緒だったんだし、いいだろう。

「なら、夜に家に来るか？夕食出すし、泊まっていけばいいんじゃないか？」

「ま、夏休みになって暇だし、いいぜ」

「なら後で家に。場所はわかるはずだよな？」

「おお、大丈夫だ」

「じゃあ、またね」

「じゃあね」

「おお、また後でな」

「一夏が記憶喪失ねえ、これは蘭に言った方がいいのか？でもなあ……はあ、どうすつかねえ……」



「ふう、ようやく終わったわね」

午後4時過ぎ、ようやく掃除が終わった。

結構疲れた。掃除は意外に体力、精神力を使う。アパートのワンルームとかなら、別にそこまで疲れませんが、さすがにこじんまりしているとはいえ、家一軒の大掃除は疲れた。

料理は疲れのとれるものにしてよう。

……カレーとかはどうだろう？ エアコンを付けて、あつあつのカレー、贅沢だ。だがそれがいい。よし、カレーに決まりだな。

「じゃあ、シャワーを浴びたら、買い物に行ってくる」

冷蔵庫の中も掃除済みだし、各種家電も使用できるようにしておいたので、料理するのにも問題はない。

「あたしも手伝うわよ」

「いいの？ 掃除だけ手伝ってもらうはずだったのに」

「いいわよ。どうせ暇だしね」

「なら頼む」

と、いうことで、買い出しに出かけた。

買うものはターメリック、クミンパウダー、コリアンダー、チンピ、フェネグリーク、フェネル、シナモン、カエンペッパー、ガーリックグラニュー、ジンジャー、デイルパウダー、オールスパイス、カルダモン、クローブス、スターアニス、セイジ、タイム、ナツメグ、ブラックペッパー、ベイリーブス。これでカレー粉を作る。豚肉、たまねぎ、人参、ジャガイモ、マッシュルーム、卵、小麦粉、米。それと小さい器の油も必要だな。

あとは明日の朝ごはんのために、豆腐、ねぎ、だしと赤みそを買っておく。豚肉と卵は多目に買っておき、朝食にも使用する。

こんなところか。

明日の昼と夜の食事は、明日に考えればいい。

いろいろ買いすぎても、明後日に俺はドイツに行くのだから、使いきれない。

冷蔵庫の中に入れておいても、千冬さんは料理ができないので、冷蔵庫に余った食材は間違いなく、腐るだろう。だから最低限の分だけを買う。

おっと、忘れていた。お菓子と飲み物を買わないとな。

本当なら酒、まあカクテルとかも買うんだが、今の俺は未成年だからな、炭酸飲料とオレンジジュース、それとお茶にするか。

食材を買った後は、調理の時間だ。

まずは少し多めに米を研ぎ、炊飯ジャーで炊く。

次に各種スパイスを混ぜ、油を引いたフライパンで炒めていく。

……うん、いい匂いだ。とってもカレーの匂いがする。

次に肉、野菜をマッシュルームを一口サイズに切る。

鍋に水を入れて火を点け、具をフライパンで順番に炒めていき、そして沸騰した鍋に入れる。沸騰した鍋にカレー粉と小麦粉を入れ、とろみがつくまで、中火でゆつくりとかき回す。

味見をする……うん、うまい。

よし、完成だ！

後は、食べる前にトッピング用に買った卵を半熟にゆでる、または辛いのが苦手な人用に牛乳を加えオムレツ状にするなどがあるが、今回は牛乳は買ってきていないし、辛さもそこまで辛くはないので、温泉卵のみにする。これは食べるときにゆでればいい。そのほうがうまいからな。

「いい匂いね。本当、あんたって料理上手よね」

テレビを見ていた鈴が、匂いにつられてやってきた。

「鈴だつて上手じゃないか」

「あんたほどレパートリーがあるわけじゃないわよ。このカレーだつて、いろいろと手を加えることできるでしょう？あたしはそこまではない」

(得意な料理以外は食べられる程度なのよね……)

でも、あれだけできれば他の料理もできると思う。間違いなくメシマズではない。メシマズ、やつらの料理は食べ物じゃない、あれは兵器だ。食ったら死ぬる。

『ピンポン』

呼び鈴が鳴った。

「五反田じゃない？」

「たぶん」

パタパタと走って、玄関のドアを開けると、弾がいた。

「よっす」

「先ほどぶり。それじゃ早速上がってくれ、もうすぐ千冬さんが帰ってくるから、そのとき夕食にする」

「へえ、あの人が来るのか？珍しいな」

そういえば、昔は月に一度しか帰ってきていていなかったって言うてたしな。それを知っていたなら珍しいと思うよなあ。

「ま、いろいろあって、結構家にいることが多くなっただよ」

「そうか…ま、お前もいろいろあったようだしな」

「そっさいこと」

「んじゃ、邪魔するぜ」

「どっぞどっぞ」

楽しいお泊まり会？の始まりだ。

#### 49 (後書き)

現在、ドイツ、フランス、イギリスについて調べています。

食べ物、観光地など……どう文中で表現するか考えると、いつも以上に疲れるし、それに調べていると、旅行に行きたくなってきます。

あ、作者は国外旅行はアメリカしか行ったことがありません。

安〇先生、ヨーロッパに、行きたいです！

「ただいま」

玄関のドアが開く音とともに、ハスキーな声が聞こえてきた。千冬さんが帰ってきたのだろう。

俺は玄関へと移動し、

「お帰りなさい」

と、声をかけた。

「うむ、ん？ほう、五反田だったな、久しぶりだな」

千冬さんは俺の後ろについてきていた鈴と弾に眼を向け、弾に声をかけた。

「ええ、お久しぶりです。お邪魔してます」

礼儀正しく、挨拶する弾。千冬さんを知っている人なら誰でもこうなるよなあ。礼儀正しい弾に違和感を感じながら、俺はそう思った。

「凰もご苦労だったな」

「いえ、こちらこそお邪魔してます」

「ふつ、ここは学園ではないんだそう堅くなるな」

「はあ」

「まあいい。では一夏、私は風呂に入ってくる。すまんが夕飯はその後頼む、それとこれを冷蔵庫にしまっておいてくれ」

手渡されたのは、ビールが入っている袋だった。

「わかりました」

千冬さんは2階の私室へと移動していった。

「ふいー、相変わらずのプレッシャーだぜ、あの人は。鈴なんて、いつもびびってたからなあ」

「う、しょうがないでしょ。あの人苦手なのよ」

まあ、たしかに怖い人だが、あれで可愛いところもあるんだけどなあ。

「俺は特に気にならないけどなあ。あの人はなんだかんだ言っている人だし、女性としては結構理想だしな」

「はあ、記憶がなくなってもお前はそうなのか？」

（シスコンだな）

「本当これだけは変わらないわよね」

（シスコンよね）

二人は何を言っているのだろうか？昔の一夏と中身俺の一夏に共

通点……今の会話からじゃわからないんだが……、まあいい。

「それじゃ、もちよっと座って待ってるか」

「んだな」

「そうね」

俺達は椅子に座り、テレビを眺めながら千冬さんが来るのを待っていた。

そろそろ、温泉卵を作るか、それとカレーも温めておかないとな。

「「「「いただきます」」」」

一斉にそう言って、カレーを食べ始める。

「ふむ、うまいな」

「うまいぜ」



「おいしいわね」

一口食べて、皆から感想を言われた。どうやら好評のようだ。自分では結構おいしく仕上がったとは思うが、実際にそう言われると嬉しい。

「しかし、相変わらずお前の家事スキルは高いな」

「昔もそうだったって聞いたけど、どんなだったんだ？」

「料理もいつからか、自分でするようになったな。最初は下手だったけど次第にうまくなっていったし、家に簡単な調理法とか聞いたりしてたな。後、日曜とかは必ず掃除とかしてな」

「そうそう、日曜の午前は掃除洗濯がある、って言って、遊ぶ時は午後とかからになってたのよね」

なるほどなあ。

「でもさらに家事スキルが上がっていないか、かなりうまいぞこのカレー」

「これ、カレー粉も自分で作ったのよ。それに温泉卵のトッピングもいいわね」

「おまえと結婚する奴は幸せだな。これと同じ質の料理を毎日食べるのだからな」

(もっとも、そう簡単にはやらんがな)

「今なら女性の職場も増えたし、いい主夫に成れるわよー夏」

将来のことか…ISのこともあるしどうなるかわからないな。

「結婚か…千冬さんが結婚したら考えるかなあ」

そつだよなあ、誰かを選んで、親密になっていっても、千冬さんが結婚とか考えないと、俺も結婚にはなかなか踏み切らないだろうなあ。

「お前が結婚したら、私も考えてやろう」

(それって、二人とも独身でいるって言ってるようなもんだぞ)

(それ、二人とも結婚しないって言ってるんじゃない…)

( (ブラコン、シスコン姉弟……) )

二人が変な表情をしているが、何か変なことを言ったのだろうか？

「「はあ……」」

なぜため息をつく？

食事が終わり、俺、鈴、弾の三人は、俺の部屋でお菓子を食べながら駄弁っていた。千冬さんは居間でテレビを見ながらビールを飲んでいるはずだ。

話始めてから結構時間が経っているが、話題は尽きることはなくいろいろな話をしていた。

「へえ、明後日からドイツ、1週間後はフランスで、2週間後はイギリスに行くのか、羨ましいことだねえ」

「はは、ま、お土産は期待してくれ」

「いいわね、あんたはいろいろできて。あたしは夏休みの間、何しようかなあ」

「実家には戻らないのか？」

「あゝ、それはちよつとね……」

あ、そうか鈴の親は離婚して、親と仲は悪くはないが、複雑な感情を抱いていると以前言っていたな。いろいろ準備してまで戻りたくないのだろう。それに寮の生活は（女性なら）気楽でいいし、I Sの訓練も行えるからなあ。ある意味天国だな。

「そうか……」

「うん……」

「……あゝ、なんか暗いが、鈴に何かあったのか？」

どうしようか？と俺は鈴を見るが、鈴は話しだした。

「私の両親離婚したのよ。それで実家にいるのはなんか寂しいというか、複雑なのよね」

「うえ！お前の両親が！マジかよ！」

弾がすごく驚いている。それだけ鈴の両親は仲が良かったのだろ  
う。

「うん、マジ。あんなに仲が良かったのにね」

「…そうか……」

雰囲気が暗くなってしまった。どうするか……。

「あー、この話はやめ！別の話題！」

鈴が暗い雰囲気を消そうと、大声を上げる。うん、鈴はこういう  
明るいといつかさばさばしているところがいいよな。

しかし別の話題…駄目だ咄嗟に思いつかない……。

「あー、そう言えば千冬さんと言えば、あの人職業は一体何なんだ  
？昔っから一夏も知らなかったみたいだし、今は知ってるのか？」

「ISS学園の教師よ」

「え、マジ？」

「ああ、本当のことだ」

「へえ、あの人がねえ。ああ、そうか、あの人はIS世界大会の優勝者だしなあ。その実力ならIS学園の教師になるのも領けるな」

「めっちゃくちゃ厳しいけどね」

「俺でも恐ろしいと感じる時がある。まあ問題を起こさなければ厳しくて優しい教師だよ。なんだかんだ言っただ指導はしてくれるし、くだらないことじゃなければ相談にも乗ってくれるし」

「ああ、それも納得」

「誰が恐ろしいって」

急に聞こえてきた声に驚き、ドアを見ると、ドアは開かれていて千冬さんが立っていた。

「げ、ち、千冬さん」

女にあるまじき声を上げ、恐れ慄く鈴。

「まあいい、私はもう寝る。おまえたちもなるべく早く寝るようにではおやすみ」

か(厳しくて優しい、か。ふん、嬉しいことを言ってくれるじゃないか)

「「「おやすみなさい」「」」

時計を見ると、もう23時前だった。

いつの間にこんな時間が経つたのだろうか？話が盛り上がり、時間が経つのを忘れていたんだろうな、きっと。

「ふう、焦ったわね」

「ああ、全く気付かなかった」

「さて、どうする？もう寝るか？」

「そうだな、あんまりうるさいと、迷惑だしな」

「そうね」

「じゃあ、鈴。客間に案内するよ。鈴は客間で寝てくれ。弾は俺の部屋でいいか？」

「ああ、いいぜ」

鈴を客間に案内し、俺の部屋に一人分の布団を引き、寝る準備をし、俺達は眠りについた。

6時過ぎに眼が覚め、朝食（白米、ねぎの豚汁、卵焼き）を作り、皆が起きてきて、朝食を食べ、その後で千冬さんが学園に行くのを見送った。

そして俺達も解散することになった。

「んじゃ、旅行からお前が帰ってきたら、また遊ぼうぜ」

「ああ、じゃ、また」

夏祭りの設営の手伝いの前に1日ぐらいならいいか。それにその後でも遊べるしな。

「またな、っと、そうだ、携帯の番号とメルアド交換してねえな」

「ああ、そういえば」

携帯の番号とメルアドを交換する。

「よし、じゃあな」

「ああ」

弾は家に帰って行った。

弾の後ろ姿を見ながら思う。やはり同性の友人はいいものだな、と。

それに俺が記憶喪失にも関わらず、特に気にせず昔のように変わらず接してくれたのだから。うん、弾はいい奴だな。お土産はちょっと奮発しよう。

「じゃあ、あたしも寮に戻るわね」

「ああ」

「一夏、夏休みは暇だから、ISの訓練でもやってるわ。だから、旅行から帰ってきたら、あたしと戦いなさい。さすがに今のあんたと白式には勝てないだろうけど、それでも強くなったあたしを見せてあげるから」

「楽しみにしてる」

「じゃあ、またね」

「ああ、またな」

鈴もIS学園の寮に帰って行った。

鈴との模擬戦か……楽しみだな。一次移行ぐらいの性能に限定すれば、負けるかもしれないな。俺も旅行でいろいろ学ばないとな。

明日からの旅行に想いを馳せながら、俺は家の中に戻っていった。



「いろいろな思惑に巻き込まれるだろうが、自身で判断し、判断ができない時は山田先生を頼れ。何、特に問題など起きないだろうから、気楽に旅行を楽しめ。そして同時に学んで来い。それでは行って来い」

現在、7月17日。

俺は今IS学園の外れにある緊急用のエア・ポートにいる。

そしてドイツ軍が手配した、VIP待遇のプライベートジェット機を前に千冬さんから旅行にあたってのありがたい言葉を聞いていた。

「行つてきます」

「織斑先生、織斑君のことは任せてください」

「ああ頼んだぞ。もし一夏に何かあったら、八つ裂きにしてやろう」

「は、はひ、がんばります!」

「ふ、冗談だ」

とても冗談には聞こえなかった。山田先生なんて、まだびくびくしている。

「では、一夏、こちらだ」

ラウラの案内の元、階段（飛行機に乗ったことがある人ならわか

るアレ)を上り、プライベートジェット機の中に入る。

中には、ふかふかのソファやベッド、テレビなど、贅沢なものが置いてあった。

「約11時間のフライトになる。今が7時だから、時差は8時間ほど引くから、ドイツに着いたら10時になるな。途中で数時間ほど寝ておけば、時差もあまり感じないだろう。それに初日は観光のため、眠たかったら寝ればいいのだしな」

「わかった」

「わかりました」

「それと、今日の観光はポツダムとベルリンを巡り、昼食なども現地のものだ。もしもの時のため、レトルトなどだが日本食も用意してある。まあ、まだ半日ほど時間はかかるのだから、ゆっくりすればいい」

「そうだな。ISで飛行して景色を見ると違って、これはこれで楽しそうだしな。楽しむか」

「そうですね。それにこんなプライベートジェット機なんて、きつと一生乗れないでしょうし、楽しみましょう」

「うむ」

『間もなく飛行体勢に入ります。揺れるのでご注意ください』

「ふむ、離陸するときは揺れるから、席に座っていよう」

ラウラのいうとおり、離陸し、高度4万フィートまで達するまでは揺れた。しかし4万フィートに達するとほとんど揺れを感じなくなっていた。

窓から景色を見るが、雲と海しか見えないな。

ふかふかのソファに座って俺はリラックスしていた。

山田先生は俺に對面する形でソファに座り、ラウラは俺の隣に座っている。

ふう、国外か……いざ出発すると、なんかこうドキドキするとうかワクワクするとうか、心が躍るな。

見渡す限りの雲と海を眺めながら、そんなことを思った。

「はあ……」

（一夏は何を考えているのだろうか？……今、一夏が手を伸ばせば触れる距離にいる。駄目だ……じっと見つめているとドキドキする／＼）

「わあ」

山田先生も、俺と同じ気持ちなのか、景色を眺めながら、感嘆の声を上げた。

（ふう、異性と初めての旅行、生徒とのいけない関係、結ばれる二人、そして織斑先生がお姉さんに……）

ふう、到着まで11時間か、長いな。俺は雲と海を眺めながら、そう思った。

昼食を食べた後ベッドで眠っていたのだが、起きたらなぜか隣でラウラが寝ていた。

何を言っているのかわからないが（ry

「すう〜すう〜」

なんでこんなことになっているのだろうか？山田先生はどうしたんだ？

とりあえず起きよう。

と、身体を起こそうとするが、ラウラが俺の服を掴んでいるため、起きれない。仕方ないからラウラを起こそうとしたが、起こせなかった。

なぜなら、無防備に寝ているラウラが、その、あまりにも可愛かったからだ。

何一つ不安のない幸せそうな寝顔は、普段の厳しい雰囲気を感じるラウラからは想像できないほど可愛かった。

まるで子猫みたいだ。

……頭を撫でてみようか。

『サワサワ』

「むにゃ」

頭を撫でると、ニパア、と口元が笑みを浮かべる。

うーん、ますます子猫みたいだ。

俺はラウラが起きるまで、頬をつねるとか、耳に息を吹くとかいろいろな反応を試していた。

無防備なラウラは、いろいろな表情を見せるので凶悪なほど可愛

かった。

ちなみに、起きた時のラウラの寝ぼけた表情も、俺に遊ばれていたと気付いて真っ赤になって照れた顔も可愛かった。

そして山田先生は何をしていたのかということ……ソファでうたたねしていた。山田先生え…。

まあ、ラウラの可愛い表情を堪能できたので、よしとしよう。

日本時間で17時、ドイツ時間で9時、プライベートジェット機はヨーロッパの上空を飛んでいた。

「さて、後1時間ほどで到着だ。到着後は車でポツダムまで移動してそれから軽く昼食、まあ私達には夕食になるが、を摂って、観光。それからベルリンを観光し、車で基地まで移動。部屋の案内などを行い小休止後、19時に我がシユヴァルツェア・ハーゼの歓待を受け、夕食。その後就寝。これが今日の予定になる」

ラウラの予定表に書かれていることの復唱を聞きながら、予定表を見て、頭に入れる。

「明日、明後日は訓練を見学と同時に訓練を一緒に受けてもらい、3日後、4日後は私やクラリツサ、隊員達と1対1、個人対複数、複数対個人、複数対複数の模擬戦を行う。5日後はライン川を巡る観光、6日後は観光、これはシヨッピング中心だ。以上がドイツの大まかな行動予定になる」

うん、特に問題ないな。

観光もでき、ISの訓練も行える、なんて贅沢な時を過ごすのだろうか。

「質問は特にないな」

「私ありません」

「なら、もうしばらくかかるので、各自リラックスしてしてくれ」

じゃあ、景色を見ているとするか。すごく小さく見える。まるでパノラマをみているようだ。

ヨーロッパか、前の世界でも行ったことはないからなあ。どんなところなんだろう？早くつかないかな。

などと、まるで子供のように俺は到着を待っていた。

「ふう、さすがVIP待遇のプライベートジェット機だけあって快適だったが、11時間連続で乗っていたら疲れたなあ」

ドイツの基地で着陸し、タラップを降りた俺はぐーと伸びをした。

「そうですね、さすがに疲れましたね。でもこれが普通の旅客機だと、もっと疲れるんでしょうね」

「訓練が足りないな」

ラウラは平気そうだった。ふ、だがそう澄ましていても今の俺には武器があるんだぞ。

「そうだな、可愛い寝顔で眠っていたいな」

「い、いいい、一夏、その話はもうしないと断ったではないか!？」

「ははは、すまない。つい、からかいたくなってしまった」

「むう」

(可愛いと言ってくれるのはすごく嬉しいのだが、からかわれるのはやめてほしい。しかし、これなら旅行中ももっと親密になれるかもしれないな……がんばろう)

『隊長、お疲れ様です』

さつと敬礼してラウラに挨拶?をかわす軍人さん。

軍人さんの年齢は20歳前半ほどで、髪は藍ぼい青色でショートカット、ラウラと同じく左眼に眼帯をしている。千冬さんのようなできる女性と言う感じだ。

『ああ、クラリツサ御苦労』

そう言ってラウラも返礼する。  
しかし、ドイツ語のため俺にはなにを言っているのかさっぱりわからない。

「織斑一夏様、山田真耶さんですね。ようこそドイツへ。私はシュヴァルツェア・ハーゼ所属、クラリツサ・ハルフォーフ大尉です。よろしく」

そう言って、クラリツサさんは俺達に握手を求める。  
俺は握手しながら自己紹介をする。

「織斑一夏です。この度はお招きありがとうございました」

「山田真耶です。引率という形ですが、よろしくお願いしますね」

「はい。では、基地指令からの挨拶がありますので、こちらへどうぞ。荷物は隊の者がお預かりします」

基地の中で待っていたのか、軍服と眼帯の同年代の少女が荷物を持っていた。

「基地指令の挨拶の後、ポツダム、ベルリンへの観光に出発しますので、ではどうぞ」

クラリツサさんの先導に従い俺達は基地の中に入っていた。



「ここがポツダム、ポツダム会議、宣言が起きた場所、か」

基地司令から挨拶された後、俺達は私服に着替え（今までは俺は制服、山田先生はスーツだった）、同じく私服に着替えたラウラとともに当たり前だが外車に乗って、ポツダムに出発した。

そしてポツダムに到着した。

階段を上り、サンスーシ宮殿、庭園などをゆっくりと歩き回っていく。

「すごいな、日本とはやっぱり違うな」

「そうですね、風車とか、あの回廊？とか全て洋風ですしね。高速道路は日本のモノと同じ感じだったんですけどねえ」

きよろきよろといろいろなところを見ながら、山田先生と感想を言い合いながら、歩いていく。ラウラはある程度場所の説明をしたら、一歩後ろを歩いている。

ポツダムを一通り見た後、ベルリンへと移動した。

街を移動したため、街並みもよく見れたが、感想は一部は日本と

は変わらない、だった。都会だからビルがあるし、道路は当然アスファルトだし、しょうがないのかもしれない。

それでも、窓などは日本のものとは違ったし、当然看板は日本語ではないので日本とは違うと感じたものもある。

食事はシュヴァイネハクセ（豚のすね肉）とクヌーデル（じゃがいもや小麦粉で作られた団子）を食べた。軽く取るために、ラウラがたぶん1人前を頼んでいたが、3人で食べてもそれなりのボリュームがあった。

肉の食べ方はやはり西洋の文化の方が優れていると感じた。なんというか豪快だが、それがいい。

そしてベルリン観光。

ベルリンでは、ベルリン大聖堂、旧博物館や旧ナショナルミュージアム、そして当然ベルリンの壁を観光した。

どれも日本ではお目にかかれないモノだ。

日本独特の和とは全く違う文化、西洋の文化は見ているだけで、こう何か言葉で表せないものを感じた。

（ふむ、悪い印象は感じていないな。これなら大丈夫か。日本の食事には劣るが、ドイツの食事でも日本より優れているモノがある。夕食ではそれを感じさせてやろう）

いろいろ見て回るうちに日が落ちてきたので、基地に戻った。

ふう、しかし圧巻だったな。ベルリンの壁とかは言葉も出なかった。山田先生も言葉を失っていたほどだしなあ。

今日は楽しかったな。これから、歓待パーティーのようなものがあるが、どんな食事が出るのだろうか。それに明日のIS部隊の訓練……この旅行は最高に楽しいものになりそうだ。

俺は車の中から、ドイツの街並みを見ながらそう思った。

## 51 (後書き)

調べていくと、それを全て文章で書きたくなくなってしまい、はじめるのが大変でした。次話あたりからはまた元のISの話に戻ります。

眼が覚めた……ここはどこだっけ……？

ああ、そうだ、俺はドイツに来ているんだ。

寝ぼけ眼で寮の部屋とは違う部屋を見渡し、今自分が滞在している国を思い出した。

ベルリン観光から基地へ戻った後、基地内でちょっとしたパーティーが行われた。

この基地はIS専門部隊用に新設された基地らしく、人はあまりいないそうだ。昨日のパーティーも、基地司令やラウラが隊長を務めているシュヴァルツェア・ハーゼの隊員、その他に手が空いている軍人や職員が参加していたが、数十名ほどだった。

ちなみに、日本語が話せる人がかなりいたので、いろいろと話を聞けたのは良かった。

ISの開発者、篠ノ之束。あの人が日本語以外は話さなかったもので、IS関係の仕事に携わる人にとって日本語はほぼ必修となっている。

だから、IS専門部隊用に新設されたこの基地にいる人の大半は日本語が話せる。とはいえ基地司令は片言しか話せないし、流暢に話せる人はそれなりにしかいなかった。まあ、それでも十分だが。

昨日はクラリッサ大尉（そう呼んでほしいと言われた）と話をしたが、あの人は……日本の文化を間違っただけで覚えた外国人そのものだった。

なんせ、アニメや漫画などを読んでいるが、その中で起きたことなどの一部を日本の標準的な知識として捉えているのだ。

その間違った知識を教えられた隊員の娘が、KAKUTOUKAは拳で銃弾を弾くのは本当ですか？とか聞いてきたし。当然NINJAのこととかも。幼馴染は結婚の約束をしているものとか、毎朝起こしてくれるとか、もうしっちゃんかめっちゃんかだった。

しかし、この部隊の隊員は変に世間知らずと言つか、一般常識に疎い娘が多いからこうなるのも無理はないのかもしれない。

まあ、さすがの山田先生も引いていたが。

それもこれもクラリッサ大尉の知識のせいだが、クラリッサ大尉はシュヴァルツェア・ハーゼの隊員に対してそこまで影響力があるということなのだろう。

隊員からすれば、皆のお姉さんの人なんだろうな。

公では軍人だけあってかなり厳しそうだが、私では結構ゆるいというか、そこらの一般女性と変わらない感じだ。隊の中で最年長だけあって、相談を受けることも多いのだろう。千冬さんの場合はある程度千冬さんのことを知らないと相談など怖くてできないが、クラリッサ大尉は公私の使い分けができているため、プライベートだといろいろと相談できるのだろう。

シュヴァルツェア・ハーゼの隊員からの信頼はすごく強い、と俺は感じた。

ラウラも、隊員からの信頼という点ではクラリッサが一番強く、それでいて自分をうまく補佐してくれる頼れる副官だと言っていた。もっとも素直にそう思えるようになったのは俺に負けてからだから、お前のおかげだ、と照れた顔で言われたのはちょっと困った。

そう言ってくれるのは嬉しいのだが、クラリッサの何ていうか

『コンコン』

と、昨日のことやクラリッサ大尉のことを考えていたら、ノックの音が聞こえた。

「びびぞ」

声を返すと、ラウラが部屋に入ってきた。

「…おはよう」

『シヨボーン』

？今、何か変な音が聞こえた気がする…。

「ああ、おはよう」

「どうやら起きているようなので問題はないな。30分後に朝食、それから、少し休憩を取った後で、隊の訓練を見せる」

「わかった」

「では、30分後にまた来るからな」

「ああ…」

ちなみにラウラは、軍服ではなく女子高生が来ているような清楚な感じがするパジャマを着ていた。きつとクラリツサ大尉の仕業だろうなあと思いつつも、パジャマ姿のラウラは見たことがなかったので、ちよつと新鮮で、心の中でクラリツサ大尉に感謝した。

しかし、ラウラの様子がちよつとおかしかったが何でだろうか？…パジャマ姿で照れているというのとはちよつと違ったし…寝起きだからか？

（クラリツサに言われ、わざとパジャマ姿で来たが、変じゃなかっただろうか？…それに一夏を過ごすことができなかつた…く、これでは任務失敗ではないか）

これが訓練か。

俺はシュヴァルツェア・ハーゼの隊員たちが行っている訓練風景を見ていた。

まずは当然走ることから始まり、その後筋トレを行う。まずは基礎身体能力の維持を目的としたトレーニングを行う+体を温めることから行っているのだろう。これは基本なので当然だな。

そして次に、銃、アサルトライフルを空中に投影した目標に撃つ訓練。アサルトライフルは当然ISの装備だ。近接ブレードやそれ以外の2世代ISで使用されている装備を生身で扱っていく。

その後、実戦も行えるISだろうを使用し、飛行訓練を各隊員がクラリツサ大尉の指示のもと行っていた。

ISの数はラウラ、クラリツサ大尉の専用機以外で3機ある。どれもドイツの2世代ISで汎用機だ。

そして、1対1、1対2の模擬戦、クラリツサ大尉対3機での模擬戦を行っていく。

軍人というだけあって、皆学園生徒では手も足も出ないだろう実力を持っている。それにISでの訓練時は眼帯を外しており、時折左眼が金色になっている。あれがあるために異常に読みが鋭く、学園生とは反応が全然違うのだ。……というかこの部隊強すぎじゃないか？

ラウラのような熟練といってもいい技術は持たないものの、実戦

要員の隊員はIS学園3年生の精鋭に勝るとも劣らない実力を持っている。そして特にあの眼が厄介だ。あれがあるため射撃は射線が簡単に読まれ、接近戦も近づくことが難しいし、斬撃のモーシヨンも読まれてしまう。

その上、隊長、副隊長が専用機持ちで、しかもいずれはドイツの代表になってもおかしくない実力を持っている。隊の結束も強く、連携訓練もかなりの錬度だ。

それに専用の機器を用いてサポートするオペレーターなどもいて、模擬戦では、相手の動きの予測などを逐一伝えていた。しかも情報の処理を左眼を金色にして行っていた。どうやらこのような使い方もあるようだ。ものすごいスピードで情報を入力、結果をすぐに伝えている。

これで3世代ISが完成したら、間違いなく軍隊としてはトップクラスの實力を持つことになるだろう。

…しかし、隊員全てが美女、美少女でスタイルもそれなりとか、なんでなんだろう？ やっぱりISスーツがあれだから、選考に綺麗な娘というのが基準なのだろうか？

「どうですか？我が隊は？」

基礎トレーニングは共に行ったが、それ以外は見学していた俺にクラリツサ大尉が声をかけてきた。隊員の指導は今はラウラが行っている。

「すごいですね。ラウラほどの技術は持たないものの、左眼を使うことによって、反応速度を高めてそれを使いこなしている。しかし……前にラウラとの試合でもありましたが、高機動型の3世代ISが相手の場合、性能が劣るISだと操縦者が反応できても、ISが反応できないことがありましたからね。後は3世代ISが完成すれば、軍隊としてはかなりのものになりますよ」



「そうですね、各国の3世代ISが完成すれば、隊員の实力が高くても総合力では負けてしまいます。それだけ完成した3世代ISの性能は脅威的だということですね。：先日的事件では二次移行した3世代ISの前に、急造チームとはいえ4機の専用機が敗北したとの情報が入ってきましたし、故に準4世代ISで二次移行した白式のデータは簡易的なものでも欲しい。それがあなたを高待遇で迎え入れた原因でもあります。もちろんただ一人の男性のIS操縦者というのもありますが」

確かに、銀の福音の二次移行形態は強かった。

あの速度、そして72発ものエネルギーの羽を一齐に射出する3世代特有の兵器。

3世代ISの一次移行形態や、2世代ISの二次移行形態では相手にならないだろう。

アメリカとイスラエルの共同開発で最先端の技術で作られているといっても、あそこまで強くなるとはね。

俺もそうだが、操縦者とISの相性が非常に良い状態で二次移行が起きると、異常なほど性能が高くなる。

3世代ISの可能性を見せたことになる。しかも束姉が4世代ISを披露してしまった。各国はよりISの可能性を見てしまった。それはおそらくISの研究をより活性化させるだろう。

紅椿はどの国にも所属していないため、難癖入れて手にいれようにも各国がすべてそう思っているだろうし、展開装甲の製法は束姉しか知らないから、そう簡単にはデータは手に入らない。少しでも確実に4世代相当のデータを手に入れるためには俺を誘致すればいい、ということと俺の旅行の件は渡りに船だったんだろうな。

まあいい。俺に有利になるのなら、気にしない。それより今はISの訓練を見ていよう。

射撃技術は白式以外のISを操縦する時は必要だが、今は必要な

いしな。これはスルーだな。

接近戦と機動の技術、これが一番高めたいので、その訓練を集中的に見る。

基本はやはり生身で剣を振ることが一番か、最初にそれを行っていたし、今もISを操縦していない娘はそれを行っている。

後はISを操縦しながらいろいろな体勢で剣を振ることか。

まっすぐ加速して、上段から振り落とす、下段から斬り上げる、横から払う。

敵の攻撃を回転回避しながらの横薙ぎ。

空中戦故の体勢を崩した形での迎撃、例えば上空から接近してきた相手を横に払うとか。

まあ、こんなところか。これは一人でも行えるな。

機動に関しては、どのルートが最短で相手に近づけるか、またエネルギーを消耗しないか、相手の射線を読み、最小限の回避行動から、接近するにはどうするかなど、模擬戦を行っていろいろなケースを経験するしかない。これは相手がいるし、いろいろなタイプと模擬戦をした方がいいか。

「さて、昼食にしましょう。午後からは演習場を使用してください。その際にデータを取らせてもらいますが、よろしいですか？」

「はい、それは許可を得てますし、大丈夫です」

さすがに詳細なデータを渡すとか、一度パーツをばらすとかは無理だが。

「では、食堂に、隊長！一夏さんの誘導をお願いします！」

「む、わかった。ではクラリッサ、隊の指導を頼む」

「は、了解しました」

「では、行こう一夏、山田教諭」

ラウラの誘導に従い、俺達は食堂に移動していった。

……山田先生が何も話していなかったのは、後で聞いた話だが、この部隊の錬度に驚いて声が出なかったそうさ。

千冬さんの指導を1年受けたことがある娘がいるし、その指導方法に基づいて訓練を課している。しかも全員適正が高く、またあの左眼の移植を受けている。

それは強くなるわけだよなあ。

## 52 (後書き)

東北エ……。ニュース聞いているとかなりまずい状況ですね。  
作者は東海で陸側に住んでいるので無事です。  
これからも毎日更新します。

昼食を取った後、演習場で俺は白式の機動を見せていた。

今は二次移行した性能での機動、あの残像を残す機動や、粒子放出加速、淡雪を見せている。

右へ残像を残したかと思えば、左へ移動すると見せかけ、残像をさらに残し、上空へ移動し、そこから急降下する。

また、急停止した瞬間、瞬時加速を淡雪を発動して行く、一瞬だけ超音速に入って距離を詰めたりする。全力なら超音速で移動もできるが、超高感度ハイパーセンサーが必要だし、かなりの距離を移動するため、ここでは行えない。

その後は一定の速度を維持しながら、上空へ移動してから体勢を入れ替え、円を描くような機動を連続で行い、まるで球を描いているような機動を行った。PICが強化されているおかげで、慣性を完全に中和できる。そのおかげで一定の速度を維持したままこの機動を行うことができる。それほどのアクロバティックな飛行だ。

空を飛んでいて思ったが、どこが違うのかわからないが、やはり日本の空とは違つと感じた。これは理屈ではなく、感情の面がそう感じたのだろう。

「すうー、はー」

……うん。深呼吸したが、やはり日本の空とは違つと感じた。しかし、ドイツの空は嫌いじゃない。白式と一緒にだからそう感じるのかもめないな。

ある程度の機動を行ってから、俺は地上へと降りていった。

「これは！？瞬時加速で一瞬だが超音速へ達している！？」

「それに計器が白式を捉えきれいていません！？残像を実体として捉えているため、一瞬反応を見失います！？」

オペレーター達が驚愕の声を上げる。

それほど、白式、そして織斑一夏の機動力は異常だった。

あのブリュンヒルデ、織斑教官の弟、か。戦女神の血は彼にも流れている。そう言いたくなる實力を見せられた。

「これが、準4世代ISの性能、そして、それを扱いきる織斑一夏の實力か……」

「すごいですね、副隊長（お姉様）」

私の呟きに、頬を上気させた隊員が応える。

「ああ、これほどとはな。予想以上だ」

こんな馬鹿げた性能をまともに相手したら、私達でも敵わないだろう。

ましてや1対1の試合形式だったら、間違いなく勝てない。

「これは……AIC？いえ、違う、でもそれと同じ？」

「どうした？」

「は、副隊長（お姉様）。白式のデータ解析から慣性中和はAICと同じ性能、おそらく同じ原理だと結果が出ました。あくまで慣性中和しか行えないと予測されましたが、これはいつたい……？」

「…そうか……」

これは白式が、隊長との試合の経験を取り込み二次移行したからなのか？二次移行でここまで性能が上がるとは、これがISの自己進化なのか。

「わからないが、データは取っておけ」

「はい、了解しました」

「ハルフォーフ大尉」

「は、司令、何でしょうか？」

準4世代ISの性能が見たいと言って、このセクションに来ていた司令から声がかけられる。

「白式、あれは日本の研究機関のISだが、もはや彼専用と言ってもいいだろう。ボーデヴィツヒ少佐が駄目ならば、シュヴァルツェア・ハーゼの誰でもいい、彼をなんとしても我が国へ取り込め。うまくすれば白式を手に入れられるかもしれん。4世代の紅椿だった

か？あれはIS条約参加各国の間で紛糾しているそうだからな、それに篠ノ之博士の妹が所持しているから強引には事を運べまい。しかし白式ならば彼の意思しだいではデータだけでも手に入れられる。動いておいて損はないはずだ。上からもそう指示があったしな」

「は、了解しました」

私人として、隊長の、あの孤独だった少女の初めての恋を成就させたい。軍人として、母国の国益のために織斑一夏を我が国へ取り込みたい。

二つの思いを胸に、私は頭の中で織斑一夏撃墜計画のプランの修正を行うことにした。それほど織斑一夏の重要度が上がったのだ。

（やはり『お帰りなさい、ご飯にする？、お風呂？それとも…わた・た・し？』は譲れない、しかしこの基地では行えない。く、何か手はあるはずだ）

地上へ降りていく織斑一夏の姿が映るモニターを見ながら、私はいくつかの織斑一夏撃墜計画を練っていた。

「やっぱり凄いですね織斑君は。さすが織斑先生の弟だけのことは



ありますね」

地上に降りた俺に山田先生が声をかけてきた。

あの人の弟だけはある、か。これはまた、うれしいこと言ってくれるじゃないの。

って前にも聞いた気がするが、やはり褒められるといい気になる。

「ま、何度も言ってますが白式のおかげでもありませんしね」

「それを差し引いても、ですよ。訓練機を使用したら他の娘達より劣るという歪な実力かもしれませんが、白式を使用した場合の上限がすごいですからね。もっと自信を持ってください。すくなくとも私は専用機を貰っても、織斑君に勝てる気がしません」

そうだな、確かに白式のおかげだが、それでも俺は強い。それを認めなくちゃ、きつともっと強くなることはできないな。

でもちよっと違うな……俺と白式のコンビは強い、だな。

「ありがとうございます。でも、そうしているとまるで先生みたいです  
ですね」

「そうですね、先生みたって、私の職業は教師ですよ！」

ぷ、やっぱり山田先生は面白いな。

ま、でも感謝してますよ。

「もう！織斑君は！」

プンスカと山田先生は怒っている。

でも全然怖くない。むしろ可愛い。

「はは、すみません。でも感謝しているのは本当ですから」

まっすぐに山田先生の眼を見て俺はそう言った。感謝している  
としっかり伝えたいから。

『キユン』

（はわわ、織斑君はただでさえ美形なんですから、その眼で見つめるのは反則ですよ）

「い、いえ、教師ですから当たり前のことをしただけです」

うーん、やっぱり山田先生はもっと経験を積んだら、千冬さんとは違うタイプだがいい先生になれると思う。なんだかんだで親しみやすいしね。

（禁断の恋、生徒と教師、だめですよ）織斑君）

あ、やっぱり駄目かも。

いきなり妄想モードに入った山田先生を見て、脱力しながら俺は  
そう思った。

「一夏」

妄想モードの山田先生を見ていた俺の後ろから声がかけられる。  
振り向くとラウラがいた。

「ラウラ」

「相変わらずの機動だったな。やはりまともに戦えば、今のお前には勝てる気がしないな」

「模擬戦の時は一次移行形態時の性能にリミッタ をかけるさ」

「悔しいが、今は力がないからな。いずれは私も追いついて見せる。このシュヴァルツェア・レーゲンとともにな」

うん、いい顔をしている。

ISを信頼し、ただの道具とは見ていない。きっとこれならシュヴァルツェア・レーゲンも力を貸してくれる、と思わせる表情だ。

「ああ、楽しみにしてる」

「さて、この後だが、この演習場を使い、学園で行っている訓練を行ってくれればいい。もちろんそのデータは取らせてもらうが」

「ああ、わかった」

「それと、山田教諭！」

「は、はひー！」

一瞬だが、ラウラの右眼が光ったような気がするが、気のせいだな。

「必要なら汎用型の2世代ISですが、隊で使用しているISを貸し出します。それで一夏と模擬戦なども行って良いです。その場合事前に連絡してください。もちろんデータは取らせていただきます」

「はい、わかりました」

「それと私は用があるので、これでしばらく失礼しますが、用がある場合はあの娘に言ってください」

（山田先生か…一夏は意識していないがああのは危険だ。なにかあってからでは遅い。不測の事態は防がねばな。よし、監視は厳にしておこう）

ラウラが手で示した方向に、シュヴァルツエア・ハーゼの隊員、あの娘は…日本語が上手な娘か。昨日も少したが会話したな。俺よりも年下で、たしか15歳だと言っていた娘だ。

『ペー』

俺達が視線をやるとお辞儀した。

「では私はこれで」

そう言ってラウラは去っていった。

「では織斑君、私はどうします。いい機会ですから、模擬戦でもしますか？あ、当然一次移行形態時の性能でお願いします。さすがに二次移行形態の性能ではいろいろ準備とかなないと戦いになりません」

「そうですね。まずはいつもしている訓練をしますから、後でお願いできますか？」

「はい、では、ISを借りてきますね。調整も必要ですし、ISス

「ツに着替えなければいけませんし」

山田先生は、緊急時のためにISスーツを持ってきていた。

「わかりました。では俺は訓練してますね」

シュヴァルツェア・ハーゼの隊員の娘に話しかけている山田先生をちらりと見てから、俺は訓練を開始した。

しかし、山田先生と模擬戦か。たしかセシリアと鈴相手に2世代ISで勝っていたな。あれは連携が碌に取れていないのもあったからだが、それでも高い技術を持っているとわかった。

ラウラ級の熟練者との戦い、か。それもラウラよりも経験値が高いだろうし、純粋な技量なら山田先生のほうが上かも知れないな。

すごくわくわくしてきた。

一通りの訓練メニューをこなし、地上に降りると、シュヴァルツエア・ハーゼの隊員の娘がタオルと飲み物を渡してくれた。

礼を言って、汗を拭き、水分を補給していると、ドイツの2世代ISの調整を行っていた山田先生がこちらに降りてきた。

「織斑君、こちらは準備完了ですよ」

「なら、休憩後は模擬戦をしましょう」

「はい、わかりました」

今から、山田先生と模擬戦を行うことを遠くで演習場の入り口付近に待機しているシュヴァルツエア・ハーゼの隊員の娘に伝える。

さて、準備できたことだし、早速模擬戦といきますかね。

「では、始めましょうか。山田先生」

「はい、では…行きます！」

空中に一定の距離をとって静止し、山田先生の会図とともに模擬戦を開始した。

白式は現在一次移行形態時の性能に限定してある。

二次移行形態時の性能に慣れ始めているためか、遅く感じるものの、より速い速度に慣れていたためか、幾分かは周りが良く見えるように思える。

ドイツ製の黒いISを纏った山田先生が、アサルトライフルで一定の距離をとって撃って来るのを回避しながら、俺は少しずつ接近

していく。

空中を舞うように弾丸を回避しながら、じわじわと距離を詰め、間合いに入った瞬間に瞬時加速で最大速度で距離を詰める。

反応できずに迎撃をしようとする山田先生から先の先を取って、横の斬撃を放つ。

『ガキイイン』

しかし、金属と金属がぶつかる音がし、斬撃は防がれた。

山田年生は先ほどまで持っていたアサルトライフルではなく刃の厚いカトラス？のようなもので雪片式型を防いでいた。

あの一瞬でオープンとクローズを行って、防いだのか！やはりできる！

俺は山田先生の実力を改めて知ると同時に追撃を行った。

防がれている雪片式型でさらなる斬撃を行わず、横蹴りで山田先生の体勢を崩し、そこで雪片式型の斬撃を放つ。

「きゃ！でも！」

斬撃が命中するが、山田先生を見ると、先ほどまで持っていたカトラスではなく銃を持っていた。

体勢を崩しながらもこちらへ照準が合っている。

「っ！」

まずいと思い、回避行動を行った瞬間、発砲音とともに弾丸が放たれた。

ISが報告に俺は安堵した。

放たれた弾丸は散弾だった。つまりショットガンで撃たれたのだ。全弾が命中していたらダメージはこんなものではない。大半は回避できたのだ。

しかし、安堵したのもつかの間、山田先生は今度は両手にマシンガンを持ち、こちらのシールドを確実に削りに来た。

回避行動を取ったものの、近距離から放たれた弾丸が何発も命中してしまった。

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、550

く、ダメージはほぼ同じか。

しかし、このままだと同じことの繰り返しだな。

ここからは全力でいく。

瞬間的に逆方向へ加速を行うことにより、残像を発生させる高速変則機動。

またアサルトライフルを持ちこちらを牽制する山田先生にと近づきながら、時折高速変則機動を行い混乱させ、隙を作っていく。

「これが織斑君の機動……モニターで見ているのと実際に見るのではやっぱり違いますね！でも……！」

少しずつ高速変則機動を行うインターバルを短くしていき、次第に連続で行っていく。

完全に山田先生が俺を見失った瞬間に零落白夜を発動させ、瞬間加速で間合いを詰める。

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、530

「く、何が!？」



何が起きているのかわからないが、しかし俺に攻撃が命中した。

「はあああ！せいっ！！」

次々に攻撃が命中するが、構わずに接近し、気合とともに袈裟斬りを放った。

袈裟斬りは命中し、山田先生はおそらく大きくダメージを負っただろう。しかしこちらでもエネルギーの消耗が激しい。

あらば、ここで決着つける！

『ガキイイイン』

追撃を行うが、またカトラスで防がれる。

かつて鈴が行ったスラストーを使用しての回転斬撃に似た攻撃放つが、これも防がれる。

「ならば！」

高速変則機動を行い、残像を見せ、実体を見失った隙に攻撃しようとするが、なぜか残像に惑わされず距離を取られてしまう。

このままじゃまずい！

「…こつだ！」

俺は零落白夜を発動させた雪片式型を投げつけた。

「きゃー！」

雪片式型のエネルギー刃が山田先生に当たったが、すぐに山田先

生の手で払われてしまい地に落ちていく。

敵IS、シールドバリアー消失

しかし、すでに山田先生のシールドエネルギーは尽きていたようだ。

零落白夜は触れるだけでエネルギーを消失させるのである程度のダメージが与えられる。普段行っている斬撃はそれプラス絶対防御を発動させることにより、シールドエネルギーを著しく消耗させている。今回はそれが功を奏し、勝つことができた。

「は、負けちゃいました。織斑君やっぱり強いです……」

「でも、こつちもかなり危なかつたです。一体どうやって攻撃したんですか？それにこつちの動きがわかってるような感じがしましたし」

「そうなのだ、山田先生は明らかに残像に惑わされずに俺を攻撃してきた。あれは一体どうしてなのだろうか？」

「とりあえず、地上に降りましょう」

「はい」

地上に降り、山田先生と向き合って話を再開する。

……俺はある一部を見ないように、眼を合わせて話をする。

「それで、いったいどうして残像に惑わされなかったんですか？」

「あれは、ですね。今までの織斑君のデータを見ていましたが、残

像がある方向へは移動していません。つまり残像がある方へは織斑君はいないとわかるんです。それでも残像と実体は一瞬わからなくなりますので、残像だとわかった瞬間にマシンガンを両手に持ち替え、残像が移動した方向ではない方、それも私の死角へマシンガンをばらけて撃つたんです。それがいくつかあったんですよ。ダメージが大きいのは、白式の機動力は高くそれも瞬間加速を使っていたので、相対速度の関係で、ですね。それに装甲が通常よりも薄いというのもありますし」

な、なるほど…しかし、言うのとやるのでは全然違うぞ。残像だとわかった瞬間にマシンガンを両手に持ち替えて、自分の死角へ撃つて…よくあの一瞬で判断、実行できたなあ。

山田先生は強いつていうより巧いつて感じた。突出したモノがないが技量の平均が高い。

それに、準4世代ISに2世代ISで互角に戦うってかなりすごいよなあ。

「実際には運がよかったですよ。あの残像を発生させる機動は2世代ISじゃ反応できなかったし、残像を連続で残したから、いつ間合いを詰めにくるかわからなかったんです。だから、完全に実体を見失った瞬間にヤマを張っていたんです。マシンガンなら撃ちつくすまでは牽制にもなりますからね、当たれば運がいい程度でやったことなんですよ」

「いや、それでもすごいですよ。その…正直見直しました。いつもは親しみやすい感じでしたから、ここまで強いとは思いませんでした。専用機を持った山田先生と戦ってみたいですね」

「そ、そんな褒めてないくださいよ。それに今の私は教師ですからね。生徒の皆さんの上達が一番の喜びですよ」

あれだけできるなら、代表になってもおかしくないのに…なんで教師になっただらうか？

うーん、失礼かもしれないが聞いてみようか。

「でも、これだけできるのに代表には選ばれなかったんですか？千冬さんは例外としてもそれなりにいい結果が出せるほどの実力だと思えますけど」

「それは……」

もしかして地雷だったのか、謝った方がいいかな。

「…本番に弱かったんです」

「え？」

「だから！本番に弱かったんです！……代表候補生の中では訓練や模擬戦では勝率が1位だったんですが、試合だと緊張して全然戦えないんです、だから代表に選ばれなかったんです……」

…。  
普段はすごいのに本番に弱いつて、本当にそんな人がいるんだ…

しかし、本気で山田先生が落ち込んでいるな。俺のせいだし、何か慰めの言葉を……。

「…でもそれだけの実力がある先生に教えてもらえるんですから、俺達は幸せ者ですよ。だから、その、元気出してくださいよ。それに…ちよっとドジで見ていると面白い山田先生が、俺は、いえ生徒皆が好きですだと思えますよ」

「織斑君、ありがとうございます」

あああ、テンパってなんかすごいこと言ってしまった気がする。  
まあ、なんとか立ち直ったし、気にしない。気にしないったら気にしない。

「…ふう、情けないところを見せてしまいましたね」

本当にね。

「まあ、そんなわけでその実力を教師として活かさないかとISS学園にお誘いいただいたので、今は生徒へ私の経験したことつ伝えることができると思っているんですよ」

うーん、それなら、千冬さんが担任じゃなくてもいいような…ああ、だから1組には専用機持ちが多いのか。

しかし、代表になれたはずの実力か…また戦ってみたいな。学園に戻ってからまたまにでいいから模擬戦とか指導してくれないかなあ。

学園にもどつたら、誘ってみるかな。

「さて、結構時間が経ってしまいましたね。そろそろ終わりましたよ  
うか?」

「そうですね」

俺は白式をクローズし、俺達の面倒を見るように言われていた娘に訓練を終了することを伝えた。

山田先生は、このままISSを返しに行くそうだ。

俺はISスーツを着替えに部屋に戻った。

シャワーを浴び、制服に着替えると、スポーツドリンクを飲んで水分を補給する。

今日は食事を取って談話し、後は寝るだけだ。

明日はどうなるのだろうか？

白式の使用を前提に考えると、シュヴァルツェア・ハーゼの訓練に参加するより、実戦方式の模擬戦をこなした方がいいような気がする。

後で質問してみよう。

## 54 (後書き)

少し忙しくなるので、しばらく(1週間ほど)感想に返信するのを控えます。

「い……、い……か、一夏」

な、んだ？

体が揺さぶられている。

俺はハツと眠りから覚めた。

ぱちつと開いた眼に、昨日と同じだが色違いのパジャマを着たらウラの姿が映った。

「ラウラ？……おはよう」

どうやらラウラが起こしに来たようだ。

しかし、いつもと違い、頭がしゃっきりしないと云つか呆っとする。こんなことは滅多にないのに……

……そんなに昨日は疲れていたのかな？

「む、おはよう」

「……今、何……時」

何時なんだ？と思い時計を見たら、昨日ラウラが来た時間よりも30分ほど早い時間だった。

まあ、余裕を持って行動するにはちょうどいいが、何もこんなに早く起こしに……ああ、ラウラは眠っている俺を起こしたかったのか。だから昨日変な感じがしたのか……。

その気持ちは嬉しいのだが、やはり眠い。睡眠を妨害した罰を与えよう。



『ピン』

ちよつと力を入れてデコピンを喰らわせる。

「っ、何をする一夏」

「こんなに早く起こしに来なくてもいい。寝ている俺を起こしたか  
つたという気持ちは嬉しいが、今後は控えること」

「……わかった」

ラウラはしゅんと落ち込んでしまった。

……本当、この娘は情緒豊かになったよなあ。そして可愛い。  
それにしても、こんな堕ちこまれるとこちらが悪いような気がし  
てくる。まさに可愛いは正義……ってちよつと違うか。

『わさわさ』

髪を少し乱暴にかき回す。

「い、一夏？」

「そこまで怒っていないから落ち込むな」

「わかった」

「それじゃ、改めておはよう、ラウラ」

「ああ、おはよう、一夏」

「今日の予定について言うぞ。午前中は基礎訓練を、午後は模擬戦を行う。昨日クラリツサが言っていた通りだな」

「わかった」

昨日の夜。模擬戦の反省会みたいなものを開き、戦闘データを見ながら山田先生の解説の元、いろいろなおアドバイスをもらった。その後でクラリツサ大尉に訓練に関しての意見を言うと、訓練の変更が行われた。

『確かに、一夏さんは当分は白式のみを使用されると思いますし、射撃の訓練はする意味がないですね。そうですね、基礎トレーニングと模擬戦のみを行うように変更しましょう』

というわけで今日は時間を挟んでラウラ、クラリツサ大尉、シュヴァルツェア・ハーゼの隊員から選抜した娘と1対1での模擬戦を行うことになった。

連戦だが、インターバルを取り、休憩を挟むため、体力的には問題ない。

ラウラもあの時以上に強くなっているだろうし、ラウラも認める実力のクラリツサ大尉も楽しくなりそうだ。それにシュヴァルツェア・ハーゼから選抜された娘もどれほどの実力があるか。

「では、朝食の時間になったらまた来る」

「わかった」

今日も楽しい一日になりそうだ。

午前中は山田先生のマンツーマンでの指導の元、基礎訓練を行った。

普段は規格外な千冬さんの指導力に隠れているが、山田先生の指導もなかなかのものだと感じた。

質問に少し考えると、適切な答えを返してくれるし、改善した方がよい部分、例えば残像を出すパターンの設定など、を意見を言うてくれる。

そんな感じで午前の訓練は終了した。

昼食を取った後、クラリツサ大尉との模擬戦が行われ、その後でラウラとの模擬戦が行われる。

俺は今、空中でクラリツサ大尉と対峙していた。

クラリツサ大尉は黒いIS、名前はシュヴァルツエア・ツヴァイク（黒い枝）を纏っている。

しかしドイツの軍は何につけても黒色が基本なのか？ISもこの部隊も名前に黒が入っているし……。

シュヴァルツエア・レーゲンの姉妹機だけあって、同じような形だがスラストが多く、レールカノンを装備していない。

どうやら高機動パッケージを装備しているらしい。

それと、左眼の眼帯を外している。しかし、金色には輝いていな

い。どうやらオン、オフの切り替えができるらしい。……前にラウラが言っていたな、成功した場合はこうなるって。

「では、始めましょう」

「はい」

『バーン！』

演習場の入り口にいた

空砲の音とともに模擬戦は始まった。

『ガン！ ガン！ ガン！ ガン！』

開始とともに、クラリツサ大尉は両手にアサルトライフルをオープンし、交互に撃ってきた。

俺は距離を離し、回避していく。

ずっと一定のタイミングで、撃ってくるの回避は容易いが、いきなり違うパターンに変化させてくるかもしれないため、油断はできない。

（やはり早い、遠距離からの射撃を命中させるのは無理か……誘いこみ中距離で仕留めるしかないか）

そろそろ接近してみるか？

俺は、放たれる弾丸を回避しながら、クラリツサ大尉へと接近しようとするが、その前にクラリツサ大尉がアサルトライフルをクローズし、シールドと、形状からしておそらくはマシンガンオープンした。

シュヴァルツェア・ツヴァイクは固定武装が少ないため、後付け

装備がシュヴァルツェア・レーゲンより多いのかもしれない。

そしてクラリツサ大尉はマシンガンを放ちながら、俺に接近してきた。

これは好機なのだが、おそらくAICがあるため、攻撃するときには必ず零落白夜を発動しなければならない。そのためエネルギー残量には気をつけなければならない。

よし、いくか。

『ガガガガガガガガガガガガガガガガ！』

バラけながら放たれるマシンガンの射線に気をつけながら、スラストー、ブースターを使用して、接近していく。

一定距離に近づいた瞬間に高速変則機動を行い、残像を出す。

昨日の戦闘データをとり解析していたのだから、山田先生の動きと同じ、残像ではない方へと弾丸を放ってくる。

しかし、俺も学習しているのだ。残像を出した方の逆へもう一度高速変則機動を行い残像を出し、瞬間加速を使用して一気に間合いを詰め、

「甘い！」

ようとしたらシュヴァルツェア・ツヴァイクからワイヤーブレードが一斉に射出され迎撃される。

しかし、俺はさらに高速変則機動を行い残像を出し攪乱、ワイヤーブレードが残像のあったあらゆる方向へと向かっていき、俺は今度こそ瞬間加速を使用し、間合いを詰めた。

零落白夜を使用し、斬撃を放とうとすることがあることに気付いた。

ワイヤーブレードがまるで結界のように俺を包囲しているのだ。

そしてワイヤーブレードのせいで機動が限定されている、このままじゃシールドで防がれるか、マシンガンから放たれる弾丸の雨の

中を進んでいくしかなくなる！

…ならば！

俺は瞬時に判断し、斬撃を放とうとした瞬間に、体勢を精密に変化させて、前方への残像を作り出す。

クラリツサ大尉は残像が間合いを詰めるタイミングに合わせて、シールドで防御しようとしている。

やはり、これが狙いだっただろう。

しかし、俺はそれに気が付いている！

「せいっ！」

俺は回転しながら、背後へと回り込む形で横斬りを放った。

クラリツサ大尉の背中へと斬撃が当たった。

「ぐっ！」

もう一発で落ちる！

俺はさらに斬撃を放とうとするが、

「このっ！」

いつのまにか金色に輝いていたクラリツサ大尉の左眼に捉えられ、マシンガンを持っていた腕から伸びたプラズマ手刀に迎撃される。

「くうう！」

スラスターを使用して回避するが、続いてシュヴァルツエア・ツヴァイクからシールドがクローズされ、腕からプラズマ手刀が伸びて、連撃が開始された。

クラリツサ大尉は両腕のプラズマ手刀で次々に斬撃を放ってくる。

回避しながら反撃、もしくは距離を離そうとするが、左眼にとらえられているせいで、回避先が読まれてまったく隙がない。

それに高機動型なのでスラスタが多く、かつての鈴のような隙もない。

実体剣モードに戻した、雪片式型で迎撃したり、スラスタを使用して回避しているが、全く反撃の機会掴めない。

どうする!?

（く、この眼を使用しても、回避先を読むのが精いっぱいか……機動力にだけ目が行きがちだが、観察力、判断力も良いレベルだ、織斑一夏。しかし、このままでは眼の負担からこちらが先にダウンしてしまう……しかし、もうこれ以外に手がない。射撃では間違いないダメージを与えられないし、この高機動戦でワイヤーブレードの使用は無理だ……手詰まりだな。左眼が使用できなくなるのが先か、織斑一夏の集中が切れるのが先か、賭けに近いが、このまま攻め続ける!）

斬撃、迎撃、斬撃、回避。

スラスタを使用して、目まぐるしく小刻みに短距離を移動しながら、なんとも同じ攻防が繰り返られる。

…本当に隙がない。

これは持久戦しかない。

クラリツサ大尉もそうだろう。距離を離す気を全く見せない。

先に集中力を切らした方が負ける。

いいだろう、たまにはこういう展開も。白式は短期決戦用だから、こういう機会はない。ここでどれ

だけ持久戦に耐えられるか、試させてもらうか。

さて、しんどいがやってみるか。

クラリツサ大尉の両手に展開しているプラズマ手刀が幾度も俺を襲う。

時には実体剣モードの雪片式型で受け流し、時にはスラスターで回避する。しかし受け流しても二刀のためすぐさま逆のプラズマ手刀で攻撃され、回避しても回避先へすぐさま距離を詰められ、斬撃が襲ってくる。

「いい加減、当たってくれませんか！」

「それはできない相談です！」

言葉の応酬で相手の集中を乱そうとするが、どちらもそんなことは気にしない。いや気にする余裕もない。

攻撃、回避、攻撃、回避、攻撃、回避。

ほぼ同じことの繰り返しを延々と繰り返している。時間がどれほど経っているかわからないくなるほどの疲労が襲ってくる。それでも思考を途切れさせず、体を動かす。もはや口を開くことさせ億劫になっている。

先に集中を切らしたのはクラリツサ大尉だった。

眼の色が元に戻り、斬撃を回避した俺を見失って決定的な隙ができた。

（く、限界か！）

（これで…終わる）



俺はもう何も考えずに零落白夜を発動させ、クラリツサ大尉を斬り払った。

「はあはあ、はあはあ」

「はあはあ、ふー……」

決着はついた。俺の勝ちで。

持久戦だったからか、互いに息が荒い。

クラリツサ大尉は俺よりも疲労が激しいのか、なかなか呼吸が元に戻らない。体力では俺が負けているだろうから、きっとあの眼は長時間の使用はかなり疲労するのだろう。

「はあはあ、ふー、はー。…私の負けですね」

「ほとんど判定勝ちのような感じがしますけどね。それにしてもまさか持久戦になるとは思いませんでしたよ。ここまで時間がかかるとは」

地上に降りて、ISを待機モードに戻して雑談を交わしながら、演習場の入り口へ戻っていく。

「白式の高機動を活かして攪乱、接近して攻撃されるだけだと判断し、接近戦で釘づけにするしかないと思いましたが、ですが、先にこの眼の活動限界が来るとは……賭けに負けてしまいました」

「こつちもぎりぎりでしたからね。少しでも集中を乱れさせれば連撃に巻き込まれ負けてしまう。体力より精神力を使いました。もちろん体力的にもきつかったです。単純な持久力ならクラリツサ大尉の方が上だと思います。けど、その左眼に活動限界があったか

ら勝ったんですよ。もしリスクなしで使用できていたら俺が負けていたでしょうね」

「ですが、負けは負けです。零落白夜にはAICが意味をなさないため、高機動パッケージで挑んだのですが、いざ体感してみると、あの機動は怖いですね。この眼なら見えることは見えるのですが反応がどうしてもワントンポ遅れてしまう。そのワントンポが続くと決定的な隙を晒してしまいますからね」

「ですが、高機動パッケージとその眼で封殺されてしまいましたし。完全に射撃ができない、白式と同じコンセプトのISをラウラやクラリッサ大尉、山田先生のような熟練者が使用すれば、俺では勝てなくなるでしょうね」

「確かにそうですね。速く動いて、あの零落白夜で斬る。やっているのはそれだけですから、機動力が同等ならより高いスキルを持つこちらが有利です。しかしそれは一次移行形態時の性能までです。二次移行形態時の機動力は異常です。あれと同じ性能を作ろうとしたら、何年かかることか…。それまではあなたに機動戦で勝てるものはまずいないでしょう」

「でも、二次移行形態時の性能は高すぎて、ISに頼りすぎてしまうので嫌なんですよ。だからなるべくは一次移行形態時の性能でスキルアップしていこうと思ってるんですよ」

そう、もっと強くなりたい。今の模擬戦もその糧にする。

「なるほど……」

(隊長が言っていた男の眼とはこれか……たしかにいい眼だ。ある

意味、温室育ちのあの娘達がこの眼を見れば間違いなく憧れ、好意を抱くだろうな。ふむ……いつそハーレムでも築いてもらうか？隊長は正妻で……4日間の訓練が終わった夜に、黒兎計画を皆で……)

「なんです？」

「いえ、何でもありません」

クラリツサ大尉が何かつぶやいたような気がしたが、気のせいだったんだろうか。

なんだか寒気がするなあ。汗をかいたからだろうか？

「織斑君、お疲れ様です」

山田先生からタオルとスポーツドリンクを受け取り、一息つく。クラリツサ大尉を見ると隊員の娘にタオルとスポーツドリンクを貰っていた。

……しかしクラリツサ大尉のISスーツ姿は、例によって色っぽかった。

ラウラと同じ灰色のISスーツに包まれた肢体は、スレンダーだが胸はそれなりに大きく、背が女性にしては高い方で、千冬さんのようなモデル体型。

俺に話すときは微笑みを浮かべ話してくれるため、お姉さんといった感じと、色っぽいISスーツ姿が相まって、結構危険だった。まあ、山田先生の爆発力よりは危険度は少ないので何とかなかったが。

「大変な模擬戦でしたね。でもいい経験になったのではないでしょうか？」

ここにこと笑みを浮かべながら、模擬戦のことを聞いてくる山田先生。

……いずれこの人のISスーツでアレしなくなるほどに成れる…  
…のは無理だな。

しかし、精神年齢では俺の方が上なのだがなあ。なんか、環境に慣れたのかももう完全に高校生だよなあ俺って……ま、実際に高校生と同じだからいいか。

「そうですね。短期決戦ではなく、持久戦、それも同じことの繰り返しで集中力の勝負。疲れましたが、いい経験になりました」

「一夏さん、次は隊長との模擬戦ですが、しばらく休憩をはさみましょう。さすがに疲労が激しいと思います。勝ち抜き戦や持久力をつけるための訓練ではないです。どちらかと言えば性能テストやデータを取ることを優先したいですね」

「そう、ですね。さすがに今すぐに開始すると言われたら、さすがに無理ですね」

「では、1時間〜2時間ほど時間を取りましょう」

「はい」

「モニターで見ていたが、あのような形の決着になるとは思ってもみなかった。しかし、これで一夏は持久戦もある程度行えることが判明したな」

座れる場所でISスーツの上から上着をはおり、休んでいる俺にラウラが話しかけてきた。

クラリツサ大尉と交代で、今は指揮所にはクラリツサ大尉がいるそうだ。

「でも、すごく疲れたな。最終的には純粹に集中力と体力で勝負した形になったが、機動力に特化した機体なら一次移行形態時の白式と同等に戦えることがわかったからなあ。データが取られているからいずれは攻略されそうだ」

「ふ、いずれと言わず、次の模擬戦で私が勝ってみせるさ」

どうやら何か対策があるらしい。

特化型はハマったら強いが、対策を取られると戦いの幅が少なくなり、次第にパターンにハマってしまい、最後には負ける。

某デ プシー使用のような感じだ。

地力で負けているため、データを解析されていけば必ず俺が負けてしまうだろう。二次移行の性能なら絶対に勝てるだろうが、それも同じこと、いずれは攻略される。

だからこそ経験を積み、地力を上げ、特化型を極める。そのため模擬戦をする。

ラウラの策も俺の強さの糧にする。

「ああ、楽しみにしているぞ」

「……そ、そのだな」

ラウラが言い澀んでいるが、何なんだろうか？  
それに顔が紅潮している。

「どうした？」

「わ、私が勝ったら、その、日曜日は二人だけで観光に行かないか？」

そうか、だから恥ずかしがっていたのか……しかしデートのお誘いか、せつかくドイツまで来たんだし、それもありだな。そのほうがラウラのやる気が出るだろうし。

まあ、この場合俺は勝っても負けても損はしない……いやラウラとデートできるなら、負けた方が得かもしれないだろ、常識的に考えて。

「いいぞ」

「ほ、本当だな！？」

「ああ、どっちにしる俺は損しないし、その方がラウラもやる気が出るだろ。せつかくの機会だし、なにも負けたらラウラを『選ぶ』ってわけでもないしな。いろいろ一緒に行動して、それでフィーリングとかを試していくことが『選ぶ』基準になると思うし……俺もいい加減真面目に行動してみようかな、と思うんだよ」

そうだ、この旅行の目的は、各国のISと模擬戦を行い強くなる糧にすること、そして俺に好意を持ってくれる娘といるいろいろ行動して、何か感じるものはあるか試すこと。

みんないい娘で、誰も選べないなら、少しでも気持ちを变化させたい。そのためには行動あるのみだ。

「だから、本当なら勝敗に関係なくデートをしてもいいが……うん、勝ったらデート、それはいい考えだ」

セシリアとシャルロットもドイツではこうしたと言えば、二人とも本気で戦ってくれるだろうし。それにこれが原因で勝ち負けが変わったとしたら、気持ちに何か変化があるかもしれない。

「そうか、ならば覚悟しておけ今日は一夏と白式専用の対策を考えてきたからな」

「怖いが…楽しみだ」

(デート、デート、一夏とデート。ああ、楽しみだ……絶対勝つてみせる、勝てば一夏とデートだからな。デート、デート、一夏とデート……)

しかし、一体どんな策があるのだろうか？…楽しみだな。

そう思うと、先ほどのクラリッサ大尉との模擬戦の疲れが引いていくような気がした。

56 (後書き)

忙しくてストックがやばい……。



「一夏、絶対に勝たせてもらうぞ」

(デートのために！)

「やれるものなら、な」

勝てばデートつをするという約束がこれほどラウラにやる気を出させるとは……しかし、それでこそ楽しくなるといふものだ。

先ほどクラリツサ大尉との模擬戦をしたときと同じように俺は今、空中でラウラと対峙していた。

「さて、始まるな」

『バーン！』

空砲の音とともに模擬戦は始まった。

俺はいつもの相手の動きを観察することをせず、自ら攻めていった。短期決戦のためには強引に、クラリツサ大尉のように自分から攻めまくることも必要だと感じたからだ。いつもはカウンターのような感じで攻めていくのがスタイルだが、それで勝てないときがあるし、今のうちにいろいろなスタイルを試す。

俺はいきなり変則高速機動を行い、ラウラへと接近していく。

「せいー！」

「くっ、まさかいきなり攻めてくるとはなー！」

「今日はそういう気分なんだ！」

零落白夜を発動させ、斬撃を放つが、ラウラは体勢を崩しながらもかわした。

俺は間髪いれず、横薙ぎを放つがそれもかわされた。

ラウラは左目の眼帯を外していたため、俺の動きが見えているのだろう。しかし重武装のため動きが鈍い。しかし、大型のシールドがあるため攻撃できる箇所が少ない。そのため、斬撃の軌道が読まれてしまい、回避されてしまう。それに大型のシールドで防ぐ方法もある。

このままでは、エネルギーを消耗していく俺が不利だ。

どうする？連続変則高速機動で攪乱し、一気に勝負を決めるか？しかし、前に一度同じ動きを見せているし、何か対策があるかもしれない……。

「今度はこちらの番だ！」

俺の逡巡を見抜いたのか、ラウラが攻勢に出てきた。

ラウラのISはいつもと違い、レールカノンと大型のシールドを2つずつ装備している。あえて機動を殺し、重武装にしているが、何か策があるのだろう。いったい何をするつもりだ？

俺は、雪片式型を実体剣モードに戻し、距離を取った。

ラウラのあの眼は制御が利かないので、時間がある程度稼げると思ったし、ラウラがやるうとしていることを見たいと思ったのもある。

「いけ！」

ラウラが言葉を放つとともに、シールドが開き、中から大型のミサイルが2つ俺に向かって飛んできた。

ラウラの網膜に映る俺をセシリアのBT兵器ほどではないが正確に狙って飛んでくるミサイル。俺は機動力に無理を言わせ、距離を取り、そして変則高速機動を行い回避し、ラウラに接近しようとしたが、

「な、何い！」

『ドガガガガガン!!!』

ミサイルがあらぬ方向へと飛んでいく瞬間に弾け、散弾のような爆弾が広範囲にいくつも撒き散らされた。

バリアーによる防御に成功、シールドエネルギー残量、480

爆発の雨は思った以上のダメージを与えてきた。零落白夜によってシールドエネルギーが減っているといえ、この消耗具合はまずい、ラウラは無傷だ。いくら零落白夜があるため逆転は可能だが、このままシールドエネルギーが減れば零落白夜を発動させられなくなる。く、あのミサイルはまずい。ただのミサイルは白式の高機動なら簡単に回避可能だ。しかしあの拡散弾頭はマシンガンなど弾幕を張れば弾ける前に落とせるが、白式にはできない。

ただ広範囲に射撃するのなら、見極めて回避していけばいい。しかしあのミサイルは速度はそれほどではないが誘導しているため、ミサイルと、ラウラ本人に意識をさかなくてはならない。

さて、どうする……？

「まだまだいくぞ！」

言葉とともにミサイルがまた発射された。

俺は一定以上の距離へとミサイルを近づけないように回避してい

く。

「甘い！」

しかし、ラウラはさらにレールカノンによる砲撃を行ってきた。

左目を使っているため、俺を確実に狙ってきて、ミサイルへの注意がそれてしまう。

まずい！

この飽和攻撃は、俺と白式とは相性が悪い。対抗策が思いつかない！

『ドガガガガン！！！！』

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、430

「うわぁ！」

レールカノンから放たれた砲弾を引き付けてから回避したはずが、なぜかダメージを受けた。

『ドガガガガガン！！！！』

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、320

く、ミサイルが直撃した。

これは本気でまずい！

攻勢に出るしかない！

ミサイルが放たれる前に加速し、距離をつめていく。

レールカノンは連続変則高速機動で攪乱し、狙いをつけさせない。一気に接近していった。

「来たな！」

「まだだ。まだやらせんよ！」

ワイヤーブレードによる攻撃も連続変則高速機動で攪乱し容易く回避する。

そして、ラウラは俺を迎え撃つかの用にプラズマ手刀を展開させるが、

「遅い！」

重武装のパッケージのためスラスターが少なく、俺の動きが見えなくても反応できていない。シールドでの防御もなぜか間に合っていない。

疑問に感じたが、俺は瞬時に零落白夜を発動、回転しつつ横斬りを放った。

斬撃は命中した。その上ラウラは体勢が崩れている。いける！

俺は追撃しようと、雪片弐型を構え、

『ドガン！』

バリアーによる防御に成功、シールドエネルギー残量、 220

ようつとした瞬間に衝撃を受けた。

く、一体何が起きた！？

ラウラが何かしたのは間違いない、俺はラウラを見た。

ラウラは……あれは、シールドが損傷している？それに薄くなっている……まさか、あのシールドは！？

「もらったぞ！」

しかし、ラウラが追撃してきたため、思考は戦闘に戻された。ラウラは、なんとこの接近した距離でミサイルを放ったのだ。

「ちょー！」

俺はすぐさま距離を取ろうとしたが、

『ドガガガガガン！！！！』

ミサイルは弾け、拡散した榴弾が、俺とラウラを襲った。

バリアー貫通、シールドエネルギー残量、0

爆発の雨に巻き込まれ、いろいろな方向へ吹き飛ばされた。

くう、俺の負けか……。

爆発の雨が過ぎ去った後、ラウラがぼろぼろのシールドに守られているのが視界に映った。

自爆作戦か、シールドがあるとはいえ、あの距離でやるなんて……いや白式にはシールドなんてないし、零落白夜発動のため、シールドエネ

ルギーの減りが早い。

あの装備はまさに対白式の装備だ。

あれは相性が悪過ぎる。いや、開始直後のあの連撃を……駄目だ、零落白夜を発動しなければ攻撃してもAICで防がれるだけか。そして距離

を取られれば、あの拡散弾頭の雨に飲まれてしまう。  
しかし、なんとというかものすごくコストが悪いし、セシリアやシヤルロットとは相性が悪そうなパッケージだな。

「一夏！勝ったぞ！」

「ああ、俺の負けだ。まさかあんな手でくるとはね」

「お前に勝つにはこうしなければ無理だと思ったからな。あの対白式パッケージは無理を言って作らせたんだぞ。しかし二次移行形態時の性

能には無意味だな

「対白式パッケージ、そんなものを作ったのか？」

「そこまでののか……」。

「ああ。……その、勝ったぞ、だから……デ、デートしてくれるの  
だろう？」

「ああ、約束だったしな」

「そうか、ふ、ふふふふふ、ふはははははげふっ！げふっげ  
ふっ」

ラウラが壊れた。

(私は……一夏とデート……が、ま……)

『プシュー』

そして空気がもれる音がすると（実際には聞こえなかったが、しかし心ではそう聞こえた）ラウラは後ろ向きに倒れていった。

慌てて抱きとめると、顔を真っ赤にしたラウラが気絶していた……しかし、その顔はしまりがなく、にやついていた。

そんなに嬉しかったのか……そこまで思っていてくれて嬉しいのだが、この顔はなんていうか、あきれくらい幸せそうだ。

はあ……負けてシヨックを感じているはずなのだが、ラウラのおかげでぜんぜん感じないな。

でも、そうだ、負けた。俺は負けんだよな……。

一次移行形態時での性能ではあの戦法は打ち破れないのか？このまま負けたままというのはなあ……ま、後で考えるか、まずはラウラを運ばないと。

俺は、演習場の入り口で待機していたシュヴァルツェア・ハーゼの隊員の娘へと向かっていった。



## 57 (後書き)

ノートからデスクトップへPCを新調しました。  
しかし、キーボードが打ちにくい + 変換がしにくい……。

その後、気絶したラウラは基地に運ばれ、訓練は終了となった。俺と山田先生は、山田先生に割り振られた部屋で、先ほどの模擬戦のことについて話していた。

「白式は牽制用の武器すら持っていないので、あの戦法を取られたら、当たる前に接近して、零落白夜で短期決戦にするしかないですね。あの大型ミサイル、拡散弾頭はかなり容量を使用しているはずなので、たぶんあれで弾切れになっていたのかもしれないですし、ミサイルを斬り落とす方法もありますね」

「なるほど、切り落とせば爆発も最小限ですみますし、ただ、あの眼がある限りレールカノンで精密に狙ってくるのでできなさそうですね」

「あの眼には時間制限があるとはいえ、地力が違いますからね。操縦者の動態反射が高い場合、一次移行形態時の白式の性能では、限定空間内での戦闘はあの戦法を取られたら、特攻が一番効果的です」

「こればかりは、分が悪い賭けに出るしかないですね」

嫌いじゃないってね。

「ええ、ですが接近してからも、シールド内部に仕込まれた爆薬を自爆させる方法でダメージを与える……これも射撃で攻撃されたらシールドの強度が持たないでしょうが、白式は零落白夜を使用しないと攻撃できませんからね。ただ接近するだけでは駄目です」

「攻撃を貰いながら攻撃して、先に勝つ。これぐらいですかね、考えられる対策は」

ノーガードで殴り合いに持ち込むという感じか。いや、ちょっと違うか？

「それしかないでしょうね。まあ、あれは他の国では真似できないですからそれほど気にしなくてもいいと思います。ですが、ああいう絡め手もあるということ覚えておいてくださいね。今の織村君の実力はかなりのものですが、よく練られている絡め手をとられた場合は危険です」

「はい、今回はいい勉強になりました」

「はい、その気持ちなら大丈夫ですね……それより、その、ボーデヴィッツさんと、デートするという約束というのは……？」

「えーと、まあ、俺に勝てば最後の2日のうち1日は二人きりデートをする約束をしまして……」

山田先生は教師だし、さすがに中止とはいわないが、節度を持つてとは言われそうだ。

「ええと、織村君が決めたことならいいのですが、その、間違ってもいくところまでいってしまうのはやめてくださいね……もしそんなことになったら……私が織村先生に殺されてしまいます」

さすがに大げさだと思う。

それにもし、そうになったら俺がちゃんと千冬さんに話す。千冬さんなら俺の気持ちをわかってくれるだろうから大丈夫。のはず。

まあ、ただ、ではないがデートするだけなのでそんな大事のよう  
に言わないでほしい。

「大丈夫ですよ、デートするだけですから。それに、もしそうなっ  
たら山田先生には何も責はありませんよ。それはきつと俺が自分で  
決めたことですから」

「た、頼みますよ。お願いしますよ」

ああ、やっぱり山田先生はこうでない。

「わかりましたから、そんなにパニックにならなくても……はい、深  
呼吸」

「すーはー、すーはー……ふう、落ち着きました。すみませんでし  
たね織村君」

「いえ、まあ、その、慣れましたから」

ほんとにね。

「それはそれで悲しいです」

「……でもいくら千冬さんとはいえ、さすがにそこまでパニックにな  
るようなことはしないとは思いますが？」

なんだかんだでやさしい人だな。それ以上に厳しいけど。

（どれだけ弟の前だといいかっこしいなんですかあの人は……そんな  
な弟が私が油断していたせいで誰かとくっついていたなんてことに

なったら……ブルブル)

「ははは、そうですね。あれで織村先生は優しいですからね」

(弟の前だけなら、なんだかんだ言っすぎてすごく優しいんですけどね)

「じゃあ、俺は部屋に戻ります」

「はい、お疲れ様でした。明日もがんばりましょう」

部屋を出ようとしたら、あるものが眼に入った。なんでこんなところにあれが？ト、トラップか？いや、きっと錯覚だ。

『じくじく』

眼をこするが、あるものが見える。

『じくじく』

眼をこするが、あるものが見える。

……山田先生って大胆なんだなあ。

「お、織村君。何をしているんですか？……え、あれ？……あわわ、はわわ……」

どうやら俺が何を見ているか気づいたようだ。

あるものとは……山田先生のパーティー、色は黒で紐のような面積が薄いものだ。勝負下着。それしか単語が思いつかない。

荷物の整理をされていてしまい忘れたのか、床に落ちていた。それが偶然俺の目に入った……これもラッキースケベというのか？

「お、織村君……」

こういうときどんなりアクションを取ればいいのか……？  
笑えばいいと思うよ。ってこれは違うだろ。

「山田先生って…大胆なんですね」

「……き、記憶を失ってくださーい!!」

『バキッ!』

衝撃とともに俺は、気を、うし、なっ、た……。

意識を取り戻した際、山田先生から土下座する勢いで謝られたが、こっちも、男としてはいい眼にあっただので、どっちも悪くないということにした。

なぜ山田先生がこんな下着を持っているのかは聞いたが、言葉をごにゃごにゃと言うだけで教えてくれなかった。

しかし、山田先生があの下着……あ、やばい、想像すると鼻血が……んんっ!!…ふう。

なるべく思い出さないようにしよう。創造だけでも破壊力がやばい。ふう、このままじゃ暴走してしまいそうだ……、よしISのことを考えて煩惱を沈めよう。

俺は寝る間際までISのことを考え、煩惱を沈めた。

4日目の朝、いつものごとくラウラは朝パジャマ姿でやってきた。それにしても昨日はいい眼にあったと同時にひどい眼にあった。

「おはよう」

「おはよう。ラウラ」

いつもなら、予定とかは話してくるのだが今日は俺をじっと見つめたままだ。

昨日のことがまだ引いているのだろうか？いや、いくらなんでもそれはないか。

「ラウラ？」

「…あ、ああ。すまなん、ちょっと考えごとをしていた」

(二人きりのデート楽しみだなあ。ああ、クラリツサに服装のコーディネートをしてもらわないと、何を着ていけばいいのかわからん……少しはオシヤレとかを勉強する必要があるかもしれない………一夏に見てもらえるのは嬉しいからな／＼)

ま、訓練の時には元に戻るだろ。今はこのまま放置しておくか。ちなみに朝食を取る時間になるまでラウラは、ずっとじくと俺を見つめてボケっとしたままだった。

俺はそんなラウラをぼくと見ていた。

朝食の時間まで後すぐという時間になってラウラは元に戻った。その後慌てて今日の予定を伝えていった。

今日の訓練は、朝はいつもの基礎トレーニングと1対2での模擬戦で、午後は2対2での模擬戦だ。

1対2では、俺対ラウラ、クラリツサ大尉。

2対2では俺、山田先生対、ラウラ、クラリツサ大尉、ほかにも組み合わせを変えて模擬戦を行う。

複数での戦いか……どんな感じだろうか？いつもと動きが違うだろうし、面白そうだ。

特に訓練を行ったわけではないので、手探りで戦うことになるが、それはそれで面白い。常に勝つための方法を考え、それを経験にする。

さて、今日はどんな1日になるのか……。



「ふう。疲れたな……」

対複数、複数対複数での模擬戦を行った4日目と5日目が終わわり、俺はシャワーを浴びていた。

対複数戦は碌に攻勢に出られないまま終了した。ラウラとクラリツサ大尉の連携はとにかく攻撃に切れ目がなくこちらは回避しているので精一杯だった。

さらにあの眼を使用された場合、回避しているのも難しくなり、しだいに攻撃を受け始め、そのまま負けた。

2対2での模擬戦は、俺がいるペアが1勝2敗だった。

最初は山田先生と、次はラウラと、最後はクラリツサ大尉と組んだが、山田先生はうまく俺を援護してくれていたが、連携訓練など行っていないため、ラウラとクラリツサ大尉の連携の前に、追い詰められていき負けた。シャルロットと組んだときのように1対1を2つにすることもできなかった。

2戦目ラウラと組んだときは俺が前衛、ラウラが後衛に別れ、白式の速度を生かして攪乱しつつラウラのレールカノンで狙撃していたが、

山田先生とクラリツサ大尉はシールドを使用して、レールカノンに真正面から突撃しラウラを二人で囲むと猛攻を加え、俺が援護しようとしたら距離を取りながら、ライフルを両手に持って乱射してきた。回避するものの、こちらのダメージは大きく、その後、俺は山田先生と相打ちになり、ラウラとクラリツサ大尉も相打ちになったが、クラリツサ大尉のほう shields エネルギーが残っていたためこちらの負けになった。

最後はクラリツサ大尉と組んだが、さすがに慣れてきたため、俺がラウラに接近戦を、クラリツサ大尉が山田先生に接近戦を行い、

どちらも目標に決して距離を取らせることなく、終始接近戦のみを行った。

その結果、山田先生が最初に落ちた。さすがに同等の技量相手に1世代前のISではなす術もなかったらしい。その後俺とクラリツサ大尉はラウラを落とし、勝った。

複数対複数の模擬戦を行ってみてわかったが、集団戦は連携が取れないと碌に力を発揮することなく負けてしまう。もっとも白式の二次移行形態の性能なら、数の暴力を性能でかなり覆せるが。まあ、同じ実力同士が組んでも、連携が取れなかったらただ戦力がプラスされるだけ、しかし連携がとれば掛け算になる。

わかっていたが、改めて連携の重要さを思い知らされた。

学園でも3学園は個人戦だけでなく集団戦を行うので、2年に進級したら連携の訓練は必須だ。モント・グロツソでも3対3の試合があるし、いずれは完全な連携を試してみたものだ。前にセシリアとしたあれはキマった瞬間は爽快だったし……いろいろ試してみたいなあ。

ま、連携の訓練はいずれお声場いい。セシリアやシャルロットとかとはISの相性がよさそうだな……。

しかし、シユヴァルツェア・ハーゼの隊員の娘達のISスーツ、あれはやばかった。すごいハイレグで、なんかもう裸よりエロかった。

うん、あれは本当にやばかった。隊員の娘の中には年下なのに発育がやばかったし、その上『お兄様って呼んでいいですか?』とか上目遣いでだつちゅーのポーズ(古いなこれ)で言ってくるし……うう、まずい、冷たいシャワーで煩惱を退散させよう……。

はあ、明日はラウラとデートだし、疲れが残らないように早く寝ておくか。それに変なことを考えてしまそうだし、よし寝よう寝よう。

6日目の朝、今日はラウラは起こしには来なかった。  
代わりにクラリッサ大尉が部屋に来た。

「おはようございます。ー夏さん」

「おはようございます。クラリッサ大尉。今日はクラリッサ大尉が来たんですね。ラウラはどうしたんですか？」

「隊長は、デートですので、出発までは会わないと言っていました。本当なら待ち合わせを試みたいが、さすがにそれは手間になるので、ということでも起こしに来ました」

「そうですか…」

確かに……そういう雰囲気は大事にする人が女性には多い……少なくとも俺の経験では。

ラウラはあれで純情だからなあ……まあ、そういうところは可愛い

「んだが、たまに変なことを言い出すからなあ……ってこの人のせいなのだがね。」

「なんですか？」

「おっと、つい視線が強くなってしまったか。ごまかすか。」

「いえ、パジャマじゃないんですね？クラリツサ大尉のパジャマ姿が見たかったんですが」

「な！？あれは、その……隊長は、一夏さんが、だから……」

「うーん、もしかしてこの人……ラウラにいろいろ吹き込んでいけど、それは本など（漫画やアニメ）で得た知識であって、自分では恋愛とか経験したことがないのかもしれない。……ちょっと可愛いかもしれない。」

「まあ、さすがにこんな焦っていると悪い気がしてくる。」

「俺が悪かったですから、そんな焦らないでください」

「……一夏さん、結構意地悪ですね。隊長が寝顔を観察されたと言っていましたし……」

「ははは、すみません。つい」

（しかしこれでは、年上の立場がないな……ふむ、ならば……明日は……）

「それで、今日の予定はラウラとライン川クルーズを行うんですね？」

「はい、午前9時からリューデスハイムを出てザンクト・ゴアール・ハウゼンまで往復します。夕方にはリューデスハイムに戻ってくるので、その後つぐみ横丁を観光、夕食を食べて終了です」

「楽しみです」

城とか見えるはずだったし、いろいろな名所があるんだったよなあ。

「それは何よりです……隊長は、あの娘はすごく難しい娘だったのですが、ある日あなたのことを嬉しそうに話すようになりまして、雰囲気が和らぎました。そのおかげで隊も結束することができましたし、あなたには感謝しています。……あの娘のこと、よろしく頼みます」

すごくやさしそうな表情だったなあ……こういう顔ができる人だから、ラウラや隊員が信頼しているんだろうな。

……今日はデートだし、ラウラと楽しむつもりだ。でもよろしく頼むって『選ぶ』のはできない……下手なことを言ったら、言質を取られそうだな。この人なんか抜け目がなさそうだな。気をつけないと……。

「今日は楽しんできますよ」

「はい。お願いします」

(ラウラのことは任せてくださいとか言ってくれればいいのに……思ったよりガードが固いな……しかし、色仕掛けとかには弱そうだな。私のISスーツ姿をチラッとだけ見ていたし、その後はなるべく視線を外していた。一番露出度が高いISスーツをあの娘達に着せて

みせたが、我慢しているようだった……女だけの場所にいるし、もしかしたら欲求不満気味なのでは……やはり黒兎計画を……)

「では、朝食はいつも通りの時間をお願いします」

「ま、待たせたな一夏」

基地の出入り口付近で待っていた俺の前に現れたのは、白いゴスロリっぽい服を着たラウラだった。

いつもの黒い眼帯をつけているためアンバランスだが、それが逆にいい。そのうえ髪型をツインテールにしていて、いつもより幼く感じて年相応に見える。すごく可愛い。って言うかやばい。

それにやわらかい甘い香りが漂ってくる。これは、香水をつけているんだろう。たぶんクラリッサ大尉がコーディネートしたのだから、いいセンスだ。

「ラウラ、すごく似合ってる。可愛い」

いや、もうマジでね。

「そ、そうか……」

いつものように顔を赤くするが、今日は倒れたりはいしないな。まあここで倒れられても困るんだが…。

「いつもみたいに、倒れたりしないな？」

「わ、私だって慣れてくるさ。まったくお前は結構意地悪だな。クラリッサもからかわれたと言っていたぞ」

うーん、俺って意地悪なのかあ？……わからん。こんな風に異性と話すのはこっちでしかしてないからなあ。前はもっとどっちかといえば女性は避けていたし……。

「ははは、悪いな」

「ま、まあいい。では行くぞ」

(きつと、それだけ私が親密になったということだからな)

リューデスハイムまではここからだと言われているのでヘリで移動することになっている……本当にここまでしてもらうとは、一応白式の詳細データ以外は渡したが、その対価としては正しいのか不安になってくるな……まあいい、せっかくのデートだしそういうのは気にしないでおう。

というわけでラウラとのデートの始まりである。

## 59 (後書き)

毎日更新はきつくなったので、火木土日ぐらいにしようかと思っ  
ます。

とりあえずはできるだけ毎日更新してみます。



リューデスハイムで船に乗り、ゆっくりとライン川を下っていく。天気は快晴でとても暑い。しかしラウラは鍛えられているのか汗をあまり掻いていない。さすがは軍人だ。

角古城のオンパレード、ねずみ城とかいろいろな古城が眼に映っていく。

陸地は森のようになっており、そのがけのような斜面に城が建てられている。

その下のほうには電車が通っている。

ただ、言葉もなく眺めているが、とてもすばらしかった。

反対側の岸には急斜面にブドウ畑が広がっているようだ。それと近くに小さな町がある。

その後には、ローレライの岩山。

ローレライの伝説で一番有名なのは、不実な恋人に絶望してライン川に身を投げた乙女で、水の精となった彼女の声は漁師を誘惑し、岩山を通りかかった舟を次々と遭難させていったという話だろう。

ただの岩なのだが、そんな曰くがあると思ってみると、印象が変わる。これは観光しているから感じるんだろうが、楽しむために迷信だなどとは言わない。

その後ザンクト・ゴアール、ザンクト・ゴアール・ハウゼンに着き、今度はライン川を上がってゆく。

下りとは印象が違って見えて二度楽しんだ。

そしてリューデスハイムに戻ってきて、つぐみ横丁を観光した。つぐみ横丁は石畳で日本とはまったく違っていた。狭い道には何人も人が歩いている。そして一番印象的なのは、やはり酒、酒、酒が売っていたことだった。

どの店もワインの試飲をしており、この身体的にはいけないのだが、試飲した。

すごくうまかった。

辛口はさすがにこの身体には合わなかったが、甘口は飲めた。あのアルコール独特の体がぼかぼかしていく感覚、久しぶりだった。ちなみにラウラはアルコールに弱かった。一口、口にしたらただけだけ顔が真っ赤になっていた…。

千冬さんへのお土産として少し値が張るワインを数本買っておいた。それと他の人のお土産は明日まとめて買うことにした。

そして夕食を食べ、デートは終わった。

特に何かを話したわけではないし、特別なイベントがあったわけでもない。しかし…ずっと手をつないでいて、寄り添っていた、それだけなのに、すごく甘酸っぱいというか、初々しさが戻ってきた感じがした。

「一夏」

基地に戻ろうとした時、ラウラに話しかけられた。

「なんだ？」

「今日は…楽しかったか？私は…楽しかったぞ」

「俺も、楽しかったよ」

ああ、楽しかった。いい思い出ができたし、それに…ラウラのことがちよつと理解できた気がする。

歩く幅、息遣い、手から伝わってくる感情…いつもの学園ではわからなかったことが理解できた。

「そつか、それならいいんだ」

そういつて微笑んだラウラはすごく綺麗だった。いつもの厳しさ、天然なところが一切含まれていない、ただきれいな笑顔、いつかの千冬さん似ている表情……つい、見とれてしまった。

「どうかしたのか？」

「……いや、なんでもない」

普段なら綺麗だ、と言っていたのだろうが、今はなぜか言いたくなかった。

………それだけあの笑顔が大切だと思ってしまったからなのかも知れない……。

こうしてデートは終わった。

しかし……ラウラとは相性がいいのかもしれないな、こういうデートの仕方はすごくいい感じだ。あまり騒々しいのより、こういう静かというか、雰囲気大人な感じが俺は好きだ。

はあ、何か今だけならラウラを選んでしまいそうだ……でも、まだみんなを理解していない、だから今『選ぶ』ことはできない。そこまで強い感情ではないからなあ……俺は本当に優柔不断だ……。そんなこんなで6日目が終わった。

「一夏さん、起きてください」

声とともに体を揺さぶられた。

うとうとしていた意識が戻り、眼が覚めた。

「……クラリツサ大尉？」

俺は寝ぼけ眼でそう呟き、その声で完全に意識が覚醒した。

「おはようございます。クラリツサ大尉……」

「はい、おはようございます」

なんでクラリツサ大尉がまた起こしに来ているんだ？

……しかもパジャマ姿、それも……ノーブラで……。

楚々としたパジャマ姿、しかしブラジャーをつけていない+胸元が少し開いていて、なんかこう、清純な色気？って感じを受ける。

クラリツサ大尉のような大人っぽい女性がこんな姿をしていると破壊力は抜群だ。

……まずい、朝特有のあれと重なり、ちょっと塔が……。

半身を起し、誤魔化す。

「もしかして昨日の意趣返しですか？」

「わかります?」

「まあ、それしか思いつきませんから」

……ふう、うまく誤魔化せたようだ。

「ふふ、すみませんね。ですが明日にはドイツを発たれるのですから、仕返しができるのは今日くらいなので、隊長にお願いして代わってももらいました」

まあ、眼の保養にはなったな。っていうか恵まれすぎだろ俺、Mogero的に考えて。うーん、なんか、意識すると余計にあれがやばくなっていく……。

「えーと、クラリッサ大尉のパジャマ姿、ご馳走様でした」

「ごういうときは……確か……お粗末さまでした?でいいのですか?」

「まあ、それでいいです」

ああ、日本じゃないからリアクションが薄い……この大人っぽい雰囲気消したいのに……そして、静まれ。

「さて、今日の予定です」

ふう、これで安心だ。

「今日は午前中は山田教員、隊長や一部隊員の娘達とともにシヨツピング。夕方少し前に戻り、その後、シュヴァルツェア・ハーゼに

よるパーティーを開きます。明日は朝はいつもどおりの時間に起床、朝食後、フランスへ出発してもらいます」

ドイツも今日で終わりか…思えば、あっという間だったな。

…ふう、まだ一日あるのだから、今日も楽しもう、寝る前にでも感傷に浸ればいい。

「わかりました」

「では、私はこれで。失礼しました」

クラリツサ大尉はパジャマ姿のまま出て行った…あの格好で基地を歩くとか…想像してみたが、シユールだな。まあ、この部屋は宿舎にあ

るので、そんなことはないのだが。

さて、ドイツも残すは今日一日。今日楽しむとしますかね。

60 (後書き)

風邪で今日はダウンしたので、誤字修正、返信などは風邪が治り次第行います。  
のどが痛ひ……。

## 61 (前書き)

約1ヶ月ぶりです。

このSSを楽しみにしていた方々、本当にすみませんでした。

今後の更新ですが週に1〜2回の更新にします。

また、感想なども返すのはしばらくやめておきます。



ドイツ最終日。

現在夕方から夜になる時間帯。

IS学園の食堂と比べるとレベルが落ちるが、それでも一般の基地よりは設備が整っているというこの基地の食堂で、パーティーが開かれていた。

簡単に飾り付けを行なった部屋、テーブルの上にはドイツの郷土料理がずらりと並んでいる。

主賓の席に俺が座り、そのそばに、山田先生、ラウラ、基地指令クラリツサ大尉が座り、その周囲をシュヴァルツェ・ハーゼの隊員達が囲んでいた。

「……………」

どうしてこうなった？

いったいなんでなのか、いや、間違いなくクラリツサ大尉のせいだと思うが、ラウラ含めシュヴァルツェ・ハーゼの娘達は全員黒いバニーガールのコスプレをしていた。

きわどいハイレグ。ほとんど見えている胸。胸が大きい娘は堂々と胸を張り見せ付けていた。ラウラのような胸が貧しい娘達は恥らいつながらもその憤ましい胸を強調していた。

エロい、とにかくエロい。すぐくピンクの雰囲気は漂ってくる。これがドイツ流のおもてなし、ってそんなわけないだろ。常識的に考えて。

きつとクラリツサ大尉が計画したが、間違った知識のせいでこんなことになってしまったのだらう。まったくこの人は。

俺は元凶であろうクラリツサ大尉を見てみた。

……………これはひどい。(嬉しいけど)

クラリツサ大尉は、すごくエロかった。

外国人サイズの平均はやはりでかく、胸にまず眼がいつてしまう。そしてその次は、きわどいハイレグ。ISスーツで慣れているといつても、もうほとんど見えてしまうほどのきわどさは目の毒だ。そして背中はずっくりと見えていて、もはや体を覆っている面積のほうが少ない。

そのうえ、香水は甘いフェロモンのようなものが漂ってくるものをつけており、しかも女性の汗が混じったせいも、すごく…そそのる。うっとうう、いろいろと限界だ。もう限界だ。くそ、耐えろ、耐えろ俺。

「一夏、どうした？」

「…いや、何でもない」

(ふふふ、冷静そうに見えて、実はかなり参っているな。これは後一押しで墮ちるか？……何とかアルコールを飲ませて、私と隊長で誘惑してみよう。これが黒兎計画バーガール)

基地指令の無礼講の言葉とともに宴が始まった。

なんか含み笑いをしていた基地指令は数人のシュヴァルツェ・ハーゼの隊員達にお酌してもらいながら、ワインを飲んでる。

基地指令がそんなだから、今日は本当に無礼講なのだろう。隊員の娘達も、砕けて話しかけてきた。日本語が話せる娘達が中心になって日本のことや、俺のことを聞いてきたので、いろいろ(IS学園で起きたことや、日本の国についての正しい知識)と話していた。のどが渴いたので、渡された飲み物を飲んだら、ワインだった。1リットルほどで数万円するとかの高級品なのか、すごく味わいがよい。

味わいがよいものだからつい飲んでしまった。

いや、今は未成年だつてわかつてますよ？でもね、久しぶりにお酒を、それもこんな高級品を飲めるなんて誘惑には勝てませんよ。なんて言い訳しながら口に含み舌を転がすようにして味わい、そしてのどに通していく。

甘い果実酒を飲んでいるかのようだが、少し経つと体がぼかぼかしてくる。そして頭がふわふわとしてきた。アルコールを飲んだ特有の症状、酔ってくる。やはりアルコール濃度が高いのだろう。程よく甘くて飲みやすいがこれは危険だ。

ふわふわ、ふわふわして、テンションが無駄に高くなってくる。

やばい、この体はまだ未成年で、しかも酒を飲みなれていない。

少しアルコールを摂取しただけでこんなに酔うとは……。

とりあえず水を飲もう。

ふう……水を飲んだら、少し落ち着いた。うん、落ち着いた、これにしよう。

「一夏さん。大丈夫ですか？」

そう言つて、クラリツサ大尉が俺のほうへ身を乗り出してきた。

胸が強調され、深い谷間が……はっ、やばい、どこを見ているんだ！？落ち着け、静まれ。

「…ええ、大丈夫です。たださすがにアルコールはこの体にはちょっときついですね」

「すみません。無礼講だということで飲み物はワインが主になります。後は水しかないので……」

「水で大丈夫ですよ」

つていうかこれ以上アルコールを摂取したら、絶対何かが飛ぶ。

「……一夏、酔ったのならしばらく私と外を歩かないか？」

『隊長、何を』

『すまん、しかし、酔った勢いで結ばれるというのは、やはり私は嫌なんだ。それでは一夏が『選んだ』とは言わないからな……私は自信を持って一夏に『選ばれ』たと言えるようになりたい……』

『隊長……わかりました。作戦は失敗したことにします。ですがこのチャンスを活かしてください』

『ああ、一夏にアピールしてくる』

『成功を祈ります』

そうだな、このままでは何かまずい事態になりそうだし……って  
いつか山田先生は……酔いつぶれる。山田先生え。

「ああ、そうしようか」

「では、いっしょ」

これで落ち着けるな。

昨日のデートのときのようにラウラとともに基地内をゆっくりと歩く。

「なあ、一夏」

「なんだ？」

「・・・ドイツは楽しかったか？」

「ああ。楽しかったよ」

いろいろ優遇されていたからそう思うのだろうが、それでも純粹に楽しかったと思う。

「そうか……………私は軍人としてこの国に誇りを持っているが、それはそう教育されたからだ。でも、今はきつとこの国が好きだ。前の私なら unnecessary な感情として切り捨てただろうな。お前に負けていると吹っ切れて、いろいろなことを知って、これからも知っていく……………それが生きることだと今の私は思っている」

生きること、か……………。

「前にも言ったがもう一度言う、お前が好きだ。私は一夏と一緒に生きていきたい……………きつとお前はまだ誰かを選ぶことはできないだろう、だから返事は言わなくていい……………ただ、もう一度言うっておきたかっただけだ」

「ああ、ありがとうラウラ」

「…ははっ、なんだか照れるし、恥ずかしいな。きっと素面ではこんなこと言えないな」

いつもと違ってラウラの笑顔がすごく大人びているように感じた。

「さて、そろそろ戻るか」

「ああ、それに時間も時間だしな」

俺とラウラは食堂へと歩いていった。

俺はベッドで横になりながらドイツでの出来事を思い出していた。模擬戦、観光、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員達との交流……楽しかったな。もし、ラウラを『選ぶ』なら俺もドイツで暮らすことになるのか？……まあそれはそれで楽しそうだが、ドイツ語覚えるのが大変そうだな……。まあ『選ぶ』ことは置いておくか、今はまだ結論がだせないな。

さて、明日はフランスか、シャルロットに会うのも久しぶりだ。

.....  
楽しみ、だ、な  
.....  
Z  
Z  
Z  
.....  
Z  
Z  
Z  
.....

というわけでフランスに着いた。

朝早く、ラウラ達に挨拶して、移動用のジェット機に乗り、フランスへ出発。フランスとドイツ、同じヨーロッパなので、短い時間で着いた。

飛行場へと降りた俺と山田先生を待っていたのは女性用のスーツを着用したシャルロットだった。

「一夏！ひさしぶり！……山田先生も」

「1週間ぶりだな、シャルロット」

「……お久しぶりですう、デュノアさん……」

（扱いがぞんざいですが、忘れられていないだけましなんでしょうか……）

「じゃあ、早速ホテルへ移動するから」

シャルロットと後ろにいた黒服の男につれられ、車（たぶん高級車なのだろう）に乗った。

「一夏、ドイツはどうだった？ラウラは元気だった？」

「楽しかったよ。IS関連では1次移行の能力限定では飽和攻撃に弱いかわかったし、模擬戦ではいろいろな経験ができたしな。観光もライン川を往復したり、食事もワインを飲んだけどすごくおいしかったな。ラウラは、うん、相変わらず天然なところもあったけ



どISではやはり強いと感じたし、軍人としてはかなり有能だったな。いろいろなることを知ったよ」

ああ、いけない、シャルロットは話しやすいというか聞き上手というか、つい、一気に話してしまった。

「ラウラらしいね。うん、よかったね。フランスも楽しみにしててね」

シャルロットはクスクスと笑いながらも、フランスを少し強調してそう言った。

「ああ」

「ホテルに着いたら、小休止して昼食を取ってから、午後は観光だよ。5日目までIS関連のを行なって、6、7日目は観光の予定だよ」

「ドイツと同じような予定だな」

「うーん、この予定が一番組みやすいからだろうね」

さて、フランスではどんな出来事が起きるのだろうか？IS開発などの見学ということなのだが……ちょっと想像がつかない。

整備についてならIS学園にもあるが、白式の調整などは専用機なので微調整以外は倉持技研から白式のデータ取りや整備のために来ている人達にまかせている。新装備なども現状では白式には必要ではないし、また白式から拒絶されない装備もないので、俺は開発関連のことはまったくノータッチだった。それにどちらかといえば開発とかより、実際にISを動かす方が好きだしなあ……まあ今回

のことはいい機会だから勉強していくか。

「午後の観光はパリを一回りするよ、とはいっても街を見た後はルーブル美術館に行つて終わりだね。あそこは本当に大きいから」

パリか、ルーブル美術館とかは有名だな、後は…あまり知らないんだよなあ。フランスがどいう国なのかせつかくだから簡単にでも知つていくかね。

「まあ、7日間よろしく」

「うん、フランスを楽しんで言つてね」

にっこり笑うシャルロット、ああ、なんか癒される。

ふう、さっぱりした。

俺は夕食の後、シャワーを浴びて、一息ついていた。

俺達が泊まっているのはかなり格式が高いホテルで、スイートルームではないながらも綺麗な夜景を見ながら今日の出来事を思い出す。

まずは食事について、さすがにフランス料理はおいしかった。魚

介類の日本とは違った味付けはこんな調理法もあるのだなと感慨深かった。そしてもうひとつ、オムレツは中に具をつめ単品でも食べられるおいしさだった。ドイツでの食事でも悪くはなかったが、さすがにフランス料理のほうがおいしかった。

昼食の後、パリの街を見て回った。ドイツで洋風の街に慣れていただけか感動は少なかったが、ルーブル美術館はさすがに圧巻だった。世界最大級の美術館の1つと言うことだけはあった。おしいのは全部門を見る時間がなかったことだ。まあ7日目でももう一度見に行こうか？とシャルロットが言ってくれたので、もう一度行くことにしよう。

あれはいいものだ。

観光しながらシャルロットと話をしていたが、いろいろなことを聞けた。

ヨーロッパ圏では一定の階流以上では美術や音楽に対する造詣があるらしい。これは日本とは違った地理、国が地続きなどが関係している。ちなみにシャルロットも母親がピアノを弾いていたので、音楽については知識があるし、芸術の分野もそれなりには知識があるそうだ。そこが日本とは違うな、美術の授業は幅広く浅くだし、音楽なんてちょっとかじる程度で、楽器だつてリコーダーぐらいしか触らない、俺も実は……音痴だし……はあ。まあ、これはどうでもいい、本当に、どうでもいい。

まあそんなわけで国の常識の違いとかをいろいろと聞けた。

それにしても、シャルロットはやっぱり常識人だ。普段濃いキャラといると、やっぱりああいう常識人は必要だよなあ……山田先生も常識人なのだが、あれはあれでキャラがかなり濃いよなあ……。

「くああ〜あ  
」

ふう、少し早いけど、今日は寝るとしよう。

っていうかこのベッドふかふかだな、こつという家具を買うのもい

いかもしれないな。疲れが取れるだろうし、日本に戻ったら、いい家具があるかしらべてみようかな？

それにしても、今日は移動と観光詩化していないのに、結構疲れたんなあ、むしろISを動かしているほうが楽かもしれぬ。

明日は開発についてのレクチャーと、現場の見学か……スパボ的な武装とか作れたらおもしろいになあ……zzz…

## 62 (後書き)

またまた更新が遅れてすみません。そのうえ短い…。

『ブーン ブーン』

携帯のバイブの振動で眼が覚めた。

今日はフランスス二日目だ。

疲れは…うん、全然大丈夫だな。

さて、起きるとするかね。食堂で待ち合わせをしてるから遅れるわけにはいかないしな。

「おはよう、一夏」

「おはようございませす、織村君」

スーツ（シャルロットが用意していた物、なぜ俺にぴったりなのかは不明）に着替えて、指定の時間に食堂へ行くと、先に来ていたシャルロットと山田先生が挨拶をしてきた。

シャルロットは俺と同じような柄のスーツを着ていた。なんか秘

書みたいんだ、しかも愛人っぽい感じの……うん、この感想については考えるのはやめよう……。

山田先生もスイーツだが、シャルロットと並ぶとどう見てもねえ……スイーツに着られている感がすごく強い。もしかしたら普段学園でスイーツを着ていないのはこのせいか……？

「おはよう、シャルロット。おはようございます山田先生」

「じゃあ、早速朝食にしようか。日本食もあるから安心してね。まあ、昨日食事をした限りではフランス料理は大丈夫そうだけどね」

「そうだな、さすがに珍味とかそういうのは無理かもしれないけど、こつというホテルに出てくるフランス料理は平気だな」

「そうですねえ、和食とは違った風味ですけど、おいしく食べれますね。とはいえ、ずっと和食を食べていないと、つい食べたくなるときがありませんか？」

「あゝ、それはありますね。ふと白米と味噌汁の匂いが頭に浮かぶというか、ね」

「学園や寮の食堂は条約に参加している各国の料理が少なくとも1種類はあるからね。そういうのは感じなかったなあ……でも、やっぱり国に戻ってきて、知ってる食材で料理を作ってみたらすごくおいしく感じたなあ」

「そついうのが故郷なのかな？」

「きつとそつですよ」

なぜか、食事中は故郷の食事についての話で盛り上がってしまった…。

そういえばシャルロットは料理もできるのか…一年の代表候補の中では一番ハイスペックかもしれないな。

ああ、そういえば4組の娘はまだ会った事もないな。専用機についても知らないし、学園が始まったら会いに行ってみようかな？

食事が終わり、一服した後、デュノア社開発部に移動することになった。

昨日の高級車に乗って、どれくらいか時間が経ち、ようやく到着した。

うん、普通（とはいってもかなり金がかかってるが）のビルだ。しかし、後ろにはでかいドームのようなもの、学園のアーリーナみたいな建物がある。間違いなくISの実験用だろうな。それとビルはそんなに高さが無い。5〜7階建てくらいだ。

ISは車とは違って生産数なんて本当に少ないし、いろいろな工場からパーツを取り寄せて、一部は自社の工場で作って、ここで組み立てて実験、こんな感じなのかな？

まっ、中に入ればわかることか。

「じゃあ、行こうか」

シャルロットに連れられ、中に入る。

中も、普通のビルだ。受付嬢がいて、エレベーターがあつて、前の世界で、仕事で打ち合わせに来たビルとそう変わらないな。



いや、警備員がかなり多いな。入り口は当たり前にいるし。受付の側にもいるな。ISを開発しているぐらいだしな、当然か。

「~~~~~」

「~~~~~」

「それじゃ、これが中に入るためのキー、なくさないでね。まあこれは今日だけ使用できて、明日はまた別のキーが渡されるんだけどね」

受付嬢と話していたシャルロットが、カードキーを渡してきた。

さすがにセキュリティはしっかりしているのか…実は壁が特殊な素材を使っているとか、あるのかな？

カードキーはバーコードがない…これはこの世界の技術が前の世界よりもやや進んでいるからだ。それなりの規模の企業はバーコードなんてもう使っていないのだ。

「それじゃあ、行こうか。とはいっても僕も開発部にいくのは初めてなんだよ。IS学園に来る前は、学校が終わったらアリーナでISの訓練をするか、データを収集する生活だったからね」

学校は行っていたのか…って当たり前か、IS操縦者が学歴がないとかはありえないしな、っていうか学校行っていなかったらIS学園には入れないし。

IS学園の入試は、筆記試験と実技試験がある。IS適正が高くても、初めて乗るだろうISでどこまで動かせるか、また、ISを動かすための知識を学習できる素養はあるかを調べられる。なので一般教養がない人は試験で落ちる。ラウラはあれで一部の知識に関してはずごいからなあ。ISの知識も2年生とか3年生で教えられ

ることも知っている。シャルロットもたぶんラウラほどじゃなくてもそうなんだろうな。

なんて考えながらビルの中を歩いていくと、スーツを着た男性がこちらに向かって歩いてきた。

「どうも、お嬢様、織村様、山田教諭。私はデユノア社IS開発部門に所属しているアラン・ボードリエです。以後デユノア社での案内は私が担当させていただきます。よろしくおねがいします」

西洋人なので実際の歳はわからないが、たぶん30歳前後の男性だ。

日本語がすごい流暢だな。だからこそ俺達の案内役を勤めているんだろう。

「うん、よろしくね」

「よろしくお願いします」

「では、まずISの設計などを行っているフロアを案内します」

男性に連れられて歩いていくと、かつての仕事場に似た各机の上にPCが置いてある部屋に入った。

「ここで設計を行なっています。ISのコアは完全にブラックボックスなので、ここではコアの解析などは一切せず、蓄積したデータから各パーツの設計を行っています。例えばアン・ロック・ユニットなども形状や機能の追加で性能が変わります。織村さんは中国代表候補生と戦ったはずですよね？」

「ええ。甲龍、衝撃砲がアン・ロック・ユニットに搭載されている

ISでした」

「はい。その試合の映像はIS学園の公式試合ですから、各国に送られています。その映像を元に性能を解析したところ、甲龍のアン・ロック・ユニットは現状では機動性の拡張性がほとんどないと予測が出ました」

たしかにブルー・ティアーズやシユヴァルツエア・レーゲンに比べると、燃費はいいが総合性能はまいちだしなあ。

「機動性を犠牲にしてもより破壊力のある武器を装備する、など、開発の際にはISのバランスを考えて設計をしなければなりません。まして専用機は代表、代表候補のISです。モンド・グロツソで勝利するためにはどれだけ高性能であつてもいい。そのために設計部門は日々送られてくるデータを元に、より性能を高められるよう、毎日設計データをいじっているのです」

しかし設計つてそんなに毎回ある必要があるのか？いまいちこういう話はわからないんだよな…。

「そんなにする必要があるのか？つて思ってますね？」

「はい」

「そうですね。普通の、例えば車の開発などはこのような設計と開発、実験を同時に行うことはありません。しかしISは別です。ISはコアの数に限りがあるから大量の量産はほとんど考えなくていいんです。そもそも消費者なんていないですからね。ですからISになによりも求められているのは性能です。いくら安く大量に生産

できほどよい性能のISが開発されても需要は全くありません。少々高くても圧倒的な性能のほうが需要があります」

まあ、現状は少数精鋭っていうかそんな感じだしな。

もしもあの銀の福音がテロを起こしたら、普通の軍隊じゃ時間稼ぎぐらいにしかならない。それはこの世界の歴史、白騎士事件が証明している。そんな時に、性能がかなり劣るISが数の暴力で対抗しようとしても当然無理だ。

「そのため少しでも性能を高めるため設計を何度も行っているのです。とは言っても、一度設計済みのIS、専用機なんかは基礎的な部分の再設計はほとんどありません。まあ、コストと時間がかかりすぎますから」

まあ、そうだよな現状で理想値を出しているなら、再設計とかないよな。

「ISは世に出てからまだ10年ほどしか経っていません。まったく未知の分野なので、技術の確立、ノウハウが全くない。なので設計もどうすればより性能が上がるのか、細かい修正でも実験ではデータが変わってきますから、ISを開発する際にはそれこそ何度設計をしても足りないのですよ」

うーん、今までのPCとか車とか戦闘機とかの開発と違っていてとか。

…たぶんだけど、ISの技術は各国ともスタートラインが同じ、全くのゼロからだから、どの国、会社でもチャンスがあるんだろう。だからこそ白熱したIS開発が行われているのかもしれない。

それにISはもしかしたら、前の世界での閉塞感の打破という意味があったのかもしれない。例えばゲームでアイデアが出尽くした

感があり、ゲームを作れば売れるような時代は終わった。しかしまったく別の、新感覚のハードが出たら？それはゲーム業界を再び盛り上げさせる。同じようにISはまったく新しい、世界を変えるような技術で世界に新感覚をもたらせたのかもしれない。

PCに向かっている人達は皆、忙しそうにしかし充実した顔をしている。例えばIS学園でも生徒達は皆学園生活を楽しそうに送っている。世界に飛び込んできた全く新しい事、娯楽に植えている人々にとってはISは夢中になれることだったのかもしれないな。

……なんて、ちょっと深く考えすぎか？

「では、次に設計の方法についてです。我が社ではISの設計、開発しているシステムを自社内で開発、改修を行っております。設計では元々は車の設計など使用していたC Dをモデルに開発したソフトを使用しています」

ボードリエさんは空いているPCを操作し、ISの設計画面を見せる。いろいろな画像と文字の羅列が見えるがさっぱりわからない。

「ここで、基本的な形状の設計と、収集したデータによる各種予想値を計算しています。その中で特に予想値が高いものをピックアップしていき、最終的にいくつかの形状ごとにISを作成、そして実験場で稼働データを取ります。細かい整備や、実験は女性しかできませんから、そこから先は女性の比率が多くなっていますね。ISの操縦者は見目麗しい女性が多いので、私としては眼の保養になつて嬉しいですね」

と、ちょっとおどけて言う。

これがフランス流のジョークなのか？俺がIS学園でこんな発言したら、引かれるどころか逆にアタックが多くなりそうだ。

「いくら周りの女性が美しい可愛い娘ばかりでも、その中でたった一人の男と言うのは、きついですよ」

「ははは、見ている分にはうらやましい、楽しそうに思えるのですがね。おっと、こんなことを言っていたら、妻に怒られそうですね」

「ご結婚なされているんですか？」

「ええ、ISが発表された後、我が社でIS開発部門を作ることになりましたね。私はその際にIS開発を強く希望しました。当時の代表と二人三脚でラファールを開発。モンド・グロツソで優勝こそ逃しましたが、高い成績を残しましたね。そのときの代表が私の妻なんですよ」

「どうやらアランさんが案内役選ばれたのは、日本語が流暢だからではなく仕事ができる人だったからでもあったようだ。」

「(う、うらやましい話です。代表になれた上、結婚までできるなんて……私なんて……はぁ)」

山田先生がなぜか落ち込んでいるが、何でだろうか？

「ちなみに、僕にISの指導を一期してくれた先生でもあるよ。途中で妊娠していることがわかって、別の人が変わってしまったけどね」

とシャルロットが言う。

「って元代表から指導してもらったのか、そりゃシャルロットが高い実力を持つてるわけだよ。」

「っと、話がそれましたね。では実際に開発システムを触ってみましょう」

さて、実際に開発を体験できる。  
いろいろといじってみよう。

### 63 (後書き)

独自設定が難しく書いて書けない。

。ISSアニメの2期が出るなら、もっと書けるようになるのに……。

DVDとかの売り上げから考えてきつと2期は作成されるはず、そのときは再び毎日更新、できたらいいなあ。



「これは、面白い形のフォルムですね」

俺が設計システムをいじって作ったISの設計図を見て、アランさんはそう言った。

俺がアンロックユニットをなくし、両肩、両脚にスラスタ兼ブースターを取り付けたISを設計した。イメージとしてはダブルガンダム・ガンダムの両脚にもGNDライブを取り付けたようなISだ。

4つのスラスタ兼ブースターを使用し、同時に瞬時加速を使用することによって、間合いを一気につめると同時に、小回りもある程度きく、そして余計な装甲を極力カットした圧倒的な機動性と運動性を兼ね備えたIS。弱点としてはブーストのエネルギーの使用が多いことだ。

将来白式の後継機を作成するならこんな形がいいかも、と思い設計してみた。展開装甲を利用すればGNDライブもどきとして充分代用できるし、今の俺は武装を雪片式型しか使っていないので、武装も雪片参型として実体剣モード時の威力を展開装甲でさらに上げたものを使用すればエネルギーを喰う零落白夜を使用しないで持久戦もこなせるようになる。

なんてISができたならおもしろいなあ。

「あえてアンロックユニットを外し、機動性、運動性のみを追及したIS、ですか」

「一夏の白式みたいだね」

「そうだな、白式の後継機としてのISならこんな感じがいい、と

思っ て設計してみたからな。白式の後継機なら、白式のデータを元に作成すればいいから、展開装甲を利用できる。展開装甲を利用したドライブユニットで機動性、運動性を上げ、雪片式型でデータが取れた展開装甲を利用して実体剣時の威力をさらに上げた雪片参型を武装として装備する。コアは白式のものをもそのまま使えば俺との適正は抜群だし、機動性重視のISならそのまま適合できそうだし、いいISになるかもな」

「なるほど、IS操縦者がどんなISがいいかという点を考えるのも面白いですね。操縦者に完全にマッチングしたISの設計、モンド・グロツソでの勝利のみを追及したIS…ノウハウがあれば操縦者でもより簡易に設計を行える、それをサポートする……ブツブツ…」

アランさんは俺達のことを忘れて思考の海に沈んでいるようだ。

「あはは、一夏の発想でなにか思いついたみたいだね」

「研究者ってみんなこういう癖を持っているんでしょうか？」

俺達は苦笑いしながら、アランさんの意識が戻ってくるのを待った。

「午後からは、ISの運用データを取るための実験場を案内します。お二人に模擬戦も行ってもらう予定です。食事は食堂を利用してください。お嬢様が場所を知っていますから、よろしくお願いします」

いろいろとシステムをいじっているうちに時間が経っていき、正午近くになり、昼食を取るようになったが、アランさんはどうやらまだやることがあるようでシャルロットにが食堂へ案内することになった。

「うん、わかったよ。午後は実験場へ直接行けばいいかな？」

「はい、時間は1時ごろでお願いします。ではまた」

アランさんは足早に去っていった。

「それじゃあ、食堂に行こうか。ホテルや学園の食堂には負けるけど、ここの食堂もおいしいよ」

「福利厚生がしっかりしてそうだしな」

「そうですね、備品も一部は最新のPCを使用していましたし、やっぱり大企業は違いますね」

「まあ、今は落ち目なんですけどね」

と、少し暗い顔になるシャルロット。いくら社長の愛人の娘でほぼ強制的にIS操縦者にされ、しかもIS学園に男として入学するように強制されたとはいえ、さつきも言っていたISの指導してくれた女性のように社内には知り合いもいるだろうし、このままデュノア社が没落していくのは複雑な気持ちなんだろう。

「そ、そういえば、織斑君の白式を開発元である倉持技研も、白式開発とデータ収集のあたりを受けて、4組にいる娘の専用機開発が途中で凍結されてしまったって話があるんですよ。もともと倉持技研は2つしかコアを提供されていない企業でしたから、同時に二つのISを開発できるほどの余裕がなくなってしまったんでしょうね」

シャルロットの顔を見て、山田先生が話を変えた。

「っていうか、そんなことがあったのか……4組の娘には悪いことをしたかも、俺のせいではないとはいえその一因と言えるしな。」

「それで、臨海学校にも来ていなかったんですか？」

「ええ、どうやら自分で開発をしようとしているらしくて、開発といても7割方は倉持技研で組み立てられたそうなので、後の作業を自分でしているって話です。授業とかは出席していますし、成績も問題ないのですけどね」

やっぱり罪悪感が湧くなあ、白式の専用装備は束姉が作った雪風のおかげで今のところ必要なくなっただし、先に4組の娘の専用機を開発してもらおうように頼んでみるか？倉持技研の人とはISの調整の時とかに話をする程度には知り合っているし、学園にもどったら

話してみよう。

「そうですね、俺から倉持技研の人に頼んで見ることにします。開発凍結の一因だから罪悪感がありますし、それに何よりそのIS、きつと3世代のISなんでしょう？どんな機能を有しているのか？どんな戦い方をするのか？楽しみなんですよ」

いろいろなISと戦ってみたい。それが経験になるし、何よりも楽しいからな。

「はあ」

（一夏って、こういうとき反則的にかっこいいよね…）

「ふう」

（織斑君、ところかまわずそういう表情を見せるのはやめてください、ISにかかわっている女性なら間違いなく落ちてしまいますよ。ドイツでもラウラさんの部下がすごく懐いていましたし、織斑君の将来が心配ですよ…）

二人が急におかしくなったが、どうしたのだろうか？

食事を取り、小休止した後、学園のアリーナのような実験場の入り口に来た。

認証ゲートを通り、入り口付近の自販機が置いてある場所のソファに座り、俺達はアランさんを待っていた。

しばらくすると、チャイムのようなものが鳴りすぐにアランさんが来た。

「お待たせしてしまったようで」

「いえ、時間通りですよ」

「では、早速行きましょう」

アランさんについていくと、学園のアリーナ内部にある部屋と同じようなつくりの部屋についた。

中には女性男性が数人ほどで、作業をしていた。

空間に表示されているディスプレイには、ラファールに似たISをまとった女性が、オペレータの指示により動いていた。そして動くたびに違うディスプレイに表示されているいろいろな数値が変わっていく。

「この先でISの稼働実験を行っています。この部屋はそのデータ収集などを行っている部屋です」

「あのラファール・リヴァイブに似ているISは？」

「あれはデュノア社の3世代ISとなるはずだったラファール・アンフィー（疾風の妖精）です。織斑さんはうちの事情をお嬢様から

聞いているので、公開できませんが、あれは他の3世代と基本性能こそ同じなんです。特有の機能がないんですよ。そのため、他の3世代ISと比べると総合的に見劣りするんですよ」

先ほどまでの笑顔がなくなり深刻そうに言うアランさん。経営危機に陥ってるって話だったし、本当にまずい状態なんだろうな。

「ラファール・リヴァイブ・カスタム？と同じような性能ですが、拡張性がありますから、こうしてデータを取っているんですよ」

ディスプレイ映っているIS、ラファール・アンフィーは6枚の羽を持ち、自由に空を飛んでいる。6枚の羽は小型のスラスタ兼ブースター  
なのだろう。機動性、運動性が高そうだ。

「3世代特有のイメージ・インターフェイスを用いた兵器、か。一つだけ、実現できそうな機能だったら思い浮かびますけどね」

「ほう、参考にお聞きさせていただきますでしょうか」

「白式は燃費が悪いので、エネルギーに関して少し調べたことがあるんですよ」

毎日寝る前にデータをまとめたり、ISに関しての勉強をしている時にふと思いついたこと。

「コア・バイパスを通してのエネルギーの受け渡しが可能の場合があるって話だったんですけど、あるISが単一仕様能力で接触するだけという条件だけでエネルギー提供ができるってことを聞いて、なら限定条件下でエネルギーの強奪ができないか？と思いましてね」

実際、3世代用の機能が単一仕様能力でレーザーとか光学兵器を吸収か反射するとか有りそうだしな。ならエネルギーごと奪うとかもできなくもなさそうだ。

それと、あるISって言うのは紅椿のことだ。絢爛舞踏、紅椿の単一仕様能力にはISへのエネルギー提供能力がある。とのことだ。今の筈では発動することも難しく、実際に証明されたことではないが、束姉の残した紅椿のデータにはそう載っていたらしい。筈が紅椿について話していたときに聞いたことだ。

「エネルギーの強奪?……シールドエネルギーだけを……コアの登録、接近、接触……ブツブツ……」

アランさんは、また意識の海に沈んでしまったようだ。

「……おっと、すみませんね。お二人はさっそく模擬戦を行ってもらえませんか?それから、デュノア社で行っているデータ収集プログラムを実体験してもらいます」

「わかりました」

「一夏とは久しぶりに戦うし、今回は本気でいくよ」

シャルロットもやる気のようにだ。

いつもが温和そうなシャルロットだが、ラウラ以上にやりづらい戦い方をするときがある。学年別トーナメントでペアを組んだときは放課後に二人で訓練をしていたなあ。少し前のことなのに、すごく懐かしく思えてしまった。

「済みませんが、織斑さんのISスーツは、うちで作った男性用の



ものを使用してください」

「前に僕が使ったために作ったものの余りだね」

今でこそ女性用のISスーツを着ているが、前は、ってあの腹丸出しのISスーツか！？あれはなんかナルシストみたいだし、いやなんだが……今日は我慢しよう、次にISを使うときはちゃんと自前のスーツを持ってこよう。

「では案内させますので」

と、案内役に女性が選ばれた。

さて、シャルロットもやる気があったし、この模擬戦どうなることか。

## 64 (後書き)

時間も空いたことなので、そろそろペースを早めようかと思案中。その前に全面的に改修しようかなとも考えてますが。まずは誤字を直して、次に簪と会長を早めに登場させるとかできないかな？  
そういえばアニメ2期について調べたら、会長の声優が決まっていたとか2chに載っていました。期待してもいいのかなあ？

渡されたISスーツを着て白式を展開し、学園のアリーナのよう  
な実験場の空中へ飛んでいく。

少し離れたところにシャルロットが待っていた。

『思えば、僕は模擬戦とか訓練は一緒にしたけど、一夏と本気で戦  
ったことはなかったよね？』

プライベート・チャンネルでシャルロットが話しかけてきた。

『そつえば、そつだな』

俺が制限とかなしの本気で戦ったのは公式試合でセシリア、鈴、  
ラウラ、そして銀の福音か。シャルロットとは同室になっていたと  
きから一緒に訓練することが多かったから、その実力は知っている  
が、本気で戦ったことがない。

『セシリア、鈴、ラウラはみんな一度は一夏と戦っている。俺は一  
番一夏と付き合いが長く、4世代ISを持っている』

なんて答えればいいんだろうか？もしかして怒ってるのか？シャ  
ルロットは何を思っているんだろうか？

『一夏にアピールするにはどうすればいいんだろうか？って考えた  
とき、ISで本気で戦うのが一番だと思ったんだ。だから今から僕  
は本気で一夏と戦うよ』

にっこり笑っているシャルロットの顔がディスプレイに映った。嬉しいな、ここまで俺にアピールしてくれているということが、そして強敵と戦えることが。

『ああ、わかった。俺も本気で戦うよ。だけど、白式は一次移行の能力だけに制限させてもらう。さすがに性能差がありすぎるからな』  
それに100%実力を発揮できるわけでもないしな。

『うん、それは仕方ないね……じゃあ、始めようか』

『ああ』

『では、模擬戦を始めてください』

シャルロットがオペレーターに合図を送り、模擬戦が開始された。いつもなら様子見をするところだが、ある程度手の内がわかってる相手なのでこちらから攻めていくか。

剣道の試合のように、相手の隙を探しながら場を動いていくように俺は緩急をつけながら徐々に接近していく、そしてシャルロットの隙を探す。一瞬でも隙ができたら瞬時加速で一気に接近する、そして高速変則機動で攪乱し零落白夜で落とす。いつもと同じだが、今回は自分から積極的に動き、相手に隙を作ることを試している。待ちの戦法をより攻撃的にした戦い方だ。

互いに、スラスター、ブースターを極力使用せず、できるだけPICを使用してエネルギーの消耗をおさえながら、相手の体勢の死角や旋回しにくい位置を、空中を飛び回り移動していく。

白式の機動性を行かすことのできない軌道だが、PICの精密さでも白式は3世代ではトップレベルだ。だが、こういう基礎技術の技量ではシャルロットが上、俺達は互いに隙を作ることができない。

そして俺が一定の距離まで接近した、その時、

『ガガガガガ！！』

いきなりシャルロットの両手に現れたマシンガンから銃弾の雨が放たれた。

(ラピッドスイッチ、ただの基本を、ヴァルキリークラスには負けるものの各国代表並みの実力にまで上げた技能。相変わらず厄介な特技だ)

しかし、俺は訓練でいやと言うほどこの技能の厄介さを知っている。

ここで距離を取れば、シャルロットが消耗するまでにこちらが消耗するほどの武装で攻撃して一定の距離を取られ、俺は釘付けにされてしまう可能性がある。

だから、

(ここで高速変則機動を使う！)

マシンガンから放たれた銃弾が装甲を掠っていくが気にせず、高速変則機動を行って分身作り出す。シャルロットがこちらを見失った瞬間に一気に瞬時加速で接近していく、と同時に零落白夜を発動させる。

高速で接近してくる俺の軌道を予測したシャルロットは、何時の間にか装備していた4連ミサイルポッドで俺が通っていくであろう空間へ飽和攻撃を行った。

(この数のミサイルなら！)

俺は加速を緩めず、零落白夜で一番近い位置にあったミサイルを切り払う。残りのミサイルが少し離れた位置で爆発するが、ダメージにはならなかった。

そのまま接近していき、近距離でもう一度高速変則機動を行い、シャルロットを攪乱させる。

そして死角から零落白夜で斬撃を放った。

(これで、終わりか!?)

あまりにもあつけない終わりに俺はやや残念な気持ちになるが、

『ガキイン!』

その気持ちは裏切られた。いい意味で。

シャルロットの右側を覆う実体シールドが何時の間に展開し零落白夜をガードしたのだ。

おそらくだが、ラウラのような眼を持たないシャルロットは、白式の軌道を見切るのは無理だと考えてある程度軌道を読み、シールドをコールして面で防御することで攻撃を防いだのだろう。

あの一瞬であせらずコールを行い、防御体勢を整える。一見すればただ防御しただけで簡単に見えるが、白式の高速変則機動で攪乱され、一撃必殺といえる零落白夜で攻撃されながら行えるのは、精神的にも技量的にも難しいだろう。

「やる!」

だから、つい俺は賞賛の言葉を言ってしまった。それは先ほど残念な失望感がありそれがいい意味で裏切られたせいでもある。

「でも、防御だけで勝てると思うなよ!」

俺は零落白夜の出力を下げ、高速変則機動を連続で行い何度もシャルロットを攪乱させる。

距離を離そうとしたら、俺が一瞬で切って落とすだろうことがわかってるシャルロットは身体をすっぽりと覆うほど実体シールドを展開する。だが、それにも限界がある。

俺はシールドがない部分を狙って斬撃を放とうとするが、

「甘いよ！」

シールドをパージさせ、高速で移動していた俺にぶつけた。

「ちい！」

俺はぶつかってきたシールドを蹴飛ばし、シールドがなくなったシャルロットへと接近しようとするが、

「今度はこっちの番だよ！」

シャルロットの両手には再びマシンガンが握られており、俺に向けて近距離から放った。

パージされたシールドを蹴ったため体勢が崩れていたので、回避できない。

「くっ！」

俺は何発か当たるが、構わず、距離を離れた。そして同時に雪片式型は実体剣モードに戻しておく。

シャルロットは、俺が一定以上の距離まで離れると、今度はアサルトライフルを両手で持ち、両肩に4連ミサイルポッドを装備した。

そしてライフルをセシリア、ラウラほどではないがそれでもかなり高い精度で俺を狙う。狙いながらもミサイルポッドを俺の軌道を予測して、予測した位置へと発射する。軌道が制限されるため、ライフルから放たれた弾がいくつつかかすってしまった。

(……3、2、1。よし、これで使用可能だ)

先ほど何度も高速変則機動を連続で使用してしまったため、一時的に瞬時加速が使用できなくなっていたが、ようやく使用できるようになった。

(次は俺が流れをつかませてもらおう)

牽制と放たれるミサイルへと瞬時加速を使用し、一気に接近し、切り裂く。同時に、爆発の煙にまぎれると同時に高速変則機動を使用する。

「しまった!？」

シャルロットは完全に俺を見失ったようだ。

俺を捕捉できるまで、ほんの少し時間がある。

俺を捕捉仕様と、空中で旋回するシャルロットの死角を見極め、俺は死角へと移動する。そして

(今だ!)

瞬時加速で一気に加速、そして零落白夜を発動させる。エネルギーが減っているもののまだまだ使用には十分なエネルギーが残っている。



(ここで一気に決める！)

気合とともに斬撃を放った、

「まだまだよ！」

が、いつの間にか持ち替えていた実体剣の近接ブレードで刀身を防がれた。

「やるな！」

俺は防がれながらも加速をやめず、零落白夜を当てようと無理やり押し付けていき、鏢迫り合いへと持ち込む。シャルロットもここで気を緩めれば零落白夜により一撃で負けてしまふと感じたのだから、対抗して鏢迫り合いへと持ち込もうとする。

「甘い！」

だが、その瞬間に俺は蹴りを放った。

一瞬、体勢を崩すシャルロット、しかし俺は追撃をせず、

「もらったよ！」

半身だけをずらす様にスラスターを瞬間に最大出力で噴射した。

瞬間、俺がいた空間に、杭が打ち込まれた。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムEの、後付装備ではない基本装備のシールドの裏に隠されていた大型のパイルバンカーをシャルロットが使用したのだ。しかしそれは無残にも何も無い宙を貫いただけであった。

「これで！」

瞬間に半身だけ移動した俺はそのまま零落白夜を振り下ろした。  
斬撃はシャルロットの肩の部分に当たり、

『試合終了です。勝者、織斑一夏』

オペレーターから俺の勝利が告げられた。

65 (後書き)

続きが書けない……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4614q/>

---

D・IS

2011年9月21日18時41分発行